
鏡の双子

栞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の双子

【Nコード】

N97280

【作者名】

栞

【あらすじ】

2つの魂が1つになる時、伝説は真実となる。

世界の為に、家族の為に。そして—— 自分自身の為に戦い抜いた4人の若者たちの物語。DragonQuest?の創作小説です。製作2002～2004年。

1話 出立

勇者オルテガが火口での戦いで散った報が城へ届いたのは…南国にあるまじき吹雪の夜だった。

オルテガの妻エリイフィール。その息子で3歳になるリロイと同じく3歳のナナ…瓜二つの双子の兄妹の手をしっかりと握り締めたまま、彼女は声も無く涙を零した。

「……………エリイよ……………」

「……………はい。……………はい……………大丈夫です……………」

そう呟く彼女の声に力は無い。雄陣した際に何処かこんな日が来るのではないかと思っていた。

「世界は…闇に閉ざされるのか……………」

何処からか、そんな声が零れた。

魔王の手より世界を救うはずの勇者の死。それは世界が魔に対して抗う刃を失った事に等しい。

「……………」

「……………」

何処からか落胆の声と絶望の溜息が漏れる。しかしそれを破ったのは、王の傍に控えていた占星術師だった。

「……………夢を見ました。大きな星が闇に飲まれるのと同じ時にその傍らに小さな、だがその輝きは何よりも純粹な…小さな星

が生まれるのを。…次代勇者は、此処に……………」

「何と?…次なる救世者が現れると申すのか?」

王が驚きを隠せない表情で占星術師を見つめ。その装飾に彩られた帽子ごと、頭が静かに垂れた。

チャリ、と揺れる装飾のその奥から覗く細く澄んだ瞳は、王の傍らへと向けられ。

「はい。……………勇者オルテガが遺し生命こそが…その強き魂を受け継

いでおります……………」

占星術師の視線がエリィフィールとその子供たちの方へ向けられる。周囲からどよめきと継るような声色が、湧きあがった――

それから、13年の月日が流れた……………。

快晴の空の下、腰に下げた魔よけの鈴が小さな愛らしい音を立てている。母親が今日の為に用意してくれたものだ。

…勇者の称を与えられたその者は今日、出立の許可を受けた。僅かな饒別と旅道具を手に、一路実家近くにある酒場に向かっている最中である。

……………小さな勇者の名は、リロイ。

16歳生誕日の今日、ようやく王から出立の許可を受けたのだ。

出立した勇者に最初に与えられた使命は「旅の仲間を探す」という事だった。

この酒場は酒場でもあり、その裏では冒険者の支援及び登録を行う、冒険者にとっては最も有名な場所だ。即ち、情報や冒険者を探すには一番最良の場所と言える。

尤も、多くの旅人が集まる場所の為、16歳の少年が一人で訪れるには少々物騒なところなのだが。

それでもリロイは何度か此処に来た事はあった。母エリィフィールと、此処の酒場の管理者のルイーダが親友だった為だ。

なので臆する事なく、真っ直ぐに酒場へ向かって歩いていく。
そして見慣れた扉へ手を掛けて、開けようと――。

どんっ!!

扉を開けるとそれと同時に一人の大男がぶつかって来た。「出る」と「入る」が同時に発生すれば良くある話である。男の胸当てにしこたま顔をぶつけ、リロイは小さな驚きの声と共に後ろへ下がった。
「――っ!？」

それを見下ろした男が、じろりとリロイを見遣る。

「ちよろちよろしてんじゃねーよ、ちび」

「なっ……」

確かに自分の身長は160もないので無理もないが、明らかに半分はそちらに非がある分際で言われる筋合いはない。リロイも負けずに男を睨み付けた。

「その言い方は無いだろ!おれだって少しは気を付けてたし、そっちだって少しは悪いんじゃないのか!？」

いきり立つリロイのくせつ毛のある髪をぐりぐりと撫で、男が豪快に笑う。

「ははははは、そりや悪かったな、ぼ・う・ず。だがな此処は坊やが来るところじゃないぜ。帰ってママのミルクでも飲んで……うお!？」

ひのきの棒の鋭い棒先を向けられ、流石に男の笑みが強張る。

「坊主でも坊やでもない。おれは大事な用で此処へ来てるんだ。……べらべらべらべらへらず口叩いてんならさっさと退け、このでか物

……!!」

ぽかん、としている男の横をすり抜け、リロイが店内へ踏み入る。入口の問答を聞いていたのか酒場の女将であるルイーダがクスクスと笑みを浮かべながらそれを迎えた。

「いらつしゃい、リロイ。暫く見ないうちに良い男になったじゃない」

「……………冗談はよしてくれよ。それより—— 今日、10月23日。…ようやく許可貰えたよ。約束通り、何人が紹介して貰えないか？」

ああ、と、僅かに表情を曇らせてからルイーダがぶ厚い帳簿を取り出す。いつの間にかさっきの男も、小さな酒場の珍客が気になったのか戸越に凭れながらその様子を眺めているようだ。

「…ちっちゃい頃からリロイを知っている人間としちゃ、出立させるのは気が退けるのよねえ。あ、お母さん元氣？また遊びに来てね、って言うておいてよ」

「…ルイーダさん…」

脱力したような呆れたような、リロイの一言に「はいはい」とルイーダが帳簿をめくる。

「…ちよつとした探索とかの希望者ならたくさん居るんだけどね。…どうも魔王討伐ともなると…ちよつと薦められない人の方が多いわあ」

ルイーダの言葉に小さくリロイが溜息を吐く。

「わかった。じゃあ良い、一人で行くよ」

その言葉にぎよつとした様子でルイーダがカウンタに手を突く。

「ちよつ、ちよつと待ちなさい。王様にはちゃんと供を連れ立って行けって言われたんでしょ？一人でなんて無理よ！後半月くらい待たらきつと……………」

「何年も待ったんだ、もう待てないよ。……………見合っ人員が居なかったんだ。約束を破ったって事にはなんないだろ？」

「お父さんの二の舞になるつもりなの！？」

遠ざかる、背後に掛かる声。…知ってる。かつて父オルテガが同じように…一人で旅立った事を。

あの時は、どうして無理をするのだらうと思ったけれど…今ならその気持ちはわかる。

仲間なんて要らな……………。

—— ダンッ！

扉に凭れていた男の片足が、リロイを遮るように扉を塞いだ。それに気づき、むっとリロイが立ち止まり…男を見遣る。

ほっとしたようにルイーダが男を見、懇願するような声色で。

「ソロ、お願い。リロイをとめて」

「……………」

ルイーダを見てから、リロイを見下ろし。男…ソロは無表情の顔をそのままにやりと笑ませた。

「驚いたな、あんたが噂の勇者さまだったとは」

「だから、何だって言うんだよ。……………そこを退いてくれ」

「仲間、探してんだろ？…頼りになる腕っぷしの強い奴を」

何だか嫌な予感がして来た、と渋顔で眉を寄せるリロイにさも面白そうにソロが笑い。

「俺あな、雷神の剣って剣を探して旅をしているんだが。もしお前が旅の途中でそれを見つけて俺に譲ってくれるのなら……………無報酬でついて行って遣ってもい…」

「断る」

ソロが言い切る前に、ぴしやりとリロイがそれを遮る。

その間、0.05秒。むぐんと重苦しいムードが漂い始めたのを察し、慌ててルイーダがフォローに入った。

「まあまあまあ、でもねリロイ。ソロは確かにこの大陸に在中してる冒険者の中じゃ群を抜いて強いわよ。軟弱な役立たずより、ずっと役に立つ方が良いでしょう？良いじゃない剣の一本や二本くらいでお供してくれるなら……………」

「…そりゃそうだけど……………だけど……………」

「んじゃ決まりだなっ。坊……いや、何だったか？セロリ？」

「リロイっ。…まだ連れてくって決めたわけじゃ……わ、わわっ
！！」

ぎゅっと手を握られリロイが目を丸くする。渋々と唇を尖らせてから、この馬鹿なんだか阿呆なんだかまともなんだかわからない男……

……ソロを見上げ。

「…倒れたら容赦なく置いていくからな」

「おう」

「おれは魔王討伐に出るんだからな？わかってるんだろ」

「ああ、わかってるさ」

「…………。——これから宜しく頼む……」

本当にわかっているのだろうか、こいつ。

吐息混じりに呟かれたリロイの言葉に懷っこくソロが笑い。

「戦士のソロだ。こっちこそ宜しく頼むな」

2話 辿る心

早朝に出立をし、一路二人は南部に位置するレーベの村へ向かっていった。

確かにソロは強い。豪語するだけはある。

大鴉やら一角うさぎやらに梃子摺っている自分のすぐ眼前でバッサバッサと敵をなぎ倒していくのは、一言で言えば圧巻だ。

「…おう、ばてたか？」

一区切りつき、振り返ったソロが、汗を拭っているリロイに声を掛ける。肩で息をしているリロイとは相成って、ソロは息一つ乱れていない。

悔しいが、それが自分とベテラン戦士の差なのだろう。

ぷい、と顔を背けたリロイにソロが小さく笑った。

「ホント愛想ねえガキだな。まあ、もう少しで大境の石橋のところまで出られるから、そこで一休みしようや。OKかい？勇者さま」

「…………。わかった…」

本大陸を二分する河のたもとにある石橋、そこで昼食を取ったのは、昼もかなり過ぎた時間だった。

「この調子じゃレーベに辿り着くくらいにや日が暮れちゃうな。野宿は平気かい？勇者さま」

「その勇者さま、ってやめろよ」

「んじゃセロリ」

「リロイだっ！！」

確かに腕は立つが性格が悪い。…………やっぱり人選間違ったんじゃないんだろっか。

そんな事を考えながらリロイは大きく溜息を吐き、視線を遠くへ向けた。霧の彼方、ぼんやりと浮かび上がる巨大な影に気付き、眉を

寄せる。

「——なあ、ソロ。あれ何だ？」

出立してから暫くからかうような会話しかしていなかった為か、不意に尋ねられソロが目を丸くしてリロイを見遣った。

指差す方。河口より海へ続く大きな岬と……島。その島に立つ大きな塔。

「ああ、あれは馴染の塔だ。…アリアハンの街外れからでも見れると思っただがな？」

「おれは町から一步も外へ出る事が許されてなかったから……」

「なるほど」とソロが続け。

「…希代の勇者さまって割に結構過保護に育てられたんだな。そんなに一人で旅立ってどうするつもりだったんだよ」

「う、煩いなっ。どうとでもなるもんだよ」

図星を指されたのか、やや顔を赤くしつつ慌ただしくリロイが立ち上がる。自分の食事の包みを早々に片して、荷物を手にし。

「レーベはまだ掛かるんだろっ。……行くぞ！」

「ああ」

ポツポツと会話のキャッチボールが増えて来たな、とクツクツ笑いながら。ソロはそんな生意気勇者の後を続いて歩き出した。

レーベへ辿り着いたのは夕方近くだった。比較的魔物との遭遇も少なかった為に大幅に時間が短縮出来たのだ。

「此処がレーベだ。アリアハンに比べりゃ小さな村だろ？」

「…外壁が無いんだな」

野っばらに、ただ家や畑が並ぶ様子にそう驚きの声を漏らすのを聞き、ソロが目を細める。

「おいおい、田舎で田舎者丸出しな真似はするなよ？…村なんてこ

んなものさ。常に魔物の襲撃に怯える日々だ……………」

ふ、とやけに表情が厳しくなったソロにリロイが眉を寄せる。「ソロ？」と呼び掛けられ表情を戻したソロが小さく首を振り。

「いや、何でもねえよ。…さあ、宿を取って休もう。明日は早いぞ」

レーベは村も小さいが宿も小さい。二人が苦も無く探し当てたその宿は酒場も兼ねた小さなものだった。

「すまない、二名お願いしたいんだけど」

「はい、二名様……………、って、ナナ…？ナナじゃないか？」

店番をしていたリロイと同じくらいの年代であろう少年が驚いた顔を浮かべる。「ナナ」という女名に怪訝そうにソロがリロイを見。

「アリアハンのナナなら……………おれの妹の名だけど…」

「あつ……………ごめんなさい兄の方でしたか。僕はシシル。ナナとアリアハン小等部学院で一年だけ一緒だったんですよ。そういえば、双子のお兄ちゃんが居るって言うてたけど……………貴方が？」

「ああ……………。おれはリロイ。ナナの、兄だよ」

一瞬リロイの表情が曇ったのを見、ん？と首を傾げたソロだったが、ずいっと宿帳をシシルに差し出され、「此れに名前書いてね」という言葉に意識を逸らされる。

ブツブツと文句を垂れながら宿帳に書いているソロの横でシシルはリロイに色々な事を訊ねていた。

「一番の友達だったんですが、7歳の時に僕がアリアハンの祖母の家からレーベの叔父の家へ引き取られる事になっちゃって、それっきり会って無かったんです。ナナは元気ですか？まだあの家にいるんですか？それと……………」

「死んだ」

嬉しそうな声を遮るようにポツリと紡がれたその言葉に、シシルの笑みが強張り、ソロのペンが留まった。

「……………え。……………死んだ？」

「ああ、8つの時。だからあんたは知らなかったんだろうけど…病気で死んだよ」

俯いた表情に動揺の色が隠せないように、やや瞬きを強めながらシルが首を振った。

「そう…だったのか。最初の数ヶ月は…手紙が来てたから…来なくなった時はあれ？って思ってたけど。そうだったんだ…」

グシツと涙を拭い、パツとシルが顔をあげ。

「でも、リロイさんに会えて良かった。そっちのお方も、今夜はゆっくりしていつて下さいね！」

南国とはいえアリアハン大陸の寒暖の差は激しい。真夜中にふと目を覚ましたソロは、満月の明かりを遮っていたのが窓辺に立つリロイだという事に気付き寝惚け眼で上体を起こした。

「…リロイ……………」 ———— まだ起きてたのか……………」

「ん？……………うん……………」

僅かに笑むリロイの肌は、男性とは思えないほど、白い。一卵性双生児の男女の場合、稀に中性に近い風貌になる場合があるというが、まさにリロイはそれだった。少年とも少女ともつかないその横顔にふと見惚れている自分に気づき、「阿呆か」と自責し再び転がる。

「明日早いと言っただろ。きちんと睡眠摂らねえと、明日ばてるぞ」

「…わかってる、すぐ寝るよ。気にしないで寝てて」

「……………」 妹の事か？さっき店番のガキと話した後から様子が変だったからな」

逆光、やや睨み付けるような視線を向けた後、吐息混じりに微かに頷き、肯定の意を漏らす。何か言いかけ、唇を噛んで。

「…寝よう。カーテン、閉めるよ」

何を言いたかったんだろう？と判らないまま二つ返事をし、ソロは

目を閉じる。暫く隣で布を擦らせる、身じろぎの音がしていたがやがてそれも収まり。二人は深い眠りに落ちていった。

翌朝。

その言葉を聞いた時、二人は耳を疑った。

寝耳に水とは良く言うもの。朝っぱらから聞いたその言葉は、世界を救う勇者と屈強の戦士を驚かせるだけに十分に足りるものだった。

「…何て言った？」

「だからっ。僕もリロイさんの旅に連れて行って貰えませんか？…叔父さんの許しは得ています」

「だから何でいきなりっ」

慌てるリロイの手をぎゅっとシシルが握り締める。

「リロイさんがアリアハンから旅立った勇者さまだって叔父から聞いて……… お願いです、僕も連れて行って下さい。… 足手纏いにはなりませんから」

「シシル、遊びじゃないんだ。おれもソロも、生死紙一重の戦いに身を置いている。… 相手は魔王だ、正直死ぬ可能性の方が高い戦いなんだ。……… 宿屋の案内人が出来る旅じゃない」

「わかってますっ。……… 実は、僕の両親… 僕が生まれて間もなくに亡くなってるんですが、一度オルテガ様に助けられた事があったんです。盗賊団に捕まって売られ掛けていたところを助けられたみたいなんですが……。… だから、オルテガ様が助けくれなかったら、僕も産まれていなかった。本当はオルテガ様に恩を返したかつ

ただ、もう亡くなられているし。…ご子息が次代勇者として旅立ったと聞いて是非手助けしたくて待っていたんです」

ソロがリロイを見下ろす。リロイがソロを見上げる。そして、二人揃って一つ溜息を漏らした。

「だから宿屋の人間に出来るような事じゃあ……」

「僕、長老様に簡単な回復魔法を教わりました。……泣き言も言いません、お願いです、連れて行って下さい!!」

がばつと頭を下げるシシルの前でリロイがソロを見上げた。……

どうする?という視線。勿論ソロもそれにどう答えて良いかわからずに、ただ見返すだけで。

やがてリロイがその視線を外し、険しい表情のままシシルへと向き直る。

「二度と此処には戻れないかも知れない旅だ。それでも…良いのか?」

「はい。……ずっと、この日を待っていたんです」

ツンツンとソロがリロイの腕を突いた。視線を向けないまま、リロイがぎゅーっ、とソロの足を踏む。

「いでえっ!!?」

「……。わかった。だけどおれたちもそろそろ出ないとならない。ゆっくりと荷物支度を整える暇は……」

「あ、もう用意は万全ですっ。すぐ出発しましょう!」

カウンタ裏から背負いリュックをどんっ、と取り出され二人が目を丸くした。

「すげえ、用意周到…」

「シシル、お許しは貰えたのかい?」

ガチャツと扉が開き。シシルの叔父でこの宿の主である壮年の男が現れた。咄嗟にリロイとソロが一礼する。

「……………本当に良いのかい？実子じゃないとはいえ、宿の後継ぎだろ？」

軽くシシルへ顎をしゃくり、ソロが尋ねる。

「……………今迄一度もわがままを言った事の無い子でした。それに…この旅の重さは十分にわかる年齢と思います。……………どうか、この子を宜しく願います」

深々と頭を下げられリロイが面食らう。

「……………生命の保証は出来ない。それでも構わないなら、此方からも宜しく願います…」

「はいっ！！」

元気良くシシルが横で返事をして、小走りに宿の戸口へと向かっていく。

「さあ、行きましょっつ」

「行こう、たつて。おいおい、飯くらい食わせてくれよ！」

「大丈夫です、お弁当用意してますんで。ほら、早く早くっ」

リロイは頭痛を感じ、深く額を抑えた。

3話 真実

こうしてパーティは、リロイ、ソロ、シシルの三人の面子になり道
中賑やかになった。

しかしそんな賑やかさも束の間の事で。一行は早々に次なる目的地
「誘いの泉」へと足を向ける事になった。

「……………誘いの泉？」

「リロイさん知らないんですか？」

「あゝ、シシル。こいつ筋金入りの箱庭勇者だからな、地理世間事
情に疎いんだわ」

ひらひらと手を振るソロにじろりとリロイが見。コホンと咳払いを
した後に改めて訊ねる。

「……………。シシル、誘いの泉って……………何なんだ？」

「あ、はい。ええと、このアリアハン大陸とロマリア大陸を繋ぐ国
境みたいなのところの一つですよ。他にあった安全路は全て魔物の攻
撃で閉ざされてしまいましたが、此処だけは何とか残っているみた
いです」

「…水辺が……………国境？」

「あゝ……………」

「……………だらけのリロイにガシガシとソロが頭をかく。」

そしてシシルから説明役を引き受けるように、リロイの鼻先にずい
っと指を押し付け。話を続けた。

「国間移動には魔法で造られた渦を利用してんの。旅の扉って巷に
や言われてるがな？誘いの泉の地下にはそこまでの連絡通路の洞窟
があつてな、そこを抜けて、渦を抜けて、ロマリアへ向かうんだ。
理解OK？」

「……………わかったような、わからないような。まあ百聞は一見に如
かずというしな……………で、あの建物か？」

ソロの指を掴み、降ろさせながら。リロイは遠くに見えて来た石造りの建物へ視線を向け、言った。

「いや、あそこは違うな、管理してる爺さんが確か……………」

不意に言葉を途切れさせたソロがジャツと剣を抜く。それと同時にリロイも剣を抜き、シシルを庇うように前面へ立つ。

「な、な、何…………どうしたんです？二人とも……………」

一人わからないのはシシルだ。「敵」とだけ言い、その瞬間、茂みから飛び出して来たものをリロイが切り捨てた。巨大な昆虫型モンスターだ。さそりばちと呼ばれるそれはリロイが切り捨てたのを合図とするように一斉に周囲から飛び出して来た。

4、5、6…………全部で7匹もいる。

「うわっ、わわっ……………うひゃあああっ！」

「シシルは下がってなっ。リロイ…………来るぞ……………」

言い放ちながら、ソロが剣を一閃させる。頭部と胴を切り離されたそれは、厭らしい羽音を残してその場にべしやりと落ちる。

リロイも攻撃をかわしつつ何体か切り捨てるが、まるで倒したさそりばちの体液の匂いに集まるようにその数はどんどん増していく。一体一体大した事のないモンスターとはいえ、消耗戦に持ち込めばこつちが不利なのは目に見えていた。

「…………ちっ、きりがねえっ……………」

「え、うわっ……………」

ぐいっつとシシルを肩に担いだソロが剣を振り回しながら、少し離れて戦っているリロイに向かって声を掛けた。

「おい、リロイ……………一気に泉まで駆け抜けるぞ……………！！ついて来い……………！！」

「……………っ……………ニフラム……………！！」

すっつと息を飲み、リロイが剣を掲げる。その切っ先に収束した光が、一斉にさそりばちに襲い掛かり、何体かが飲み込まれて消えて行った。

その隙にソロの隣まで一気に駆け。一緒に逃げ出す。

「そんな便利なもん使えるならさっさと使えっ……………」

「馬鹿！！この魔法は隙が大きい上に成功率が低すぎるんだよつ。

……無駄口叩いてないでさっさと走れつ、追いつかれるぞつ」

「お前よか足は速いぞ」

「悪かったな、どうせ——」

ぎゃあぎゃあ騒ぐ二人に、担がれたまま移動中のシシルが目を細めた。

この人たちって相性良いんだか悪いんだかわからない。……子供みたいだ。

結局はちの集団を巻くまでに暫く掛かり、泉へはかなりの遠回りになってしまった。

「……ぜえぜえ……」

「だから言っただろ、しゃべりながら走りや消耗も激しいって」

けろりとしているソロと対照的にリロイは肩で息を繰り返している。一度逃げ遅れてはちに刺された箇所をシシルが隣に座りホイミを施しており、その傷は大した事ではない。

「……う、煩いっ……」

「リロイさん、動かないで。……はい、お終い。どう？痛いの消えた？」

ポンツとシシルに肩を叩かれ、リロイがそれを見下ろす。いつの間にか痛みどころか傷まで消えている。

「……ありがと。凄いな、刺された痕も無い。……綺麗なもんだ」

「へへ」

「確かに……この先は回復魔法があったら心強い。シシルに来て貰えて本当に良かったよ」

素直な気持ちだった。

アリアハンを立つ時にはソロが邪魔で、荷物にしか思えなかった自分が。幾つかの戦いを越えてソロもシシルもかけがえの無い者となっている。

その心境の変化に気づいたのか、に、とソロが笑みを浮かべ。「さて」と、立ち上がる。

眼前に広がる無気味な泉。そして、その対岸にぼんやりと見える石造りの入口。別に番人も誰もいる様子はない。

「そろそろ行くかい？………何だか随分と荒れちまつてるが」

「…ソロも此処を抜けて来たんだろう？」

「二ヶ月くらい前にな。だがこんな薄気味悪いところじゃなかった。俺がこの大陸に着いてのんびりしている間に…何かあったのは間違いないな…」

リロイとシシルが互いに顔を見合わせる。

「何かって…何？」

「知るか。…何にしろ、さっきの状況にしる魔窟になっているには違いないな。…びびるなよ？シシル」

かかか、とふざけた口調で笑われシシルが頬を膨らませる。

「わかつてるよ！」

その様子に自然とリロイの口元に笑みが浮かんだ。

「—— 走れ！此処じゃ応戦は無理だ、数が尋常じゃねえっ——」

「リロイ！そつちじゃないっ、こつちだっ！」

「—— っ」
迫るモンスター。

数と混乱、そして暗闇に分断され、リロイは焦りの色を浮かべた。

そして次の瞬間。ぽつかりと口を開けた崖に足を滑らせそのまま…転落した。

「……………！！」

「……………！！！！」

仲間の声が遠ざかる。モンスターの鳴き声が、魔法の炎が、金属の打ち合う音が。聞こえるのは、崩れる瓦礫の音と鋭く耳に飛び込む風の音だけで。

咄嗟に剣で落下を防ごうとするが、ままならず……………途中で岩場に頭を打ちつけ、そのままりロイは意識を手放した。

……………

……………

「……………。……………つつ……………」

じやり、と冷たく細かい砂の感触に指を反応させ。リロイは目を開けた。パラパラと、まだ自分が落ちて来たであろう大きな巨穴から何か細やかな砂が落ちている。

「……………くっ……………う……………」

ずる、と上体を起こす。骨は運が良かったのか支障なさそうだが全身打身でまともに動けそうも無い。

呼吸をする度に胸が痛んだ。

「……………。ドジったな……………」

小さく吐息が漏れる。

そういえば、出立してから……こんな一人になる事等無かった。
魔物の巣に動けない体。

冷たい汗が背を伝い落ちる。

このまま此処で…魔物に見つかって食われるか。それとも…連中が見つけ出してくれるか。

どちらにしろこのままでは自力で戦う事すら出来ない。

それに——切り抜けられるのか？……外で出て間もない自分が。

ソロの言うように、自分はまだ……過保護の下で育った箱庭勇者、役立たずでしかない。

「……………」

時間が流れるのが妙に遅く感じる。時々遠くで這うような音がする度、吐息が自然と抑え込まれる。

ごくりと、自身の唾を飲み込む音が。奇妙に近く感じる。

……。

恐れてるのか？魔物を。死ぬという事を。

……。

当たり前だ。

怖くないはずがない。……死にたくない、その気持ちは、強い……。

……。
だって、自分は——。

……………ズル。

嫌な音がすぐ背後に響いた。びくりと肩を跳ねらせ、リロイが座り込んだまま剣を抜く。
闇から何かが近付いて来る。……………巨大な芋虫、キャタピラーだ。ヒコヒコと先端の小さな触手を動かしながら、ゆっくりと確実に、リロイへ近づいて来る。

色形や匂いじゃない、恐らくは………体温を察して位置を読んでいるのだ。

「くそ………っ。こんなところで、死ぬわけにはいかないんだ………っ!!」

軋む身体に叱咤して、リロイが立ち上がった。そのまま、真一文字にキヤタピラーの頭部目掛けて剣を振り下ろす。―――が。

バキィンッ!!

予想外の事態が発生した。出立の時から愛用していた銅の剣が、その堅い装甲を貫く事が出来ず……いや、それどころか、根元から二つに折れたのだ。

「………っ!!!!」

事態に一瞬で表情を変え、離れようとしたが…傷ついた体にそれだけの素早さが残っているわけでもなく。リロイの喉下目掛けてキヤタピラーがその小さいが鋭い牙を剥けて来た。

間一髪それを両手で受け留めるが………それが仇となった。此れでは攻撃魔法も使えない。

顔面ギリギリで攻撃を阻止するリロイだが、その動きに気づいたのはそれから間も無くだった。

キヤタピラーの尾の部分。鋭い槍のようになっているそれがゆらりと蠢いたのだ。

「………っ。しまっ………!!」

その瞬間、まるで矢のようなそれは獲物の腹部目掛けて突き込まれた。

「………リロイ―――っ、何処だ返事しろっ!!」

「ソ、ソロっ、そんな大声出して走り回ったら魔物が集まって来るよっ」

「るさいっ！あいつを探し出す方が先決だろうが……っ……」
シシルへ文句を言ったソロだが、自分の眼前に映ったものに信じられないという表情を浮かべたまま、言葉を失った。

「ソロ……？……っ……っ！！リロイさんっ！！」

それに気づいたシシルも悲鳴混じりに叫ぶ。今まさに、キヤタピラーの尾に貫かれ、だらりと動かないリロイの姿がそこにあったからだ。

叫ぶよりも先にソロはキヤタピラーに斬りかかっていた。リロイの血で濡れた甲殻魔の装甲はただでさえ半端ではない。しかしソロの剣はそれもお構い無しに、まるで紙を切るようにスッパリと切り裂いたのだ。「ぴぎいいいいいいっ！！」と耳触りな鳴き声と共に絶命するキヤタピラーを蹴り飛ばし、ソロがリロイを引き摺りだす。意識を失っているのか、それとも死んでいるのか。リロイは尾を引き抜かれても眉一つ動かさない。閉じられた瞼も開く気配は無かった。……いや、微かに、息がある。

「リロイ！おい、リロイ！しっかりしやがれっ！！」

「リロイさんっ！！」

リロイを横たえるソロの隣に、半泣きにシシルが近づいて来る。ソロが言うよりも先に、早口に回復魔法の式を完成させ、ホイミを唱え始める。

「……ちっ、俺が……俺が目を見離さなきゃあ……畜生！！」

如何に勇者といえどもまだ実践もそこその16歳の少年なのだ。どれだけの潜在能力を秘めているかは知れない。だが、今はまだひよっこの少年だったのだ。

わかっていたはずなのに……！！

ソロは深い自責の念にかられ、ガンツと強く地を叩いた。そのまま手早に血で染まったりリロイの鎧を外しに掛かる。

「……、ソロ？」

「黙って治療に専念してろ。……傷口に近い方が回復魔法の効きが良いと聞いた事がある。こいつをこんなところで……死なせてたま

るかつ」

汚れた装甲を取り払うと、血で染まった真っ赤な上体が現れた。

が

回復魔法を掛けたまま、シシルが固まった。そして、脱がせていたソロも、固まった。

「……………」

胸が

ある

晒しで抑えられているが、間違いなくそれは成長途中の女性の胸だった。

「女……………」

ぶつとシシルが鼻血を噴出す。それを慌てて後ろで抑えながらソロがポツリと呟いた。

「声変わりしてねえと思ったら……………女かよ」

シシルのホイミで何とかリロイは一命を取り止めた。

その後は大したモンスターの襲撃も無く、ソロに背負われたまま何とか洞窟を抜け出す事に成功したが………ソロもシルも、その両頬には手痛い平手打ちの痕が二つくつきりと残っていた。

「……………」

背中に齧り付いたまま、リロイは何も言わない。やがてロマリア城であろうか城が遠くに見え始めて来た時、ポツリとソロが呟いた。

「いや、悪かったとは思うけどよ……。言わなかったお前も悪いんだぜ？何つーか、その………緊急事態だったろーが。………な？」

「……………」

無言に空気が押し潰されそうになりながらソロとシルはげんなりとした。

「いい加減話してくれよ。…何故「勇者リロイ」が女なのかよ。

…一応、仲間だろ？」

「……………」

「リロイ……………」

「死んだのはリロイだ。……………8年前、次代勇者として育てられていた兄のリロイが…病で死んだ」

「……………え」

ぴたりと二人の足が止まる。背負われたままのリロイを見、やがてシルが「あ」と小さく言い。

「じゃありロイさんが……………ナナ、なのか？」

「次代勇者まで死んだとなれば…それに縋って生きていた民が混乱し、絶望し…二度と立ち直れなくなる。おれは…最高の替え玉だった。へ 死んだのは妹のナナ」そう、そして…兄の墓には妹の名が刻まれた」

そのまま一息吐いて、続ける。

「確かに…おれの本当の名前はナナだ。だけど……………8年前のあの日、髪を切り、兄として生きる事を誓ったんだ…。知ってるのは、

母さんと…一部の人間だけ。今のおれは、リロイ。それ以外の誰でもない。…知られるわけには、いかなかった。…知られてはならなかったんだ」

「……………ナナ……………」

ポツリと寂しげに呼ぶシシルの声に、リロイはソロの背に顔を埋めた。

「その名は、呼ばないでくれ。……………シシルの知ってるナナは、死んだんだ。おれは、リロイ。英雄オルテガの息子の…」 世界を救わないとならない” 勇者リロイだ」

「……………っ、だけど……………」

「頼む」

きつぱりとしたその言葉に自然と言葉が制される。

「……………お願い、だから……………」

微かな鼻声。泣いているのか、とソロが僅かに眉をあげるがあえて何も言わずに再び歩き出す。

「リーダーのご命令だ、シシル。こいつはリロイ、それで良いだろ」

「ソロ、そういう問題じゃ……………っ」

「……………そういう問題なんだよ。」「リロイ」はそういう道を選んだんだ。俺たちはそれに従うだけさ。———そうだろ？リロイ」

やや上向きに顔をあげ、俯いたままの相手に声を掛ける。泣きかけたのか、僅かに目尻を紅く染めたりロイが、小さく頷いて。それから微笑を浮かべた。

「……………。ありがとう、ソロ……………」

「…気にすんな。それよりも街で少し休んだら、すぐ出発だぞ。まだまだ先は長いんだからな？」

「ああ……………」

ロマリアの城下が見えて来る。アリアハンに負けず劣らずの、大きな城下街だ。

ソロはああ言っただけで、恐らくは数日は滞在を余儀なくされるだろうと、シシルは感じていた。

口ではきつい事を言っているけど、リロイを気にかけて、そして無意識のうちにパーティの最年長の自覚が芽生えつつある。

そういう男だ、ソロという男は。

「シシル？」

知らずにやや笑んでいたのかシシルにソロが怪訝そうに声を掛けた。そのまま手をシシルの眼前へ向け、ひらひらと揺らせながら。

「…………。人面蝶にでも幻見せられてたような顔してたぞ」

「失礼な、ソロの寝顔よりはまともな顔してるよっ」

「いつ寝顔見たんだよっ」

「うさぎに睡眠魔法掛けられてスヤスヤ寝てたじゃないかっ」

「んなもん覚えてるわけないだろっ！！」

二人のやり取りにリロイが小さく笑った。その声色に思わず二人が留まる。

「そろそろ城下だ。行こう」

言葉にソロもシシルも大きく頷いた。

新天地は若者たちに何を齎すのか……………。

4話 齒車

「—— リロイ、武器と防具と……後は薬草と毒消し草。此れで足りる？」

パタパタと宿へ戻って来たシシルは大盾一つと薬草類の入った小袋を、部屋の隅へ置いた。窓辺に置かれたベッドから外に見える海岸を眺めていたリロイが「ああ」と見遣って笑む。

「悪いな。おれがもつと早く起きれたら手伝えたのに。……そういえばソロはどうした？」

「あれ？まだ戻って無いの？買った武器の方、重かったから先に持って帰って来て貰ったはずなんだけど。……ああ、リロイ、ベッドから起きちゃ駄目だよっ」

寝間着、素足で降り立とうするリロイをシシルが制する。

「だけど……いつまでも寝てるわけにも。何か手伝える事があったら、おれも……」

「ホイミで治癒したって言っても瀕死の重傷だったんだからっ。……ソロも言ってただろ？ええと、その……ほら。万全な状態で完治しろ、って……」

正確には

（ぶらぶら出歩くなよ。半怪我人をお荷物として連れ歩きたくねーからな？怪我人は怪我人らしく大人しくベッドと愛を育んでな）

と、いう台詞だった。

「わかってる。だけど寝たきりばかりじゃ逆に身体に悪いし……。少し街を歩くだけで、付き合ってくれるか？シシル」

ご指名され、どきん、とシシルが目を丸くする。

（こ…これって……。デ、デートって…奴！？）

「…シシル？」

奇妙に固まった少年の前でひらひらとリロイが手を振る。

「……………いや、嫌なら別に一人で……………」

断り掛けたリロイの言葉にぶんぶんと首を引き千切れんばかりに首を振るシシル。

リロイが驚いたように目を丸くする。

「大丈夫っ！！何か…あっても、僕じゃ回復魔法使えるし…ソロも許してくれるよっ。じゃ、じゃあ…階下で待ってるから、身支度整えたら、来て？ま、待ってるから！」

やけに浮かれて部屋を飛び出していったシシルにぽかんとリロイは見送り。

8年、女としてではなく男として育ったリロイはそのシシルの気持ちができる事もなく、ただ一言。

「……………。どうしたんだ？あいつ……………」

現在のロマリア城下は普段の2倍も3倍も盛り上がっていた。そう、たまたま建国記念祭とぶつかってしまった為に祭りムード一色に染まっているのだ。

人混みを避けて、シシルとリロイは小高い丘からそれを見下ろした。

「……………アリアハンよりもかなり人が多いんだな」

「世界にはもつともつと大きい国がたくさんあるからね。ええと、ポルトガ国にイシス国、エジンベア国にサマンオサ国…ロマリアは結構小国の部類に入るみたい」

並べられた国家名の数々にリロイがシシルを見遣る。

「凄いな。シシルは行った事があるのか？」

「いや、僕の家は宿屋だったからね。レーベはアリアハン城下に向かう中継地でもあるし、他国のお客さんが多かったんだよ。その人たちから色々聞いてたんだ。一度行ってみたいと思っていたけど……いつか行けるかな」

「魔物の影にさえ怯える事がなくなれば、簡単にいけるさ。……いつか、行ける。その為に……戦っているんだ」

笑みと共に呟かれた言葉にシシルが一つ頷く。しかし、ふと何かに気づいたようにリロイを見、やや傾斜のきつい坂を少し滑り降りた。「ん？」とそれに何事かと見遣るリロイにへへっと笑い。

「リロイはそこで座って待ってて。動いちゃ駄目だよ」

やや暫くし、シシルは二つの果実飴を持って戻って来た。林檎と苳そして両方をリロイへ差し出し。

「はい。好きな方取って良いよ？」

突然の事にリロイが戸惑っていると、シシルがにっこりと微笑む。

「リロイ………小さい時から甘いもの好きだったろ？」

「ナナ」と呼びたい。それを堪えてシシルは笑みを崩さずに更に促した。

「あ、ああ……。………それじゃあ、苳の方……」

リロイ……いや、ナナは覚えていないかも知れない。アリアハンで同じように行われた祭。9年前のあの日、幼いシシルは同じように林檎飴と苳飴をなけなしの小遣いで買って来て……ナナに選ばせた。そしてあの時選んだのも、苳飴だったのだ。

思い出し、やや俯き加減のシシルにリロイがそつと顔を覗き込んで来る。

「……シシル？………どうした？具合でも………」

「あの頃に戻りたいな……。魔王軍の脅威も何も知らなくて、ただ笑っていたあの頃に」

「……………」

「もう戻れないんだよな」

小さく、黙ったままりロイが頷く。不意に影が出来たと思い、顔を上げたその時。

ゴーン

ゴーン

ロマリア教会の鐘が、夕刻を知らせる為に低く重たい音色を鳴らし始めた。

リロイは、何が起こっているかわからなかった。柔らかいシシルの唇の感触。目を見開いたまま、退けようか否か、迷っているその間に。…シシルはそつと唇を離れた。

「…ナナが生きているとわかって、僕は本当に…嬉しかったよ」
そのまま立ち上がり気まずそうに俯いて。

「……………」
「ごめん」
それだけ言い残して。シシルは逃げるように雑踏へと駆け去った。

人々が帰路へ流れるなか、その行動と、言葉の意味を見つけられず
呆然と…リロイはその背を見送っていた。

「……………」
連れ出して置いて来たなあ！？……………お前なあ、あいつが
怪我人だつて事忘れんじゃねーか！？一体何考えてるんだっ！」
戻って来たシシルに待っていたのは、当然とばかり保護者…否、ソ
口のお小言だった。

「…ご、ごめん」

「……………いい、俺が探して来る」

新調したばかりの剣を手にソロが立ち上がった瞬間。ガチャツと戸を開け、リロイが戻って来た。

二人の視線が、リロイに向けられる。

「……………あ、ソロ…。ごめん、勝手に出歩いて…」

「……………」

二人揃って「らしくない」様子にボリボリとソロが頭をかき。それから再び剣を投げ出した。

「まあ、いい。動けるようになったなら、そろそろ出立するぞ。…」

…シシル、宿主に明日出るって話つけて……………———シシル？
ぼんやりと窓から外を眺めていたシシルがソロの言葉に、はっとして振り返る。

「え、え？何？何か言った？」

「だ〜からっ！！明日出立するって宿主に言っつけつつたんだよ」

「わ、わかった」と頷き。やや急ぐようにパタパタと部屋から出ていくシシルに、ソロが小さく溜息を吐いた。

「やれやれ、何ぼけーってしてんだかな。なあ、リロ……………」

そのままリロイの方を見遣ると、今度はリロイがベッドにこてんと転がったままぼんやりと何か考え事をしているような。

ソロの溜息は一層大きいものとなった。

「人が買物してる間に何があったよ……………このガキどもは……………」

翌朝――ロマリアを出、一行は山岳地帯を越えた先の東の台地アッサラム地方へ……向かう予定だった。

しかし、出立の朝、突然現れた兵士たち。自分たちはロマリア王の使いで、アリアハンから入国していた勇者を探していた、というのだ。

「確かにおれたちだけど、王様に呼ばれるような事は何もしていない」

正論だった。

その言葉に慌てたように兵の一人が違うと否定をして。

「いえ、何かした、という事ではないのです。実は王より直々にお願ひしたい事があるとの事で……。お願いします、一緒にいらして下さい」

必死な様子に、此処で突っ撥ねればこの者たちは王から叱りを受けるに違いないと察したりロイは、同じく困ったような顔をしているソロとシル双方を見遣った。

頷きで承諾の意を受けると吐息混じりに兵士に向かい。

「わかった。だけど、おれたちは出来るだけ早く発ちたい」

「お時間は取らせません……。ありがとうございますっ」

……と、いう事だ。

そして現在、三人はロマリア城大間の謁見の間にいるのだが……。

「ご足労すまなかったな。わしがロマリアの王、ゼオルじゃ。そなたが、魔軍討伐の旅に出ておる勇者リロイか……。若き日のオルテガ殿に良く似ておる」

「……。ありがとうございます」

礼を込めた声色で静かにリロイが頭を下げ。続いてその後ろでソロ

とシルも頭を下げた。

「兵士方よりお伺いしております。…何か頼みがあるとの事ですが…」

「それなのじゃが、大盗賊カンドタの話は聞いた事があるかね？」

「カンドタ…？」

眉を寄せるリロイにソロが「出た、箱入り勇者」とばかりに慌ててフォローをする。

「ぞ、存じております。西方大陸を騒がせている、山賊あがりの盗賊の名でしたね。カンドタ一味は」

「その方は？」

「勇者リロイが従者の戦士ソロと申します」

恭しくソロが儀式礼をし、そつとシルがリロイに耳打ちした。

（きちんと話せるじゃん）

（……………ああ、意外だ）

「…それで。数日前の話なのだが…彼の連中は恐れ多くも我が国の宝である黄金の王冠を盗んでいきおつたのだ」

「……………」

嫌な予感がして来た。

「西部シャンパーニの塔が奴等の寝倉とわかったものの並の兵士どもでは歯が立たん。そこでそなたらにカンドタ討伐と王冠奪還を依頼したいのじゃ、無論礼は支払う」

…ビンゴ。

ソロとシルは揃って半目になりかけた。自分たちはぶらぶらと旅をしているわけではない。一刻も早く戦力を強化し、魔軍へ挑まねばならない身だというのに。

奪還屋でも何でも屋でもないのだ、自分たちは。

反意を示そうとしたその時、リロイが一步前へ進み出た。

「……………了解致しました。その代わり、礼金は要りませんので、ポルトガ国との国境を渡る権利を頂きたい」

「リロイ？」

地理に疎いはずのリロイから出たその一言に二人が啞然とした。ぴくりとゼオル王の眉が上がる。

「聞いたところ、現在ロマリアは魔物侵攻を恐れてポルトガ間の旅の扉を封じているとの事。その使用権を頂けませんか？」

「むう……」

思いがけなかったのか、王がやや考え込み。それから背に腹は変えられない様子で一つ、頷いた。

「わかった。それでは達成の暁はするように施しを為そう」

「ありがとうございます。…それでは早速これよりシャンパーニの地へ発たせて頂きますゆえ、此れにて失礼致します」

「うむ、吉報を待っているぞ」

二人を視線で目配せした後、深く一礼をし、そのまま城を後にした。

納得がいけないのは、同行している二人である。

「お前、いつの間にこの辺りの状況に詳しくなったんだ？」

歩きながら訊ねるソロにリロイが小さく苦笑する。

「部屋で寝ている間、暇だったからな。色々調べて見たんだ。――

ポルトガ国は世界でも有数の船の所有国。船があれば世界は広がるからな……。だから敢えて、遠回りになっても引き受ける事にした」

「なるほど」

「いつまでも何も知らないのは嫌だし……。さあ、とにかくそのシャンパーニの塔とやらに行こう」

塔へは徒歩だと二日かかってしまう為、馬を借りる事になった。乗馬経験のあるソロとリロイを尻目に馬に乗れないシシルは仕方なくソロと一緒に乗る事に。

「はっ、早い早い早い、落ちる落ちる落ちる……っ」

「こらっ、手綱取りにくいだろうがっ、しがみつくんじゃねえっ！」

「だ、だだだ、だって怖いっ」

「いい加減にしろっ！！気絶させるぞ！！」

風切る音のなか、ソロの拳骨の音が生々しく響き渡る。

「—— 見えたぞ！」

リロイの言葉に二人が前方を見上げた。聳え立つ巨大な塔。…あの、出立した時に見た、馴染の塔よりも遥かに大きく見える。

「リロイ、森に入るぞ」

馬の軌道を逸らせながら、ソロが声を掛ける。

「先に連中に気づかれると逃げられる可能性がある。こっそり忍び込むんだ」

塔のすぐ東側には鬱蒼とした森が広がっていた。

そこを使えば、塔の上に見張りがいようと早々と見つかる事は無い、そう考えて。

リロイたちは馬の足を速めた。

5話 奪還作戦

—— 塔内部は外で見たものよりも狭かった。

かつては魔物の巣窟だったらしいのだが、どうやら連中が住み着いた時に全て排除したらしく、中は倒された魔物の骨で一杯になっていた。

「こいつぁ……………なかなかひどいな」

「カンダタとやらは何処にいるんだろう」

「そりゃ勿論……………」

歩きながらソロが「お」と呟き、上がり階段を示した。

「ボスは上階つてな。お約束だろ？」

上がった先の個室では荒くれ者が3人、酒を酌み交わしていた。換気が悪いのかひどく空気が汚い。しかめっ面をしたシルを後ろに、リロイとソロが一步室内へ踏み込んだ。

途端、ざわめきが収まりガタンと男たちが立ち上がる。

「何者だ！！」

「お前らに名乗る名前等ない。……………カンダタは何処だ。痛い目に遭いたくなければ居場所を吐け」

静かな声色でリロイが呟く。ソロもシルも、その恐ろしいほどの静けさは誰よりも知っていたので苦笑を浮かべるだけだ。

「このつ……………ガキが生意気な口叩きやがって！！構わねえ、やっちまえっ！！」

ガタンガタンと壁にかかっていた剣を手に三人の男たちが一斉に襲いかかって来る。

しかし、リロイは不動のまま、小さく息を吸った。そして一人の顔面に鮮やかなパンチをクリーンヒットさせたのだ。気持ちの良い音が室内に響き渡る。

「ぎゃあっ！！」

ガタタンッ！！

吹っ飛んだ一人が残り二人を巻き込んで無様に落ちる。殴られた本人は歯が折れたのか、しきりに口を抑えて何かうめいていた。

「—— もう一度言う。カンダタに会わせる」

「ひっ……………」

「おっ、お頭に報告だっ！！」

一人を引つ張るように二人が慌てて奥の梯子を上がっていく。それを確認した後、リロイがそれまで黙って後ろで見守っていた二人へ振り返った。

「あの上だ、行くぞ」

返事も聞かずにタツと駆け出す。

「…………… ああ」

「おっかないな…………… もうリロイ怒らせないようにしないと……………」

梯子を上がるとそこには覆面の大男が先ほどの手下と共に待っていた。大柄で、ソロよりも遥かにでかい。

確かにこんなのが相手じゃ、ロマリア兵も苦戦するわけだ。

「てめえらか、俺の可愛い部下をぶん殴ったって奴は」

下品な笑いが耳につく。眉を寄せたままりロイが一步踏み出した。

「そんな事よりも…………… おれたちが此処に来た理由はわかってるだろう？ —— 黄金の王冠は何処にある」

「へっ、随分とひよろひよろしたガキじゃねえか。てめえがリーダーか？」

「質問に答える」

「へいへい、と…………… 確かに王冠は俺様が持っているさ。だが、はい、どうぞ、って差し出すとも思ってるかい？」

言葉にぎゅっとシルの杖を握る手に力が籠る。

話し合い等最初から期待はしていない。

受けた命は、「討伐」だ。縛り縄で連れ帰れるか…………… 最悪此処で

斬り捨てる事となるか。

生か死か二つに一つ。……………更に相手は魔物ではない。外道とはいえ、人間なのだから。

「そんなに甘い連中なら苦勞はしないだろうな。——— 力
尽くで従って貰う……………っ!!」

リロイの言葉を皮切りに、ダツと三人が獲物を抜いて駆け出す。しかしカンダタは不動の笑みを浮かべたまま、ダンツと無造作に床を踏み締めた。

罨……………!?

そう思った瞬間には遅く、三人の足元の仕掛けが動き、落とし穴が生じる。

「甘えよ、ガキども」

カンダタの嘲笑が遠ざかり、三人は再び先ほどの小部屋へと落とされた。

「うわああっ!!」

ドガガシャン!!

反射的に下方に剣を突き立てたので、木製のテーブルが真つ二つに割れてしまった。残骸からリロイたちは舌打ちし、再び梯子を上がっていく。

「おい、リロイ……………っ」

「……………何だ!??」

「あんまり感情的になんな! 付け入られるぞ?。奴は口だけじゃねえ、多分それなりに腕も立つはずだ」

ソロの言葉に出しかかった言葉を飲み込み、一息吐く。「ごめん」と漏らし、そのまま…先ほどの屋上まで辿り着くが、既に連中の姿は無い。

「くそ…逃げられたか?」

「あつ、リロイ、ソロ、あれあれ。あれ使ったんじゃないか?」

何かに気づき、シルが駆け寄る。窓から掛かった一本のロープの切れ端を見。そこから吹き抜けの通路を見下ろした。

考え込むような仕草の後、ポンツと手を叩き。にやっと笑うシシルにリロイが小首を傾げる。

「どうした？」

近づいて来た二人に一つ頷き。それから確信あり気に遙か下を指示した。

「まだ追いつける！」

「……………しかしあのガキ、何処かで見た事が……………」

カンダタとその一行は塔の入口へ向かい歩いていった。連中は下部屋へ放り込んでおいたし、完全に撒いている。もう追いつけるはずもないだろう。

誰かに似ている。

あの目、何処かで……………。

しかしそんな思考も、前方を歩いていた手下の戸惑いの声にかき消された。

「……………！？お、お頭っ！」

「何だ……………、うお！？」

「……………もう逃がさないぞ」

前方にリロイとシシル、後方にソロが立っている。細い通路で挟み撃ちされ、カンダタが唸るような声を漏らした。

「てめえらどうして此処に……………」

「別に大した事じゃない。高低差を利用して先回りしただけさ」

「かゝなり全力疾走強いられたけどね……………」

そう肩で息をしているのはシシル。

「さて、全員で此処から身投げすつか、俺等に捕まるか。二つに一つだぜ？おっさん」

後ろでソロが愉快そうな声を上げる。しかしカンダタはふんつ、と鼻で一つ笑い。

「もう一つあるだろうなあ、兄さんよ」

「……………」

「俺がてめえらをぶつ倒して逃げるって道がなっ！」

「てめえら袋にしゃがれ！」というでかい声を合図に三人の手下、それに大斧を担いだカンダタが一齐に襲い掛かる。

辺りは一瞬にして乱闘に陥った。

「ルカニ！」

青い光が走り相手の装甲を弱らせたところにリロイとソロの鋭い一撃が襲う。一致団結した行動は、あっという間に手下どもを戦闘不能へ陥らせ、カンダタを追い込んだ。

「…やあああっ！！」

ガキンッ！！——ギギッ！！

買ったばかりの鋼の剣が斧と擦れ、嫌な音を立てる。リロイの攻撃を受け止めたまま、じりつとカンダタの足が動いた。

ソロが睨んだ通り——かなりの手垂れた。

「……………む…。こいつ……………」

「リロイ！」

急いでソロも加勢に向かうが、カンダタは眉を寄せたままリロイを見つめるばかり。攻撃が迫るとわかると、タイミングを合わせ、片腕でソロの顔を吹っ飛ばした。

「……………ぐあっ！！？」

衝動で塔から落ちかける。寸で柱に掴まるがその体勢は危つく。

慌ててシルがそれを引き上げた。

「…つつ……………俺は良いっ、リロイの援護を…！」

そうソロが叫んだ瞬間、力負けしたリロイから苦痛に満ちた声が漏れた。

「あああっ！」

斧で肩を切り裂かれたリロイの腕から剣が落ちる。それに動じる事

なく、カンダタがにやりと笑い。

「勝負あつたな、小僧」

「くっうつ………!!」

肩口を抑えたまま苦痛の表情を浮かべるリロイの顎を、ぐいっと乱暴にカンダタの指先が捉える。

「男のくせに綺麗な顔してやがるな。…奴隷と売り払っても良いが………これなら客も取れるだろう」

——客？

リロイはともかく、ソロとシシルも目が点になる。

「好きな連中も多いつて事だよ」

つまり。

「変態!!」

叫んだのはシシルだった。それにムツとしたようにカンダタが斧を振り上げる。

「やかましい!!俺あ、女にしか興味ねえんだよ!!………と、動くなよ。大事なリーダーの首が飛ぶぜ」

じりつと動きそうになったソロの足に気付き、カンダタが再びリロイの喉下に斧を押し当てる。

「くっ………」

利き腕を斬られたリロイに戦う力は残っていないと、甘くみていたのだろう。

ソロとシシルに意識が集中していたという事もある。——

だから、気付かなかつたのだろう。

彼がほんの微かな声で、呪文式を完成していた事を。

「ニフラム!!」

「なっ………」

弾ける閃光にカンダタも、ソロとシシルも、思わず目を瞑った。

「リロイ!!」

真っ白の光のなか、10秒、いや、5秒くらいだったかも知れない。シャリンと刃が擦れる音が響き、カンダタのくぐもった声が聞こえ

た。

ソロとシシル、二人の視界が戻ったその時には。
形勢は逆転し、カンダタの喉下には刃が押し当てられていた――

いつの間にか肩の傷も消えているリロイが、予備武器として持っていた聖なるナイフを喉下へ押し付けたのだ。

「……………。ホイミか。いつの間に……………」

「逆転だ、カンダタ。武器を置け」

言葉に舌打ちをしてカンダタが重い斧を投げ下ろす。それをソロが拾い上げ。

「黄金の王冠もだ。お前が持っているのだろうか？……………。つと、妙な真似はするなよ。そこは頸動脈だ。切れたらホイミどころじゃ済まないからな……………」

「わかったわかった。……………。ほらよ……………。受け取れ！！！」

ぶんっ！！！！

袋から出した王冠を力任せにカンダタが投げつける。

「わっ！！！」

ガツとそれはシシルの頭に当たり、反動で反対側の壁に当たる。

そしてその一瞬……全員の意識がそれに向いた瞬間、カンダタはその強靱な脚力でリロイを蹴り飛ばし、そのまま間合いを取った。

「ぐっ！！！」

「へへへ、だからガキだってんだよ。……………。そいつあ返してやる。だが二度目があると思うなよ？」

ごそりと懷から出したのは羽毛のような魔法道具。……………。キメラの翼だ。

「……………。くっ……………。！！逃がすかっ！……………。ギラっ！！！」

「バギ！！！」

二つの呪文が一斉にカンダタに向かって放たれるが……………。遅い。

「ははははは!!」

閃光が炸裂した瞬間、カンダタの姿はそこになかった。王冠を手にしたまま、シルが呆然とする。

「逃げられちゃった。どうしょ……………」

「……………ああ……………。でも王冠は取り戻せたし……………ん?」

きらりと床に光るものに気づき、ソロが拾い上げた。それは金の金具で装飾された木製の小さな鍵。恐らくはカンダタがカメラの翼を使う際に落としてしまったものだろう。

「確かあの最上階の部屋に鍵の掛かった部屋があったよね」

「あつたっけか?」

記憶にないソロが眉を上げる。しかしリロイは覚えていたらしく、一つ頷いた。

「もしかしたら他のカンダタの盗品があるかも知れない。それも一応持つて行こう」

再びあの最上階まで戻り、鍵で扉を開ける。しかしその中の物は既にあらかた持ち去られた後で目ばしいものは何も……………否、巨大な鳥籠があるだけだった。

「ちえっ、拍子抜けするなあ……………。どうする?リロイ。早く戻って王様にさ……………」

「待つてシル!…誰がいる!」

部屋から出掛かったシルの背に未だ探索していたリロイが声を掛けた。まだカンダタの手下が、と想像し、ぎよっとして振り返る。

しかし実際は残してあった鳥籠の中で眠る……………少女だった。

「ふああ……………」

人の声に目を覚ましたのか、一見14、5歳のその黄金髪の少女は大きな紫の目を瞬かせた。1、2、3と籠の外にいる三人を交互に見遣る。

「………………。貴方たち、誰？どうみてもあのむさくるしい連中と毛色が違うみたいだけど」

「誰と言われても……………君は、誰だ？」

「あたしはミロッド。此処の一番でかい男に攫われて来たの。……………もしかして、あいつらやつつけてくれたの？」

三人は視線を交わして。やがてシルが済まなそうに頭をかいた。

「いや、逃げられちゃったんだけどさ。でも鍵を落として行っただけだ」

「ふうん。……………まあ、何にしる助かつちゃったわ。この檻、魔法が効かないのよ。開けてくれる？」

ふわりと揺れる金糸のような髪を見、見惚れていたソロとシルだが、ふとソロがその耳が異様に尖っている事に気付いた。

「あ、お前……………じゃない、ミロッド、だったか。……………お前、エルフなのか？」

【 エルフ 】

流石にリロイにも聞いた事はある。自分たち人間の他にこの世界で暮らす種の一つで、ホビット、ドワーフ、魔族に続く、尖耳の高い魔力を持つ森の民だ。

「ん……………。ちよつと違うわ。正確にはハーフエルフ。あたしのパパは普通の人間なの」

鍵を開けられ、ようやく出られて。ミロッドは嬉しそうに身体を伸ばした。

「ありがとうつ。……はあー、窮屈だったつ。もう、あいつらつたらいきなりこんなところ押し込めて…売り飛ばすつもりだったのよ?」

「おれはリロイ。あのでかいのがソロ。隣のがシシルだ。…おれたちは王命を告げにロマリアまで戻るけど、一緒に来るかい?」言葉にソロとシシルが顔を見合わせる。

「王命?…良くわからないけど、あたし行かないといけないところがあるの。…これを持って、お婆ちゃまに会いに行きなさい、ってママに言われてるから…」

すると、胸元から何かを取り出す。反射的に視線を逸らしたソロとシシルだが、次いで出された物に目を奪われた。

赤い赤い、素晴らしく美しいルビー柱。長い間見つめると魂を吸い取られそうなほど。

「…良くカンダタに取られなかったな」

「服を剥がれなかったから。剥がれたら取られてたわ」

「ロリコンの気は無かつ……いであつ!」

ぎゅーっとシシルに抓られ、ソロが悲鳴を漏らした。

「お婆ちゃまはノアニールの森に住んでいるの。ロマリアは反対方向でしょう?だから、此処でさよならよ」

だいじょぶ、一人でも行けるから。

そう笑顔で言い、ミロッドが立ち上がった。

「…そうか。気を付けてな」

「うん、リロイたちも本当にありがとつ。それじゃ、またね?」

「リレミト!」そう鈴のような声色が漏れた瞬間、淡い光が弧を描いて。次の瞬間、既にミロッドの姿はそこに無かった。

「……魔法使い」

「え?」

「リレミトって時空を歪めて出口を作る魔法なんだよ。エルフが魔法に長けているって話聞いた事あるけど、あの娘も多分…」

「——行こう。ミロッドとはまた会える」

「え？」

「そんな気がするんだよ」

こうしてシャンパーニの戦いは夕暮れを背に終焉を迎える。

一路は夜闇の森を疾走し、再びロマリアへ戻り……その報を告げ。そして。

ポルトガへの道を手に入れる事に成功した。

6話 生命の護り

「—— 何でこう、王様連中に振り回されないといけないんだよ。僕たち、魔軍討伐の旅の最中だろ!?」

此れだからお偉いさんは、とブツブツ言っているのはシシル。

「そう言うなって。黒胡椒とやらが手に入ったら船を譲ってくれるってんだからありがたいもんじゃねーか」

「ソロの脳筋! そういうの利用されてる、ってんだよ」

いきり立つシシルに、「まあまあ」とリロイが割って入る。

「そう騒ぐな、人だかりが出来るぞ」

そう言われ、シシルがはつとした。…… すっかり忘れてた。

気付けば、けんかだ、けんかだ、とばかりに遠巻きで眺めてる人の数が増えている。

集中する好奇の視線に、シシルの頬はすっかり赤くなった。

…… 現在地、アッサラム街。 昼は商業の街、夜は大人の街で有名な二面性の街である。

夕暮れ時、ただでさえ人が多くなるこの時間帯にぎやあぎやあと騒ぐ連中。 三人は思いつきり目立っていた。

「とりあえず宿でも取ろう。今後の方針について話し合わないと…… おい、ソロ。聞いているのか?」

ふと、ソロは露天を眺めていた視線をリロイへ戻した。「ああ、悪い」とにへらと笑う様子だが、絶対に悪く思っていないなトリロイが半目になり。それでもまた事を荒立てて周囲の視線を集める真似だけはしたくなかった為に、咳払いをし、そのまま続ける。

「—— 就寝までに薬草の買い足しと武器の研磨をそれぞれ

れ……………」

「なあ、リロイ」

「今・度・は・何・だ!!」

歩きながらリロイがじろりとソロを見上げる。両手を半ば上げるような形で苦笑を浮かべながら、ソロが続け。

「そう怖い顔するなよ。……………あのな、後で個人行動させて貰って良いか？何、言われた事は全部やつくからさ」

「個人、行動…？」

「折角アツサームまで来たんだし少し物見見物したいんだよ。良いだろ？一晩くらい」

「…店の規模ならロマリア城下の方が多かったと思うが…」

「？、とかくと首を傾げるリロイに慌ててシルも付け加えた。

「ほ、ほら。夜露店とか酒場とか…そういうものだよ。そうだろう？ソロ」

ぐいぐいと肩を押されてソロがああ、ああ。と曖昧な笑みを浮かべる。訝しげに二人の様子を見ていたが、やがてリロイが小さく吐息を漏らした。

「……………わかった。ただ無駄遣いはするなよ？——— 目立つ行動も慎む事。良いな」

再び歩き出すリロイに二人がほくつと溜息を吐いた。にやにやと笑いながらソロがシルを突く。

「……………うひひ。此れでお前も同罪だな？」

「…う、うるっさいなあ。……………観光だよ観光っ」

二人の目的は、勿論。

夜間踊り子たちが悩ましげにたつぷりと踊りを披露する、ベリ―ダンスだった……………。

「………… あいつら、何が楽しいんだかわからん……」

二人が出て行った後の宿屋の一室。リロイは一人で鋼の剣を拭いていた。いつもなら就寝している時間。この時間に戻らないという事は………… まだ遊び歩いているのだろう。

リロイ………… いや、ナナは兄の替え玉の道を選んだ時から修行の日々に明け暮れていた。その為に夜遊びすら知らない。

興味がないわけではないが、どうしても使命感の方が先立ってしまった。

「……………」

しかし今は…………。その重い感情も支えあつ仲間がいる所為か、何処か気が楽だ、という感がある。

気が抜けているわけではない。事実この街に辿り着くまで………… かなりの数の敵に襲われた。

紙一重の勝利も少なくは無い。………… それでも。

勇者としての負担はかなり減ってはいた。

「…………… ちよつと行つて見るかな」

ポツリと漏れたその一言。それはある意味でのリロイの初めての冒険だった。

「お兄さんお兄さあん。ちよつと見てかない？ ほら、その素敵なお兄さんっ」

「ほらほらそこのお姉ちゃん！ どうだい、イシス直輸入の新鮮な蟹味噌だよっ！ 美味しいよ！！ お土産にどうだい！？」

活気付いた夜の露店街はある意味戦場だった。うへえ、と目を丸くしながらリロイがそのなかを歩いていく。

「可愛いぬいぐるみは如何？何処にも売っていないよ！」

……ある意味この状況も死闘だな、と小さく笑いながら、何人かの商人を片手で断り。ふと、前方にじつと露店を見つめている見知った顔に気づいた。

ソロだ。見ているものは……何と貴金属屋。

つまり、女性が身に付ける飾り等を扱う店だ。

……あいつ、男の癖にお洒落なんかするのか。

父にしろ、近所で武術を教えてくれた師匠にしろ、魔法を教えてくれた爺にしろ、リロイは周囲でお洒落をした男というものを見た事が無い。ソロの意外な一面を知ったみたいに、僅かに鼓動が早くなつた。

見られている事に気づき、ソロがリロイを見る。一瞬驚いたような表情を浮かべるが、すぐにニツと笑い。

何かを買い、ポケットに押し込みながら代金を支払い……そして歩いて来た。

「よお。驚いたな、お前まで出て来るなんて。……どうだい？夜の街の感想は」

「………凄い人で驚いた。何処から沸いて来たのかと思ったくらい。………そういえばシルは？一緒にじゃないのか？」

「ああ……あいつまだ、劇場に……」

言いかけ、ソロが蒼白になり。慌てて訂正をする。

「い、いやっ！魔法具を見て来るってな。途中で別れたんだよっ。

あー、そうそう、そうだった」

「………まあ、良いけど。何か、買ったのか？………ソロが装飾品に興味あるなんて知らなかったけど」

「ん？あー、これが………」

ポンポンとポケットを叩いてから、少し考えるような仕草をして。人差し指をくいくいと、動かしながら。

「まあ、移動しようや。此処は人波の邪魔になるしな」

ぶらぶらと二人、人混みに流されないように人気の少ない小高い丘へと移動する。どさりと傾斜に座り込み、ちよいちよい、とりロイにも座れと促して。

「目え閉じな？」

「目？」

「いや、何も変な事はしねえからっ。…良いから黙って言う事聞い
てくれ」

何だ、と言い掛け。ソロが冗談で言ってるわけじゃない事がわかり。
ぎゅっとりロイが目を伏せた。

何か首筋をソロの指が当たる感触がして、びくりと肩を跳ねらせる。
だが、言いつけ通りにその目は堅く瞑ったまま。

その様子に、ソロがくすぐったいような笑みを浮かべ、ポンツとり
ロイの肩を軽く叩いた。

「おっし、終わったぞ。目え開けな」

「……………？……………あ……………」

ちゃり…と首に微かな違和感。それは細い銀で編まれたペンダント
だった。先端には丸い…綺麗な黄金色の琥珀に、何か緑色の葉の欠
片が埋められている。

「……………これって」

マジマジとそれを見つめているりロイにソロが頭をかいた。

「…普段は服の中に隠しておけるしよ……………。その。今は確かにそ
の時じゃねえがっ……………いつかは…女に戻る日が来る、だろ…？」
「……………」

ぎゅっとペンダントヘッドを握り締めたままりロイが俯く。

女扱いするな！と激昂したい男の自分と、ひどく喜んでいる女の自
分が共存している。

自分の本当の感情が、わからなかった。

「それに、だ。さっきの店で聞いたんだが、それ曰く付きみたいで
な。持つ人持つ人、何故か健康運に恵まれたんだとよ。流れ流れて

あの店で売られる事になったみたいだが……。そういつ、お守り
的ご利益もあるっていうし……。だから、その……。――要
らねえから返して良いから……」

「おれは……。――本当に、貰って良いのか？受け取って
…喜ぶ事が…勇者として、正しい選択なのか、おれにはわからない」
泣きそうな表情。

「世界の勇者であるべき」圧迫感がリロイを抑制させている。幼い
頃から自然と染み渡った世界の期待。重荷。それが彼……。否、彼
女としての心を抑え付けているのだ。

「……ナナとしては……。どうなんだ？」

「……。――嬉しい……。人から、物を貰うのなんて…知
り合いでもほとんどなかった、から……」

ぐしゃぐしゃと短い黒髪をソロが乱暴に撫でた。この少女が不憫で
ならない。彼女を苦しめたのが、この守るべき世界全てなのなら…

……自分にも決して無関係とは言えない。それがひどく悔しかった。
「受け取ってくれるな？」

改めて訊ね、小さく頷いた肩へそつとソロが手を回そう……。とす
るが、ふと、リロイの一言にそれは留まった。

「……。そういえば、此れ……。結構高価そうだけど、この代
金は……。？」

「あ、これはその。…ロマリアの……。だから……」

ボソボソと言葉を濁すソロにリロイが眉を寄せ。ふと、何かに気づ
いたように。

「……。まさか、賭博で……」

「あ、いや、それは……」

「あれほど行くなと行ったのに、お前は……っ！……！」

「わっ、わわ！やめろ！リロイっ……！」

深夜をやや回った頃、頬に張り手のついたソロとリロイは共に宿に戻った。

その頃には既に「ぱふぱふ娘」に騙され不貞寝をしていたシルが待っていたのだが、お互いについて詮索する事は一度も無かったという……………。

7話 緑の眠り

「駄目じゃな。此処を通すわけにやいかん」

その一言にリロイは愕然とした。手にした書簡を見せながら再度その男へ詰め寄る。

そのホビットの男はノルド、と言った。ポルトガ王の出した条件：黒胡椒の買い付けの為には、バハラタまでの抜け道を管理しているこの男へ頼むしかなかったのだが、王が用意してくれた通過許可証を見せても、ノルドの首は縦に振られる事は無かった。

「—— 王命……。おれたちは、ポルトガ王の命令で来たんだが」

「じゃかあしいわいつ。ポルトガ王とはガキの頃からの付き合いじや。奴の事はよう知っておるわ。だがな？わしはホビット、奴は人間。誇り高きホビットが人間に従う義理なんぞありやせんわい」

確かに正論だがそれで「はい、わかりました」と引き下がるわけにもいかない。

ソロもシシルも腕を組んだまま、さてどうしようか、と考え続ける。「王と顔馴染なのなら、尚更困っている時に手を貸してやるのが友なんじゃねえのか？」

ソロの言葉にノルドの唇が曲がる。

「手伝えるもんなら手伝つてるわい。ホビットはな、誇り高いのと同時に義理人情にも厚い存在なのよ。—— だがな？」

ノルドが封鎖している通路の方を顎でしゃくる。「耳、澄ませてみる」と言われ、全員が息を飲んだ。

吹き抜ける風の音のなかに、奇妙な獣の鳴き声が混ざっている。しかも重なるように響き渡る辺り、その数は少数ではなさそうだ。

口を開いたのはシルだった。

「……………モンスター？」

「そうだ。……………バハラタ地方のモンスターが近年妙に凶暴化しおつてな。最近じゃあ人攫いが現れるとも話が出とる。…ただでさえレイディーダ渓谷に近年見る事のねえほどの深い霧が出ておるし…せめて霧が落ち着くまでは旅人であれ王命一行であれ一切通行は駄目だ。此れ以上の犠牲者を出させるわけにもいかないからな。安全が確認されるまで、此処を通すわけにはいかないんじゃ」

「レイ…ディーダ？」

「【腐れ神の足の裏】 抜け道の出口にある渓谷の名前さ。バハラタに向かうにはそこを通るしかないんじゃよ」

霧が晴れるまで一月は見ないと無理だと言われ、三人は唸った。こんなところで、足止めを食らうわけにはいかない。

何とか…と食い下がる三人と頑として応じないノルドの会話は奇妙に長く続いた。やがて根負け折れたのは、ノルドの方。

「……………お兄さん方がどれだけの實力を持っているか知らんがな、そうやって自信過剰に抜け道を渡り消息を絶った冒険者方は数知れんのじゃよ。多くの悲鳴を、わしは此処で聞いてきた。ポルトガ王の勅命を受けた者とあれば尚更じゃ。危険すぎる橋を渡らせたくは無い。……………じゃが……………。どうしても……………というなら、一つ案を出して遣ろう」

「何だ？」

「ノアニールを知っておるか？カザーブの北方にある、深い深い森のなかに隠された小さな村じゃ」

知っているも何も。

ノアニールという言葉に過ぎたのは、あのシャンパーニの塔で別れた少女の事だった。

「…名だけは」

「……………村の……………ノアニールを襲っている異変を解決す

る事が出来れば、お兄さん方の実力が本物と認め、此処を通してやるう」

「…異変？」

訝しげにシルがソロを見上げる。ソロはそれを横目で受け留めた後に小さく首を振った。

（リーダーに任せな？）

そう、小声で呟き。「また、仕事かよ」とブツブツとシルは呟いた。

「見てみればわかる」その一言に押し出され一行はアッサラムより道に戻る事となった。

村に起きた謎の異変。彼女は、ノアニールの森へ向かうと言っていたが……大丈夫だったのだろうか？

そして半日の強行軍の後、三人が目にしたものは……ひどく非常識な光景だった。

その村は……村自体が眠りについていたのだ。

空気自体が留まっているような不思議な感覚のなかで三人は慎重に村のなかへ踏み入った。

「一体………どういう事だ………？」

道端で眠る者。店先で眠る者。或いは井戸端でおしゃべりをしていたのか、数名が折り重なるように眠る者たちまでも居た。

「い、生きてんだろ？」

「脈はある。呼吸も正常だな。…こいつら、ただ寝てるだけだ」

「ご飯も食べないで眠り続けて……生きてるのか？」

「血色も良いし、見た目は健康そうだけだな。仕組みはわからんが、生死に別状は無いみたいだぞ」

「淡々と確認して回るのは、鋼の心臓の持主ソロ。」

「眠る村……これが異変か」

「——誰か……誰かいるんですか？」

物音一つしない村を散策最中、不意に声を掛けられその弾みにリロイは剣を抜き掛けた。慌てて声の主が引き攣った声を漏らす。

「ま、待って下さい！私はモンスターじゃありませんっ、人間ですっ」

その言葉にはつととして柄から手を離し。リロイが声の方を見た。壮年の男……というより老人。驚いたように三人を見つめ、両手を上げている。

「……あなたは？」

「驚かせて……すみません。私は、ゲイニッツ。この村で唯一眠りの支配から逃れられた者です……」

—— 彼の話によると、村は十数年前、近くにするエルフ族の怒りを買って、魔法の眠りに堕とされてしまったのだという。

—— 事の起こりは、ゲイニッツの息子 —— 義理の、

らしいが、その息子イルダがエルフ族の女王の一人娘であるアン王女と駆け落ちしてしまったのが原因らしい。

女王は人間が最愛の娘を攫っていったと、弁解の言葉も聞き入れずにその怒りを爆発させたのだというが……。

「……エルフ族はひどく他種族との交感を嫌います。わしはイルダの

養父として何度もエルフの里を訪れ、村の開放を頼んでいるのです
が…… 未だに里へは一步も入れさせてさえ貰えません。何日も、
何年も…… 通い詰めるうちに、いつの間にかもうこんなに…… 老い
てしまいました」

「……………」

「エルフの里は何処にある？」

「尋ねたりロイに、ゲイニッツが驚いた表情を浮かべる。」

「……西部の森の奥、ですが……。貴方たちは——」

「わかった。それじゃ、おれたちが女王と交渉してみる。……色々な
事情があつて、おれたちもこの村を開放させに来たんだ」

何と、とゲイニッツが絶句し、そのままポロポロと涙を零し始めた。
十数年、たった一人で訴え続けていたのだらう。その箍が外れたよ
うに泣き崩れた老人の背を、シシルが優しく撫でた。

「……………」 エルフ王の魔法は強力で、如何な魔法でも対抗する事は出
来ないと言われている。魔族がエルフに直接手を出さないのもその魔
力を恐れて、つつう話があるがな。あくまで言い伝えられてるぐら
いしか、信憑性は無いが」

「深い森を歩きながらソロがそう呟いた。」

「……………」

「黙々と歩くロイの隣へ、トトトつとシシルが近づいた。」

「ロイ、何考えてるか当ててやるうか？」

「？」

「ミロツドの事だろ」

「……………」 ああ……。彼女は多分、エルフの里へ向かっていったはず。…ソロ、エルフは混血に対してはどうなんだ？」

視線を受け、ソロが肩を竦める。

「ハーフエルフはエルフ間では忌み嫌われている存在だ。エルフが秩序を守る為にハーフエルフを永久追放したという古い話があるくらいにな」

「……………」 なあ、どうしてそんなに彼女の事気にかけるんだ？こう言っちゃ悪いけど、リロイそんなに他人を気に掛けるような事なかっただろ」

シシルの言葉も最もだ、とソロが頷く。リロイは視線をあげないまま、小さく首を振り。

「わからない。だけど……………」 ミロツドは……………」

突然、ガサツと脇の茂みから何かが飛び出して来た。あまりにも急で体勢を整える間もなかった一行…いや、リロイの胸にドンツとそれが体当たりようにぶつかり。

……………」 それは、泣きじゃくるミロツドの姿だった。

それぞれが半戦闘状態のまま固まり、彼女を見遣る。

「……………」 ミロツド……………」

「お、おい。どうしたんだ？」

ひっ、ひっく、と肩を震わせリロイの胸に縋ったままのミロツドの手には、あのルビーが握られており。

「リ、リロイ……………」 リロイ……………」

「どうしたんだ？ミロツド？」

「あ、あたし……………」 あたし……………」 う、わあああっ！！」

—— 落ち着いたミロツドの話を聞くと、ミロツドは母の言いつけ通りにエルフの里へ訪れたのだが…。

「あたし、ミロツドです。この集落にいた、エルフ族のアンの娘なんです。あたしのお婆ちゃまに会わせて下さい」

森の衛兵たちはミロツドの言葉に心底驚いたような表情を浮かべたが同時に険しい表情になり。ミロツドはいきなり身柄を拘束された上で、女王の下へ連れて行かれた。

「……………お婆、ちゃま……………」

縄で拘束された上、初めて会った母の母は、ひどく冷たい目をしていた。

「貴方が我が娘をかどわかした…下賤な人間の男の血を引く混血児ですね？ミロツドと言いましたか……………」

「お婆ちゃまつ、あたしは ——」

「……………貴方は、自分が此処で受け入れられると思ったのですか？忌み子の分際で……………！私を祖母等呼ぶんじゃないやありません！汚らわしい！」

「えっ……………」

鋭い一言にミロツドは言葉を失った。

「エルフ族に他の血を入れる事は決して許されるものではない…。存在を認めるわけにはいかないのです。 —— さあ、問題が生じる前に、この娘を魔物の巣へ捨ててしまいなさい」

魔物の巣。ノアニールの森の外れにある、光苔の洞窟の事だ。

祖母は自分の存在を否定しただけではなく、殺そうとするのだ……………

……………

「いつ、いや。やめて…………… —— いやあああつ！！」

そのままミロッドは一人、洞窟の最奥へと置き去りにされた。魔法で脱する事なきよう、魔封を掛けられ。容易に魔物に食われるように。出口もわからないまま魔物の影に怯え……………どのくらい経っただろう。地底の湖近くにさ迷い出た彼女が、そこで見つけたものは……………。祖母の下へ行け、という言葉と共に別れたきりだった、母親からの手紙だった。

……………

きつと、誰の目にも届く事は無いでしょうこの手紙を此処へ遺して置きます。

私は、愛してはならない人を愛してしまった。

その所為で……………多くの人々を不幸にしまいました。

私は全てを知りながら、その愛を育ててしまった。

禁忌と知りながらも、誰の事よりも、彼を選んでしまった。それが一番の罪……………。

罪の重さはわかっているのです。そしてそれを終わらせないとならない……………それは、罪なる者の責任です。

私は、私たちの生命を絶つ事でその歪みを正したいと思います。

だけれどミロッド。私たちの可愛い娘、ミロッド。貴女だけは、巻き込みたくはない。

王家のルビーはきつと貴方を守ってくれる事でしょう。

そしてお母様、どうかミロッドを……私の娘を受け入れて。

貴方はイルダをひどく嫌悪していましたが……この娘には片方とて私の血も入っている事を……どうか忘れないで。

親不孝な娘の最期の願いを……聞き入れてくれる事を願います。

最後にミロッド。貴女を捨てて先に逝くパパとママを許して下さい。だれと忘れないで、貴女の中に在るのは、忌まれる血等ではない。あらゆる可能性を秘めた、希望の血なのだから。笑顔を忘れないで。

貴女の行く末に大いなる光があらん事を――。

アン

……

次の街で待っていると思っていた両親がこの洞窟で生命を絶ち、死んだと知ったミロッドは悲痛な叫びと共に魔力を暴走させた。暴走した魔力は魔封を打ち破り……彼女は魔力の放出に流され、洞窟から投げ出された。

そして……そこでリロイたちと再会したのだ。

「…………ミロッド…………」

「…………ママも…パパも死んで…………お婆ちゃまからも殺されかけて…あたし、これからどうしたら良いの…………？」

「…………」

不安げに呟き頂垂れる少女に掛ける言葉を、ソロもシシルも持ち合わせてはいなかった。

暫しの沈黙。…………しかしそれを破ったのは、リロイの思いがけない一言だった。

「ミロッド。エルフの里へ戻ろう」

震えるミロッドの肩を抱いたまま、リロイはそう言い切った。驚いたように残りの者がその方を見遣る。

「お、おい、リロイ。彼女今さっき殺されかけたばかりなんだろう！？」

「…母さんの手紙は持って来てるな？」

小さく頷くミロッドにリロイが確認のように頷き返し。

「手紙とルビーを女王に託す。後は…………女王が決める事だ」

再び現れたミロッドにエルフたちに動揺が走った。何故なら、生きていただけではなく今度は人間を三人も連れて来たのだから。

それを忌々しそうに見遣る女王の視線は何よりも冷たい。視線を逸らせたまま、ミロッドはただ震えていた。

「…生きていたのも驚きですが、また戻って来たのはもっと驚きでしたよ。…今更に何の用です？まさかもう一度殺されに来たわけでもないでしょうに」

「さ…」とリロイに促され、ミロッドは懷からエルフの宝である真紅のルビー柱…「夢見るルビー」を取り出した。

女王の眉が上がり、周囲にどよめきが走る。

「……ママは……これを持って、お婆ちゃまのところへ行けと言い……それっきり別れてしまいました。……あの洞窟のなかで……ママは……。——どうか……これを読んで貰えますか？」
ルビーと共に差し出された一通の湿気た手紙を受け取り、女王がそれを読み始める。

しかし文面を読み進める毎にその表情が見る見る驚愕のものに変わり。手紙を持つ手が震え出す。

「……アン……」

「……あたしは……どうしたらいいかわかりません。だけど……ママは、パパを愛してたと思います。だからお願い、ノアニールの人たちを助けてあげて下さい！……パパとママの死を……無駄にしないで下さい……っ……」

震えるのを押し切り言い切ったミロッドに俯いたままの女王は答えない。

「……女王、ミロッドは……」

「お黙りなさい。……ミロッド。これを持って、ノアニールへ戻りなさい」

表情も口調も、冷たいまま。一步前に踏み出した女王はそう言いながら、小さな絹の袋をミロッドに差し出した。

一瞬びくりと身を竦ませたミロッドだが、そのままおずおずと袋を受け取り。

「村の一番高い場所で、この袋の口を開けなさい。それまでは決して開けてはなりませんよ」

「あ……、は、はいっ。ありがとうございますっ」

ぺこりと頭を下げるミロッドに恭しくリロイら一同も頭を下げ。

「……それから、貴方の処遇の事です……。如何にアンの願いとて、今の里に貴方の身を置く事は許されません」

その一言に、ミロッドの表情が凍てつく。小さく、「はい……」

と漏らしたまま唇を噛み。

しかし、女王の話はまだ続いた。

「……………それほどハーフェルフに対する差別が未だこの里には色濃く残っているのです。貴方は、これからこの人間の勇者方のお手伝いをなさい。全てが終わりに、一人前に戻って来れるまでに……………貴方の居場所を、私が責任を持って用意致しましょう……………」

言葉に、はっとミロッドが顔を上げる。そこには一国の女王の顔ではなく、柔らかい一人の女性の顔となっていた。

「……………よくわかりましたね」

勇者、と言われリロイが驚いた表情を浮かべ。

「貴方はオルテガ殿に良く似ていらっしゃる。一目見てすぐわかりましたよ……………勝手なお願いと思いますが、ミロッドをお願い出来ますか？」

「……………ミロッドの魔力は我が旅に大いなる戦力となってくれるでしょう。此方からお願いしたいほどです」

良かった、と微笑む女王。トン、とミロッドの肩を軽く叩き。

「家族より国の秩序を選んでしまった……………私をどうか許しておくれ。いつか貴方が元気な笑顔で戻って来るのを……………待っていますよ」

「お婆ちゃま……………」

「さあ、お行きなさい。……………願わくば勇者の道程に光あらん事を……………」

女王の手から光が走る。

「待って、まだ……………」

別れたくないミロッドの声色が、自分の視界が、どんどん遠ざかり。

再び目をあけたその時には、四人はノアニールの村の入口に、立っていた。

8話 波紋流転

「行くよ——っ！」

村一番高い建物…教会の鐘の上から、シシルが手を振った。その手に握られたのは、あのエルフの女王から貰った袋だ。

三人が息を飲み見守るなか、シシルは片手で器用にそれを開いた。

「よっ……………。」——わっ……………！」

金とも銀ともつかない、不可思議な色合いの粉がふわりと袋から漏れ出で。まるで自ら意思を持つかのように風に乗り…瞬く間に村中に広がっていく。

「……………うわあ……………」

その美しさにシシルが、ミロッドが、感動の声色を漏らし。……………やがて、村はその眠りの呪縛から開放された。

「……………リ、リロイさん、これは……………まさかっ……………」

周囲で人々が目覚め始めた為か、驚いた様子でゲイニッツが家から飛び出して来る。

「ゲイニッツさん」

「あ、ああ……………貴方は……………貴方という人は……………っ……………！！」
「ありがとう、ありがとう、と。何度も繰り返し、泣き崩れるゲイニッツを労わるように、そっとミロッドがその肩に触れた。その小さな手に驚いたような表情でゲイニッツが涙で濡れた顔を上げる。

「……………娘、さん？」

「リロイから聞きました。…パパのパパ…ですよね？——

あたし、パパの…イルダの、娘です」

「何と……………イルダとアン様に…御子が……………？」

「……………あたしたち親子の為に…辛い思いをさせてごめんなさい、

…お爺ちやま…」

「…………おれたちはもう行かねばならない。…………だがミロッド、君が望むなら、祖父さんと一緒にノアニールに残っても…………」
抱き合う二人の背に、氣遣うような声色でリロイが声を掛ける。

それを聞き、ミロッドが静かに振り返った。

「お婆ちやまは、リロイのお手伝いをしなさいって言ったわ。…お爺ちやまに会えたのは嬉しいけれど…………あたしも、リロイのお手伝い、したいの…。だからお願い、そんな事言わないで。一緒に連れて行つて？」

真剣な様子にこそつとシルがソロに耳打ちし。

（ …ミロッド、リロイが男の子だと思ってるんだよね？ ）

（ ……………そりやな ）

（ …実は惚れちゃった、とかだったらリロイ大変だよなあ………… ）

（ …ばっか、お前じゃあるまいし ）

こそこそとしたやり取りの中、唐突なソロの言葉にシルの顔が一気に赤くなる。

（ …………… な、何で僕なんだよつ ）

（ …あのなあ、お前態度に出すぎなんだよ。…………ま、あつちは全然その気じゃ………… ）

「そこ。何ブツブツ言ってるんだ」

リロイが冷やややかな目でそれを見。慌てて二人が口を噤む。

「い、いや何でもねえ。…………で、そろそろ行くのか？」

「ああ、ミロッドも一緒に来てくれる事になったしな。アッサラムまで戻って、レイディーダ渓谷を抜ける。約束は守ったんだ。ノルドも今度は通してくれるだろう？」

——そしてリロイの言葉通り、ノルドは此れ以上断る事も出来ず、やや唸りながら頷いた。

「まさかお兄さん方があの呪いを解く事が出来るとは思わなかったわい。……………まあ、約束は約束だからの。レイディーダへの道……………バーンの抜け道へ、案内しよう」

「宜しく頼む」

「じゃが……………無理はするなよ？今度は若い嬢ちゃんも連れてるんじゃない。尚更じゃな」

説教モードに突入し始めたノルドにミロッドがふふつと小さく笑った。

「大丈夫よノルドさん。皆凄く強いんだから」

「そうか？……………むう……………。まあ、とにかく来なさい。……………こつちだ」

バーンの抜け道。バーンというのはどうやらホビット族の言葉で

【裸熊】……………つまり、人間を意味するらしい。

細い通路の先に在る錠前を外され、その先に更に続く暗闇の道を見遣つてから、ノルドが四人に顎でしゃくつた。

「わしは此処までじゃ。門番が持ち場を離れるわけにはいかんからの。……………また、お兄さん方のような命知らずに来られても厄介じゃ」

「いや、此処で結構だ。本当にありがとう、ノルド」

深々と礼儀正しく頭を下げたリロイにノルドが表情を和らげ。しかしすぐに真顔へ戻るとリロイの手にそのランタンを握らせた。

「良いか、この道を真っ直ぐに歩いていくとやや下り坂になる。その突き当たりに岩壁に大きな傷が付いておるから、そこを西へ上がれ。地底湖の滝の裏を抜ければ、レイディーダ溪谷の最西端に出られる。その後は崖沿いに南へ向かえば良い。……………だが忘れるな？あの霧がどれだけの障害になるか、わしには想像も出来ん」

「それと魔物、……………山賊もか。重々に気を付ける」

「気を付けてな。大地と空の神の祝福があらん事を
こうして、四人は漆黒の抜け道に足を踏み入れた。」

……ノルドの言った通り、抜け道の出口の先は真っ白な霧に覆われていた。視界30mというところだろうか。かろうじて、切り立った境界線が確認出来るくらいだ。

ソロが先頭に立ち、シシル、ミロッド、リロイの順に先に進む。

「足元、気を付けて。……離れるな、落ちるぞ」

シシルがミロッドに手を貸す。「ありがと」と、その手を取り、やや高い岩の上からトンつとミロッドが飛び降りた。それを先に行かせてから今度はリロイに手を差し出す。

「リロイ」

「あ、ああ。すまない……」

きゅつと手が握られ、弾けるようにリロイがその手を離れた。「

え」とそれを見ていたソロ、ミロッド、そして誰よりもシシルが目丸くし。

「リロイ？」

「……っ。何でもない、一人で降りれるっ」

俯き加減に飛び降りたその頬が微かに赤い事を見て取ったシシルがつられて赤くなる。やれやれと肩を竦めるソロと、わけわからないミロッド。

一行は運良くも、渓谷中腹までモンスターと遭遇する事なく踏破する事に成功した。

そして結局、夜間を抜けるのは危なすぎるという事で風の当たらない窪地で一夜を明かす事になったのだが……。

「……………で、この先をもう少し行くと平地に出られる。その後は森……………いや、水辺が多いから湿地地帯と言った方が良いかもな。ぬかるんで歩きにくいところだ。更にそこを下るとバハラタの街はもう目と鼻の先さ」

ミロッドが持っていた地図にソロが指で辿りながら説明する。

「じゃあ明日までに行けそうね。……………でも、ソロって本当色んな事知っているのね。あたしも結構色んなところパパとママと行ったけど、そこまで詳しくは説明出来ないわ」

「詳しい…つうても何年も前の知識だからな。それが今通用するかなんて事はわからねえよ。……………手がかりのない旅だしな」
そう。

ソロがリロイたちに同行しているのも、伝説の剣の一刀、雷神の剣を探し出す為。ふと出会った時の事を思い出し、リロイがソロを見た。

「そつえば皆って何処の出身なの？あたしはこの前の事で生立ちがわかったと思うけど、実は生まれはアッサラムなのよ」

「僕はアリアハン。今の家は、レーベにあるけどさ。昔はリロイの家の近所に住んでたんだぜ？」

火を熾しながらそう答えるのはシシル。

「おれもアリアハンだよ」

「うん、リロイは『アリアハンの勇者さま』で有名だからわかるわ。……………ソロは？」

振られ、肉を炙っていたソロが三人を見遣る。「あ？」と間拔けた声を漏らしつつ、やや躊躇したような仕草を見せてから。

「俺あ……………まあ、うん。——今は内緒だ。そのうちわかるだ

る」

「えゝっ、ずるいわっ。折角一緒に旅をするんですもの、それくらい教えてくれたって――」

言い掛け、ミロツドの言葉が留まる。ソロの表情が険しく、だが拒絶ではなく何処か悲しみに満ちていたからだ。

「…わかったわよ…」

「すまねえ」

そのやり取りを無言で眺めていたシシルとリロイだが、ふと視線が合い。

「なあ、リロイ」

「……………何？」

「あのな、さっきの……………」

「…女扱いはされたくないだけだ。あの時の言葉、シシルだって、忘れたわけじゃないだろ……………」

「……………わかってる。……………だけど、だからって、僕は……………」

「……………」

無言で立ち上がるリロイにシシルが「あ」と手を伸ばしかけるがそのまま俯き。一人わけがわからなかったミロツドが「なあに、けんか？」と小首を傾げた。

「……………ソロ」

「…ったく。単独行動するなというべき人物から率先してかよ。…反面教師も良いトコだぜ」

「ちよ、ちよっと、何？何なのよっ。……………貴方たち何か隠してない！？」

「え？あ、ミロツド、その…」

鋭く突っ込むミロツドにソロが肩を竦める。

「俺が【オヒメサマ】のお相手をしている間、お前はミロツドに「俺たちしか知ってはならない事情」を説明してやりな？どうせ、あいつは自分の口からは言わねえだろうし。…だからといって秘め事をいつまでも作っとくわけにもいかねえし、……………な？」

「ええ？僕がつ！？」

「任せたぜ？僧侶シル殿」

笑いながらソロがその場を立ち去る。それから数刻後、ソロの背にミロツドの驚愕の悲鳴が響いたのは、言うまでも無いが……。

そんな賑やかさの外で。リロイは少し離れた岩場に背を預けるように、蹲っていた。

「——— そんなところに一人で居たらあぶねえだろ。此処はモンスターの出没地帯なの、忘れたか？」

不意に頭上から声を掛けられ、リロイがはっとして見上げる。いつの間にか岩場の上からソロが見下ろしていた。

「……… ソロ」

「あいつと何かあったのか？…何か、されたのか？」

訂正されたその言葉にふるふる首を振り。再び押し黙る。その様子に深く溜息を漏らした後、ソロが滑るように岩場から降りた。

「…リロイ」

「なあ、ソロ。……… これをくれた時の事覚えてるか？」

チャリ……という音と共に琥珀のペンダントが取り出される。それを見てからソロが小さく頷き、リロイを見遣った。

「あの時、お前は言ったよな。今はまだ男に戻る時ではないと……

……いつか戻る日の為にくれたと。……… おれは……… まだ「勇者リ

ロイ」でなくてはならない。それなのにあいつは……シルは……おれの事を女として……ナナとして、見るんだ。それが……わからない」

「………」

「……ソロは……おれをどう思っている？」

「………。確かに……… 世界を救うべき勇者が実は何年も前に死んでいたなんて今更広まったら……それこそ一夜で世界は混乱に陥りあつという間に魔王軍の手に落ちるだろうな………。確かにこのシー

クレットは最重要機密だとは思っ、ただ……。俺はつきり言
って同じ旅の仲間としてなら、気にしねえ。男のリロイだろうが女
のナナだろうが、勇者リロイはここにいる、生意気なガキ一人さ。
…どう扱われようと自分は自分、自分が信じた道を行けばいい、そ
れでいいんじゃないのか？」

「……………」

「難しかったか？」

「……………かなり。だけど……ありがとう。……………」

「女として見られるのは仕方ないと思えよ。幾ら男だって言い張っ
ても…変えられねえ事実にな違いねえ。シルも俺も、完全に割り
切れるほど冷徹じゃねえからな……。——と、そろそろ夜も遅い。
戻ろうぜ？」

「——うん……………」

「リロイちゃんっ！」

戻るや否やいきなりそうミロッドに叫ばれ、リロイは硬直した。

……………リロイ……………ちゃん？

すまん、というシルの顔、そして背後で我慢しているようなソロ
の小さな笑い声が響いて来る。

「なっ、ななっ、な……………」

「リロイちゃんが女の子だなんてあたし全然気づかなかったの。そ
りや隠さないとならない事情があるとは思っけど、そんなの駄目よ
っ。世界を救った後、このままじゃ困るでしょ！？あたしがお化粧
とか色々教えてあげるから、さあ、こっち来て。大丈夫、内緒は守
るからっ。ほら、髪もボサボサ。手入れなんてほとんどしてないで
しょ？この分じゃ肌も……………」

「ミ、ミロッド——？ちょっと待って、待ってくれ、ちょっと……！！」

ずるずると野営の方へ引つ張られていくリロイを爆笑しながらソロが見送った。その後、呆然としているシシルの頭を撫で。

「話したらああなったのか。説明の所為かミロッドの性格の所為か、どっちにしる明日が楽しみだな」

「……………僕、明日リロイと顔合わせるの怖いよっ。ソロの馬鹿野郎…………」

「大丈夫だって。いざって時やお前回復魔法使えるだろ。致死には至らねえよ」

「そついう問題じゃないっ！！」

その言葉は決して気休めにすらならず。結局シシルは翌日殴られはしなかったものの思いつきり脳天から怒鳴られたという……………。

9 話 決意

朝が来たのだろう、という感と共に一行は野営を離れた。

「 だろう 」 というのは、一夜寝て起きた、というだけだからだ。僅かに明るくはなっているものの、以前霧が濃いのは変わらない。明け方なのか、もうすっかり朝なのか。昼なのか ——— さっぱりわからない状態だ。

「 …… 湿気が酷いなあ。こんなんじゃ非常携帯食にカビ生えちゃいそうだ。バハラタへ着いたら乾物系は買い直した方がいいかも 」
ぶつぶつと袋を覗き込みながら文句を言うのはシシル。

「 無事辿り着けたらな …… 。どうやらお出迎えが来たみたいだぞ？ シシル 」

前方を歩くソロの足が留まる。察したようにリロイも剣を抜き、ミロッドが杖を構えた。

「 …… モ、モンスター？ 」

「 だな。 …… シシルは後衛に下がってミロッドを守ってる。おれとソロが行く 」

まだ何も見えない霧のなか、スツと目を細めたソロがまるで空気を裂くように一閃を放つ。

「 ぎゃあっ 」 と、甲高い動物の鳴き声が響いたと思うと赤毛の獣の肢体が霧から飛び出し、べしやりと汚い音と共にソロの足元に崩れた。動物の死骸に邪悪な魂が宿ったモノ、デスジャッカルである。

「 ——— やったか 」

「 いや …… まだだ。 …… 上、 …… 来るぞっ！ シシル！ 」
頭上をすり抜け、蒼い影がさあ、っとシシルとミロッドの方へ向かう。

「リロイ！」

「——っ。…………ちっ！邪魔だ、退け！！」

二人の加勢に向かおうとしたリロイ目掛けて、もう一匹のデスジャツカルが飛び掛って来る。それを薙ぎ払うが、流石にソロと違い腕力差がある。仕留め損ね、跳ね上がるように反撃して来たその牙が肩に食い込んだ。

「…………くっ。…………おおおっ！！」

走る痛みを堪えそのままジャツカルの首を刎ねる。「大丈夫か」と駆け寄って来たソロに頷く間もなく後方を指差し。

「おれは…大丈夫。それよりも何体が抜けられた」

「わかった。…………お前は此处にいる、良いな？」

傷ついたリロイを留め。ソロは霧の中駆け出した。

30mほど離れてるだけだというのに、リロイたちの状況はシシルたちには見えない。——否、見ている余裕が無かった。

霧で分断された中、二人は青い蝙蝠猫…………キャットバット数体に囲まれ、苦戦を強いていたからだ。

「バギ！」

「ベギラマ！…………シシル魔法力を無駄使いしないでっ、あたしが何とか…………きゃあっ」

「ミ、ミロッド！大丈夫だ、これくらい。…ソロたちがいなくなつて…………」

それでも消耗戦に持ち込まれては明らかにシシルたちの方が不利だった。

「…………はあ、はあ…………な、何なんだ、こいつら…………。妙に打たれ強いじゃねーかつ」

「違っわ、シシル。こいつら…………あたしたちの魔力を吸い取ってる…………っ。弱くなってるのはあたしたちの魔法…………——」

「シシル、危ないっ！」

魔猫の鋭い爪がシシル目掛けて薙かれる。―― やられる。そう、シシルが思った瞬間、横からミロッドがシシルを突き飛ばした。壁沿いにバランスを崩してぶつかるシシル。そしてモンスターの標的は―― ミロッドへ移った。

「ミロッド………！！ミロッド――…！！！！！」

叫び、手を伸ばすが間に合わない。
ミロッドが恐れるように目を伏せた瞬間。大きな影がその間を割って入るように飛び込んで来た。

「――― 散れっ！！！」

「……………！？ソロ！！！」

「間一髪だったな。大丈夫か、お前ら」
乱入して来たのは追って来たソロだった。そしてそれは、まるで台風のようにキャットバッドの群に突撃を仕掛けていく。

動けないミロッドの肩を抱き起こし、シシルは大きく息を吐いて。そのまま視線を動かせば、ホイミで止血をしたリロイが戻って来るのも確認出来た。

緊張感が奇妙に緩和する。

「……………」

「…ちよ、ちよっとシシル……………」

ひどく密着している事に気づき、ミロッドが居辛そうに身じろぐ。ようやく落ち着いて来たのか、ぐいっとその肩を痛いほどシシルが掴み。そして―― 怒鳴った。

「……………馬鹿野郎！！あんな事したらミロッドが大怪我するだろっ！！」

そのあまりの大きさに全員がぎょっとした視線をシシルへ向ける。

当のミロッドも、驚きに一瞬言葉を詰まらせて。

「——　だ、だって。あのままだったら貴方が大怪我してたじゃないっ」

「ミロッドを盾にしてまで、僕は助かりたくないよっ。僕は回復魔法使えるんだから怪我したって　——　」

「……ごめんなさい……だけど……」

「ホントは僕が守るべきじゃないか……」

フェミニスト。ソロは咄嗟にそう脳裏に浮かんだが敢えて突っ込まず、俯いたシシルの頭を軽く小突いた。

唇を噛んだままのシシルが、視線を上げる。

「ばあか、守る側になりたきゃ、もつと強くなりな」

「ソ、ソロっ！……そんな言い方って……」

言葉を失っていたミロッドがソロに咎めの声を掛けるが、横からシシルが片手でそれを制した。

「……シシル」

「良いんだミロッド」

「……っ」

先立って歩き出したシシルにミロッドが「待つて」と、追おうとする。しかしその手をソロが掴み。

「……っ、離してよ。あれじゃシシルが可哀想よ！？ひどいじゃないっ、シシルだって、頑張ってるのに……！！」

「あいつだって男のプライドってのがあるんだろ。そつとしておいてやれよ。……なあ、ミロッド。俺あな、同じ男としてあいつの……シシルの気持ちかわかる。だが望む為には牙が必要で、それは誰にも与えてやる事が出来ねえんだ。……時間と、努力が解決する問題だ」

「………　だけど………っ………　——　………　わ、わかった、わ………。」

ソロの言いたい事はわかる。それでも、先を歩くシシルの背があまりに寂しくて。

ミロッドは胸元を抑えたまま、目を細めた。

その後数度に渡りモンスターと遭遇するが何とか撃退に成功し、一行は夕暮れも深まる頃、バハラタの街へ入る事が出来た。

名産、黒胡椒で栄えた地とはいえ、それほど大きくはない静かな街である。

近頃は人攫い等の関係で自警が強化されているらしいが、それでも目立ったところはない。

胡椒買い付けは明日行うとして、今日は早々に休む事にした。朝から強行軍を強いて来た為に肉体的にも精神的にも全員がボロボロになっていたのだ。

「夕飯貰って来たぜ。とりあえず寝る前に腹に入れとこつや。……
おら、リロイ起きろ起きろ」

パンとチーズの入ったバスケットを貰って来たソロが宿の戸を開け、入口近くで転寝をしていたリロイを軽く足で小突いた。片目を擦った後、もっそりとリロイが起き上がる。

「……………もう……………朝？」

「やだ、寝惚けてるの？リロイったら。寝る前にご飯食べようって言ったの。ほら、しゃんとして」

ボーッとした表情のリロイがなかなかパンを取らない為にミロッドは苦笑を浮かべ。バスケットからパンを取り、渡して遣る。

しかしそのリロイの手に触れた瞬間。何かに気付いたようにミロッドが声を上げた。

二人が視線を向ける中、怪訝そうな表情でミロツドの指先がリロイの額に伸びる。

「……………？何。どした？」

ハムを咥えたままソロがその行動を尋ねる。

当のリロイはというと、額に触られても嫌がる様子が無く。パンを持ったまま、まだぼんやりとした表情で。

「……………やだ、大変っ。リロイったら凄い熱！」

「あー？……………おい、ミロツドちよつと退け……………って、こりゃ……………」

「熱あるって？リロイ大丈夫なのか？」

どやどやと三人に押し寄せられ蕩けた目のままりロイが手を振る。

「大丈夫……………だつて。多分、疲れから……………。これくらい一晩寝れば……………」

「毒性に寄るもんじゃねーな。恐らく風邪か何かだろ。シシル、回復魔法効くのか？こういう場合」

リロイの説得力の無い言葉を無視し、ソロが続ける。

「薬草の類なら効果はあるだろうけど……………でも、即効性じゃないし。魔法は外傷を治癒するものだから細菌とか……………病気とかには効果が無いんだ。普通に薬飲んで安静にしてるのが一番だと思う」

「何てこつた」 とソロがリロイを引っ張り起こし、ベッドまで歩かせる。

横になり、熱の所為か妙に大人しいリロイの髪を撫で、それからシシルとミロツドを見る。

「今日はもう医者は呼べねえし、明日にならねえと話にならねえな……………お前らも食ったらすぐ休んどけよ。油断してるとすぐ感染るからな」

「わかつた」

「うん、わかつたわ」

——— しかし、翌日になつてもリロイの熱は下がるところか、上がる一方だった。

医者を呼び診察をして貰える事になったのだが、その結果はソロが診断したのと同じ風邪。ただし長旅で体力が低下している為に数日は安静にしておかないと駄目だと念を押されてしまった。

「…………… やっぱり女の子にはキツイ旅なんだろうか」
眠るリロイの傍に座つたままのシシルが、ポツと呟いた。

「あたしも女の子なんだけどね、シシル。…………… でも、リロイはホント、かわいそう。だつていつだつて、あたしたちを守る為にソロとたつた二人で前衛に立つてるんだものね」

「——— …………… ソロは何処？」

ふと何かを思い立つたようにシシルが立ち上がる。「何？」と尋ねかけるがそのあまりに神妙な表情にミロッドは言い返せず。問われたままに戸口を指差し。

「…………… 今、調味料屋さんに胡椒の買い付けに行つてるわ。朝ご飯食べてすぐ行つたし、そろそろ戻つて来るんじゃないかしら？」

「わかつた、ちよつと僕も出て来るよ。——— ミロッドは、

リロイを見ててあげて？」
「うん」

「お、シシル。見てみるよこれが黒胡椒———」

店先でシシルにあつたソロが小さな麻袋に入つた黒胡椒を見せる。
しかしシシルはそれより何よりも別件を口にした。

「ソロ、頼みがあるんだ」

「あ？——頼み？」

重い口調で切り出したシシルに、ソロの笑みが止まる。

「一ヶ月……いや、一週間で良い。僕一人別行動させて欲しいんだ」

「別行動って、お前——何を……」

「リロイが倒れてる以上、決定権があるのはあんただ」

真剣なその様子にソロが袋を腰に引っかけ。すぐその酒場を顎でしゃくった。

「わかった。……詳しい話、聞いてやる」

小さな街の酒場はやはり小さく。その一角にソロとシシルは腰を下ろした。

やって来たウェイトレスに麦酒を二つ注文し。シシルは黙ったままソロを見つめている。ソロもまた注文を終え、ウェイトレスが立ち去ると。指を組んだ形で、真っ直ぐにシシルの瞳を見返した。

「……で？現状で更に戦力を割こうというその真意を聞かせて貰いたいところだが」

「あ、うん。……その事なんだけど。……ソロはあちこち回って来ているから、この街の北方にあるというダーマの神殿という場所を知ってる？」

出された地名にピクリとソロの眉が動き、「ああ」と一つ頷き。「人の素質を開花させるという技術神の神殿だろう。あそこで業を積んでいる者も数多くいるみたいだな」

「うん……。それで、僕。そこで賢者の試練を受けようと思うんだ」

「……賢者？魔法の超越者か。……しかし何で今」

「…………。このままじゃ回復魔法しか能が無い僕は足手纏いにしかない」

ソロがその言葉に何か返そうとした時、ウェイトレスが酒を運んで来る。受け取った後、改めてシシルを見る。

「…………。一昨日の俺の言葉、気にしてるのか？」

「ソロの言った事も勿論きっかけの一つだけど、ずっと以前から考えていた事なんだ。偶然、アッサラムでこの神殿の話は聞いていて、リロイが元気な状態だったとしても持ち出すつもりだった。まさかこんな事になるなんて思ってもいなかったけど…………。」

「…………。一週間と言ったな。その間俺たちはどうすれば良い？リロイが完治するまで、一週間も掛からないだろう」

ぐいっとソロが酒を煽る。唇に浮いた泡を乱暴に手の甲を拭き取り、真っ直ぐにシシルを見つめる。

「…急がないとならない旅だとはわかってる…………。僕のわがままだという事も。だからその時は僕を置いて先にポルトガへ戻っていて欲しい」

「…………。お前はどつする。あのな？回復しか能が無いって言ったって、お前の回復が命綱なんだぞ。お前が抜けた後、誰が…………。」

「ホイミならリロイも使える。…………。それに僕はこの旅を捨てるつもりはない。…必ず追いかけるから。どうか…………。僕を信じてくれないか？」

「…………。あ…………。」

どうしたものか、とソロが頭をかき。やや悩んだ後に渋るような表情でこくりと頷いた。

「…………。わかった」

「ありがとう、ソロ」

「…良いか？ポルトガには一晩だけだ。それだけしか待つ事は出来ねえ。リロイが復帰するまで二三日として…一週間だ。…………。それまでに絶対戻って来い」

「わかった…………。必ず、賢者として戻るから。リロイにも…勝手な

事してごめん、って。伝えておいて」

「こっちの事は心配するな。お前の抜けた穴は俺が埋めて遣る」

「ありがとうソロ。…………じゃあ、行つて来る」

カタンと立ち上がるシシルの表情に迷いは一欠けらもなかった。酒場を出ていくその姿に、ソロは目を細めて。そして呟いた。

「頑張れよ、シシル——」

シシルと別れたソロはそのまま宿へ戻り……たまたま目を覚ましていたりロイとミロッドにその事を告げた。

「…………。そうか…………」

「シシル、随分悩んでたと思ったら、そういう事だったのね」
再びベッドに横になるロイがその状態で腕を組む。

「ポルトガまではシシル抜きで戻る事になるのか。レイディーダの霧が晴れていれば良いけれど」

「寂しいか？」

ソロにニツと尋ねられロイが枕を抱くような形でソロを見上げる。

「そりゃあ少しは…………って、何言わせるんだよっ」

枕をソロへ投げつけ、照れたような、真つ赤な顔でロイが怒る。

それを片手で受け留め、ソロとミロッドが笑い声を立てて。

「お前変わったよ。ホントにな」

「?…………変わった？」

「——ほら、大人しく寝て早く治しな。ミロッド、休んでるトコ悪いんだが、道具の買い付け手伝ってくれないか？シシルがいねえと荷物持ちが如何せん足りん」

「あ、うん。…………じゃありロイ、大人しく寝ててね？動き回っちゃだめよ」

……パタン……

扉が閉まり部屋にリロイが一人残される。

寂しいか？

一人、たった少し離れるだけで空虚な気持ちが何処か抜けない。
でもソロとミロッドがいる。だからそこまでキツくないのだろう。

もし、あの時ソロが引き留めてくれずに一人で旅立っていたら……
…？

今はもう、想像が出来ない。きっと一人になったら……寂しさに
押し潰されてしまうかも知れない。

初めて旅立った時、心を閉ざし、一人の方が良いと思っていた自分
が、ひどく子供だったと……今なら実感が出来る。

成長した、のだろうか。それとも、そう勘違いしているだけなのだ
ろうか……。

「……一人で旅をして……勝ち目の戦いに身を投じて……父さ
んはたった一人で、何を考えたんだろう……」

敵わない壁を感じる。

あの人は肉体的にも精神的にも勇者として英雄として。

——立派すぎた。

世界が望んでいるのは、「英雄オルテガの息子」「オルテガ
のような強さを持つ勇者」
ふさわしき、者……。

……自分は……何処まであの人に近づけるのだろう……。

あの人たち「に」……。

色々考えつつ、リロイは再び眠りに誘われていった。

―― ナナ

……

…… 誰……

―― 私は全てを司るもの

…… 全て？

―― いつか貴方は真の勇者となり、私の前に姿を見せる事になるでしょう……

…… あんたの……前に……？……どういう意味だ……それに、おれは……

―― 貴方はもう真なる素質に目覚め始めています

……

―― 自分を信じ、仲間を信じ……歩み続けなさい

…… 信じる

—— そう、仲間を、大切な者を信じる事……… それこそが
大いなる道へ繋がる力となります

……… あんたは………

—— 忘れないで……… 私はいつでも貴方を見守っています 私
の名は……… ——

「……………」

びくりと、リロイは跳ね起きた。寝汗をかいたのか、ひどく全身が
湿った感があり、気持ち悪い。

「…………… はあ……………」

深夜、辺りを見回すと戸口に持たれるようにソロが座ったまま眠っ
ており、すぐ傍のベッドではミロッドが小さな寝息を立てている。
リロイは汗で汚れた寝間着を手早く着替えると、再び横になった。

…覚えてる。決してただの夢じゃない。

あの声は、一体何だったのだろう………。

名は……… 誰だったのか。それだけは思い出せなかった。

10話 賢者の試練 前編

一方その頃、シシルはたった一人ダーマ神殿へ続く森を歩いていた。朝から発ったとはいえ、もう丸一日歩き通しである。現に今現在真夜中だというのにその足が休まる事は無い。

幾度モンスターを撃退したかわからないし、その場から逃げ出したか知れない。…僧侶であるシシル一人では敵わない相手が多すぎるのだ。

「……………確かこの辺り……………合つてると思うんだけど……………」

へとへと体を叱咤しつつ、書き写してきた地図を頼りに漆黒の森を歩く。ランタンの明かりはモンスターを呼ぶだけなので手掛かりは天空の星の位置と月明かりだけだ。

「———」
「———」

急に開けたところに出、真っ先に湖が視界に飛び込んで来る。そしてその月を飲み込んだ湖面に反射するように存在する荘厳な美しい神殿。

ダーマの神殿が、そこにあった。

「……………全く、無茶をなさいます。如何に旅慣れた者とはいえ、僧侶が供無しで此処まで来るとは……………。あの森には危険な魔物が多数潜んでいるですよ?」

ダーマの管理者であるトリスタン「ダーマは疲労したシシルを嫌な顔一つせずに快く出迎えた。

管理室で一日ぶりに口にした温かいパンとスープに身も心も安堵したような表情を浮かべつつ、シシルがその言葉に深く頭を下げる。

「ご迷惑かけました。食事までご馳走して頂いて……………」

「いやいや……近日は魔物の凶暴化が目立ちましての。巡礼者や修行者たちもすっかり減ってしまっている次第ですよ。シシルさん………」と、申されましたな。それで危険を侵してまで訪れた理由……お伺いして宜しいですか？」

笑みを浮かべるトリスタンに、シシルは表情を引き締め、自らの身の上を明かした。

自分はアリアハン勇者一行の一人だと。力の無さに悔い、此処での修行を望む事を。

「普段ならこんな話、身寄りのない旅人の戯言と一笑するトリスタンだが、その時ばかりはシルのその強い眼差しに真剣に聞き入った。……それで、賢者の試練を受けたいと申すのですな

「はい、…これから激戦になるだろうなか、僕だけ立ち止まっているわけにはいかないんです……。ついて行くと決意した以上、足手纏いになるわけにはいかない…。だから、お願いです。どうか試練を受けさせて下さい」

「賢者の試練は此処何年も成功者が出ておりませぬ。試験を行うガ
ルナの塔の魔物が外界同様：凶暴化した為でしてな。……… ついに
死者も始め、近年ではほとんど合格者が出ぬ状況。…それでも、
受けますかな？」

「はい、構いません」

迷いのない即答。トリスタンはやや迷いの色を強めていたが、やがて吐息と共に小さく頷いた。

「わかりました。それでは今宵は此處でお休み下され。如何に急ぐ身といえ、疲弊した体で受かるほど生温い試験ではありませんから」

翌日、トリスタンの用意した馬車に乗り、シシルは更に北方、別の

湖水に向かう島に聳え立つ塔へ案内をされた。

ガルナの塔。代々偉大なる賢者たちを生み出してきた魔法を担う者たちの聖域とも呼ばれる地である。

「………… シシルさまに与えられる試験は三つございます」

案内をしてくれた若い女官が説明を始め。黙ってシシルがそれを聞き入る。

「一つは、塔に封印された魔物を倒す事。二つ目は、悟りの書と呼ばれる賢者の秘法を見つける事、そして三つ目は塔の最上階の祭壇へ辿り着き、儀式を行う事です。祭壇には先にダーマさまがお待ちになられておりますので、儀式の方法等はそちらでお伺い下さいませ」

「魔物を倒して…悟りの書を見つけた上で最上階へ向かえば良いんですね。わかりました」

「万が一の時の為に此れをお渡ししておくよう、ダーマさまに言われております」

女官が差し出した薄紫色の宝石にシシルが首を傾げたまま受け取り。

「此れは？」

「キメラの涙と呼ばれるもので塔内部より一瞬でこの場所…入口まで戻る事が可能です。………… 万が一の際にお使い下さい」

「わかりました、ありがとうございます」

信用ないんだなあ、そんなに僕弱そうだろうか…………。

そんな事を脳裏に考えながら、シシルは重たい扉を開け、塔へ踏み入った。良く見るとあちこちに、旅の扉が設けられている。

「………… なるほどな、階段じゃなくこつちを使うのか？」

一つ飛ぶと、今度は大きな階段へと出た。魔物の気配に最善の注意を払いつつ歩を進める。ふと、開けた窓に大きな影が過ぎり、慌て

てシルは階段の影へ身を潜めた。

その影には巨大な鱗があり、よくよく視線で追うとそれが飛来する一体の巨大なドラゴンである事が判別出来た。

「……………あれは……………」

でかい。半端じゃなくでかい。

本で読んだ事がある。スカイドラゴンだ。

低位とはいえ、純血のドラゴン。今の自分に敵う相手ではない。

「……………見付からないように進むしかないな……………」

見つかったら一巻の終りだ。…逃げ切れるかどうか、怪しい。

—— やがてシルは「如何にも」というような大きなフロアへ足を踏み入れた。

東西南北にそれぞれ、青の宝玉、白の宝玉、赤の宝玉、黒の宝玉が配置されている。そして、中央には黄色の宝玉が。

「……………これ、東方の……………何だっけ？…五行、だったっけ。それかな……………」

五行。東方に伝わる呪紋式の一つである。東に青龍、西に白虎、南に朱雀、北に玄武、そして支柱に黄龍が司られ、その象徴色がまさにこの五つの色彩なのだ。

よく見ると五つの宝玉のうち、東西南北の四つは完全に固定されているが、中央の黄色の宝玉は台座に乗っているだけで動かさそうだ。

「……………封印された魔物、ってたな。……………五行は五つの力の流れで成り立つはず。封印を解くという事は……………」

近づき、黄色の宝玉を台座から摘み上げて見る。

「……………此れでバランスが……………」

—— ほほう、数年ぶりの試験の希望者が腹に響くような声色にシルが驚き、宝玉を手落とした。コロコロ

とそれは紋式から出、壁に当たるように転がっていく。

「だ……っ、誰だっ」

第一の試験官。試験内容は伺っておろう？……若き僧侶よ。賢者になりたくば、この我から一本取ってみよ！

「わっ………！！」

四つの玉から光が走り、収束したそれから、蝙蝠翼の生えた六本足のライオンの姿をしたモンスター……ライオンヘッドが現れた！

「……マジかよ……！！」

——がおおおんっ！！

地から響くような雄叫びにビリビリと空気が震え。シシルは硬直した。何とか杖を手にギツと歯を食い縛る。

行くぞっ！！試験とて甘く見ておればその命奪い取る！！紋式から床を蹴り飛び出したそれは、真一文字にシシルへ向かってその牙を走らせた。

「………うあっ！………つつ………」

間一髪で軌道から逃れ、シシルが転がった先で膝を突く。そのまま杖を媒体に指で呪文を走らせ。ライオンヘッドの側面目掛けて魔法を放った。

「バギー！！」

風切り生み出す真空破。しかしそれは硬質なライオンヘッドの皮膚を傷つける事なく、数本の毛を散らせるだけで終わってしまった。

「………！！？」

こんな微風が我に通じると思ったか。まだまだ青い！

瞬間生じた隙に、ライオンヘッドの鋭い後足蹴りがシシルの身体を吹き飛ばす。うめく間も無いまま、壁で激突し大きく咽せ返る。

「………っ………がはっ………！！」

口の中に広がった血の味がそのダメージの大きさを物語っていた。

これで終わりか

「………っ、はあっ………はっ………。ま、まだだ。まだ僕はやれる！終わっちゃいないっ！！」

……風の通じぬ皮膚にお前の貧弱な打撃が通じると思つか。
現実を知れ！

師に怒鳴られるような鋭い一言。「彼」は今まででもこうやって
全ての賢者希望者に「道」を示してきたのだろっ。

だが。

……今は——例え死んでも退けない。

僕には、やるべき事がある。僕には待つている人たちがいる。
護るべき約束がある……！！

「……まだ、手は残ってる……」

スツと手を合わせ。目を伏せる。その微かに漏れる呪文は、ライオ
ンヘッドの耳には届くものの小声過ぎて判別が出来ない。

……ならば、我は「試す者」としてお前を倒すだけだ……

！！

この魔法は詠唱が長い。しかも奴に通じるかどうかわからない。

それでも、シシルに残された手はこれしかなかった。

地を蹴る音が近づいて来る。しかし、次の瞬間シシルにとっては予
想外の事態が発生した。

彼は攻撃を仕掛けて来たのではない。……詠唱を中断させに来たの
だ。

マホトーン……

「！？」

放たれたその一言に背筋が一気に冷める。動揺が、詠唱を中断へ誘
う——が、シシルは敢えて歯を食い縛り堅く目を瞑つ
た。

ここで魔法を避けようとする確実に牙や爪にやられる。
ならば。……答えは一つ。

ライオンヘッドの封魔が効くか、自分の詠唱が形を為すか。賭ける
だけだ。

詠唱は止まらない。止めさせない——！！

「……………ザキ！！！」

複雑に組まれた印をライオンヘッドへ向け。シシルはその魔法を叫ぶように唱えた。

対象の、一切の生命活動を停止させる魔法。

しかし唱えた瞬間、シシルはその巨大な爪に裂かれ大きく弾き飛ばされた。

「……………あああつ！！！」

二転三転し、血を散らせながら。その場に転がる。痛みを堪えて何とか視線をあげると……………——ライオンヘッドはシシルを弾いた格好のまま硬直していた。その瞳は見開かれたままに、ズズン、とその場に重たい音を残し倒れる。

「……………。ベホイミ……………」

傷を塞ぎ、何とか身体を起こし。ふらふらとライオンヘッドの傍に行く。……………瞳に生氣は無い。呪文が成功したからか、既に完全に絶命していた。

よくぞ我の影を倒した

先ほどまでライオンヘッドから聞こえていた声が、今度は部屋全体から聞こえる。

「……………！？」

己の力と心を信じ、最後まで諦めない。その強き思いこそ、賢者に必要なものだ。如何な場合でも冷静に判断し行動する。その壁を乗り越えられた者のみ、賢者の道は開かれる

「……………あ……………。じゃあ」

うむ。第一の試練は合格だ。この鍵を持ち行くが良い……………此れが悟りの書を開く事が出来る唯一のもの

ふわりと眼前に銀色の魔法の鍵が降りて来る。それを受け取り。シルはぺこりと頭を下げた。

「ありがとうございます!!」

その心忘れるなよ。汝に光あれ

黄色の宝玉が再び紋式の中央へ現れ。やがて声は聞こえなくなった。

ライオンヘッドの間を出たシルはそのまま先へ進んだ。

後は悟りの書を手に入れて、最上階へ向かうだけ。試験官から認められた事で、シルは自分に自信がついてきた。それは決して慢心ではなく、精神の成長、という言葉が似合うような自信感だった。

「…………道はこつちか。…………塔に入ってから、どれだけ時間が掛かったんだろう」

モタモタしている暇は無い。

気ばかり急いても仕方が無いのはわかっているが、それもまた事実だった。

11話 賢者の試練 後編

「第2のしれん♪それは、しんじつを悟るみち♪塔にかくされし、いにしえの悟りの書をみつけたすのがあなたの役目なの♪」

何とも間延びしたたどどしく高い声は、聞くだけでも結構大変だ。赤いドレスを纏った二足歩行の白猫の後ろを、シシルは歩いている。

——塔の奥で会った「自称」「書の番人だ」というその雌猫？

は、書への道案内をすべくシシルを誘ったのだ。

「……………」

「悟りの書は書にして書にあらず♪もとめしものの心のかがみ♪」

「……………？書物じゃない？」

「そうよ♪」

くりん、と猫が振り返る。ちつつち、と肉球を振りながらにんまりとその大きな縦三日月のどんぐり目を笑ませ。

「あるひとはそれが剣であったり♪ひとの姿だったりするのよ♪シシルちゃんがみつける書はどんな書かちらねえ♪」

「…だから、心の鏡か。それはそれで厄介だなあ」

「……………さあ、着いたわよ♪このなかに悟りの書はあるの♪」
ぴたりと立ち止まった猫の視線の先、鳥とも竜とも付かないレリーフが刻まれた大門が聳えている。てちてちと猫は歩いていき、コツコツと軽くノックをし。…まるで何かに反応するように最奥からゴウンと重たい音が響き渡る。

「あちしが案内できるのはここまでよ♪あとはシシルちゃんがこのなかで書をみつけたすの♪がんばってね」

何かを聞く間もなく、ぽふん、と弾けるようにその場から猫が消える。えらく一方的だったな…と、シシルは頭をかいて、それから門の奥へ一歩踏み込んだ。
そして。

その中の広さと無数と思えるほどの巨大な本棚の羅列に言葉を失う。
「なっ……………!？」

悟りの書をみつけたすのがあなたの役目なの

さっきの猫の声が虚しく脳裏を過ぎる。

「冗談だろ……………」

自然と愚痴が零れた。この本の海から一冊、探し出さないとならぬ
いのか。

限られた、短い時間で――。

「あらあらあら、今回の試験者はまた可愛らしいわねえ。私好みだわあ」

ふと前方から声が聞こえ。はっとシルが身構えた。しかし現れたのは若い女性。緑の腰ほどの髪とダークオリーブの大きな目が愛らしい、美しい女性だ。

「……………貴方、は？」

「ここの主よ。名はエルレーン。貴方がフィオナに案内されてきた僧侶さんね。ようこそ、魔導図書館へ」

「フィ……………??？」

「さっきまで一緒に居たでしょ？私のペットなの」

ああ、あの猫の事か。

理解をすれば一つ頷く。

「此処では私が手伝う事が許されているの。……………ほら、見て？今、図書館の時計の針が0時を指しているでしょう？あれが一周するまでに書を見つける事が出来なければ……………貴方は、貴方の持つ知識ごと、此処の図書館の本に変えられてしまうわ」

「……………!？本に？」

「だから一番脱落者が出るところなのよ、この試験は。……………さ、無駄口叩いてる時間も惜しいわ。早く本を探しちゃいましょう」

全つ然危機感のない口調でさらりと言つてのけ、エルレーンがその辺りの本を手に取り始める。

「…………… 今までずっと本探しの手伝いとして此処にいるなら、何処に本があるかわかるんじゃないんですか？」

自分も本棚をチェックしつつ、尋ね。

「本はねえ…………… 毎回現れる場所が違うのよ。それは、本の意味だから…………… 私にもわからないのよね」

「…………… 大変ですね、そんなのに毎回付き合つてのも」

「まあ、仕事だからね。…………… あ、そっちの大きい棚お願いね？私向ここの棚を見に行くわ」

…………… チツチツチツチツ……………

…………… チツチツチツチツ……………

無駄に時間だけが流れていく。手に取る本、全てに書かれている事は興味深い事ばかり。恐らくは世界全てあらゆる知識が此処に終結しているのだろう。

しかしシルにはそれらを見る余裕等なかった。…………… 時計の針は既に八時を指している。残り四時間以内に見つけ出す事が出来なければ一生此処から出られない。

リロイたちを追う以前に、自分が自分で無くなる…………… つまり、死と同じなのだ。

「見つかった？」

「……………いえ、まだです」

お互いの落胆の吐息がひどく虚しい。疲れも限界だった。

「……………後四時間ね……………、大丈夫、まだ時間はあるわ、どんまいっ！」

……………

……………

ボーン、ボーン。時計が十一時を鳴らした。額に汗を浮かべながらシシルは本のタイトルを必死に流し見ている。

後一時間しかない。…一向に本は見付からない。

此処で終わりなのか？

ぎゅっと握られた手のなか、「キメラの涙」がほのかな光を放つ。……………いや、これを使うのはギリギリになってからだ。

「……………、あ」

ふと、何かが脳裏を過ぎった。何か忘れていないか？

猫の忠告。……………あの猫は——何ていった？

悟りの書は書にして書にあらず

そう言われて確かに心に留めておいたはずなのに。……………入るなりいきなり視界に入ったこの本の海に気を取られすぎてはいないか？

あるひとはそれが剣であつたり……………

ひとの姿だつたり……………

人……………。

「まさか……………」

視線が自然と、少し離れたところで本を漁っているエルレーンへ向けられる。それに気づいたエルレーンがちつとも疲れていないような笑顔を向け、「なあに？」と声を掛けて来た。

「……………」

「どうしたの？ シシル。ぼーっとしてる時間ないわよ？」

「貴方が。…………… 貴方が、悟りの書……………？」

呟くような声色で漏れたそれに、エルレーンが笑みを崩さないまま、ちらりと時計を見遣った。

…………… 11：48。

「…………… 残り十分でギリギリその事に気付けた、か。ちょーっと危なかったけど、何とか及第点ね。」

「それじゃあ、やっぱり貴方は————」

「合格よ、シシル」

口を開こうとした瞬間、眩しい光が部屋全体に弾けて、シシルは一瞬目を瞑った。そして目を開けた次の瞬間、その図書館はまるで存在していなかったように跡形も無く消え去っていた。

塔のなかの何の変哲も無いフロア。エルレーンがフィオナを抱いたまま、まるで狐に化かされたような表情をしているシシルを見つめている。

「…………マヌーサ。幻影魔法よ」

「…………いつから」

「そうね、貴方がフィオナに会った時から、かしら？」

その手に抱かれた白猫が大きく欠伸を一つ漏らした。赤いドレスも纏っていないし二足歩行も、人語を話す素振すらないただの猫だ。

「……じゃあ図書館の本になるというのも嘘だったんですか」

「まあね。極力死人とか出さないようにしないと。ダーマに怒られてしまうし…………。さあ、話し込んでいる暇は無いんでしょう？待ってる仲間たちの為にも、早く儀式を終えてポルトガへ戻ってあげなさい」

エルレーンの言葉にシシルが目丸くする。

「何でその事を！？」

「何でって」

クスツとエルレーンが笑う。

「私は【悟りの書】。知らない事は何一つ無いわ。……………」

見えるものだけが真実ではない」……………貴方はそれを悟った

はずよ。……………さあ、受け取りなさい。貴方だけの悟りの書を」

エルレーンの手から光が零れる。それは反射的に手を出したシシルの手へ移され、彼の手のなかで輝きを強めた。

「何が……………見える？」

光が眩しすぎて、良く見えない。それでも何処からか聞こえたエルレーンの声にシシルは何とか光のなかを覗き込もうとした。

そして……………。

「……………あ」

誰かの笑顔。表情しか見て取れないが、誰かが、思いつきり…幸せそうに笑っている。

「……………笑ってる。……………誰か…が、……………つつ……………」

一層光が強まり、シシルはそれに耐えられずに意識を手放した。

忘れないで。それが貴方の【大切なもの】……………守るべきものよ

一瞬、声と猫の鳴き声が聞こえたような気がした。

目を覚ました時、シシルは大きな祭壇の上に倒れていた。その手に握られているのは、緑色の皮を貼られた一冊の書……………悟りの書。

「此処は……………」

「ようこそ、賢者の祭壇へ参られた。シシルさん……………」

トリスタン＝ダーマが笑顔でそれを迎える。

「あ。……………じゃあ」

「おめでとう、貴方は賢者の試練を見事乗り越えました。……………さ

あ、祭壇から此方へ。その魔方陣の中央へお進みなされ」

まだ目がちかちかする中、シシルはトリスタンに促され魔方陣の中央へと足を運ぶ。

「基礎呪文式は心得てますな？……………私が儀礼の詠唱を行いますの

で、それに二乗式で重なるように続けて下され。悟りの書は魔法の

鍵を添えて両手の中へ。……………そうそう」

いよいよ、賢者の儀礼が受けられる。

何が起こるのか、不安よりも期待が勝るなか、シシルはきゅっと唇を堅く結んだ。

「トリスタンさん……………一つだけ、聞いて良いですか？」

「何ですか？」

「この塔は何なんですか？……普通の場所と、何処か違うような気がするんです」

「ガルナの塔はの、古代に神が叡智の場として残した地と言われてます。…悟りの書はその結晶とも言われる存在。そして賢者の試練の番人たちは、魔からその知識を守る為に神が残した守護神たち……天界人なのです。例えば世界が滅びようと、この塔だけは彼等の手で守り切られる事でしょうな」

「——滅びません」

きつぱりと放たれたシルの言葉にトリスタンが視線を挙げる。

「……世界はリロイが……いや、僕たちが必ず守ります」

「……そうでしたな。さあ、時間はあまりありません。取り急ぎ始めましょう」

「はい」

——青い風に帆が揺れている。

リロイは船の甲板、縁に凭れてそこから見える夕陽を眺めていた。

——バハラタを発ってから、六日。

……シルはまだ戻って来ない。明日の朝にはもう発たねばならないのだ。

あの陽が落ちて、また上がって来た時には……自分たちはこの港

から出航する。

例え…… シシルが間に合わなくても。

「リロイ。―― リロイ、まだそこにいたのね。… 体冷えちゃうじゃない」

元気が無いリロイの背に、気遣うようなミロツドの声が響く。トン、とリロイの隣に立ち、ミロツドもまた潮風に心地良さげに目を細めた。

「… 大丈夫よ、シシルは戻って来るわ。きっと立派な賢者になって」
「…… ああ」

「元気出して？… ソロが航行中の食料を確保して来たら… 何かお腹に入れましょう。リロイ、お昼も食べてないでしょう？」

「…… そうだな。―― …… そうしよう」

船の下。肩に袋を下げたソロが歩いて来るのが見える。片手を振るその姿にミロツドが手を振り応えた。

「いやあ、参ったぜ。どうやらおれたたちの船が出るのと漁船団が出港するのと時期がぶつかったみたいでな、乾物屋とか道具屋とかみっちり混雑状態だ」

「あら、何なら一度戻って来れば、あたしたち手伝ったのに」
船の中、ミロツドが二人にスープを出す。

ポルトガ王から貰った船は小ぶりといえどもがっしりとした船体で、内部調理も可能だ。武装は無いが、これはリロイが「不必要な重火器は重荷にしかない」という理由で撤去して貰った為である。

「―― 次の行き先は…… 此処だ」

パンを齧りながらリロイが地図を指で辿る。ポルトガから逆時計回りに南下していくとあるアリアハン大陸と平行して存在する島国ラ
ンシールだ。

神聖を司る事で知られており、かつて父も訪れたと言われる地。そこを目指す。

「ランシール。地球のへそと呼ばれる遺跡があるところね。聞いた事はあるわ」

「ランシール立ち寄りには中継地点のようなものだ。此処で燃料を補給した後…北上してジパングを目指す」

「ジパング…？聞いた事無い国ね」

聞き慣れない響きの地名にミロツドが瞬きを強めた。

「ああ、女王ヒミコが治めている後進国だな。火山帯にある細い島国だ」

「街の船乗りたちに聞いたんだが、あの国の女王は不思議な能力を持っているらしい。会っておくだけ損はないだろう。……………それに現状手探りの旅だ。何処をどう行けば魔王軍に近づけるのか……………少しでも手掛かりが掴めれば」

「そうね」

頷く二人。しかしリロイは一人、船窓からちらりと外を見た。いつの間にか陽は沈み、外は闇となっている。明日朝まで……………早朝までに、シシルは間に合ってくれるのだろうか。どんなに作戦立てや稽古で気を逸らせても、リロイの心の不安は決して消える事は無かった。

そして、一夜が過ぎ……………朝が来た。

「……………」

「……………リロイ」

船縁で不眠の朝を迎えたリロイの肩に、ソロが毛布を掛けてやった。

視線をあげたその表情がひどく痛々しい。

「あいつは、まだか」

「—— ああ。もうすぐ出港だ。シシルは……………」

「もうなかに入って休めよ。どうせ寝てねえんだろ？」

気遣うような言葉にぶんぶんとりロイが強く首を横へ振った。

「シシルは絶対来る。……………戻って来るって約束したんだ……………だから、おれは待つ」

「……………なあ、リロイ。お前あいつの事……………」
「？」

視線を挙げるリロイにソロが言葉を濁した。「何でもねえ」と言うソロにリロイが何か聞こうとしたその時。

「リロイ、ソロ——っ。……………やっぱり此処に居たのね。そろそろ時間だから一度中へ戻ってって、船乗りさんがミロッドが船室から出て来て、二人に告げる。」

「あ……………」

「……………タイムリミット、か」

「待つて。もう少し、もう少しだけ、……………シシルはきっと……………」

「リロイ、急がねえとならない旅だって一番わかってるのはお前だろ……………？あいつだって、間に合わない時の事は覚悟していたはずだ」

「……………だけど……………だけど、おれは……………！！」

ギイ……………と、微かに船が動き始める。——しかし、離岸しかけた、その時。

「おおい、待つてくれっ！！まだ出るなあっ！！」

叫ばんばかりに聞こえてきた声に、はっとリロイが顔を挙げた。

「あ……………止める……………止めてくれっ！！シシルが……………っ！」

バツとりロイが船縁から飛び降りる。ゆうは二階建てほどの高さだ。しかしリロイはそれも構わずに埠頭へ降り立つとそのままシシルの方へ駆け寄った。

若干外傷はあるものの、元気なシシルがそれを迎える。……………そして額には、賢者の証のサークレットが。

「……………シシル……………!!」

「ごめん、遅くなっちゃって。ホントはもつと早く戻りたかったんだけど——泣いてるの?……………リロイ」

唇を噛み締め、リロイがただ首を振る。不器用な笑みを浮かべ、「お帰り」と一言。

そして港へ戻った船から、ソロとミロッドが降りて駆けて来る。

「……………オヒメサマ方が待ちくたびれてたぜ?シシル。……………お帰り」

「……………ただいま、ソロ。……………僕は約束を守ったよ」

「みたいだな。……………ちゃんと賢者になれたみたいだしな」

「凄いわ、シシル。……………本当にお疲れさまっ」

「おおーい、兄ちゃん方、船は出さないのかい?」

船上より船乗りたちの声が聞こえ、リロイが視線を挙げた。

「すまない、今戻るっ」

「……………さあ行こうぜ?ランシールまでは添乗員が来てくれるが、後は俺たちで船を操らないとならねえしな。それまでみっちり操舵の特訓だ。……………頼りにしてるぜ?賢者さま」

「わっ」

ぐいっとソロに手を引かれ、シシルが船の方へ引つ張られる。心から嬉しげに笑っているリロイの肩をツン、とミロッドが突き。

「……………良かったねっ」

「……………ああっ。行こうミロッド。おれたちも船の事、教わらないとな?」

「うんっ」

「出航だ——っ！——」

風を受け、船がゆつくりとポルトガから離れていく。だんだんと遠ざかる陸地に、眼前に広がる広大な海原に。最初は感動の声を上げていた四人は皆、次第と言葉を失っていった。

「……………綺麗ね」

「……………うん」

「世界ってこんなに広がったのね。あたし…自分が見て来たものが如何にちっぽけだったか…って。今思ったの」

船縁からミロッドが離れ、リロイを見遣る。

「さあ、食事にしましょ。今日は船乗りさんの分も用意しなきゃ。

リロイも手伝って？」

「わかった、じゃあ船室の方へ戻ろう。今日は何にするんだ？」

「今日はジャガイモの冷スープとね……………」

何処までも穏やかな海原。しかし海模様と同じく、この平穏もそう長くは続かないだろう。

リロイ、ソロ、シル、ミロッド……………。心のなかではそう誰もが痛いほど感じ取っていた。

12話 偽りの村 前編

「……予定外が有り得るってのは承知してたけどな」

「……ああ」

「……どんなのが来ても驚かねえ、って決めてたけどな」

「……ああ」

「……幾ら何でもなあ、これはちょっと……」

今にも湿気そうな乳灰色の空。船縁で黄昏る男二人。ソロとシシル。

事の起こりは数時間前にさかのぼる。

「———— きゃあああつ！」

「ミロッド！……くそつ、ベホイミ！！」

航行は無事に行われていた。……しかしそれも、突然現れた白い悪魔たち……大王イカの群に囲まれるまでは。

状況は急変し、場はあつという間に修羅場の渦に飲み込まれる。

斬っても斬っても、魔法ですら大きな効果を出せないほど、強靱な体皮を持つモンスターに一向は苦戦を強いられた。

「……イオラ！！」

ミロッド、シシルが同時に放ったその魔法に、船の上空で ガオオオン！！ と、大爆発が起こり。波で船体が大きく揺れる。

「……やったか！？」

マストから飛び降り、合わせてリロイが見上げ。しかしその瞬間爆風から飛び出した触手が鋭くリロイ目掛けて突き込まれる。

「……………危ねえっ!!」

ソロが慌ててそれを横抱きに飛んだ。魔法隊の方から声が上がる中、しこたま頭をぶつけたリロイが表情を歪め、跳ね上がる。

「……………つつ……………油断した……………っ……………」

「大丈夫か?」

「あ、ああ。ごめん。……………それにしても、きりが無いな……………」

「何つつ生命力だ……………こんなの相手にしてたらキリが無いぜ。船がもたない」

「大丈夫!?!」

駆け寄って来た二人へ頷きを返してから、ソロは船の周りを囲む白い影を改めて見上げた。

「このままじゃ、次の攻撃で船が沈むぞ」

「……………。……………ねえ、皆。僕に試したい事があるんだ。少しでも連中の気を引いておいてくれないか?」

シシルの言葉に全員がその顔を見遣る。

「試したい事?」

「詳しい話は後で」

「……………わかった。ミロッドはおれと一緒に魔法攻撃を。ソロはフオローに回ってくれ。……………頼んだぞ、シシル」

「ありがとう、リロイ」

—————
ゴゴン。

再び巨影が動いた。……………拮抗状態が揺らいだのだ。—————

……………来る!

「ベギラマ!」

「—————イオラ!」

熱と爆炎が一気に弾ける。怯え恐れ、うろろろする船乗りたちに「引っ込んでろ！」と怒声を飛ばしながら、ソロがイカの足目掛けて斧を振るった。

「……………生と死、創造を破壊を司る者。死の王パーシよ」

祈るような形で詠唱に入ったシシルの回りに、光の輪が広がる。

「……………我が声に応えよ。我が導きに応じよ」

「……………大いなるその力にて、……………我に害為すものたちに刃無き終焉を与えよ。我が名はシシル。汝が流れに存在せし者」

ぐつと、両手に力を込めるとそのまま素早く魔法の印を結ぶ。目を見開き、辺りに向かい叫ぶ。

「皆、下がって……!!」

「—————!」

ザラキ!!

一切の生命活動を広範囲に止める事が出来る、ザキの上位魔法。死の言葉が紋から放たれ、激しい痙攣と共にイカの群が硬直する。

「……………」

息を飲み見守るなか、ずるりと一匹、また一匹と、その巨体が水中へ没していく……………。

「……………は……………あ……………」

その様子を険しく見つめていたシシルが、そつと印を解き。脱力したようにその場へ座り込んだ。

魔法が成功したのを見届け、リロイたちが近付いて来る。

「シシル、大丈夫か？ 凄いな、一瞬で全滅させるなんて」

「ザラキ…………… 広範囲即死魔法だよ。…………… 成功率が低い魔法だけど、効いてよかった……………」

バキン！！

不吉な音に全員がその方を振り返る。死んだ大王イカの足が一本、食料庫用の小さな船室に絡まっている……………。そして、重力に従い海へ沈むイカと共に引つ掛かった足が船室を締めているのだ。

「……………」

「つて、まずいだろ、あれはっ！」

駆け出す四人も構わず、ついに船室が「バリバリッ」と耳障りな音を立てて引き剥がされ、イカと共に海へ引きずり込まれた！

「あ…………… つ！！！」

水の入った樽が、食料の詰まった樽が、水飛沫を立てながら次々と海へと落ちていく。そしてあつという間に激しい波に飲み込まれ、見えなくなってしまった……………。

そして。

現在に至るわけだ。

「ソロ、シシル。そろそろ戻れ」

船倉から出て来たリロイが二人を呼んだ。

「上陸準備に入るぞ」

「…上陸？」

「村が近くにあるらしい。人が住んでいるなら、補給が取れるだろう？」

「人家……………？ ……ちよ。ちよと待てよ、リロイ」

あからさまにソロが眉を寄せ振り返る。「何？」と、シシルもソロを見。

「…どうしたんだ？ソロ」

「現在位置は…ネクロゴンド大陸の西方南部海岸沿いだよね？ ……一つの地図が知らねえが、現在この地域にや町村は現存してないはずだぞ？」

「……………地図にはテドンという村の名があった。川沿いに南下をしていく位置だったけど……………？」

眉を寄せて首を傾げるリロイに、あゝ、とソロが首を振り。

「あの村は今は無いんだ。船乗りの奴等、知らずに古い地図使ってたんだろ……………。俺ちよつと言つて来るわ」

ソロが戻ってから暫く、リロイはシシルと顔を見合わせて肩を竦めた。

「……………廃村？」

「かな？……………何だ、がっかりだなあ。折角水と食料補給出来るか

「思ったのに」

「だけどさつき船乗りたちに聞いた時はそんな感じじゃなかったけど……。まあ、おれたちも戻ってみよう。ソロの勘違いかも知れないしな」

軽い調子で戻ったりロイとシシルだったが、船倉でのソロと船乗りたちの妙な雰囲気には扉を開けた途端固まってしまった。

「……………何だつて？」

「だからさ、今はあの村は復旧してるよ。仲間が一度座礁した時にあの村の人間に手貸して貰ってるんだから」

「そんな馬鹿な!!」

「馬鹿もへつたくれも、つい先月の話さ」

食って掛かるソロの姿に船乗りたちも驚いた表情で首を傾げ。当のソロの表情には、いつもの余裕は見えない。テーブルに握り拳を置いたまま、ギリ、と力を込めている。

「んなわけあるか!……………あの村は……………!!!」

「——— ソロ……………?」

激昂するソロにロイが恐る恐る声を掛け。それにはっとしたようにソロが船乗りから視線を逸らす。

「…………… ロイ……」

「わしらはその村で何があったかは知らないがな。だが、可能性があるならそこで補給を受けた方がいい。……………このままじゃランシールに着くまでに日干しになっちまうぞ」

「……………っ……………」 ———— ちっ、勝手にしろ!」

「おい、ソロ!!」

シシルを押し退け、ソロが船倉から出ていく。あれだけ感情を顕わにしたソロはじめて見た。シシルもリロイも、目を丸くしたままその一部始終を見届け。それから船乗りたちを見た。

「……………あ、あの。テドンへは……………向かうのか？」

「ああ、現在進路を向けている。川沿いに入ると途中で行き止まりになるからな……………そこからは歩かないとならないが、なあに、すぐ近くさ。それより、あの兄さんは大丈夫かい？」

「……………怒ってる原因がどうもわからないけど、村があるにしろ無いにしろ、確認すれば機嫌も戻ると思う。———こつちこ

そ、仲間が騒がせて済まなかった」

頭を下げるリロイに船乗りたちの表情が和らいで。

「気にすんじゃない。まあ、自分の目で確かめれば気が済むだろう？」

「ああ……………」

そう呟き、リロイは扉の方へと視線を向けた。

———上陸を果たしてから、ソロは無口だった。一件の事を休んでいて知らなかったミロッドがシシルから事情を聞き、首を傾げ。

「……………もしかしてソロ、その村の出身なの？」

尋ねられたその言葉にリロイもシシルも気付かなかったらしく、同

じくソロの背中を見遣る。

「そうなのか？」

「……………まあな」

「……………—— ソロ。その村は今は無いつて言っただわよね？」
ふと何かに気付いたようにミロツドが立ち止まる。その様子に全員が立ち止まり。

「ああ。……………それがどうかしたか？」

「船乗りさんたちの話ホントじゃないかしら？ ほら……………見て。明かりが見える」

「……………あ、ホントだ」

ミロツドの示す方へ視線を動かしたシルの口から呟きが漏れる。
前方に明かり、そしてそれに浮かび上がるように幾つかの建物も微かに見えた。

「馬鹿な——」

「あ、ソロ！？」

ソロは駆け出していた。絶対ありえないはずだ。だって、あの日。自分は……………！！

ザザッ！！

茂る草をかき分け。ソロが村の前で立ち止まる。そして、目の前の光景に目を疑った。

「—— おや、ソロ。そんなところで何しているんだ？」

番人の男が笑みを浮かべてそれを迎えた。その表情に、見知った仕草に、冷水を浴びたようにソロの鼓動が早くなる。

「ああ、そういえばフィーナちゃんとの婚礼準備でバタバタしていたな。材料集めに頑張るのも良いが、村の外は危険だ。……………早く入りなさい」

「……………バジル、さん……………?」
呆けたように尋ねるその名に、男が首を傾げた。
「寝惚けてるのか? ほらほら、最近は魔物が凶暴化しているんだ。
嚴重に門に鍵を掛けておかねばならないからな」

「ソロ! 単独行動は……………!!」

「先に行っちゃうなんてひどいわ、ソロっ」

慌てて後を追って来た三人に、毒気を抜かれたような、やや青ざめた表情でソロが振り返った。様子に門番バジルが微笑みを浮かべる。

「おや、ソロの友達かい? 旅人のようだが」

「……………」

押し黙るソロに、リロイが怪訝そうな表情を浮かべ。小さく頷く。

「アリアハンから来た……………。此処が、テドンの村か?」

「? アリア…ハン? …………… ああ、南の…………。知ってるよ、勇者オルテガが旅立ったって国だろ。さあ、皆さんも早くお入り。門かんぬきを掛けるからね」

…………… ???

オルテガが、旅立った……………?

旅立ったのは自分だ。何か違和感を感じたりロイの後ろで扉が重い音を立てる。

「…………… こんな門無かったはずだ」

ポツと呟いたのは、ソロ。バジルが笑みのまま首を傾げ。

「お前、本当に寝惚けてるみたいだな。お前が生まれた時からあったろう? …………… さあ、明日はお前の婚礼式だ。早く帰って休みなさい」

「…………… !?」

「「婚礼式い! ?」」

驚いたように叫ぶシルとミロッド。

リロイは、反射的に立ち止まってしまった。自分ではすっかりして

いるつもりだったのだろう。それでも傍目にはひどく呆然としているように感じ取られた。

「—— リロイ？」

「…… あ、ああ。ごめん。ソロ…… その。婚礼って…？」

「僕も驚いた。…ソロ、婚約者がいるのに旅して回ってたの？」

「……。—— 何れわかるさ」

照れた様子も動揺した様子も、ソロには無かった。あるのは素っ気無い、感情が見えない声色だけ。

恋人と上手くいってないのだろうか、等と考えながら。シシルとミロッドが顔を見合わせる。

「…… ソロの家、あるの？」

「…… どうだって良いだろ、行く気はねえ。…… ほら、宿へ向かうぞ」

—— 何もかもが此処ではおかしい。何もかも。
それに……。

ソロの、婚約者。…… 居たのか。

リロイはあてがわれた部屋のなか、ぼんやりとしていた。自分でもわからない、この気持ち。
胸が、苦しい。

ノック音が響き、もそりとリロイが顔を挙げる。

—— どうやらこのテドンという村。辺境の地の為か滅多に來客が無いらしく久々の來訪だったリロイたちに一部屋ずつ無料であてがってくれたのだ。

ノックの主は、ミロッドだった。

「どうした？」

「う、うん。……………ねえ、あのね？……………今夜、こっちで一緒に寝て良い？」

不安そうなミロッドの言葉にリロイが首を傾げる。

「おれは別に構わないけど。でも、どうしてまた」

「……………何かこの村、気持ち悪いの。……………風に乗ってうめく様な声が聞こえて来るし……………一人で部屋に居たくない……………」

ミロッドの言葉が途切れると、自然にリロイが言葉を失った。寄せる風が僅かに窓枠を揺らす、目立った異音は聞き取れない。

「風鳴りみたいなもんだよ。……………でも、部屋に居たいなら居ても良いよ。おれも今日はちよつと……………一人にはなりたくない気分だし」

「でしょう？何か……………妙な感じよね？この村。……………さっきの勇者オルテガの事だつて……………あれってリロイのお父さんの話でしょう？かなり古い話だし……………」

「ああ。……………ソロの態度といい、気になる事が多すぎる」

押し黙るミロッドの髪をポンポンと叩き、入れ違いに戸口へ向かう。

「リロイ？……………や、やだっ、一人にしないでよ」

「ソロもシシルも隣の部屋にいるだろう？……………ちよつと外を見て来る。それとも、ついて来る？」

リロイのからかうような言葉にミロッドが慌てて首を横へ振って。

「い、行かないっ、待ってるっ」

……………深夜、嵐が近いのか厚い雲に覆われ星すら見えない。生温く神経を刺激するその風に小さく身震いをしてから、リロイは宿を出た。

深夜だというのに外で話をしていたり、酒盛りをしていたり、賑や

かだ。……誰かが歌っているのだろう、古い歌が微かに聞こえる。

……普通の村、なのだろうか。

何か、違うような気がする。何か……。

また声が聞こえた。今度は歌じゃない。……知った声？

声がする方へ足を向けると、そこは開けた泉が広がっていて。そのほとりにいるのは、ソロと……亜麻色の長い髪の、美しい女性の姿。

また、胸が痛んだ。……一体何なのか。リロイにはその感情がわからずに苛立ちだけが募る。

彼女は。……彼女は、まさか――。

「……どうしたの？ 久しぶりに帰って来たと思ったら……変な事を言うのね」

クスクスと微笑むソロの婚約者……フィーナはそう言いゆったりと首を傾げた。

「……何故、お前は此処にいるんだ。……いや、どうしてこの村が、此処にあるんだ？」

会話が成り立ってないようにも思える。木の影からそつと覗きながら、リロイは息を飲んだ。

出て行けば良いじゃないか。ソロの婚約者だ。挨拶の一つでも――。

……どうして、こそこそと隠れたりしてるんだ、自分は。

「…………村の外で幻でも見ちゃったの？今日のソロ、ちょっと変よ？あ——もしかして、お酒飲んだ？」

「……フィーナ……………」

屈託なく笑う彼女にどうする事も出来ずにソロがきつく抱き締める。それを見てしまったリロイは湧き上がる何かを感じ、口を抑えた。ばつと視線を逸らし。震える肩をぎゅっと抑えてから。——

——立ち去ろうとした。

——その言葉を、聞くまでは。

「…………この村は、魔王軍に滅ぼされたはずだ…………。俺が出掛け
ている間に……………」

13話 偽りの村 後編

忘れる事等、出来るはずもない。

五年前のあの日、幼馴染みとの婚礼式を目前にした前夜に……ソロは一人、婚礼の儀に必要な光石を採掘する為に森へ向かったのだ。色々あってこんなギリギリな時間になってしまったが、採掘出来る場所は熟知している。それほど時間は掛からない作業の、はずだった。

採掘された光石は研磨をし、花嫁のヴェールに散りばめられる。美しい彼女の姿を想像しながら、ソロは漆黒の森を歩き続けた。

……ねえ、ソロ。今夜は一人になるの…嫌なの。……早く、帰って来てね

出掛けに不安な口調でそう言った婚約者のフィーナの言葉が脳裏を過ぎる。

婚礼前に不安はつき物だ。特に花嫁の精神が不安定になる話は、男のソロでも良く聞く話だった。

軽い気持ちで「大丈夫さ」と声を掛け。……そのまま足早に村を離れた。

—— フィーナが何を思い、察したのかはわからない。

しかしソロが村を離れて数十分もしないうちに、村は魔王軍に攻め入られた。

魔王の居城が近くにある所為か、かなり早い段階から屈服を命じられていた地、テドン。

しかし村長リドルは老人ながらに正義感の強い男であり、脅しに屈する事は決してなかった。

… 外壁が無いんだな

いつの日か初めて堅固なアリアハンより出たばかりのリロイが見た、外壁の無い村の現状。

… 村なんてこんなものさ。常に魔物の襲撃に怯える日々だ……

…

レーベだけじゃない。…… いや、アリアハン国の大きな後ろ盾がある分、レーベの危険性はそれほど高くない。

しかし同じ状況でテドンは違った。…… 屈しない愚かな人間に対する魔物たちの攻撃。

後ろ盾も何も存在しないその状況は

—— テドンを一瞬に

して壊滅へ追い込み、血濡れの修羅場へとその姿を変えていった

。

「…………お前は…………いや、お前たちは…………あの日死んだはずだ
ろう…………？どうして此処にいるんだ————」
絞り出すような声。微かに唇を震わせながら呟くソロに、フィーナ
が訝しげに眉を寄せ。

「ソロ…………？…………言ってる意味がわからないわ、どういう事？
…………だって私は。私は、此処にいるじゃない」

「お前は…………俺の、いや、”俺たちの家”の前で血まみれ
で突っ伏していた。…俺が村の異変に気付いて戻った時にはもう既
に息絶えて————」

「ソロ、冗談はやめて。怒るわよ？」

フィーナの語調がやや強くなる。しかしソロの表情は変わらないま
まだ。

「生き残ったのは、たまたま村を離れてた…………俺だけだ」
「やめて！」

「それに、この村には元々外壁も存在していなかった。この村は、
フィーナ。お前たちの…………」

「嫌っ、やめて、聞きたくないっ！！！」

悲鳴に似た声色が漏れ、フィーナがソロの胸に顔を埋めた。そのま
ま、ドン、ドンと何か責めるような。…………否、ソロではなく自分
を責めるようにその胸を叩き続ける。

「…………フィーナ」

「————— 幾夜…………貴方が帰って来てくれるのを待ったか。
どれだけ会いたかったか…………貴方にはわからない。私がどんな思
いでこの地で待っていたか…………！！！」

そっと、胸を叩くフィーナの指先をソロが捉えた。そのまま真っ直
ぐに彼女を見つめ。

「すまなかった、フィーナ。だがな、フィーナ—————」

「肉体が無くても良いの。…………貴方の傍にいたい。…………オー
ブがある限り、私たちは存在し続けられる。貴方と一緒にいられる
の。おしゃべりしたり、笑ったり、だから————もう、行かな

いで」

「—— オープ？」

聞き慣れない言葉に、リロイもぴくりと反応する。

ソロはきつと、自分たちを受け入れてくれる。そう思い、その名を口にしたフィーナだったが、ソロの反応はその考えを思い切り覆した。

「……………それが無くなれば、お前たちは成仏出来るんだな？」

「……………え」

「オープは何処だ、フィーナ。……………言うんだ」

「……………いつ、嫌。嫌よ教えないっ。私たちは永遠の時間を手に入れたのよ。争いも無い、穏やかな時間を過ごしたいの。お願い、ソロ……………っ」

「—— リロイ!!」

不意に怒鳴るように叫ばれ、隠れたままリロイがびくつと肩を震わせた。

いつから気付いていたのか、と、ばかりに出る事も出来ずに沈黙しているリロイにソロが構わず叫ぶ。

「……………シシルとミロッドに伝えて……………オープを探せ!!」

「……………」

ソロはフィーナを抱き締めたまま離さず。

「離して……………」ともかくその声を背に受けながら、リロイは漆黒のなか、走り出した。

宿へ戻り、眠っていたシシルを叩き起こし、自室で本を読んでいたミロッドに事情を説明し。……………再び、宿の外へ飛び出した。

「……………い、一体何が……………？」

「この村は死霊の村だ。……………魔王軍に滅ぼされた魂が創り上げた幻の村、それがテドンの正体……………」

「ひええええ!!??」

「ソロは………?」

「………。婚約者の霊を説得中。………霊たちを実体化させている
オーブというものがこの村にあるらしい。………それを探し出す
んだ」

走りながら状況を説明するリロイに二人がぞつとした。

「オーブ………。……で、でも。狭い村だって家のなかに隠されたらわ
からないわ」

こつちです

ザザッと三人の足が留まった。

早く………っ………村人に気付かれる前に

声がする方は暗い路地になっている。「どうする?」と尋ねる
シシルにリロイが小さく頷き。

そのまま三人はその方へ足を向けた。

男は脱獄囚人のようだった。千切れた足枷を嵌めたまま、俯き。闇
のなかに座り込んでいる。

（ゾンビじゃねーだろうな……）そう耳打ちするシシルにミロッ
ドが小突いた。

「あんたがおれたちを呼んだのか?」

「………はい。………私は、いつかオルテガ殿がこの村に来た時に
………オーブを渡そうとずっと守っていた者です」

「!?!」

「かつてはオーブを秘密裏に守護する為の村でした。………幸い、
全滅させられたとはいえ、その事をバラモスに………魔王に悟られ

る事はありませんでしたが……。滅んだ後、残されたオーブの魔力は肉体を失った我々に仮初の器を与えてくれました。…………やがて、いつの日か、村人は「オーブを勇者に渡す」「使命を忘れ……」「オーブの恩恵」「だけを求めるようになってしまい。私は……村長が守るオーブを偽物とすり替え……こうして、ずっと本物を守って来たのです。…………オルテガ殿に手渡す為に…………」

男の懷から竜の像が出される。竜が抱いた玉は美しい碧色をしており、一瞬三人はその柔らかない光に目を奪われた。

「グリーンオーブです。…………六つなるオーブを集めし時、天空より大いなる力が得られるとされます。是非、お持ちになって下さい」

「…………おれはオルテガじゃない。…………それでも、良いのか？」

戸惑ったように受け取るのを躊躇うリロイに男が微笑んだ。

「…………貴方だから、です。オルテガの御子」

「…………」

「さあ。…………受け取って下さい。そして、我々をこの呪縛より解放して下さい。…………勇者よ…………」

男の手より、リロイの手にオーブが手渡される。そしてその瞬間、オーブは柔らかない光を広げていった。

目に刺さるような光ではない。まるで音楽が聞こえてきそうなほど柔らかない光。

「ああ…………」

男が光を見上げ、安堵に似た声を上げた。その瞳からは大粒の涙が零れ。

「…………ありがとうございます…………」

「…………そう言い残し、眼前で男は完全に消え去った。」

男が消えても光は消える事はない。まるで村全体を包み込むように光が広がり。そして、天空に向けて大きな光の柱を創り上げた。

死者が昇る道。天へ続く道が。

「……………あつ……………」

光を浴び、フィーナにもまた異変が生じていた。抱き締めたままだったソロが、はっとして周囲の光の帯を見遣る。

リロイだ。リロイたちが、オーブを見つけたのだ。

それはすぐに察した。……………だが、手放しに喜べはしなかった。何故なら。

彼の腕のなかには、戸惑いの表情を浮かべる……………彼女が居る。

「……………フィーナ……………」

「ソ、ソロ。……………私……………」

「すまねえ、フィーナ。俺は……………俺はっ……………」

抱き締めたその腕のなかに感触が次第に失われていく。まるで夢の世界のような、不安定な存在。

開放を求めたのは自分なのに。今は……………その存在を消したことなくて。

繋ぎ止めようと、抱き締めている腕には自然と力が籠った。

「……………。良いの……………ごめんね。……………ソロに、迷惑かけて……………」

……………。わかってた……………。自然の摂理に逆らっているのは自分たちだって……………」

「……………悪いのは俺だ。あの時、村を離れなかったら……………」

……………そして現実から逃げなかったら……………。つ。悲しみ

も寂しさも、お前を苦しめる事も無かったのに……………!!」

血を吐くようにまくし立てるソロの姿に、フィーナが表情を曇らせる。

既に透け始めた指先で彼の頬を捉え、そして……………最後になるだろう口付けを、与え。

「ソロは……………悪くないわ。……………悪いのは、私……………ずっと、

引き摺らせてて…ごめんね。だけど、私は—— ううん、私
ちは。皆…ソロを苦しめさせたくて此処に居たわけじゃないのよ…
……。私たちの分まで……。私たちが、叶えられなかった事、全部
…全部……。ソロ、貴方が叶えて…。—— 何人にも縛られず、
自由に、自分に素直に……。生きて……。お願い……。」「
「フィーナ……。！」」

いつまでも…見守ってるわ、ソロ。……。ありがとう……

そして、フィーナの姿は完全に消え去った。

光が薄れると同時に山間よりそれとは別の光……。太陽の光が差し
込んで来た。
朝が来たのだ。

村の様子も一変していた。建物はボロボロに朽ち果て、変色した血
が、べったりと残っている。泉は酸化し奇妙に泡立っており、そし
て村の中央には……。かつてソロが立てた墓が、幾つも並んでいた。

あの頑丈そうだった外壁も消えて無くなっている。……。あれは、
村人たちの願いでもあった幻の存在だったのだ。

物音が何一つ消えた静寂のなか、リロイたちは路地から通りへと出
た。

生の気配は無い。あの嫌な感じの空気も、もう感じられない。

村人は全員成仏したのだ。

「…………リロイ」

泉の方から、ソロが歩いて来る。やや沈んだ表情を浮かべているように思えたが、立ち止まるとそのまま笑みに変え。

「サンクス」

そう、一言呟いた。

リロイはどう答えて良いかわからず。やや唇を噛んだ後に笑みを浮かべ、ただ頷いて。

その後ろでミロッドが未だ信じられない表情で小さく呟いた。

「皆、成仏したみたいね…………。こんなところでずっと…………死を拒み続けていたなんて」

リロイが手のなかにあるグリーンオーブを見下ろす。

「…………あの名も知らない男は言ったよ。六つのオーブを集めし時、天空より大いなる力が得られる…………と」

「オーブを探すのか？」

「あの男の話が本当かどうかはわからない。ただ———このオーブの力だけは、本物だ。これだけの力を発揮する代物……………本当に、天空の力があるのかも知れない」

「どうやら次の目的が決まったみたいだね」

シシルの言葉にリロイが頷く。魔王を戦う為には、まだまだ自分たちだけでは戦力が足りない。力が得られるのなら、可能性が少しでもあるのなら、それに賭けてみたい。

「…………それにしても、これからどうしよう？……………船乗りさんたち、きつと待ちくたびれてるわ。飲み水も食料も……………」

「戻ってから考えよう。……………まずは心配しているだろうし報告だ。

……………テドンの事も……………」

ちらりとソロを見。一瞬躊躇ってから声を掛ける。

「もう…………良いのか？」

「…………ん？」

「船へ戻るつもりだけど……………」

リロイの気にかけるような声に一瞬目を丸くした後、「ばあかと、呟きながらソロがその大きな手でワシワシと乱暴にリロイの髪を撫で付ける。

驚いたように離れるリロイに、ニツと笑い。

「んな可愛い事抜かしてんじゃねーよ。…………俺あ平気だ。自分の気持ちにも、村の事も…………けじめはつけたしな。…………あいつらもようやく安らいで眠れるだろ」

「……………うん」

「行こうぜ。もう二度とこんな事が起こらねえようにな。その為の旅だろ？」

「そうだな……………っ」

…………初めは、ただの戦い好きの…………武器を求めて旅に付き合う男だと思っていた。

しかし必死に自分の生命を助けてくれた事、相談に乗ってくれた事。そして今度のテドンでのソロの過去。

…………リロイのなかで、ソロへの印象は初めよりも大分変わって来ていた。

丘の上に一つだけ離れたお墓。そこに根付いた白百合の花。
見守るように見送るように。朝露を煌かせながら…………静かにそよ風に揺れていた。

14話 勇者の苦悩

船に戻って来てから、リロイは一人悩んでいた。

あの件以来、どうもソロと話し辛い。……妙に苛々した感が消えないのだ。

テドンの件はあいつが悪いわけじゃない。悪いのは魔王軍だ、それは良くわかつているはずなのに。

ソロの前では素直になれない。……シシルやミロッドでは、そんな事無いのに。

自分の中に芽生えた感情が良くわからない。

そんな自分に嫌気がさしていた。――。

「……結局テドンでの補給は無理だったわけだし、問題は此処からランシールへの航行だな」

「――ポルトガへ一度引き返すという方法は？」

「いや、現地点じゃあランシールへ向かう方が道は近いな」

ソロの言葉にシシルが首を捻る。

「水も無し、食べ物も無し。……僕たちは構わないけど……」

「……」

地図を見つめたままだったリロイが顔を挙げ、尋ねる。

「……此処からランシールへ着くまでの大まかな日程を計算出来るか？」

「……嵐やモンスターとの遭遇が無かったら、……順調に進めば

約十日だな」

「なら、死ぬ範疇じゃない。このままランシールへ向かおう。釣竿が何本か残っていたはずだから、食料は釣りで魚介類を、水は海水から真水を精製すれば少しは蓄えられるはずだ」

ちらりとミロッドが代表として参加している船長を見遣る。

「あの。………大丈夫ですか？この決定で。………一番心配なのは、船乗りさんたちなんです。その。………お年を召した方も多いし………」

恐る恐る尋ねるミロッドに気分を害した様子も無く、船長が首を横へ振り。

「ああ、わしらとて無駄に船に乗ってるわけじゃねえ。大丈夫、体力はまだまだ若いもんには負けんよ。………それよりもお嬢ちゃんの方が心配だがね？」

「あたしは平気です。旅暮らし長かったから、これでも丈夫なんですよ？」

につこりと笑ったミロッドの、綻んだ花びらのような笑顔に船長も笑顔で返した。

「——— 決まりだな。それじゃあ、一度解散。飲み水だけは常に確保しておいてくれ」

カタンと席を立ち、リロイがそう告げる。

「船長、船をランシールへお願いする。………ソロ、シシル。二人とも操縦の方は教わったのか？」

「あ？——— ああ、俺たちはみっちり教わったぜ」

「うん、大体の対処法は教わったよ」

「じゃあ後はおれだけだな。」

ら舵取りを教えて貰えるか？」

「ああ、構わんよ」

——— 船長、時間が空いた

領き船長が先立って船室を出ていく。続いてリロイも軽く片手を挙げてから、そのまま船室を出て行き。

リーダーの去った船室内でソロが溜息を吐いた。

「頑張るな………あいつ。テドンを出てから、無理に躍起になっっているような感じがするぜ」

「あ、やつぱりそう思う？僕もそれ感じてたんだよ」

窓から外を見ていた視線を戻し、シシルもそれに同意する。

「………また熱出さないかしら？心配だわ。リロイすぐ溜め込んだんじやうから」

「………まあた、何か考え込んでんじやねーのか？うちの悩めるリーダーは」

「あ、それ上手い」

「もうっ、笑い事じゃないわよ。………此れから栄養がどんどん減っていくの、忘れないでよ？ふざけるとホントにリロイ倒れちゃうんだから」

炎が広がらない特殊な魔法布の上にメラを込めた石が置かれ。その上に海水の入った鍋を置きながら、ミロツドが二人を睨み付けた。

「さあ！シシルは船乗りさんと魚釣りに行ってちょうだい。ソロは船の修復手伝い………なんだけど、その前にリロイを元気つけてあげて？」

突然の別命にソロがぎょつとしたようにミロツドを見。

「あ！？俺かよ。………俺やかシシルやお前の方が良いんじゃないのか？」

「あら、駄目よ。だってシシルはリロイが好きだし、あたしは此れから真水精製しなきゃ」

「ミロツド……！」

さらりと言われシシルの顔が一気に真っ赤なる。そっぽを向き、ミロツドが悪戯そうに舌を見せて。

「ホントばれねんだから。だから、ソロお願い」

（ 本当、女の勘って怖いーなあ……… ）

「わかった、わかったよ。まったく……」
ボリボリと後頭部をかきながら、ソロはブツブツと船室の外へと歩いて行った。

「……………で、此处を、こうする。後は、此れを落とす事で走行を安定させる事が可能だ」

「思ったより単純作業なんだな。……………神経を使いそうだし。操舵を握りながらリロイが呟く。ニツと何処か嬉しそうに船長が笑

い。
「単純作業だ、という事を認識してそう思えるのなら大丈夫だ。単純作業だから安心……と思われるよりはな」

「リロイ、終わったかあ？」

階下から、ややのんびりした声色で呼ばれ。リロイはその方を見下ろした。言葉に船長が頷き。

「……………今終わった。何？ソロ」

「ちょっと俺とでえと、しねえ？」

「……………はあ！？」

ぶつすつ、と不機嫌100%のリロイを甲板へ連れ出し、……………否、連れ出したまではないもののこつからどうしたら良いものか、とソロは頬をかいた。

（ 魔物相手にするより難易度高いぜ、このオヒメサマはよ…………… ）

「で？この忙しいのに一体何の用だ？皆忙しいのわかってるんだろ？」

「ん？……………んー、まあ。お前も疲れてるんじゃないかと思ってよ。ちよつと息抜きに誘ったんだ」

リロイが小さく吐息を漏らす。眉間を指で抑えた後、困ったように顔を上げて。

「……………気持ちには有り難いけど。……………だけど今はそれどころじゃないだろう。次に魔物と遭遇してしまう前に、船の損傷を修復しておかないと」

「そりや俺たちでやるから。豪腕の船乗りさんもたくさん乗っているしな？…お前、働きすぎだ。少しは休めよ」

差し伸べたソロの手をリロイが反射的に払う。

「……………っ」

「おれはリーダーだ。率先して動かないでどうする」

「体を休めるのもリーダーの務めだ。いざって時に息切れしたら命取りになるぞ？……………少しでも仮眠しな。……………な？」

「おれはお前との責務の大きさが違うっ！」

叫ぶような声色にソロの眉が上がる。

「リロイ」

「…………… おれは勇者だ。…この船ではおれがリーダーだ。

一介の戦士であるお前にはわからないだろうけど、……………

おれは……………っ……………！！」

強い口調で言われソロが言葉を途切れさせる。その様子に、あつ、

とリロイが言い過ぎたと唇に手を当て。

「……………そうかよ」

「あ……………」

「わかりましたよ、勇者殿。」「一介の戦士如き」は大人しく作業へ戻りましょうや。……………勇者殿の責務の大きさは十二分にご理解させて頂きましたよ」

ふい、と歩き出すソロにリロイは片手を伸ばしたまま、ついに声を掛ける事が出来なかった。

————— あんな事、言うつもりなかったのに。

自分の責務に潰されかけ、つい口走ってしまった事をリロイは悔いた。

「ごめん」その一言も言えずに、ソロの姿が船室の影へ消える。

力なくへたり込んだそれを遠くマストの上で見つけたシシルが慌てて、駆け寄って来た。

————— 辺りを見回してもソロは居ない。

「……………リロイ、どうしたんだよ。具合、悪いのか？」

（つつく、ソロの奴……………頼んでおいたのにっ）

「なあ、リロ」————— ………………リロイ？」

覗き込んだシシルはその顔に驚きを隠せなかった。

呆然としているリロイの目からは細い涙が伝っていた。

「……………シシル……………」

ぎゅっと、その胸に顔を埋められ。どうしたらいいものか、と両手のやり場に困る。

「な、な、な……………何？何だよっ！？どうしたんだよっ！！」

「どうしよう、おれ……。ソロに……。ひどい事を……」

「……！？——リロイ……？」

「もう赦して貰えない、きつと……。あんな……言つつもり……なんて……っ……っ……」

微かなしゃくり上げる声色が漏れ。シシルは瞳を歪めたまま、その勇者と称するにはあまりに細い肩をぎゅっと抱き締めた。

……一緒に旅を始めてから、初めて見たリロイの涙。どんなに辛い時にも決して他人には弱い部分を見せなかったというのに。

「……ソロ……ごめん……」

——そうだ。見せなかったのだ。

押し殺して、隠していたのだ。この少女は……。

その夜、ソロとリロイが食事の席に現れる事は無かった。

甲板で一人漆黒の海を眺めていたソロのところへ……一人の人影が歩いて来る。

「ソロ」

「……ん？」

振り返ったソロの瞳に映ったのは……厳しい眼差しを向けているシシルの姿。険しい表情でソロを見詰めている。

「……どうした？」

「手合わせして欲しい」

「……は？」

冗談で言っているのではない、というのはわかつては、いた。しか

し、旅を始めてから一度もこんな事は無かったし……まして賢者
とはいえ、魔法タイプと剣士タイプの自分たちだ。どちらが勝つか
など、戦わずにもわかる事。それに二人には実践経験という大きな
壁があった。

「どうしてまた……」

「ソロが悪いわけじゃないのはわかっている。リロイが悪くないと
いうのも、わかっている。……だけれど、僕はあんたが赦せない
んだ。……ナナを泣かせた、あんたが」

「……」

泣いたのか。あ後に……？あいつが？

「どうして泣いたか、わからないだろうな。……あんたは、死ん
だ婚約者の事で頭が一杯だっただろうから」

「！……それとこれは関係ねえ話だろう」

ゆらりと向き直る二人の間に得も知れぬ緊張が走る。

「リロイが……どんな気持ちだったのか……」

シシルの手から氷の飛礫が放たれる。それをかわしながら、ソロが
それを睨み付け、剣を抜いた。

「なら、俺はどうすれば良い！？なあ、あの時、俺に何が出来たっ
てえんだ！？」

「うるさいっ！！」

「俺だって後悔してんだよっ！！」

微かな悲鳴が船室の方から響いた。騒ぎに気付いたミロッドだ。そ
の声に気付いたように船乗りたちが出て来て。リロイもまた剣を片
手に船室から飛び出して来る。

「……っ。何してるお前たちっ！！」

リロイの声にぴたりと、二人が留まった。散った火花はそのまま引火する事なく、収束する。

「……………どういう事だ、これは。……………何があつたんだ？」

咎めるといふよりも、慎重に尋ねるような声色。ソロが横を向き、シシルがリロイを見た。

「……………ソロと男の会話をしていただけだよ。騒がせて、ごめん」

「……………そゆ事」

「けんかじゃ、ないんだな？」

シシルが申し訳なさそうに頷いて。ようやくリロイの唇から安堵の吐息が漏れた。

ちらりとリロイがソロを見遣る。ソロは、リロイを見ようとしない。

「……………とにかく……………。二人とも……………もう休め。そろそろモンスターの発生地域に突入するはずだから……………休息をちゃんと……………」

絞り出されるような声色に、ちらりとソロがリロイを見遣った。

「……………そうだな。お前と一緒に寝てくれんなら休んでも良いぜ？
リロイ」

「え」

呟かれた言葉にリロイがきょとんとソロを見。シシルとミロッドが目丸くした。

「おい、ソロ……………っ……………」

「そうよっ。……………あ、えっと」

周りにいる船員の為にはつきり言えずに二人が黙り込む。???と浮かべるギャラリーを他所にソロが更に続けた。

彼等からしてみれば、「男同士寝て何が悪いのか」なのだから。

「お前の寝息が聞こえたら、俺も寝る。……………それで良いだろう？」

「ソロ……」

「無理すんな。疲れた時は我慢せずに休めよ。……俺は、それを伝えたかったんだ」

ポロ、と零れた涙に全員がぎよつとした。

「お、おい。リロイ……」

「ごめ、ん。ちよつと…涙腺が変……」

「リロイ」

張り詰めた糸が切れたのか、ソロの胸に顔を押し付け、リロイは声を殺して泣いた。

泣いて、泣いて。……そしてそのまま、まるで幼子のように泣き疲れて眠ってしまったその姿に、一同から柔らかな笑みに似たどよめきが漏れた。

「……しつかりしているといえども、まだまだ子供だからな……。あんたが一番年長者なんだから、ちゃんと気を配ってあげないとな」

目尻の涙を拭い、微かな寝息を立てるリロイを抱き上げ。ソロが苦笑を漏らす。そのままシシルへ視線を向け。

「……なあ」

「うつ……。わ、悪かったよ。……僕が悪かった」

「そうじゃねえ。……お前には感謝してるよ。これで、自分の気持ちにはしつかりとけじめがつけれた」

一件落着と、船員が船へ戻ろうとしている中、そう告げられシシルが立ち止まる。

「え？……けじ、め……？」

「此れからはライバルだな？————互い頑張ろうぜ、賢者さまよ」

笑い、リロイを抱えつつソロが船室へ消える。ぽかんと立ち尽くしているシシルの背を、ツン、とミロッドが突いた。

「強力なライバル出現ね。……と、いうか、ライバル育成してどうするのよ、シシルったら」

「う、嘘だろお！？だってあいつ、そんな気全然——　　お
い、ミロッドっ」

「あーあ、あたしも素敵な恋愛したいなあ。リロイが羨ましいわ」
パタンと立ち去ったミロッドの背を見送りながら、シシルは一人い
つまでもその場で固まっていた……………。

15話 勇気の試練

十二日後。船は無事にランシールの地へ船入りした。

船乗りたちは此処から更にポルトガの巡回船へ乗り換え、そこから別の地へ移動するとの事で。

ランシールでの最初の夜は船乗りたちとの最後の夜となり。一同酒場で酒盛りとなった。

老いも若きも楽しい一時を過ごし、そして。

翌朝、彼等はりロイたちに感謝の気持ちと共に見送られ、この地を後にした。

……全てが終われば自分たちも目的の為の行動に移る。とりあえずは、ランシールの街を散策する事となった。

「……でもさあ、オーブを探すって言うても……このグリーンオーブだって偶然の入手だろ？全部で六つって事は残り五つ……どうやって見つけ出そうっていうんだよ」

歩きながらシシルが尋ねる。

「ランシールには古きより存在する大きな神殿が存在する。その文献を調べて貰うってえ手はどうだ？」

「神殿？」

前方を歩いていたりロイが首だけ振り返った。

「ああ、街の南のドーヤの森、その先にあるでけえ神殿だ。行くかい？」

「……手掛かりがあるかも知れないなら、行ってみよう。ソロ、この街は来た事あるのか？」

「いやあ、話で聞いたただだからな、実際行ってみないと。まあ小さい街だし、そう迷いはしないだろう」

前方でソロとリロイが並んで話しているのを、後方でシシルとミロッドが眺めている。歩きながらミロッドがシシルの顔を覗き込んだ。
「……………何か急接近してるわねえ、あの二人。……………リロイは相変わらずだけど」

「ま、まだまだだよ。リロイにその気はないっばいしさっ」

「そうねえ。でも、時間の問題っぽいのは、あたしの気の所為？とりあえずギスギスした感じは抜けてるし」

「ぐ……………」

タツとシシルが前方に向かって駆け出し。二人の間に割り込んだ。驚いたように二人の視線がシシルに集中する。

「な、なあなあありロイ。今夜の宿とかってどうするんだ？」

「宿は取らないよ。船に戻って休むつもりだけど」

「何だお前、陸で寝たいって贅沢言うんじゃないだろうなあ？」

にやつと笑ったソロに額をうりうりとされ。シシルが両手をバタつかせた。

「そんなんじゃないってっ」

「宿屋の坊ちゃんだったしな」

やりとりにクスクスと笑っているリロイと、後ろで苦笑しているミロッド。

「……………邪魔しに入ったくせに手玉に取られてるわねえ……………。ソロの方が一枚も二枚も上手だね。さっすが年季入ってるだけあるかも」

女の子がこの手の嗜好きだというのは、勿論ミロッドも当てはまっていた。

トン、とリロイの背を叩き。振り返ったリロイに微笑む。

「折角久しぶりの陸地なんだもの。リロイも一杯お洒落しないとね？」

「えっ？」

「ほらっ、先に神殿行くんでしょ？もたもたしてないで早く行きましょ？」

「ま、待てミロツドっ。お洒落って何だ、お洒落って。先があるって、後もあるのか！？」

ぐいぐい押され、急かされるように。

やがて一行はガイアの大神殿へと辿り着いた。

神官長へのお目通しが許され、事情を説明するまでまた暫く時間が掛かったが。神官長は驚愕と共にその事実を速やかに受け取ってくれた。

「……………オルテガ殿の事は存じておりましたが、よもやその息子方が遺志を継ぎ旅立ったとは初耳でしたな。いやはや、お恥ずかしい」
「一部国家には伝令が入ってはいますが、事を大きくする事は望んでいないので。恐らくは噂程度にしか民に情報は流れていないと思われます」

「リロイ殿…と申しましたな。……………いや、昔より勇者の名を語る詐欺は後を絶ちませんが、貴方はオルテガ殿に良く似ておられます。一度、この神殿に訪れた事があったのですよ？」

「……………父さんが？」

「ええ。……………と、オーブの事を聞きたかったのですしたな」

カタン、と席を立ち。神官長は後ろ棚の引き出しを開けた。何やら羊皮紙の丸めたようなもの……………それが地図だと気付くまでそう時間は掛からなかったが、それを差し出され。

「レイラムランドの伝承に、古の神珠…オーブの話が存在します」
「レイラムランド？」

「かつて大地がまだ神の代の一つだった時、天空より光の巫女と不死鳥が降臨なさったと言う。不死鳥は世界に生命を与え、そこより人間や動植物が生まれた。万物に生命を吹き込んだ後、不死鳥は卵

へと還り、巫女はその卵を外界から封じる為に六色のオーブに乗せて世界へ散らせたという。……伝承には、今も巫女が不死鳥の卵を護り、極寒の地レイアムランドの雪の結界の中で眠りにについているとされるが……」

「……不死鳥……」

御伽噺ではないのか、と一瞬リロイは思った。しかし、現にグリーンオーブはこの世界に存在した。

死者の魂を実体化させるほどの魔力を秘めた宝珠。……確かにこれを贗作というにはあまりにも疑いが残り過ぎる。

四人の前に広げられた羊皮紙の地図には、数箇所印が付けられていた。

「……誰がどのような手を使い残した物かは知りませんが、オーブの在処を記したものです」

「！？」

「この地図は数百年……いえ、それ以前からかも知れません。始祖司教の言いつけにより誰の目にも触れさせる事は許されませんでした……ですが、世界がこうやって悲鳴をあげている以上、時は来たれたのかも知れません」

確かに、テドンにも点が記されている。

テドン、ネクロゴンドの山脈、それと……。

「あれ？ここって……」

印が示しているのは、何とこのランシールの街だ。

「ちよつと待つて。ランシールにオーブがあるんですか！？」

ミロッドが驚いた声色を挙げ、それに神官長が頷き答える。

「……確かに此処にも、オーブは奉られております。……ただし、そこは……かなりの危険を伴う地ですが」

「この場所じゃないんですか？」

言葉のニュアンスに何かを感じたようにシルが尋ね。

「地球のへそはご存知ですか？」

「このランシール近くにある古代遺跡だな」

思い出し呟くソロに全員が視線を向けて。

「そうです。………実はこの神殿の最下より、地球のへその最深部へ続く洞窟へ向かう事が出来ます。オーブはその先に眠っていると
言われておりますが………ただ………」

「何か問題でも？」

「はい。………遺跡の試練というものがございます。遺跡に踏み入れられるのは、唯一人と定められていますので」

「———一人!?」

「勿論、洞窟、遺跡は魔物の巣窟と化しております。一人で最下層まで赴き、オーブを手に戻るのは………かなりの覚悟が必要と思いますが」

如何しますか?という言葉に四人が視線を交わした。

「………戦いの経験が一番あるのは俺だがな。魔法が使えねえ」

「僕なら広範囲魔法と回復が使えるけど………」

「駄目よ、マホカントという魔法が存在してるの、シル知ってるでしょ?魔法系が単独行動なんてリスクが高すぎるわ」

「なら、おれが行くよ。イオラとかホイミなら使えるし、剣もソロには負けるけど、まあ何とかかなりそうだし」

リロイの言葉に三人が見遣る。

「………バランス的には大丈夫だろうが………だがなあ」

ソロの言葉に、シルの脳裏にもあの誘いの洞窟での惨状が思い出される。腕を信用してないわけじゃない。寧ろ、ソロよりも素早いリロイの方が、時に的確な行動に出る事も最近じゃままあるほどだ。

飛躍的に成長している事は認める、それでも……。

「……………」

「では、リロイ殿が遺跡へ向かわれるのですな？」

「ちょ、ちよつと待てって」

「待つ必要なんかないさ。……………神官長、遺跡への道を示して貰いたい」

ソロの言葉を制し、リロイが独断で押し切る。頷き歩き出す神官長の後を続きながら、ソロが片眉を上げた。

「おゝい、リロイ」

「……………勝手に決めてごめん。でも、やってみたいんだ。……………それに、大丈夫だよ。もう手傷を負うような真似はしない」

「……………何があっても誰も助けに入れないんだぞ？」

「大丈夫だよ。おれを信じてくれ」

「……………遺跡には不可思議な魔力が残留しており、時空系……………リレミト等の脱出魔法は一切使えません。どうか無事にお戻り下さりますよう」

「わかった。元々リレミトは使えないから問題無いよ」

洞窟への入口。そこには薄緑色の結界が張られていた。触れても何ともない。……………しかし、リロイ一人がそこを潜り抜けた瞬間、結界は堅固な魔法水晶の壁となってしまった。

「試練、かあ」

賢者の試練を思い出し、思わずシシルの口から言葉が零れる。それを聞きソロが目を細めた。

「恐らく試されるのは実力と……………勇氣だろう。信じて待とうや。

あいつが…戻って来るのをよ」

試してみたいのだ。

勇氣ある者 ————— 勇者として、自分がふさわしい存在なの

か、否か――。
「しくじるなよ、リロイ」

洞窟の奥へ消えたりロイを見届けた後、三人は戻って来るまで……
…その場で待ち続けた。

――
引き返せ。

壁一面に彫られた貌。人の深層意識とも、内面的人格ともいえるその数々の表情は久々の来訪者を拒んだ。
抜かれた剣は握られたままだ。……此処まで来るのに倒したモンスターは数え切れない。

（……シシルやミロッドが来なくて正解だな……）

確かに魔法は剣に勝る絶大な効果を発揮する。しかし、こう数が重なる最終的に勝敗を決するのは、スタミナだ。

――
引き返せ。

また、声が聞こえた。どういう仕組みなのだろう。……………そもそも、これを作ったのは、古代人なのか、それとも天空の民なのか。

……………やはり、オーブを守る為の仕掛けなのだろうか。

「……………？」

ひたすらに声を見殺し歩いていくと、通路の先に小部屋が見えた。
……………慎重にその金具を引いてみると……………鍵が掛かっていない。

「……………誰です」

ゆっくりと扉を開けようとしたその時、中から女性の声が響いた。
「……………」

とりあえずは無視をして、扉を全部開ける。すると、小さな祭壇の上に大きな宝箱が置いてあり……………その上に、昆虫羽の生えた小さな女の子が座っている。

モンスター……………という感じではない。とりあえず剣を納め、改めて彼女を見遣る。白く長い髪に白い肌、琥珀色の瞳を持つその少女は何処か人外じみた風体で。あどけない表情で、じつと此方を見詰めている。

「君は……………ここで何をしている？」

出来るだけ、刺激しない声色でリロイが尋ねた。

「……………私は守人。この地でオーブを護りし存在」

（……………やはり）

「おれは、オーブを求めて此処まで来た」

「何故にオーブを求めるのです？」

一歩室内へ踏み込み、リロイはその光景に絶句した。祭壇を中心に無数の人骨が散らばっている。……………オーブを求めた者たちであるうか、その効力を知ってか知らずか、或いは金の為か、求め、彼女に認められなかった者の……………？

「……………不死鳥を蘇らせる為だ」

「彼の存在を蘇らせ何とします？」

「……………君がずっとこの地にいたのなら知らないだろうけれど、世界は今、魔王バラモスが率いる軍により滅亡への道を歩んでいる。……………おれたちはそれを阻止する為に、不死鳥の力を借りたい」

「……………汝が名を答えよ」

少女が名を求め、改めてリロイを見遣った。透き通るような眼差し。全てを、見透かされそうな。

「リロイ」

「……………真なる名を答えよ。それはそなたの本当の名ではないはずです」

何もかも知っているのか？リロイは一瞬眉を寄せた後に小さく息を飲み。

「……………ナナ」

「……………精霊ルビスに祝福されし娘よ。……………我はルビスさまの命によりこの悠久ともいえる時のなか、貴方だけを待っていました」

「ル……………ビス……………？」

聞いた事があるような、ないような。……………不思議な響きのその名に、リロイは目を瞬かせた。

「精霊ルビス。大地と万物の生命を司る真なる精霊姫の名。……………」

貴方は既にその御方に会っている筈」

「……………」

「我が使命は地上の光を守る事。……………総じてはそれを成し遂げようとせん貴方たちの手伝いをする事。……………さあ、創世よ

り預けられしオーブ。今こそ人の手に託しましょう。受け取りなさい、ナナよ」

ふわりと、少女の手から光が生じ。それが見る見るうちに青い宝珠へ変貌する。……………ブルーオーブだ。

リロイの手にそれが収まった瞬間、光は顕われた時と同じ。唐突に

消え去った。

「ありが——」

ありがとう、そう言おうと顔を挙げたその時には、既に少女の姿は無くなっていた。

眼前に置き去りにされた宝箱を慎重に開けてみると、そこには。

古代文様で堅くシールドが施されていた鎧……。大地の鎧が埃一つ浴びた様子なく、収まっていた。

「——遅いつ——」

Uターンで同じだけの距離を歩いて戻って来たリロイに待っていた最初の一言は全員からのその一言だった。

「あは、は……。——あれから、どれだけの時間が経つてたんだ……。？」

「半日強。此処じゃわからないけど神殿の外出たら実感出来るわよ」。もうそろそろ明け方ですもの」

正直、そこまで掛かっているという感じはなかったただけに驚きは隠せない。

お腹も空かなかったし……。

寧ろ——あの場では時間が止まっていたのかも知れない。

「それで、成果は？」

シシルの言葉に、リロイが僅かな笑みと共に薄青く輝く宝珠を取り出す。光の色こそ違い、グリーンオーブと全く同じものだ。

「ブルーオーブか。……何にしろ、良かった」

「番人が話のわかる人で助かったよ」

リロイの返した返答に、ソロがその額を指先で小突く。

「馬鹿野郎。心配してたのはお前の事だよ」

「……………」

「……………さて、オヒメサマもお疲れだし戻って宿で寝ようや。俺もう眠いわ」

「オヒメサマ言っな！」と、怒りながら歩き出すソ口とリ口イを背後につくりとシシルが肩を落とした。

「……………あゝらら」

「ま、まだまだだっ」

こうしてランシールでの長い一日は惰眠という形で終わりを告げる事となる。

16話 日出国の美姫

テドンで見つけたグリーンオーブ。

ランシールで見つけたブルーオーブ。

そして、幸か不幸か航海中に襲って来た海賊が所持していたレッドオーブ。

探索を開始してから一ヶ月。偶然か必然か、オーブは四人に集まり始めていた。

まるで、何かに導かれるように……………。

地図にあるポイントは後一つ。ネクロゴンド……………魔王拠点のすぐ傍の山脈。しかし、それでも後二つ足りなかった。

「はあ……………」

甲板に座り込み、地図を眺めながら。リロイは大きな溜息を漏らした。始めに地図に記してあったポイントは三個所。半分だ。

残りはどうやっても自力で探し出さないとならない。

何処にあるかわからない二つのオーブと、敵の本拠地へ乗り込む覚悟で向かわないと手に入らない一つ。……………どちらも気が遠くなりそうだ。

頭痛を覚えてリロイが眉を寄せる。

「——リロイ」

食事の後片付けを終えたシルが、甲板へ近づいて来る。

「シル。……どうした？」

「いや、する事終わったからさ。僕じゃ相談相手にならない？」

「……いや、助かるよ。……残りのオーブ、その行方を考えていたんだけど。おれじゃ流石に知らない事が多すぎるから、さ。どうせ後で皆に相談しようと思ってたところだ」

広げた地図、その傍にリロイとシルが座り込む。

「この前倒した海賊の事もあるしさ、人の手に渡ってる可能性も否定出来ないんじゃない？」

「確かに……それもあるけど、おれが危惧するのは既に魔王軍に渡っている可能性もあるんじゃないか、という事なんだ」

「——伝承通りの力があるのなら、魔王も欲してるかも知れないもんね」

木炭のペンを、するつと地図上走らせながらリロイがその先を見つめる。

「……ジパング。女王ヒミコが治める地。東方独特の文化を持ち、ヒミコは過去、現在、そして未来までも読むと言われる。」

「ジパング。……此处で、女王にオーブの事を尋ねてみるつもりだ」

「一種の予言者だろ？……大丈夫かなあ」

「何もしないよりはマシだろう。本当に女王が過去を読む力があるのなら、オーブの手掛かりが掴めるはずだ。……それより。やたら静かだけど……ソロとミロッドは？」

思い出したように呟くりロイにシルがぎくりとした表情を浮かべる。

「あ——ああ、あいつらは……食った後、寝ちまった」

「え？寝た？」

「疲れてたんだろ？少しそっとしておいてやろうぜ。な？」

リロイは食事後すぐ甲板へ出たので知らなかったが。
その後、シシルが二人にラリホーを施したという裏があったのだ。

……だって二人つきりになれる機会って少ないし。

シシル16歳、初めてソロを出し抜いた瞬間だった。

「……食事してすぐ眠るほど疲れさせてしまったのか。……まあ、良い。丁度良い機会だしシシルも休んで来て良いぞ?」

「あ……え!?!」

「此処はおれだけで良い。……大丈夫だ、何かあった時の対処法はわかるしな」

慌ててシシルが立ち上がる。そんなつもりで魔法を使ったわけじゃなかったからだ。しかしそんな事露知らず、リロイは笑顔でシシルを見詰め。

「たまにはのんびりするのも良いだろう?」

「い、いや。僕もリロイと見張り付き合っよ」

「遠慮するな。シシルの回復魔法はおれたちの生命線みたいなものだし。……しっかり休んで魔法力を回復させておけよ?」

につこりとかわされ、リロイが船灯台へ向かい去っていつてしまった。

—— ぽかんと立ち尽くすシシルを一人残して。

しかも、シシルの悪夢はそれだけで終わらなかった……。

「シ・シ・ルちゃん、あたしたちにラリホー掛けたでしょっ。白状なさいっ」

「俺を出し抜こうとするとは良い度胸だなあ？ んん？」
追加効果として、目を覚ました二人に責められる事となったのだった。

そんなこんなで一行は中央フェリニム海を抜け東の地、ジパングへ…… 着くはずだったのだが、その国には何と大型船が着陸出来る船着場が存在しなかった。

その為、丘一つ越えた砂浜海岸へ錨を下ろし、そこから一山越える形で向かったのだが……。

疲れた一行を迎えたのは、とても良い歓迎とは思えない光景だった。

「あー、ガイジンだあ」

「みてみて、あにうえ。あのガイジンへんなふく」

歩く先々、人々が好奇な眼差しで指まで丁寧に指して来る。

「何だよっ、あいつらの方が変な髪形とか服とか着てるじゃねーかっ」

「落ち着けよ、シシル。言ったる？後進国だって。俺たちが珍しいんだよ」

顔を真っ赤にして憤慨するシシルの髪をポンポンと撫でながら、ソロが爆笑する。

「あたしたちパンダになったみたいね」

「—— すまない。女王ヒミコの城はどちらへ行けば良いか教えてくれないか？」

そんな二人を無視し、リロイが傍で見物している男性へ声を掛ける。

「しろ？しろは知らないが、お社ならある。お前たち、ヒミコさまのお知り合いか？」

「おやしろ？……いや、女王とは顔見知りではない。ただ、用件があつて会いたいだけだ」

「そうか。お社はこの先ずつとだ。ずつとずつと歩いて行くと鳥居が見えて来る。後は門番に聞くと良い」

「感謝する」

ぺこりと頭を下げた後、リロイがまだ子供たちに馬鹿にされている三人を見遣った。

「ほら、女王の居住地がわかったぞ」

「お、おう」

金色の草地の床に覆われた美しい木造の建造物。そこに女王を名乗る女性は存在した。

艶やかな長く美しい黒髪とルビーのような真紅の瞳。透き通るような肌を持つその女性は神秘的な雰囲気を漂わせたまま、一行を迎えた。

「……………わらわがヒミコじゃ。番兵より話は聞いておる……………南方は遠きアリアハンからいらしたそうじゃが。長き船旅、さぞかし疲れた事じゃろう」

「お初にお目に掛かります。私は……………」

「存じておる。魔王軍に敗れ散ったアリアハンの英雄オルテガの子息であろう。千里の眼を持つわらわが何も知らぬと思つてか？」

「ほほほほ、と小さく笑い声を立てるヒミコ。しかし次の瞬間その眼差しはキツと鋭いものへ変わり、四人を睨み付けた。あまりの変容に全員がぎよつとする。」

「……………わらわはの、例え救世使であれ外人は好かぬ。そなたらに教える事は何も無い……………。早々に、この国より立ち去るが良い」

「え？」

「ちよ、ちよつとそんな言い方……………」

「ミロッド。……………わかりました」

腰を浮かせ掛けたミロッドを制し、リロイが頭を垂れ。残り三人は黙ったままそれに従った。

その様子に満足気にヒミコが笑みを浮かべ。始まりと同じ、ゆつたりとした声色で。

「良い心掛けじゃ。……………さあ、客人のお帰りじゃ、丁重に、社の外へ案内せい」

「……………僕、この国ぜってえ好きにならね……………」

「あたしも。何よあれ。美人を鼻にかけたみたいで感じ悪いったら
ありやしないわっ」

ぶんぶんと頬を膨らます二人を他所に、リロイは未だ社を見つめて
いた。それに気付いたソロが、そつと声を掛け。

「……………どうすんだ？このまま国を離れるのか？」

「いや。……………何か引つ掛かるんだ。少し調べてみたい」

「マジかよっ」

げんなりとシルが眉を寄せる。

「何か、は、わからないんだ。……………だけど、嫌な感じがどうも離
れない。あの女王……………何か、隠してる」

「何か？」

——— その時、道の外れで女性の悲鳴が聞こえ。反射的にリ
ロイとソロが駆け出した。

見ると兵が若い女性を引き立てようとしている。それを引き留めよ
うと必死に縋る、祖母であろう老婆の姿が、そこにあった。

「……………罪人か？」

「いや、でも……………何か……………」

「…………… お願いであります、弥生はっ、弥生はまだ子供なんですっ
「ええい、ヒミコさまの命だ！邪魔立てするのなら斬り捨てるぞっ
！！」

「婆さま……………」

「生贄ならば私がっ。…………… どうか、どうか弥生だけは…………… っ、
お助けを……………」

「ならぬ！ヒミコさまの命は絶対だ！ヒミコさまは今期の火守の護
女として弥生を選ばれたのだ。光栄と思えっ！」

ガツと縋る老婆が蹴り飛ばされる。――― しかしその体は、

ソロの大きな手で受け止められた。

途端、兵たちから動揺めいた声が上がる。

「何者だ！」

道を阻むようにリロイが兵たちを睨み付け。

「生贄とは何の事だ？彼女は嫌がっているじゃないか」

「い、異国の民の分際で……………」

激昂しかかった兵を片手で制しながら、恐らくは上司であろう、兵
の男がリロイを見つめる。

「彼女はヒミコさまの下へ連れていく。邪魔立てするのなら、我々
はそなたらを女王に反逆した者と見なして引っ立てねばならぬが、
如何する」

「……………」

「弥生は名誉ある火守の責を与えられたのだ。それを全うするのが
この者の役目。…………… そしてこれがこの国の方式だ。さあ、生きて
国を出たければ、そこを退け」

剣に手を掛けかかったリロイのそれをソロが抑える。

「な……………」

「ソロ？」

見守っていたシシルとミロッドも信じられない様子で、ソロの行為
を見つめた。

やがて邪魔をしない事を確認したのか、泣き叫ぶ少女を連れて、兵

士たちは社の方へ去っていつてしまった。バツとソロの手をリロイが振り解く。そのまま噛み付くような勢いで。

「ソロ……っ、何で止めるっ」

「そうよ、あの娘……殺されちゃうわよ!？」

「あーあー……落ち着けよお前等。どのみち今、あの娘を奪還したところで、殺されるのが娘から兵士に代わるだけだろ」
ポンポンと落ち着かせるようにソロがリロイの頭を撫でる。

「キーワードは二つだ。」 生贄 ” ” 儀式 ” …… 此处から導き出されるものは何だ?リロイ」

「—— ……後をつけて……儀式の場から彼女を助け出す……?」

「良く出来ました。……まあ、それが一番最良だな」

「……あの」

ソロの脇で震えていた老婆が、震えた声を漏らした。それに気付いてソロが苦笑する。

「ああ、すまねえ。怪我はなかったかい?ばーちゃん」

「……儀式を邪魔するのは……恐らく無理かと思われます」

「……火守というのは何なんだ?」

「火守の儀は……一年に一度、このジパングの地を守るヤマタノオロチさまに若い娘の生贄を捧げるというものです。邪魔をするという事はオロチさまに刃を向けるという事……。土地神さまがお怒りになれば……この国は海の底へ沈んでしまうでしょう。……」

「……どうか——どうか、この事はお忘れになられ。急ぎ国から離れて下され」

「でも。……おばあちゃんのお孫さんなんでしょう?どうして?殺されてしまうかも知れないのに」

堪えきれずに横からミロッドが老婆の肩に触れる。その透き通るよ

うな小さな手に、節くれた手を重ね合わせ、老婆が微笑んだ。

「……………それがジパングという国なのですよ。……………さあ、馬鹿な事は考えなさらず……………お帰りなされ。……………ね？」

これが、ジパング？

—— 女王が生死を決める、この国が。……………それを人々は享受しているのか？

「……………認めない」

「……………リロイ」

「儀式を止める。……………ソロたちがやらないなら、おれだけでもやる！」

そんな生命を左右する権利など、誰にも存在なんかしない。人であれ、魔物であれ、どんな理由であれ。

偽善と言われても構わない。
だがリロイにはどうしても

—— それが許せなかった。

17話 魔都陥落

櫓に乗った少女がゆっくりと祝詞に合わせて村の裏門より外へ運ばれてゆく。

少女は……巫女装束を着せられた弥生だ。薬を盛られているのか、或いは魔法の類を掛けられているのか、横たえられたまま目を開く様子は見られない。

「あのまま火守の儀を行う洞窟とやらに運び込むのか」

やや離れたところから見ていたシシルがぼつりと呟く。並んで一緒に見ていたミロッドがその先を指差した。

「あ、見て。あそこじゃない？……ほら、あの洞窟だわ」

「——どうする？」

「どうするって……こうなったら弥生嬢を救いださねえと、なあ？放っておくわけにもいかないだろ」

ソロが顎でしゃくる先には、リロイが険しい表情で櫓を見つめている。

洞窟に一行が消えたのを見送った後、徐にリロイが立ち上がった。振り返るうともせず歩き出すその姿にソロが苦笑を浮かべて。文句も無くリロイの後に続き。

「おら、シシル。もたもたしてると置いてくぞ」

「わかってるって、待てよ。……ほら、ミロッド。行こ」

「はあい」

洞窟に一步足を踏み入れた一行は、その場で言葉を失った。

割れ目より吹き出る溶岩。それが流れ込み作り上げた炎の川。……

… 空気まで焼き尽くされそうな熱気に呼吸すら困難になる。

まさに、灼熱地獄だった。

「火山帯にある国だから、まさかなという感があつたが……。此処まで強烈だとは」

参った、という表情でソロが額の汗を拭い。

「……暑い」

「… 溶けそう……」

一步先まで陽炎で揺れている始末だ。こんなところ長時間居れば、生命の危険もありえる。

「連中は？」

「この先の道を歩いてるな。……見るよ。藁が落ちてら」

「ホントだ。んじゃこの後についてけば良いんだな。」

？ ……おい、ミロッド。大丈夫か？」

ふと、シシルが後方を歩いていたはずのミロッドに声を掛ける。彼女はいつの間にかしゃがみこんでいた。両肩を抑え、その表情は俯かれて見て取れない。

シシルの言葉にリロイとソロも足を留める。

「——ミロッド？ どうした」

「気分悪いのか？」

「……あ……」

肩を掴まれ、何か戸惑ったような視線を上げるミロッド。その焦点が合っていないように見て取れて、シシルは訝しげにその眉を寄せた。そして肩を軽く揺すり、もう一度シシルが声を掛ける。

「ミロッド？ 一体どうし」

「——シシル！！」

「嫌あ！！」

リロイがシシルを引き摺り倒したのと、ミロッドが悲鳴を上げてメ

ラミを放ったのはほぼ同時だった。

大火球がシルの髪を掠め、その後ろに立っていたソロの隣に炸裂する。

「うわあ!？」

「何だあ!？」

「ミロッド!！」

ミロッドは目を見開いたまま震えていた。杖を三人に向けたまま、怯えるように見つめている。

「ミロッド、どうしたんだよ。危ないじゃないかっ」

「ちよつと待てっ、シルっ。近付くな。」

何か様子

が……………!！」

明らかに正気を失っている。

もしかしたら、自分たちがわかっていないのではないか。

灼熱の空気で意識が飛んだとは思えないほどの豹変ぶりに三人は戸惑いを隠せなかった。

「いきなりどうしたんだよ……………!おい、落ち着け……………どわあ!？」

ドカンッ!

再び炸裂する魔法。

熱波で増幅された炎球が凄まじい衝撃音を立てて岩盤に激突する。

このままじゃ先に行く兵士たちに気付かれかねない。

「————— 気絶させる」

舌打ちと共に剣を仕舞い駆け出したリロイ。

それを見守っていたシルが、ふと、ミロッドの後方の岩影で赤いものが蠢いているのを見付けた。

醜悪な老人のような顔を持つ、外見に似合わず大きな杖を持った土着人……………。鬼面道師だ。

「————— !わかった!リロイ、リロイストップ!！」

気付いたように叫んだシシルにリロイが振り返る。立ち止まった瞬間、再びメラミが弾け。反転するように二人のところへ戻るリロイ。「どうした」

「あれ。あの奥にいる奴だ！あいつがミロツドを」

指差され、びくつと鬼面道師が先ほどまでの余裕顔を引き攣らせる。短い足であせあせと逃げ出そうとするが……。

原因さえわかってしまえばどうって事は無い。瞬間的にソロが駆け出し、一気にその距離を縮める。

「———— りゃあ！！！」

鋭い一断がその背後を襲い。「ぴぎいいいっ！！」と耳障りな甲高い鳴き声と共に真つ二つになった鬼面導師だったそれが、ドボンと水音を立てて溶岩の川へ落ちた。

モンスターが絶命すれば、まるで操り糸から解き放たれたようにミロツドが杖を取り落とし。その場にへたり込む。

まだ朦朧としているが、精神汚染の影響は無いようだ。

「————………？え？………何？」

冷水を浴びたようにきょとんとするその表情に三人の口から深い安堵に似た溜息が漏れる。

「…あのモンスター知ってる。ガルナの塔で読んだ本に載ってたんだ。熱帯に生息する鬼面道師…。メダパニという精神混乱の魔法を使うんだ」

「まさかとは思ってたが、やっぱり此处もモンスターが蔓延ってたかったか……。油断出来ねえな」

「ミロツド、立てる？」

リロイに手を貸され、ミロツドが頷きながら立ち上がる。

——— と、その時。

地を割くような唸り声が響いた。……………どつやらの下の階だ。

「……………今のつて」

「……………聞こえた？」

「ああ……………」

オオオオオオ……………！！！！

一鳴一鳴する度に周囲の岩盤が大きく揺れる。ビリビリと、その圧迫感が伝わって来るほどだ。

「何だかいやゝな、予感すんだけど、僕」

「急ぐぞ。弥生が危ない」

一行はそのまま階下へ続く道を駆け抜けた。

「ひつ、あつ……………た、助け……………」
ぎゃあああああ

ああ……………っ！！」

階段を降りた四人に聞こえた第一声は、断末魔とも思える悲鳴だっ

た。

全員感じた事も無い圧迫感に表情を強張らせつつ、現場へ迷う事なく急行する。

櫓が燃えていた。引き倒された拍子に転がり落ちたのか、幸い弥生は櫓の火災に巻き込まれる事もなく、少し離れたところに倒れている。

しかし一行が目を奪われたのは、もっと悲惨な光景だった。

三人の、櫓を此処まで運んでいた兵であろう。一人は頭部を食い潰され、もう一人はその強靱な爪に貫かれ、最後の一人は……先ほどの悲鳴の主であろう、大顎の牙間に挟まれたまま絶命をしている。十本の巨大な首を持つ龍。八又大蛇……ヤマトノオロチだ。その真紅の瞳は爛々と、新しい獲物を祝福するかのように溶岩から一步、一步と確実に這い出て来る。

「で、でけえっ——こいつが……」

スカイドラゴンなど、比でもないその姿に、思わずシシルの口から言葉が零れた。

無言でソロとリロイが剣を抜き、ミロッドが後ろに下がる。

「シシルは氷結魔法でおれたちを援護！ミロッドは弥生を安全なところへ。その後援護に回ってくれ」

「了解！！」

こういう時の判断の早さは流石に恐れ入る。ソロとリロイが十本の巨顎と対峙する間にミロッドが弥生の下に駆けける。それに気付いた一本が又ウ、と二人の方へ首を伸ばすが、それもまた、シシルのヒヤダルコに阻まれた。

「あいつらには手出しさせないぞ！！こつちだ！」

「シシル！」

「……………わかってるっ！！……………バイキルト！！！」

ソロとリロイの持つ刃が魔法を浴び、青く輝きだす。にやりと笑い、次の瞬間にソロが一本を力任せに切断した。

ギャオオオオッ！！

「……………う……………。此处は？……………ひっ！！！」

目覚めた弥生だが、すぐさま眼前の惨状にその表情を強張らせる。ミロッドがそつとその肩に手を置き、安堵させるように。

「大丈夫。あたしたちに任せて、弥生さんは早くこつちへ」

「貴方、たちは……………？……………あ……………あの時の……………！！！」

「お節介救世使一行よ。……………さあ、炎の届かないところへ早く。……………」

……………あたしは皆のところに戻らないと

元気良く立ち上がったミロッドの手を弥生が掴んだ。……………震える手で必死に縋っている。

「弥生さん」

「お願い、怖いのに……………行かないで。一人にしないで……………っ……………」

……………」

「弥生さん……………。……………あたしは皆を助けなきゃ。ごめんね。……………でも、絶対守るから。あたしたちを信じて……………じっ……………」

……………としてて」

弥生の指をそつと離してから、ミロッドは微笑を浮かべて。だが、その表情もすぐ引き締まり、炎に包まれる戦場へ駆け戻っていった。

どうして？

あんな小さな子まで、どうして戦っているの？

死ぬかも知れない、他所の国の事なのに――。

「ミロッド！」

「遅れてごめん！弥生さんは大丈夫よ！」

シシルが眼前、大蛇の首に攻撃を仕掛ける二人を見上げ。それを見留めたミロッドが一つ頷きを見せた。

「シシル、ヒヤダイン使える？」

「ヒヤダルコなら」

「ヒヤダルコが使えるなら応用次第よ。あたしに合わせて詠唱してシシルならきつと出来るわ」

「ぐあっ！！」

炎に包まれて首からソロが落下する。溶岩の海ぎりぎりの台地に落ち、ぐぐつと体を擡げ。

「ソロ！！」

「平気だ！！他人より自分の事考えてろ！！……………半端じゃないぞ、こいつは……………っ！！」

確かに、斬っても斬っても、弱る兆しは見えて来ない。

魔法隊と分断されている所為で、リロイの魔法力もそろそろ底を尽き始めていた。

「……………くそっ……………何て生命力だ」

「……………！？リロイ！！」

「！？」

一瞬、疲労が生み出したその隙を突いたように大蛇の鎌首がリロイ

を弾き飛ばす。先ほどのソロとは軌道は違い、真っ直ぐに、その軽い体は放物線を描いて溶岩の海へ向かって放られる。

「リロイ——　　っ……！」

ゴボゴボと湧き上がる熱源に落ちる、そう思った瞬間。

「「ヒヤダイーン！」」

別岸より魔法の氷の嵐が巻き上がり。一瞬にしてリロイの落下地点付近の溶岩を凍らせた。

それを踏み台に、リロイは台地へ戻る事に成功したが、次の瞬間には再び氷は蒸発し、すぐさま周囲は溶岩に埋もれてしまった。

「……　はあ、はあ……」

「驚かせるなよ、馬鹿野郎」

息切らし戻って来たリロイに、ソロが安堵の息を漏らす。……シルもミロッドも駆けて来た、が。これで戦局が変わったわけではなかった。

「……　きりがねえな、これじゃ何れ押し切られる」

その時。四人は信じられない声を聞いた。
聞き覚えのある声色。

ほほほ……。折角そなたの父と同じ末路を味合わせてやろう
と思つたのに。真、残念じゃのう……

確かに、大蛇の中央首から聞こえたその声色は。

「……　女王！？」

「ヒミコ！？」

如何にも。わらわはヒミコ……そして、魔王軍四天王は一人……
…八又大蛇じゃ。食事の邪魔をされたのは不本意じゃったが、こう

してオルテガの血筋を討ち取れる機会に巡りあえたからのう……。そなたらの魂、我が王へ献上してくれるわ

「我が王……魔王バラモスかつ!!」

叫んだリロイに笑い声が大きくなる。答えは無い。ただ熱波に反響する声色が、まるで呪詛の詩のように四人を慄かせる。

「ヒミコ!!」

久方ぶりに極上の獲物に有り付ける……。さあ、来よ。如何にそなたらの行動が愚かなものだったか、示してくれる

再び襲い掛かる大蛇。しかしリロイは動かなかった。真っ直ぐに、大蛇を、否、ヒミコの真紅の双眼を見つめ。

「リロイ!? 避ける馬鹿!!」

しかしその瞬間、リロイは跳躍をしていた。大蛇の中央首に降り立ち。……一気にその刃を突き立てる!!

大蛇の額に埋まっていた黒い水晶のような核ごと……刃は眉間を貫き。

ぎゃあああああつ!?

激しくのたうつ首の上で、リロイは剣を握んだまま俯き、堪えていた。—— 此処から落ちれば、今度こそ燃え尽きる。

ぎり、と柄を握る手に汗が滲んだ。

「—— おれたちは絶対に負けはしない。人間を食い物としか……生き物とさえ思っていない奴等になど、絶対に負けはしない!! 間違つてなんかいないんだつ!!」

お、おのれ小童……っ!! 振り落としてくれるわっ!!

激痛に耐え、ぶんつと大きく、大蛇がその鎌首を振り上げた瞬間。リロイの口から一つの呪文の詠唱が零れた。

ま、まさかそれは……! —— やめろ……!!

はっとするが時遅く、狼狽した大蛇の叫びだけが響き ——

。

「———— ライデイン！！！」

天空から地上へ。地上から、この地下奥深くまで。叫んだ天空魔法に従うように光の蛇……強力な大雷がリロイの剣を伝い、大蛇の体内へ流れ込む。

ぎゃああああああああつ！！！！

例えば溶岩を物ともしない強靱な皮膚を持つとともに、体内まではそうとは限らない。一瞬にして全身を裁きの雷で焼かれた大蛇は、轟音と共にその場に崩れ落ちた。

そしてその首から、リロイが落ちる。

「リロイ！！！」

叫びと共にソロが駆け出し、危うく溶岩へ落ち掛けたリロイの体を受け止める。

意識は無く、その瞳は堅く閉じられたままだ。

「シル！早く回復をっ！！」

「リロイ！しっかりして！！」

直撃こそ無かったとはいえ、ライデインの余波をもろに受けたリロイは相当なダメージを被っていた。ソロが急かす前にシルが急いでベホイミを施し。

「……………」

「リロイっ」

「……………ヒミコ———は……………」

薄く眼を開いたリロイを抱き起こしたまま、ソロが後方をしゃくる。全身から煙を立てて、大蛇は絶命をしていた。

「………、無茶しやがって。……………あんな魔法の使い方がるか、

それにあんな……強え魔法……お前何処で……」

「ライデイン。……選ばれし者だけが使えるという伝説の魔法……」

……よね。昔話でしか聞いた事なかったけど……」

「——ライデイン……？」

「リロイ、お前。——覚えてないのか？」

ふと、朦朧だったリロイの表情が凍てつき。それに気付いたように三人も振り返る。

死んだはずの大蛇が、重たい音と共に動き始めたのだ。

ヨロヨロと蠢く大蛇の後ろには、……旅の扉……」

「野郎！まだ生きてやがったか」

「逃げる気だ……」

傷つき、まだ動けないはずのリロイが立ち上がり。その方へ走り出す。そしてその後をシル、ソロが続いた。

ミロッドは腰が抜けて動けない弥生を叱咤し、その後続く。

「ま、まだ戦うの？……皆もうこんなに……ボロボロなのに……」

「今諦めたら……ジパングが滅んでしまつの。……さあ、急ぎましょう」

旅の扉を抜けた先は、ヒミコの寝所だった。そして眼前には全身血塗れのヒミコが……沢山の兵士に囲まれた状態で倒れている。

「——……！？……お前たち何処から来た……」

「……皆の者……。彼奴等は間者じゃ……！！わらわを殺そうとしたのは……奴等じゃ……」

「何ですと!？」

確かに、此処で捕まれば女王傷害の罪で国に裁かれてしまうだろう。
女王の意思で、確実に死刑に。

……最後の最後まで切り札を残しておいたわけか。
苦々しく舌打ちをするリロイと、ヒミコの視線が合った。

(どうじゃ。最後に笑うのはわらわだったであろう)
……そんな嘲りを込めた、笑み。

—— どうする。

四人の表情に焦りが浮かんだ、その瞬間。

「 ……違います! 皆、違うんです! ! 」

その時、四人の背後から飛び出して来た。 …… 一人遅れて戻って来た弥生だ。

一同から「 まさか 」やら「 生きていたのか 」等という驚愕の声が漏れ始める。

「 皆、聞いて下さい。 …… ヤマトノオロチさまがジパングを守っていた等、嘘だったのです。ヒミコさまは …… ヒミコさまが、ヤマトノオロチ! …… 女王に成り代わり、ジパングを滅ぼそうと忍び込んだ魔王軍の四天王なんですっ! 」

「 何だと! ? 」

「 魔王軍だって! ? 」

「 弥生、それは本当なのか! ? 」

「 私が …… 儀式より生き延びた理由がわかりましたか? 私はこの方々に命を救われたのです。それに隠れている時に私はしっかりと聞きました! …… ヒミコさまの声色で …… 大蛇が、 私たちを食い物としている 「 事を …… ! 」 」

ざわりと、周囲に動揺が走る。恐れてヒミコから人が離れていくほどだ。

しかしヒミコだけは違った。ギツと表情を歪め、激昂する。

「ええい！儀の任を放棄し、わらわを傷つけた極悪人どもの話を信じるというのか！！」

「見苦しいぞ、ヒミコ」

冷ややかに響き渡るリロイのその声色に、ヒミコだけならず周囲もびくりと視線を挙げる。

「お前のその体に付いた血が……お前だけのものなら。お前が食い殺した櫓運びの男たちの返り血も、べつたりとついているはず」
食い殺したという言葉に周囲から恐怖の声色が漏れた。

「……………ほ……………ほ」

ざわりと空気が揺らぐ。はっとしてソロが辺りを見回した。

「てめえら、外に出ろ！！巻き添えになりたくないならな！！」

「愚かな人間どもよ……………大人しゅう騙されておれば、まだ幸せだったものを……………」

「……………！！！」

「死にやれ……………！！」

逃げ惑う兵に目掛けて、半端に大蛇に変貌したおぞましいヒミコが灼熱の炎を吐いた……………はずだった。

瞬間、全てが白へ塗り替えられた。強烈な冷氣。全員が思わず目を伏せる。

「な……………！！」

やがてそれは収まり、戻り始めた視界には牙を剥き出しに炎を吐こうとしているヒミコの姿。

その姿は完全に凍て付いており、動く様子は無い。

……………見事なまでに氷の彫像と化していた。

「ミロッド………?」

それは本当に、一瞬だった。

ミロッドの手からほとんど詠唱無しに放たれたその魔法は………氷系最上級魔法、マヒヤド。

本人も、はっとしたようにその手を見つめている。

「——— あ………あたし………」

無我夢中で、ただヒミコを止める、それだけしか考えていなかったのに———。

「ミロッド、いつの間にそんな魔法………」

「え……え?今の……あたしが………?」

こくりと、逃げる事も忘れて立ち尽くす兵士たちも込み、全員が頷く。

「凄じじゃないかミロッド!マヒヤドなんて」

嬉しそうにそう言うシルに、ミロッドは戸惑ったような微笑を返した。

——— 半妖化したヒミコは……凍結したまま、二度と生き返る事はなかった。

そしてヒミコの体が不意に碎け散り。そして、その場には………パールオーブが。

「オーブだわ、紫色のオーブ。………ヒミコが……隠し持ってたのね」
しゃがみ込み、ミロッドがそれを拾い上げる。

「……………兵士方。我々はこの宝珠を捜し、世界中を回っていた。…
………勿論、無料とは言わない。何とか譲って貰えないだろうか」
全員が視線を交わす。女王亡き今、決定権は誰も持たないのだ。
ざわざわと混乱めいた空気のなか、慌てたようにシシルがリロイへ
耳打ちした。

「ちよ、ちよつとりロイ。……………買い取るって現在幾らあるんだよ」
「15000Gちよつとだな」

「それ食料代込みだろ？」

「……………構いません。……………それは無料でお譲りします。
……………我等を血塗られた呪縛から解放して下さい。さっとお礼として。お
持ちになって下されば」

「……………良いのか？」
こくりと頷く兵たちにリロイは深く頭を下げた後にパープルオーブ
を受け取った。

「リロイさん……………」

駆け寄って来た弥生にリロイが笑んで。

「弥生さんが勇気を出して言うてくれたおかげで、おれたちは助か
った。本当に感謝してるよ」

「いえ。……………皆さんの戦いが私を勇気付けてくれたんです。…こ
れからは祖母と二人……………静かに暮らしていきます」

「元気だね？」

「皆さんも……………どうか、どうかお元気で」

船に戻った四人は、村人に見送られながらゆつくりと離岸していった。

「……………さて、これで四つ目か？ネクロゴンドの一個はさておいて、問題の一つは何処にあるか、だな……………」

「船の損傷具合が良くないし、一度ポルトガまで戻りたいんだが。その時に少し情報を集めてみないか？」

水樽に腰を降ろしていたミロッドがその言葉を聞き。

「そうね。港町だし、もしかしたらオーブの事知っている人いるかも知れないものね」

こうして一行は、再び長い航路を辿り ————— ポルトガの地へと戻る事となる。

静かに、静かにその予兆は迫りつつあった。それぞれが変わり始める予兆。その事に、未だ誰も気付いていない。

18話 想い

「—— プラムナツハール？」

ポルトガへ戻った一行は、船の損傷が直るまでの一週間、滞在を余儀なくされた。

オーブの情報を求めて船乗りたちに尋ねはしてみるものの、知る者はなく。

しかしそんななか、一人の人物の名が浮上して来た。

流浪の行商人、プラムナツハール。スーという村より世界を渡り歩いている初老の行商人の名だ。

「ああ、多分間違いないと思うがな。プラム爺さんがそいつの黄色つばい奴を持ってたのは昔見た事あるわ。—— 三年くら

い前かね。高価そうな代物だったから良く覚えてるけどな」

酒を煽りながらそう男…… 船乗りアルベルトは思い出すように目を細めた。以前、ポルトガより船を世話してくれた船長の息子にあたる、豪快な海の男だ。

「黄…… ———— その人は、今は何処に？」

「うーん……、あの爺さん、鉄砲玉だからな。会わせてやりたいのは山々だが、一度出航すれば何ヶ月……何年戻らない場合も多いくらいだ。——— ちっと待ちな」

ふと思い立ったようにアルベルトが席を立つ。小首を傾げたりロイを他所に、アルベルトは大きく息を吸って、そして——— 怒鳴った。

「………… おおい、てめえら！！ちよつと聞け！！」

「………… つ、ちょ………… つ」

リロイが驚いたように制止の声を掛ける。しかしアルベルトは「心配すんな」と笑みのまま。そのまま、続けて。

「何だよ」「やら」「金なら貸さねえぞ」「など、笑い声に混じった返答が戻って来るなか。アルベルトは改めて周囲を見遣った。

「馬鹿野郎、これしきの酒で酔っ払ってんじゃねーよ。」

「てめえらの中で此処最近プラム爺さんの船を見た奴はいるか？」

「プラム爺さんだあ？」

「偏屈のプラムナツハールの事かい」

「……………偏屈？」

リロイは頭が痛くなって来た。

そもそもリロイはこういう人だからに一人で来るのはあまり好きではない。ルイーダの酒場だって、あまり立ち寄りたくはない場所だった。

しかし、ソロが船修復の先導、シシルとミロツドが水や食料の買い付けに行ってしまった為にこうして一人で情報集めをしていたのだが……………。

幾らアルベルトが一緒だからと、あまりに軽率すぎた自分の行動に後悔が過ぎって仕方ない。

———
帰りたい。

こんなになるなら、戻って来るのを待てば良かった。

「おうよ。この兄ちゃんがプラム爺さんの行方探ししてるってからよ。てめえらもちったあ協力してやれや」

「爺さんの船ついていや、青い斜め縞三本の赤い旗の奴だろ？」

「違う違う。緑の斜め縞四本の紅まだらの奴だろ。縞三本の赤いのは、トゥーリーの船さ」

「……………あ、そついや俺、クワティア海で見たわ。一週間ほど前だったか」

「……………え？」

一人の男の言葉にがたん、とリロイが立ち上がった。

「クワティア海って……………何処の海なんだ？」

「何、此処の港を出てすぐの海域の事さ。ただし、クワティア海の端っこ……………北スー大陸の東岸付近だけだな。陸地に向かって舵を取っていたから、上陸すんだな程度にしか思っただけだ」

「船の修復が終わるまで一週間か……………。それが本当なら一週間前の話で、更に向かうにあたって3、4日……………」
「……………だめだ。」

深い吐息と共に落胆の色を見せるリロイの背をアルベルトが叩き。

「まあ、駄目元で航路に入れて置きや良いだろ。それまでにまた目撃情報があったら、あんたの宿まで伝えに行つてやつからよ」

「……………すまない。ありがとう、アルベルト」

リロイの言葉に、ニツとアルベルトが笑い。「任せとけ」と大きく親指を立てた。

……………酒場から出て来たリロイは、そのままぐつと肩を伸ばした。葉巻の匂いが臭かったし、空気自体も良くなかった。良くあんなところで酒等煽れるものだ。

「リロ……………いつ。居た居た」

高い声に呼ばれ、リロイが振り返る。野菜の詰まった袋を抱き抱え

たミロツドが駆けて来る。……………そして、その後ろにはミロツドの数倍の荷物に埋もれよろめきながら歩いて来るシシルの姿が。

「お疲れさま。良いの買えたか？」

「うん。ほら、艶の良いお野菜が沢山♪……………もお、シシル！何ばててるのよっ、早く早く」

やや青い（ 船旅をする為には熟す前のを購入しないと傷んでしまう為だ ）トマトを片手にミロツドがシシルに手を振った。

クス、とりロイがそれに駆け寄り。幾つか持って遣る。

「大丈夫か？無理するなよ」

「あ、あ。ありがと。……………だってミロツドが「あれも良いわ」

」「こんなのもあったら便利よね」って次々籠に……………」

「なあによ。シシルだって「良いんじゃないか？」って賛同してた癖に。それよりもリロイ。……………それで酒場の方はどうだったの？オーブの場所はわかった？」

トコトコと横を歩きながら、ミロツドがリロイに尋ね。苦笑を浮かべたままリロイが小さく首を振る。

「プラムナツハールという人物がイエローオーブを所持していた、という話は聞いたが。……………当の本人が世界中を回っているらしくて現在位置は不明な状況だ」

「……………えええ？」

「一週間ほど前、スー地方で船が目撃されたみたいで。……………おれたちが辿り着けるくらいにはまた移動しているかも知れないけど、船が直ったら向かってみようかと思うんだ」

「そうねえ……………もしかしたら、何処かで会えるかも知れないもんね。——— そうですね、ソロはまだかしら？通りで待ち合わせ、って話なのに……………」

「女でもナンパしてんじゃねーの？」

しゃがんでいたシシルがぼそと呟き。それにミロツドが反論する。「ソロはそんな男じゃないわよ」

び、と舌を見せたミロツドに、「どうだかな」 とシシルが悪

態をつく。ふと、リロイが前方を見遣り、歩いて来る男の姿を捉えた。

「お疲れさま、ソロ」

歩き出したリロイに二人が慌てて続き。修理場から戻ったソロを迎えた。

「損傷具合は？」

「あー。……やっぱり戦闘した際の爪痕がひでえな。ところどころ焦げたところもあったし、何より、あの大王イカに持ってかれた貯蔵庫の建て直しにえらく時間が掛かってる。底板から丸ごと剥がされてるから打ち付けが面倒だ」

「焦げたトコって……」

「あたしたちの魔法ね……」

「やはり一週間は掛かるか……」

呟かれたリロイの言葉にソロが首を傾げ。

「急ぎの情報でも入ったのか？」

「うん。実は——」

「なるほどな……」——スー地方はインディア族といっ

てな、土着人が住む土地なんだ。…ジパングほど閉鎖環境じゃないがな、それでも語学すら発達していない半未開の地だよ」

「……また、「ガイジン」かよ」

ジパングでの出来事を思い出し渋い顔を浮かべるのは、シシル。それにクカカとソロが笑い、バンバンとシシルの背を叩いた。

「ガイジンの凄えとこ見せてやりや良いじゃねーか。……ほら、とつと歩いた歩いた。往来の邪魔だぜ、俺ら」

確かに、とリロイが辺りを見回す。入港と出港の狭間なのか、いつのまにか人の波が激しくなっていたからだ。

「わ、わかってるって」と、ぼやきを漏らすシシルを先頭に

四人は予約を入れていた安宿へとその足を向けた。

今日の寝場は陸の上である。船がある以上そこで寝泊りするのが一番安上がりなのだが、肝心の船が修理中の為に今回ばかりは仕方ない。

「うわあ、久々にふかふかのお布団で寝れるのね♪」

「そうだな」

そう感動の声色を漏らすミロッドにリロイが笑った。

「ねーえ、リロイ？この宿って温泉があるみたいなの。後で行ってみる？」

「え？……おれもか？」

温泉があるのはわかっていたが、まさかミロッドに誘われるとは思ってもしなかったのでリロイが目を丸くする。そして荷を降ろしながらその言葉に振り返る男連中。

「良いじゃない。たまには一緒に付き合ってくれてもいいでしょ？」

「い、いや。……おれは後で一人で入るから……」

心は男でも体は女。

旅を始めてから、リロイは誰とも風呂には共に入らなかった。

自分でも決心が付ききれないのだ。男であると決めた以上ミロッドと裸の接触などしたくはなかったし、ましては男連中に関しては論外だ。

風呂………と、想像する二人には、あの誘いの洞窟での一件が思い起こされる。如何に治療の為とはいえ、二人は見ているのだ。リロイの素の胸を。

やや顔を赤くしそっぱを向くシシルにミロッドが半目になり。

「やあだソロもシシルも。——……………言っておくけど、覗きなんて無粋な真似したら……………」

今にも攻撃魔法の詠唱を始めそうな勢いなミロッドに二人が慌てて手を振った。

「んな馬鹿な事するわけねーだろっ!」

「そうだよっ、そんな豪傑熊の開いた口に飛び込むような真似……………むぐっ」

「馬鹿シシルっ!」

慌ててシシルの口をソロが塞ぐが、既に遅く。目を点にしているリロイの前でミロッドの髪が冷気に揺れていた。

「へえーえ?乙女二人に向かってそういう事言うんだ……………」。

——温泉に浸かる前に底冷えしたらしいわね」

「ミ、ミロッド、違っ……………」

「うるさいっ!……………ヒヤダルコ!」

「うわあああっ!?!」

あっという間に二人はかき氷をぶっ掛けられたように凍てつく。……………

……まあ、元来は冷気の嵐で敵を凍死させる魔法だ。それを考えるとかかなり手加減はされているのは間違いないのだが……………。

「ぎゃ———っ!冷て———っ!………」

「ひゃあっ!」

「寒かったらお風呂入って来なさいっ!」

ミロッドに追い立てられ、氷をこびり付かせた二人がバタバタと部屋から出ていく。

「ミロッド……………」

ポツリと呟いたりロイの言葉に、くるりとミロッドが振り返り。にっこりと微笑んだ。

「———良い?どんなに男の子のふりしても、貴方の体は女の子なのよ。今は戦いのない休息の一時ですもの。今くらい……………」

……ちよっぴり女の子に戻って、綺麗にしても……きっと誰も責めたりはしないわよ？」

正論には違いないが、リロイにはその一步を踏み出す勇気がどうしてもなかった。俯いた自分よりも長身の彼女を労わりながら、ミロッドが「決めた」と小さく頷く。

「え？」

「まずはお風呂で綺麗にしましょう？……さあ、支度支度」

「な、何？……ミロッド！？」

「……ちよっ……これ、色濃すぎない？」

「大丈夫よ、ほら、動かないで……」

「長いし……動きにくいし……」

「平気平気。……待つて、後は此れを髪に……ね？ほら、可愛い」

えらい目にあつた、と。湯気を立てたソロとシシルが部屋に戻つて来たのはそれから数十分後の事だった。戸口前で二人が考え込む。

「…………ミロッドの機嫌直つてみたいか？」

「笑つてゐる声が聞こえる、けど。…………リロイと何かやつてゐた
い」

「入るか？」

「…………入らないと怪しいだろ」

腕組をしつつシシルがソロを見上げる。ソロも気まずそうに口角を歪めているが、意を決したように勢い良く、扉を開いた。

ボタン、と大きな音と共に扉を開け、決死の覚悟で部屋に戻った二人の目に飛び込んだものは…………。

「…………あ！」

「お帰りなさいっ」

恥かしそうなリロイの声と楽しそうなミロッドの声。そしてソロとシシルはあんぐりと口をあけたまま、固まった。

ドサツと、手から離れた風呂道具が床に落ちる音が響き渡る。

リロイはミロッドにすっかりコーディネートされていた。

短い黒髪には白い花飾りがつけられ、薄黄色の、向日葵柄のワンピースを着せられている。

ほんのりと唇に差した紅は、まるで初めての化粧に戸惑うような初々しさを醸し出し。

……はつきりいつて、美人だった。

「—— リロイ、すっげ綺麗だ」

二人ともやや頬を染めたまま、見入るようにリロイを見ている。

それに恥かしそうにリロイが視線を外し、戸惑うようにミロッドを見。

ミロッドが笑みのまま柔らかく微笑んだ。

「ほら、あたしの言ったとおりでしょ？リロイお化粧したら綺麗なんだから」

「そつ、そんな事……っ。……二人とも遠慮してるだけだ、こんなの……」

脱ごうとするリロイにミロッドが制して。

「ま・だ・よ。……さあ、お姫さまを夜のパーティにご招待してくれるのはどっちの王子さま？」

「え？ちよ、ちよっ……」

まだあるのか！？という表情にリロイの唇にポンッとミロッドが触れる。

「シンデレラという物語、知ってる？リロイ」

「………は？」

聞いた事はある。西方に伝わる童話だ。

意地悪な無縁家族のなかで育てられた少女が魔法使いの手を借りて一夜の夢を得るといふ幸せ物語。

「今夜の貴方はシンデレラよ。……… 一夜の夢を楽しんでらっしゃい。—— ナナ」

今だけは。

使命も何もかも忘れて。

放棄するわけではない。ほんの少し、その肩荷を降ろすだけでも大

分変わってくる、それをミロッドは伝えたいのだ。

「…………おれは——」

どう接して良いかわからない二人を前にリロイが視線を挙げた。
そして、…………ソロの前に立ち、そっと、手を差し出して。

「——リロイ…………？」

「……………」

「リロイ……………」

「嫌…か？———こんな姿のおれ……………」

恥じらいを込めて呟くリロイのその言葉に、ソロがきゅっと唇に力を込める。「馬鹿」と小さく頷いてから、リロイの…………否、ナナの手を取り。

「お望みのままにお姫さま。…………何なりとお供致しましょう」
恭しい言葉と共に膝を突き、従者の真似事をしてからソロが立ち上がり。そしてニツと笑った。

はにかむような笑顔をソロへ向けた後に、照れるような表情で、ミロッドへ視線を向けて。リロイが感謝の言葉を漏らす。

「ありがとう…………ミロッド」

「うっん。楽しんで来てね？ナナ。———素敵な夢が訪れますように」

ソロとリロイが部屋を後にする。一瞬の静寂。取り残されたミロッドがシシルを見遣った。

シシルは何も言わなかった。目を細めただけで、止めようとせず
に。

寝台へ向かい静かに腰を降ろすシシルの姿を、ミロッドが視線で追った。

「……………シシル」

呟きが漏れる。

「ナナが選んだんだ。僕にはもう止める理由が無いさ」

「……………ごめんね？」

ポツ、とシシルの隣に座り込んだミロツドの口から、謝罪の意が零れた。

リロイを楽しませたくて、……………楽しむ事を教えようとして、した事が。

結果としてはシシルを傷つけたのだから。

「何でミロツドが謝るんだよ。……………リロイの為に……………いや、ナナの為に、してやりたかったんだろ？それなら良いじゃないか」

「……………でも、貴方を傷つけてしまったわ」

「……………気にしじゃないさ」

につと笑うシシルだが、ミロツドの表情が曇っている事を見て取り、そのまま寝台へ寝転んだ。

見上げる天井が、奇妙に高く感じられる。

「あのさ……………ミロツドには、感謝してるんだ」

「……………え？」

「僕は絶対ソロには勝てなかった。……………ナナが、ソロを慕っているのにも気付いていたのに……………未練がましく、機会を待ってた。

ミロツドはそんな情けない僕を……………助けてくれたんだよ。だから……………ありがとう。男のプライドを失う前に、吹っ切れて良かった」

「……………」

「小さかったナナの面影を追うのは……………もう卒業だ」

「シシル……………」

「それより……………。あいつらだけ楽しい思いをするのは癪だと思わないか？」

不意に話題が逸れ、ミロツドがその大きな目を瞬きさせる。

「僕たちも夜の街に遊びに出ようぜ？……………な？」

にかつと一杯の笑顔を浮かべるシシルに、ミロツドが頬を染めて頷

きを返した。

—— 停泊している船のネオンが、まるで星屑の明かりのよう
に夜の海に散らばっている。そのなかを、リロイとソロは歩いて
いた。

「……………綺麗だな」

「ああ。でも、良いのか？何なら酒でも飲みに行ったらって良いんだ
ぜ？ —— あ、お前、酒駄目だったか。うーん……………アツサ
ラームの夜市みたいに楽しめるところがありや良かったんだが……
……」

「良いんだ。こうして静かで、綺麗なのも楽しい。賑やかなの、苦
手だから」

花が綻んだような純粋な笑顔を浮かべるリロイに、ソロも笑んだ。

…………… 来たいところに連れて来て正解だったな、とそう感じながら

「なあ、リロイ」

「ん？」

慣れないサンダルに、ややよろめきながら前方を歩くリロイが、ソ
ロに呼ばれ振り返る。

「お前さ。 —— いつかこの旅が終わったら……………どうす
るんだ？」

「 —— 終わったら？」

魔王バラモスを倒した後の事。

考えた事も無かったのだらう。咄嗟に思い浮かばなく、リロイがや
や黙り込み。そのままくるとソロへ振り返った。

「国へ……………アリアハンへ帰る。母さん一人で…家で待ってるはず
だから。寂しがってるだらうし……………安心させてあげたいよ」

「そうか……………」

妙に歯切れの悪いソロの返答に訝しげにリロイが近づいた。真下から覗き込まれ、ソロがどきりとする。

「どうした？それが何かあるのか？」

「いや……。何でもねえよ」

苦笑を浮かべてポンポンと頭を撫でられ、リロイは苛々とその眉を顰めた。

「嘘だ、どうしていつも、そうやってはぐらかそうとする？……」

おれが、子供だからか？」

「そうじゃねえよ」

「なら、どうして本当の事言ってくれない？……何か悩み事があるなら……」
—— あつても、おれ相手じゃ相談相手にな

れないって事か？」

「……なれないわけじゃねえけど……なあ」

不自然に視線を逸らす様子に、とうとうリロイが唇をへの字へ曲げた。

「わかったよ。……じゃあ、おれ、帰る」

あまりに子供なその行動に、戸惑いを通り越し。ついソロは噴出してしまった。ふい、と後ろを向いてしまった少女の肩に手を置き、苦笑を浮かべて謝罪する。

「わかったわかった。……はぐらかせて悪かったよ。そうだな、

俺の悩みは……お前の事だ」

「おれの？」

予想外な返答にリロイが振り返った。瞳を穏やかに細めたままソロが頷きを返す。

「……俺あな、この旅が終わったら……。—— 本当

はずっと、終わるまで黙って見守ってるつもりだったが……。まあ、良いだろ。聞きたいと言ったのは、お前だからな。後悔するなよ？」

「？……何の話……」

「お前に求婚したいと思っている」

さわ…………と夜風が二人の間を通り抜けた。風に攫われ、リロイの髪から花飾りが外れ落ち。ふわりと揺れる水面へ着水する。しかしソロの言葉は、そんな事も気に掛ける余裕が無いほど、リロイには唐突なものだった。

求婚。

鈍いリロイでも、流石にその言葉の意味はわかっていた。

「おれ、に…………どうして…………——　だつて、だつてソロは…………」
「フィーナの事があるのに？　つて顔してるな」
「だつて…………」

テドンで会ったソロの婚約者。……………例え死していたとはいえ、一度愛した人がいるというのに。
それなのに。

「フィーナは、言った。自分に出来なかった事を、俺に託した。自分の分まで幸せになつてくれ、と」

「……………幸せ……………」

「……………ルイーダの店で会った時は、不器用で、生意気なガキだと思っていたが、そんなお前に惹かれてる自分に気付いたのは……………そう最近の事じゃあない。……………薄情な男だと思つてくれても良さ。だが……………もう自分を押し殺し偽るのは終わりにする。お前を想う気持ちは本物だからな」

言い切った後、ソロはリロイを見下ろした。頬を染めて俯き、戸惑いを隠し切れずにいる少女の髪を優しく撫で。

「……………悪いな。未だ戦いも終わってないつてのに、こんな話……………」

……それに、お前の気持ちも、な？——忘れてくれや」

す、とソロがリロイの隣を通り過ぎる。しかし、クン、と背の服を引っ張られその歩みは留められた。

「——リロイ」

「……………」

嬉しいはずなのに。

喜んで良いはずなのに。

出て来るのは、嗚咽と涙だけ。

「リロイ……………お前」

涙で濡れた頬に手を添えながら、ソロがリロイを見つめた。

「……………好きという気持ちが……………どんなものかわからない、けど……………。——ソロの言葉が凄く、嬉しかった。……………おれもソロの事……………好きになっただいのか……………？」

この高鳴る鼓動の意味を自分で理解をしていない。

「好き」という事の自覚。

押し潰されそうな環境のなかで欠落した、感情……………。

それでも。

きつと自分はソロが好きなんだ。

それに、気付けた。……………気付かせて、くれた……………。

「……………ああ」

ぎゅっとソロがその細い肩を抱き締めた。

「馬鹿————当たり前だ。……………お前の感情は……………お前だけのものだからな。世界が何だ、勇者が何だ。誰も……………例え神だろうが何だろうが、そんな事勝手に決める奴はこの俺が許さねえ」
「ソロ……………」

「約束しろ、リロイ。…………自分に素直に生きるんだ。そして――」

――いつか――

――いつかこの果てしない戦いが終わったその時には――

――その時は…………一緒に――

「――約束だ」

煌くネオンの中で、二つの影が重なりあった。

出航三日前の、出来事である――。

19話 敗北

……静かに波が寄せて来る。修復された真新しい木板にそれは当たり、再び拡散を繰り返す。

船は何事も無く穏やかにポルトガの西方へ進路を取っていた。

あの夢のような日から三日。一行は予定に沿って出航を果たしていた。

一度鎧を着込めば、既にリロイはその気持ちを切り替えていた。ソロも、シシルも、ミロッドも同様だ。

不自然に落ち着かなくなる事は、もう無かった。

それが自分の気持ちに素直になれたからだという事には、勿論、当のリロイは気付いていない。

「……………着くまでどれくらい時間が掛かるんだろう」

地図を見つつリロイが呟きを漏らす。それを聞き留めたシシルが距離を測定する為の大定規で航路を示し。

「当初の予定だと3〜4日ほどって話だったけど……………この分なら3日目の早朝には着岸出来るかな。魔物との遭遇があったらまた多少狂って来るだろうけど」

「……………モンスターか。それが一番厄介だな……………」

カタンと席を立ち、リロイが立て掛けてあった剣とランタンを手に取る。そのまま船倉の外へ向かい。

「リロイ？」

「ソロと見張りを交替して来る。シシルはミロッドと一緒に先に食事を取っててくれ」

「了解。ソロの分も用意しとくから交替したら船室戻るよう言つていて」

「ああ、わかった」

到つて風は穏やかなまだ。風向きも、雲の流れも悪くは無い。

船乗りたちの受け売りとはいえ、リロイにもそこそこ空を読む方法は飲み込めて来てはいた。

船倉から出、見張り台へ続く木造の梯子を上っていく。やがて剣を抱くような形で暇そうに欠伸を漏らし、胡座をかいているソロの姿が視界に入つて来、リロイは小さく苦笑を浮かべた。

「—— ソロ、交替の時間だ」

「ん？おお……」

「何かあった？」

ランタンへ明かりを灯し。漆黒の海へと視線を向ける。

「いや、さつき痺れくらげが一匹迷い込んで来たただけだな。特に何もねえ」

「そうか。……階下でミロッドが今食事の支度をしているから、ソロは戻つて食べて来て良いよ。後はおれが見張ってるから」

「…… 一人で平気か？」

「馬鹿にするなつて。……さあ、行つた行つた」

リロイに急ぎ立てられ、ソロが渋々と船倉に戻っていく。それを見届けた後、リロイは置いてあつた毛布を肩に掛け、座り込んだ。

…… どれも過保護に拍車が掛かつたような気がするのとは気の所為だろうか？

「あふ……」

退屈に、知らず知らずに欠伸が漏れる。

何もない、星空に彩られた穏やかな海。何もなさそうな感じだが、
どうも胸の中の警鐘が鳴り止まない。
こういう時には大抵何かあるものだ。……………自分は旅立ってからそ
う戦歴が長いわけではない。それでも、こう。勘らしいものは芽生
え始めていた。

いつでも剣を抜けるように半ば抱き抱えたまま。リロイは漆黒の海
へ視線を凝らし続けた。

―― 異変は、唐突に訪れた。

不意にざわつと周囲の風の流れが変わり。リロイは弾かれたように
立ち上がった。シャリンと刃を抜くその音が、ひどく大きく感じる。

…………… 圧迫感だ。ヤマトノオロチの時の、比ではない。
―― 明らかに強い。

「……………」

来ている。…………… 否、「居る」…………… 既に、この船の何処か
に。

―― 呼びに戻っている暇はないな。

そう感じながらリロイは見張り台から床へ飛び降り立った。

視線を挙げると、船頭に人影が見える。

…………… 誰かはわからない。しかし、明らかに圧迫感はそこから流れ
て来ていた。

……魔王軍四天王級の实力者の可能性は十分に有り得る。……
リロイは握った剣柄に汗が滲むのを感じ取っていた。

「……………誰だ」

静かな声色で、問いただす。

「貴様が勇者リロイか」

返って来た応えは、男の声。ポウ、と辺りに光珠が生じたと思うと、その男の姿は闇のなか、有り有りと浮かびあがって来た。

紫闇のローブに身を包んだ、……………人間？闇色の髪に紫の瞳を持つ、男の姿だ。

ふと違和感を感じ、リロイは眉を寄せた。何か引つ掛かる。この男、誰かに——。

否、考えてる余裕は無い。疑問を吹っ切るようにリロイは唇を軽く噛み締めると、息を飲み、男へと応えを返した。

「……………だとすれば、どうする。お前は……………魔王軍の者か」

男の笑みは崩れない。睨み付けて来るリロイをしっかりと見据えながら、僅かな含み笑いを込めて半歩、前に出た。

「我が名はアークマージ。……………魔王軍四天王の一人だ」

「……………四天王……………」
やはり。

「貴様らがオーブを集めていると聞き、阻止しに来た……………とはいえ、わかりやすいか？」

「確かに……………わかりやすいな。だが、「はい、わかりました」とオーブを渡すとても？」

間合いに緊張が走る。

しかし、その瞬間、アークマージは弾けたように笑い始めた。

「ふははははっ……！……その甘さが人間所以だな、若き勇者よ。

……私の目的は……貴様らを抹殺する事で阻止する事だ。……

……オーブを奪取したところで、貴様らの運命は変わらん」

「……………！」

ボタン！

船倉の扉が開き、ソロ、シシル、ミロッドが飛び出して来る。どうやら異変に気付いてくれたらしく、すぐさま臨戦状態に陥った。

「リロイ……！誰だよ、このおっさん……………」

肌に痛いほど感じる圧迫感に表情を引き攣らせながらも、シシルがアークマージを睨み付ける。

「……………魔王軍四天王の一人だ。……………おれたちを、殺しに来た……………」

「刺客だと！？こいつが……………？馬鹿な、どう見たってただの人間じゃねえか。……………お！？」

どんと押されるような形になりソロが揺らいだ。驚いた先には、今にも前に飛び出しそうなミロッドの姿が。

「おい、ミロッド下がれ！」

危ないぞ、とソロが、リロイが叫ぼうとしたその時。

ミロッドの口からとんでもない言葉が、漏れた。

「……………パパ？」

全員がミロッドを見つめる。……………アークマージもだ。アークマージは表情を変えないまま、じっと、射るような視線をミロッドへ向け。……………やがてその口を開いた。

「ミロッドか。……………やはりバルログが言っていた通り、勇者一行に同行していたという話は本当だったな」

「……………ミロッドの親父さん！？」

「嘘だ！！だってミロッドの父さんって人間……………——魔族
だろ！？こいつー！！」

今にも飛び出しそうなミロッドを片手で制しながらリロイがアークマージを見つめる。

しかしミロッドは必死にアークマージに訴え続けた。

地底湖の洞窟で母と共に死したはずの父が。……………あの優しかった父が。

どうして魔王軍に……………。どうして自分たちの敵に。——
刺客……………？

——ミロッドにはどうしても信じられなかった。

「パパ……………。本当に、パパなの？……………生きてたの……………？」

「ああ……………。生きていた、というよりは……………死んだのはアン

—— お前の母親だけだ……………」

「え？」

「お前を迎えに来たのだよ、ミロッド。……………救世使ごっこはもうお終いだ。さあ、父さんと共に帰ろう」

差し出された手にミロッドが戸惑ったように首を振る。半ば涙を浮かべたまま、「どうして？」と呟きながら。

それを阻むようにリロイたちが前に出た。

「　　ノアニールのイルダ　　」 は人間のはずだ。……………お前がミロッドの父親のはずがない！」

「……………パパ……………」

「魔族が人間のように振舞う等、造作もない話。貴様らもジパングのヒミコを見ただろう？……………人間の姿で潜入していた、ただそれだけの話だ」

「じゃあ……………パパが……………　　……………パパは、魔族なの……………」

……………？」

「そうだ。そしてミロッド。お前は……………魔族とエルフのハーフリング。アンがお前をエルフの森へ遣ってしまった後から、ずっとその行方を探していたんだよ。さあおいでミロッド。お前は、我等の仲間だ。お前まで死なせる必要はない……………」

「さあ　、と促され、ミロッドは激しく首を振り。耳を塞いだ。

「やめろよ！」

割って入ったのはシルだ。睨み付けたまま、ミロッドを後方へ庇い。

「ミロッドは僕たちの仲間だ！魔王軍になんか絶対に渡すものか！……………」

「……………お前が、いや、お前たちが欲してるのはミロッドの「血統」だろう。エルフの高い魔力と魔族の高い魔力。それが合わさるだけでも強力な魔法使いが手に入るからな。……………女王の娘を殺

したのも、もしかしたら……」

ソロの言葉にびくりとミロッドが顔を挙げる。「嘘でしょ？」と呟く声色には残酷な色が浮かぶが、此处で同情をしている暇はなかった。

「……ふっ……」

アークマージ……いや、イルダの口元に歪んだ笑みが生じた。

「……く、はははは！……その通りだ。確かにアンを誑かし子を産ませたのは……エルフの血が欲しかった為。……その後、

アンの奴が気付いてミロッドを逃がしてしまったのには誤算だった……——刺し違えて死のうとは馬鹿な女だ。所詮は無駄

死。殺せると思ったのか、四天王であるこの私を——」

「嘘！……パパ……嘘よね、……嘘って言うてよ……！！！」

「魔族とエルフのハーFRINGは受胎する可能性が無いに等しい。だからこそその強大な魔力は魔王軍に大きな助力を齎すのだ。……

……引き摺ってでも連れ帰るぞ！」

「——やめてええっ！！！」

悲鳴が引き金になり、氷の魔力が周囲に渦巻く。マヒヤドの冷氣が白い蛇となりイルダに向かい襲い掛かった！

……しかしそれも、片手で軽く往なされてしまう。

「……その若さで既に此处まで魔力を扱つか……流石は我が娘だ」

「……はあ、はあ……。あたしは……。あたしは行かない……っ……。貴方なんて、パパじゃない！」

「ソロー！」

リロイが突然叫んだ。それに半瞬で反応を返したソロが、リロイと共にイルダに斬り掛かる。

「——バイキルトー！」

シルが唱えた攻撃力増強魔法を皮切りに、四天王アークマージとの戦いの火蓋が切って落とされた。

「……………うわっ!!」

「ちっ!……………くそおっ!!」

唱えられる数々の呪文は、ほとんどが直撃を食らえば一瞬で絶命出来そうなほど威力があった。

メラ系、ギラ系、ヒヤド系、イオ系……………まるでこの世の叡智を全て知ったような、完全な、魔力。

閃光系最強魔法ベギラゴンで一蹴された三人を、イルダが見下ろす。

「その程度の技量で我が魔王軍に刃向かおうとはな」

「……………っ」

動けない。……………いや、動かなかった。三人とも、倒れ込んだまま起き上がれない。

全身が悲鳴をあげている。辛うじて握られた剣も、僅かに震えるだけだ。

「やめてっ……………!皆から、離れて……………っ」

参戦していたものの、攻撃範囲から故意に外されていたミロッドが、イルダを睨み付ける。

「……………ぐっ……………」

「ミロッド……………逃げ……………」

「……………お前は連れ帰る。そう言ったはずだ……………。見る、この惨状を。勇者どもはこの場で…確実に全滅する。……………だが、お前まで共に死ぬ必要はない」

「嫌っ!……………あたしは……………あたしは!リロイたちの仲間よっ!

！」

ミロツドの杖に魔力が収束する。その熱波を感じ取り、僅かにイルダの瞳が見開かれた。

微かな舌打ちと共に、イルダも魔法を放つ。

—— ミロツドが放った魔法と、同じ魔法を。

「「ベギラゴンー！」」

灼熱が疾走し、ミロツドは僅かに顔を顰めた。

「……………見ただけで体得したか。まさかベギラゴンまで……………。ますます興味が沸いたぞ」

相殺し無傷のイルダが、にやりと笑った。

今は、まさに自分の切り札だった。……………打つ手が無い……………！！

このままでは全員が殺されてしまう。

どうすれば……………。—— 一体、どうしたら……………。

「……………ミロツド……………」

微かな声色に、はっとミロツドが足元へ視線を落とす。傍で倒れていたリロイとシシルが、意識を取り戻したのだ。

「このままじゃ確実に……………全滅だ……………っ……………」

「……………ん」

「……………僕に手がある……………」

風にかき消されるほど微かな声色で伝えられるその作戦に、ミロツドが眉を寄せた。戸惑いを隠し切れずに辺りへ視線を向ける。

シシルの作戦は、大胆なものだった。

しかし……………迷っている暇はない。……………確実に、待つのは死だからだ。

「どうした……。観念したか？ミロッド」

「……………」
スツと、ミロッドの杖が下がる。それに満足そうな笑みを浮かべてイルダが手を伸ばした。

「良い子だ。……………王もさぞかし満足するだろう……………」

しかしその瞬間、ミロッドはイルダの手を避け。……………何と床へ向けて魔法を撃ち込んだ。

伏せて、体力を温存していたリロイ、シシルも同じ魔法を同時に放つ。

「「「イオラ！！！」」」

「……………！？……………なっ……………っ！！！」

ドガアアアアアアアアアアアアッ！！！！

中級爆裂魔法といえども、三つの紋式が同時に発動すればそれはイオナズン級に高まる。

爆発は一瞬にして船を粉々にし、四人は海へ投げ出された。

「くっ……………！！……………ミロッド……………っ！！！」

イルダの怒りの声色が巻き上がる爆風に響き渡り。しかし次の瞬間その姿は一筋の光となり、何処へか撤退をしていた。

海中に大量の木片と共に、赤い帯が滲み出る。ミロッドは必死に水

面へ向けて手足を動かしたが、まるで力が入らない。
だんだんとその意識も薄れていく。

リロイ……………ソロ……………—— シシル……………っ……………！！

ゴボリ、と大量の気泡が口から溢れ。……………そして、ミロッドは意識を手放した。

どれだけの時間が経ったのだろう。ミロッドは微かな喉の渇きと共に目を覚ました。

「……………あ……………」

ああ、船の天井だ。

……………もしかしたら、あれは全て夢だったのではなかったのだろうか。

そう、揺らいだ意識のなか、ミロッドは考えてみた。しかし視線を動かすと自分と同じように寝かされている仲間たちの姿が目に入り。あれが現実のものだったと認識させられてしまう。

リロイも、ソロも、シシルも、皆、手当てされてはいるが痛々しい。……………あの状況で、犠牲一つ無く……………良く助かったものだ。

ぐつと、ミロッドは上体を起こした。倦怠感があってもミロッドには外傷という外傷はほとんどなかった。

イルダが自分へ攻撃をしてこなかった所為なのだが、正直喜べない。

……………それにしても。

———この船は一体誰のものなのだろう……………。

「おや。————— 気付いたかね、お嬢さん」

微かな音と共に扉が開いて、ミロッドは顔を挙げた。……………どうやらこの船の主であり、海へ投げ出された自分たちを助けてくれた人物であろう老人が部屋へ入って来る。

「はい。……………あの……………助けてくれて、ありがとうございました。

……………貴方は……………？」

「わしはプラム。たまたま船で通り掛かった者さね。……………驚いたぞ、中型船といえどもほぼ完全に木っ端になっておったし、漂流しているあんたたちは血まみれだし……………。魔物にでも襲われたかね？」

「プラム……………さん……………え？もしかして……………失礼ですが、プラムナツハールさんですか？……………うっ……………」

身を乗り出そうとし、ミロッドは不意に脇腹に鈍い痛みを感じ眉を顰めた。それを気遣いながらプラム老が首を傾げる。

「確かにプラムナツハールはわしの名じやが、……………ああ、無理しちゃいかん」

「あたしたち……………あたしたち、貴方を探して……………此処まで来た

んです……………っ!」

「……………わしを?どうしてまた」

「……………あたしの口からは……………。リロイ……………リーダーが目覚めますまで、待つて貰えますか?」

それから半日した頃、リロイもソロもシルも、何とか意識を取り戻す事が出来た。しかし、シルだけは全員にベホイミを掛けまくった為、早々にまたベッドへ戻って行ってしまったが。

リロイとソロ、ミロツドの三人は今までの大体の経緯をプラム老に説明をした。

自分たちがアリアハンの勇者一行である事。イエローオーブを探してプラム老を尋ねる途中で、魔物に襲われ船を失った事を。

「……………確かにそれに似た黄色い珠はわしが持つておる。昔、海底から引き上げた財宝のなかで眠っていた代物の一つでな。不思議と珠を手に入れた時から嵐に一度も遭遇しなくなつての。魔法の品か、航海の護りにと売らずに手元に残しておいたもんじゃ」

出された兄弟珠を見、呟いたその言葉に三人の間に安堵の息が漏れた。

「……………譲つて……………、いや、お金が必要なら、用意はする。……………」

… 売つていただけないだろうか」

「ふむ。……………まあ、魔王軍に関しては世界を色々回つて身だからの。陸の人間より知つてゐるつもりじゃ。—— 譲つて遣ろう

……………と言いたいところなんじゃがな」

「?」

言い洪るプラム老に三人六つの瞳が瞬きを強める。

「見たところ、すぐ出立も出来まい。まして、船も失つてはな？ど
うじゃ、わしはこの先にある小さな平原に村を作ろうと現在計画し
ておるのだが、その手伝いをしてくれんか？なあに、最後まで付き
合えとはいわん。小屋を一軒建てる事と、それとわしの助手になり
そうな者を近隣の部落から探して来てくれるだけで良い。その要求
さえ飲んでくれれば、わしの予備船一隻とこの珠をくれてやろう」

「——村あ？」

あまりに想像をかけ離れていた為にソロが目を丸くした。

「……村作りの手伝いか……。まあ、船が無い以上、条件を飲
む方が近道だな」

「賢いな、勇者どの。……では、契約成立じゃ。……とりあえ
ず、今日は船で休んでなされ。目的地に着いたら、起こしてやろう
……。ああ、食事は貯蔵庫に芋があるから、それを焼いて食うと
いい。薬類と包帯はその箱のなかじゃ。——わしは操

舵室にいるから、何かあったら呼びなさい、良いね」

出て行ったプラム老に三人が視線を交わしあった。

「……ポルトガの船乗りたちの話では偏屈だという事だったが……

……。良い爺さんじゃないか」

「……そうね。でも、不幸中の幸いだわ、船まで提供して貰える
んですもの」

「そうだな……」

カタンと椅子を押し、リロイが丸窓から外を見た。
微かに見える高い岸壁、あれがスー大陸であろう。

「——完敗だな。逃げるしか、出来なかった」

「……うん」

例え敵方の頭脳が父であつたとしても、誰もミロッドを責める者は
いなかった。慰めたりもしない。それが、逆に相手を悩ませる事を
知っているからだ。

それでも遣り切れない思いのミロッドは俯いたまま、リロイに微かな返答を返すだけ。それを見遣り、リロイが目を細める。

「—— ミロッドはミロッドだろ。おれたちの大事な仲間だ」

「うん」

「まあ……深く考えるなよ。無理かも知れないけどな。……いざという時は——俺たちだけで、手を下す」

「……うん——ごめん……」

短いやり取りの後、リロイが、そしてソロが、船室を後にした。一人船室に残されたミロッドは、船が揺れる度に揺らめきを強めるランタンの灯りを見つめ続け。

…… パパは……「あたし」を必要としてくれなかったけれど。…… リロイたちは、「あたし」を必要としてくれる。あたしが誰であれ、責めたりは……しない。

…… あたしの、居場所。
…… だけど……。

—— 次に、対峙した時……あたしは、パパを倒せるのだろうか。リロイの仲間として……。あの人に、勝つ事が……。

—— ママ……ママはパパの本当の事知って、どう感じたの……？

—— ママならこんなとき、どうするの……？

揺れる波。僅かずつ、確実に。陸地が近づいて来る。

大きな危機は、何とか回避する事が出来た。しかし自分たちの力の無さが、一層に感じられた一戦。

焦りと苛立ちを心に秘め、一行は初めての敗北を心奥深く、噛み締めていた……………。

20話 休息

「…………村作りの手伝い？駄目ね、自分たちので、私たち手一杯帰る、良い」

何度断られたか知れない。

インディア族の部落は数はそれこそ少ないわけではないが、どれも密林の遙か先にひっそりと存在している。

小屋作成の手伝いに残ったソロとミロッド。そして人材探しとしてリロイとシルが、それぞれ分かれて行動しているのだが…………。

小屋作成はともかく、プラム老の助手になりそうな人間はなかなかいない。

最近妙に数を増したモンスターの為に、他所に手を貸す余裕が無いのだ。

まあ、仕方が無いといえば、仕方が無いのだが…………。

こう、門前払いが続くと気が滅入ってくる。

「ふう…………参ったな。こりゃ時間掛かりそうだ。…………リロイ、まだ歩けるか？」

プラム老に借りた周辺の地図を見ながらシルが気遣う。しかし息が上がっているのはシルの方だ。

男女といえども、リロイとシルでは前衛職と後衛職。鍛えが段違いで違うからである。

「おれはまだ平気だけど…………。——一休みした方が良いな」

「僕はまだ」

「無理するな。…………ミロッドが作ってくれた弁当でも食べよう」

「リロイ…………っ」

座り込むリロイにシシルが声を掛ける。唇を曲げて、不満そうに。自分が足手纏いになるのは、嫌だった。しかしそれを察しているかのようにリロイが笑む。

「……………この芋のサンド、おれが手伝ったんだ。…食べてくれないのか？」

「そりゃあ……………食べる、けど……………」

吐息を吐いて、シシルも座り込む。正直体はほっとしていた。歩き通してクタクタだった足の血流が心地良く流れを取り戻すのを、感じる。

差し出されたサンドイッチを片手で抓み、口に頬張り。「美味しい」と小さく漏らしたその言葉にリロイが満足そうに自分も口にする。

そのまま片手で地図を調べながら。

「……………この先にウルファン族という部落があるらしい。陽の具合もあるし、そこで見付からなかったら今日はアウトだな。……………」

一度船に戻らないと」

「……………そうだな」

そう返したシシルの眉間に皺が寄せられる。回った箇所は数知れずだが、その幾つかは魔物の襲撃により壊滅していた。————

そう、あのテドンのように。

断られるのは辛い、まだ無事に生活しているだけ、この大陸ではマシなのだ。

「……………そろそろ行こうか」

クズを片して立ち上がるシシルに、リロイが見上げた。

「もう行くのか？————全然休んでないじゃないか」

「休んで食ったから、もう平気だよ。早くウルファンの部落に辿り着きたいしな」

「シシル……………。膝笑ってるぞ？無理するな」

「大丈夫だって！」

数十分後辿り着いたその部落は、やはり他の部落同様に防護とはとても言えない僅かな木の柵と獣の皮で編まれたテントの集落だった。「誰だ、旅の者。そこで止まれ」

石器槍に阻まれ、リロイとシルが立ち止まる。浅黒い肌の番人である男たちがわらわらと、二人の周りに集まって来た。

「リロイ……」と呟くシルに「大丈夫だ」と制しながら。

リロイが辺りを見回す。

「……………」。言葉が通じているみたいだが、部落長に会いたい。お目通し願えるだろうか」

「ウタパに会いたい？何故だ」

「ウルファンの者に頼みたい事がある。だから部落長に会いたいんだ。…………… 必要なら、獲物は外す」

「……………」

リロイの怯まないその言葉に男たちは顔を見合わせ。何やらボソボソと話し込んだ後、一人が村の中に駆けて行った。

奇妙な静寂のなか、数名の男たちと共に取り残される。

「…………… どうだろ……………」

「さあ、おれたたちが無害だとわかってくれれば良いんだがな。無用な争いは出来るだけ避けたい」

やがて男が戻って来、じろりと二人を見遣り。

「旅の者、ウタパが会われる。…自分たちと一緒に来る、良し」

嚴重な移送の後、二人はウルファン村の最も奥にあるテントへと案内された。そこで待っていたのは、目も判別出来ないような長い白髪の老人と、その身内であろうか、黒髪の女性が隣で物珍しそうに見つめている。

「私がこのウルファンのウタパ……そちらで言う、部落長にあたる、レムセンだ」

他の者に比べると格段に発音が良い。顎鬚を弄りつつ、穏やかな笑みを浮かべている。

「さて――頼みがあると聞いたが、一体何かな？見ての通りこの村は武力も財力もほとんど持たぬ細々と生きる村だ。貴方たちの期待には応えられないかも知れぬが、それでも良ければ聞こう」

「……初にお目に掛かります。実は此処の西の海岸線にて新たな村を建てようとしている者の使いとして参りました、リロイ。此方がシシルと申します」

リロイの紹介にシシルが隣で慌てて頭を下げ。

「ほう、村を興すのか」

「……はい、それで助力を貸して頂けるような者を探し、方々を当たって来たのですが……この村でお願い出来ないかと」

「ふうむ……確かに新しい地で生活を始めるには、その地の者に頼むのが一番だな。だが、……果たしてこの村でそれに見合う人材があるか否かだろう」

ごくりとシシルは息を飲んだ。レムセンの声色は優しくだが、その瞳はまるで獣のような鋭さを秘めている。

「只者じゃない、という事はリロイもひしひしと肌で感じ取ってはいた。」

人を動かす、それは容易ではない事だ。それはどの国にいつても同じ話。

――こういふ交渉。最後にものをいうのは、「信頼」――。

「……………何卒、宜しくお願いします」

再びリロイとシルが頭を下げる。

暫しそれを眺めていたレムセンだが、不意に横から別の声が掛かった。彼の隣に座っていた、若い女性の方だ。

「お爺さま、そんなに困らせてはかわいそうですね。手伝いなら、この私が行きます」

「———— ミリエル」

「この村で一番…知があるのはお爺さまの他に私だけですわ。私が、この方々と参りましょう」

レムセンは暫し女性…ミリエルを見つめ続けていたが、やがて一つ頷き。

「良いだろう。……………旅の方よ。ミリエルは十数年前難破した船より私が保護した他国の者だが、地の利に関しては村の者に引けは取らぬ。彼女で良ければ同行させよう」

「ありがとう、お爺さま。……………私はミリエルよ。宜しくね、お兄さん方」

そう挨拶をしながら、ミリエルはまるで太陽のような微笑を二人へ浮かべた。

「この村に来た時の事は…凄くちっちゃかったから、あまり覚えていないの。ウルファンの集落で…お爺さまに育てられて、色んな事を教わったわ」

密林を歩きながら、ミリエルが言う。

「皆は大好きだけど、いつか自分が暮らしていた国を探し出して、帰りたいかった。話で聞いただけのものとかも、実際に見てみたかつ

たわ。だから、外の世界から来た人がいるって聞いて、急いでお爺さまに同席をお願いしちゃったの」

「…………ミリエルさん」

「ミリーで良いわ。ええと…………リロイさんと、シシルさん、よね？」

「——ああ…………うん。じゃあ、ミリー。…もう集落には戻らないつもりなの？」

シシルが尋ねる。

育ての親とて、そう簡単に切り離せるものなのだろうか？

シシルにしてもそうだ。両親を失った後、預けられた叔父の元…………まるで実の子のように育てられた。出立を決めた前夜には、「頑張って来い」と力強く肩も叩かれ、励まされた。

自分の場合は…………旅が終わったら戻るつもりだった、それなのにほとんど境遇の同じ彼女は、戻るところか…………まるで逃げ出すような口ぶりで。

「そうね。…………このままだとお爺さま、絶対に私を手放さない気だったわ。…………愛してくれてるのはわかる。大切にしてくれてるのはわかるけど…………。私は籠の鳥じゃないもの。扉が開けば…………外へ飛び立つわ。それが、自然の摂理でしょう？」

「うゝん…………そっかなあ…………そんなものなんだろうか？」

「そんなものなのよ。窮屈なのは、もううんざり。——だから、村作りの話は、本当に良い機会だったのよ。…村が大きくなって…人が集まれば、街になる。そうしたら色んなところから…………世界中から、船が来てくれるわ」

プラム老のところへミリエルを連れていくと、すぐに二人は意気投合をした。年齢差は…………何十年かは知れないが、まるで久しぶりであった友人のように。此处には井戸を掘ろうとやら、整地しよう

等と、楽しげに相談している。

小屋作成の方は順調らしく、ねじり鉢巻の既に良い大工格好のソロが屋根の上から声を掛けてきた。

「おう、お疲れさん。——あの姉ちゃんか？見つけて来たの」

「ああ。ウルファン族のミリーだ」

来いよ、と促され。リロイとシルが屋根にあがる。藁ぶきの、良い香りが漂うなか、二人はその作業の手際の良さに吐息を漏らした。

「凄いなあ、これ全部ソロがやったのか？」

屋根を潰さないように慎重に這い上がりながら、感心したようにシルが呟く。

「嬢ちゃんや爺さんに危ない真似させられねーだろ」

「これ、もう完成じゃないのか？」

散った藁を手で弄びながらリロイが尋ねる。

「いや、後2〜3回敷き直してから、こなさねえと。中の方も天井が抜けないように張りを整えないとならねえし……」

「凄いなあ、とても自分には出来ない。ソロにこんな特技があったなんて知らなかったよ」

リロイの言葉にソロがくかか、と笑い。

「おいおい、本業はあくまで戦士だぜ？……ま、家に関してはなあ。実家建てたのも俺だし、それなりに知識と技術があったって事よ。——惚れ直したか？」

ふざけてリロイの耳元で囁くように呟き、そのまま頬に軽く口付ける。シルがあんぐりと口を開け、そして当のリロイはというと……数瞬間まった後、かああつ、と真っ赤に頬を染めて

そして。

「……………なっ……………な、ななななな、何する——っ！……」

ばきっ！……！

素でパンチがクリーンヒットし、「どわっ!?」という慌てた声色と共にソロは、地上へ転がり落ちていった。

「……………ばゝか」

覗き込むリロイの後ろでシルが半目でそういったのは、勿論当人には聞こえちゃいなかった……………。

「……………かんぱゝい!!!」……………」

野営テントのなかで、六人はミリエル歓迎の祝杯をあげていた。

食べ物も酒も、船の貯え分しかないので盛大に、というわけにはいかなかったが、それでも誰もが心からの笑顔を浮かべ。此れからの成功を信じてやまなかった。

「あの小屋の事じゃがな。もう大方は終わっているみたいだし、後はわしだけで十分じゃよ」

干し肉を掴みながら、そう呟いた言葉にソロが視線を上げる。

「大丈夫か？爺さん」

「いやいや—— あんたたちは精一杯やってくれた。……………」

旅路も急いでいるのだろうか？こうして、頼りになりそうなお嬢さんも連れて来てくれたしな」

「プラム老……………」

コツ、とリロイが果汁の入ったコップを置き、それからプラム老へ視線を向ける。

「え？リロイさんたち…もう行ってしまうの？折角、一緒に村作り出来るのかと思ったのに……………」

残念そうに呟いたミリエルにシルが苦笑した。

「僕たち、プラム爺さんの手伝いをしていただけなんだ。やらない

とならない事があって、その旅の途中なんだよ」

「ふうん……………残念」

ごそりとプラム老が置いてあった袋から……………黄金に輝くオーブを取り出し。リロイに手渡す。

「約束の珠だ。船も、出立する時に船倉から降ろそう。予備船といっても、わしが改造しているからな。ちょっとやさつとじゃ転覆なぞしないはずだ」

「ありがとう」

「……………全てが終わったら戻って来るといい。ミリーも会いたがるじやろうからな」

言葉にリロイが頭を下げ、イエローオーブを袋へ仕舞い込んだ。

「本当にありがとう。……………最後まで見届けられないのは残念だけど……………また、絶対遊びに来るから」

「ええ。……………あら？これ……………ねえ、見て？」

笑顔で頷いたミリエルだが、ふと、リロイ下げている袋……………先ほど、オーブを収納した皮袋から、微かな光が漏れている。

はつとしてリロイが袋の口を開くと、赤、青、黄、紫、緑の五つのオーブがまるで共鳴をするように光を放っていた。

「……………これは———」

「求めてるんだ、最後の一つを。最後のオーブを……………」

しかし問題が一つだけある。

ランシールで貰った地図に記された場所は、ネクロゴンド大陸……………

…魔王居城のほんの目の前の地だ。

イルダが襲って来た事を考えると、すんなりと在処まで通してくれるとは到底思えなかった。

「……………ネクロゴンド……………」

知らず呟いたリロイの言葉に、プラム老が眉を寄せる。

「あの地へ赴くのか。しかし、魔物もこの比ではないし、何より船だと浅瀬が多すぎて近付けんぞ。陸路も海路も難所だらけじゃ」
「……………」

それでも、道を探して行かねばならない。

最後のオーブの在処。それにネクロゴンドの地は……………父が、没した場所でもあるのだから。

黙り込むリロイの姿にソロとミロッドが吐息を漏らし。顎に手を当てたままプラム老が唸った。

「ふうむ……………。リロイ。……………サマンオサの勇者サイモンは知っておるかね？」

「勇者？」

尋ね返すリロイの隣で、「知っている」と返答するのは、ソロ。
「アリアハンのオルテガと同じく、強国サマンオサでかつて魔王討伐へ旅立った勇者だろう。旅の最中に行方知れずになったと聞いたが……………」

「そうだ。勇者サイモンもまた、オルテガ同様にネクロゴンドの地で消息を絶ったという。……………だが、サイモンには血を分けた息子が一人いての。……………もしかするとサイモンの息子が何か知っているかも知れんぞ？」

「サマンオサの地か……………」

どうする？という四人の視線を受け、リロイは暫し目を伏せた。

「考える間でも無い。……………手掛かりがない以上、可能性に賭けるだけだ」

「そうだな」

笑顔のまま三人が頷く。

「……………では、サマンオサまでの航路を教えてやろう。国境の関係で旅の扉と陸路をかなりの道のり、越える事になるが—————」
「……………」
そうして、プラム老は地図を広げ。木炭ペンを走らせ始めた。

翌朝、四人を乗せた小型船はゆつくりと陸地を離れ。

やがて水平線の彼方へと消えていった。

それをプラム老とミリエルは見届け。戻ろうとしたプラム老の背に、ふとミリエルが声を掛ける。

「……………ねえ、プラムさん」

「何じゃな？」

「リロイさんたちって、何者だったのかしら……………」
だって。

とても、ただの旅人には到底見えなかった。そんな疑問を浮かべた表情で、海を見続ける。

「彼らはな……………そうさな。……………最後の牙さ、我々、人類のな」

プラム老が笑いながら言い。その言葉にミリエルが訝しげに首を傾げる。

「人類の…牙？それどういう……………あ、待ってよプラムさんっ」

「ほれほれ、作業に戻るぞ。此れからは忙しくなるからの」

先に行くプラム老の背を追いながら歩を進め、もう一度ミリエルが海へ視線を向ける。

……不思議な人たち。

また会いたい。……でも今は、私に出来る事を精一杯……やろう。

私に出来る事は、立派な村を作り上げて……リロイさんたちがいつでも遊びに来れるような場所にする事なのだから。

まだ小屋一つの草地に向かい歩きながら、ミリエルはそう考えた。草地が村となり、村が街になるまで……それは遠い話にはならない事を、まだ誰も気付いてはいない。

21話 血濡れの王都 前編

勇者サイモンの話は、奇妙にリロイに親近感を持たせた。

サマンオサより出立しネクロゴンドで行方知れずとなった勇者サイモン。

アリアハンより出立しネクロゴンドへ散った勇者オルテガ。

似ているのだ。彼の息子と、自分の境遇が。

確かに情報得るのが最優先目的でもあるが、
—— 会いた
い。勇者サイモンの息子に —— そんな思いが過ぎつてな
らない。

一体どんな人物なのだろう？

自分と同じく、英雄として戦った父を…… 尊敬していたのだろうか。

船上で舵を取りながら、考え込んでいる様子のリロイに、シシルが近付いて来た。

「お疲れさん、リロイ。僕、交代するよ」

「え？…… あ、ああ。すまない」

はっとして舵から手を離れたリロイと入れ替わりにシシルが割り込む。それから視線を挙げ、僅かに首を傾げ。

「考え事でもしてた？さっき見た時、何か上の空だったから」

「…… あ、ああ。…… そんなに、顔に出てた…… か？ ——

ごめん、見張りも兼ねているのに」

「あーいや、別に良いんだよ。良いんだけど。……うん。ただ、どうしたのになって。また、ソロとけんかしたの？」

また、という言葉に（いつもけんかしてるように見られてるのか……）と、げんなりしつつもリロイが首を横へ振る。

「違う。……サイモンの事を考えていたから」

「勇者サイモン？」

「彼の事。……そして、その息子の事。あまりに自分と境遇が似てるから、つい」

「あ、そっか……」

察したのか、シルもポンつと手を打ち。

「どんな人なんだろな。会えたら良いけど。良い人ならいいよな」

「ん……」

懸念している事は一つだけある。境遇が似ているという事は、彼もまたサマンオサの地に留まっていけない可能性があるという事だ。

父の遺志を……、リロイもまた、それを理由に世界を巡っているのだから。

「まあ、サマンオサへ着くまでは考えても仕方ないよ。船室でミロッドがご飯用意してっからさ。食べて休んでおいた方が良いぜ？」

「そうだな……」

ふ、とリロイが笑み。そして頷いた。

「それじゃ、任せるよ。何かあったらすぐ呼んでくれ」

「了解」

数度の戦闘を経たが航海は到って順調だった。目標のサマンオサ国

境ともいえる地——尤も、サマンオサは非常に閉鎖的な国で、他国との交流も滅多に無い為その陸路は閉ざされており。向かうには旅の扉を使って赴かないとならなかったのだが。市街地に入るまで、大凡二日という行程だった。

度重なる戦闘。ランシールやジパング、そしてイルダとの激戦を越え、リロイの鋼の剣はもう限界に達している。幾ら磨いても、その修復さえ難しい刃毀れは寿命ともいえるものだった。

「サマンオサへ着いたら、まずは武器を調達したい。……ソロの斧もかなり傷んでるだろ」

武具の手入れをしながら、リロイがソロに声を掛けた。同じく部屋の隅で鉄の斧を磨いていたソロが「そうだな」と応じを返し。それから自分の鎧を指さして。

「それと鎧もだな。お前のそのランシールで手に入れた鎧は大丈夫だが、俺の鋼の鎧も大分ガタが来てる。サマンオサは魔法銀——

——ミスリルの生産地でもあるから、値段も張るが良い物が買えるだろう」

「そうだな。後はシシルとミロッドの武具も……」——
金面チェックをし、小さく吐息を漏らす。

魔法関係の武具は、兵士騎士用の武具よりも遥かに値段が高いのだ。「暫くは、芋生活だな」

諦め口調で漏らされたリロイの言葉に、ソロとミロッドが盛大に重たい溜息を漏らした。

—— サマンオサ国境の旅の扉は、厳重な警戒の下、守られていた。四人が訪れると青い鎧に身を包んだ兵士がその歩みを留めさせる。

「止まれ。—— 旅の者か。身分を証明するものは持っているか？」

「証明するもの……。精々このサークレットしか、おれは持っていない。アリアハン王から直々に頂いたものだ」

そう、リロイが自分の額のサークレットに触れる。いつも自然と身につけていたものだが、これは出立の際、アリアハン勇者としての証として与えられたものだ。

「……名は？」

「アリアハン、オルテガは子息のリロイ。理由あってサマンオサの地を目指している」

「オルテガの……！？」

流石にオルテガという名前を出されて兵たちの表情に動揺が走る。

……正直、父の名を使うのはあまり好きではなかった。

それでも必要な時には、使わないとならない事もある。……父さんも別に怒りはしない。そう、自分に言い聞かせながら。

「悪いが命は国家機密だ。詳しい証拠付けが欲しかったら、アリアハン国王宛に書簡を飛ばしてくれ」

兵たちは互いに顔を見合わせた後、ややしてから「お通り下さい」と敬語で、道を開く。通り過ぎながら、シシルが小さく口笛を鳴らした。

「リロイ格好良いじゃん」

「……そ…そうか？」

きょんとして振り返るリロイにソロがけらけらと笑った。

「おう、何か威圧感ばっちって感だったぞ。蛇に睨まれた蛙だな、ありゃ」

「…それ、褒められてるんだか、貶されてるんだかわからないぞ…
……？」

リロイたちが広野に消えたその頃、リロイを通した兵たちは別の兵
—— 身なりからして、国王直属の者であるう、男と話を
していた。

「……真か」

「は。……確かに、アリアハンの勇者の子息と……」

「…わかった。我はこれから国へ飛び、王に知らせる。……お前
たちは引き続き、番を続けろ」

「了解しました」

—— 恐らくは自分たちが巡って来た国々のなかで一番大き
かったところかも知れない。

最初に感じた感想が、先ずそれだった。

「……ふへえ」

「ちょっとシシル、そんな田舎者みたいな顔しないの。口閉じてっ。
……でも、ホントおつきいわよねえ……」

そう注意しているミロッドも、ぽかんとしている。ソロ以外は訪れ
るのは初めてなのだから仕方ない話だが。

……とても救世使一行とは思えない様子だった。

「おい、ちよろちよろすんなよ。はぐれたら実名で迷子案内出するか
らな」

田舎者三人…と苦笑しながらソロが先立って歩く。「あまりきよ
ろきよろすんなよ」とか後ろが煩いなか、ふとりロイが立ち止ま
った。

「ん？」

「どうしたの？リロイ」

「……声が聞こえる」

「え？」

ざわざわと賑やかな街の音に混じり。……風の音に乗って、何処
からか人の叫ぶような声色と、鐘の音。

「ホントだ、何だろう」

「……行って見ない？どうせ、宿の目星は立ってるんだろ？」
シシルの提案に他の三人も頷いた。

街並みからやや外れた場所にあつたのは、墓地。黒い服……喪服
に身を包んだ人間がたくさん、涙にくれながら棺を教会へ運び込ん
でいる最中だった。

「あなた、あなたあああ……っ……目を開けて……え……っ……」

喪主であろう若い女性がその棺に縋り泣いていた。先ほどの声色も、
彼女のものに違いなかったろう。

「……ねえ、おかあさん。……おとうさん、どうしてねてるの
？」

その裾を引っ張りながら、息子なのか小さな男の子。…父親の死を
理解出来ないのだろう、きょとんと、その様を見上げながら。

「―――― 葬式か」

ソロの呟いた言葉に、リロイはツキンと胸が痛んだ。

この光景は知っている。………… 兄が死んだ時だ。

泣き継る母親とその傍にいたのは………… 自分。 「兄の身代わりになる道」を選んだばかりの、八歳の自分。

ふらりと足元が不安定になるのを感じて、リロイは踏み止まろうとした。しかしその肩をしっかりと腕で受け留められる。

「！」

「おい、大丈夫か…………？ 顔色、真っ青だぞ」

「………… リロイ？」

はつとしたようにシシルとミロッドも心配そうに見遣っている。リロイは胸元を抑えたまま、コクリと息を飲み。そのまま頷いた。

「大丈夫だ…………」

「リロイ？」

「―――― 大丈夫」

………… 知っているか？ 子供が犬を追って王家馬車の前に飛び出したのが原因らしい…………。斬り捨てを命じたらしいが………… そいつの親が身代わりになって………… 子供の目の前で…………

………… しかし、王も酷な事をする…………。如何に無礼を働いたとはいえ、子供のした事じゃないか…………。あれじゃあまるで…………

…

この前は………… 踊り子の舞が気に入らないと………… 三人を…………

…

微かに流れて来る人々の囁き声。それを聞き掴んだ瞬間、リロイは、はっと顔を挙げた。

……馬車の前に飛び出したからと……死刑だって！？
馬鹿な。

アリアハンでもそんな話……聞いた事は無い！！

「——それは、本当なのか？」

体を支えるソロから身を乗り出し、リロイは小声で話し合う街人に声を掛けた。

「おい、リロイ……」

「……そんな理由で、人が殺されたのか？」

リロイたちが旅の一行だと悟ったのだらう。余所者に話せば自分たちが危うくなると感じたのか、一人、また一人とそそくさとその場を離れていく。

「……待つ——おいっ！！」

「……リロイっ」

「なかには生きたくても生きられなかった人がいるというのに。…

……そう簡単に死を……」

「——王は心変わりされたのですわ……」

気付くと先ほどまで棺に縋り泣いていた女性と子供の姿がそこにあつた。

険しい表情で、じっと此方を見詰めている。

「おかあさん、かえらないの？」

子供に尋ねられ、彼女は目元を拭いながら、「ええ、遊んでらっしゃい」と返し。

リロイたちの間をすり抜けるように子供が駆け去っていく。それを痛ましげに眺めた後、改めてリロイが女性へ視線を向ける。

「…………… どういう事なんですか？この国は…………… 死刑が……………」
そんなに頻繁に行われてるんですか？」

シシルが眉を顰めたまま、尋ねる。

「…………… 此処じゃ何なので……………。兵に聞かれると、厄介ですわ。私の家へ……………」

彼女の名は、シェリーと言った。質素な部屋で茶を出しながら、未だ曇った表情のままの彼女に、改めてリロイが尋ねる。

「心変わりされたと言っていたけれど、前は違ったのか？」

「…………… ええ。以前は優しい王様でした。…………… 夫… ケレスは祖父の代から王と面識があり… 私たち家族も、幾度か交流があったほどでした。…………… それが、五年前に病に伏せた後から、態度が豹変し…………… 気に入らない者がいれば、即座に死刑。税率も大幅に上がり、民が貧しくなるなか、自分は国政を行わずに金を湯水のように豪遊し……………」

語尾に涙が続き、彼女はハンカチーフで目尻を拭った。

「…………… テイト、…………… 息子的事件が起きた時も…………… まるで王様は私たちと面識が無いような様子で…………… 平然と斬り捨てを命じて……………。夫が必死に懇願しましたが、「なら、父親であるお前が身代わりとなれ」と言い放たれ……………。あの人は、その場で…………… あの子の、前で…………… 二度と生きて…………… 戻りませんでした……………」

「…………… そんな……………」

「私には、どうしても今の王と昔の王が同じ人だと………思えないのです。―― ふふ、ごめんなさいね。見ず知らずの方に、こんな事」

「シェリーさん」

「もし、旅途中で立ち寄っただけのなら、すぐこの国を離れて下さい。………夫の葬儀で会えたのも何かの縁ですし。………私はもう、これ以上誰かの死を見たくないんです………」

シェリーの家を出た後も四人は無言だった。サイモンの情報を求めて立ち寄った国。しかしこの国の悪政は………想像も出来ないほど、荒廃しきっていたのだ。

「………王に会う。会って、事情を説明して貰う」

ポツリと漏れたリロイの言葉に、ソロが眉を顰めた。

「―― 馬鹿、んな事したら俺たちが縛り首にされちまうだろ」

「………だけど………っ………」

食い下がるリロイにミロツドもまた首を振った。

「………どんなに悪事を働こうとも、どの国でも王様は一番偉いのよ。一介の旅人であるあたしたちがどうにか出来る問題じゃないの。………」

………シェリーさんの事もあるし、リロイの気持ち、わからないわけじゃないけど………」

「僕たちが今出来る事を、やろうよ………」

「アリアハン王に通達を流して話し合って貰うという方法もあるだろ。そう、急ぐな」

三人に説得され、ようやくリロイの肩の力が抜ける。

「そうだな………」

サイモンの息子を探しだし、そして自分たちの旅に戻る。それを決

心した矢先だった。

—— 数名の兵士に、突然取り囲まれたのは。

「なっ……………」

辺りの住人たちは、まるで腫れ物を触るかのような。僅かに見遣った後に怯えた動物のように建物の中に逃げ込んでいく。

訪れた静寂のなか、リロイたちはわけもわからず、その兵たちを睨み付けた。

先ほど国に入ったばかりの身で、こんな扱いをされる言われなど全くなかったからだ。

「…………… 何だよ、あんたたちっ！」

苛立ちを込めて叫んだシルを、ミロッドが抑えた。「一体何なの？」というミロッドの小声に、リロイが息を飲む。

「—— アリアハンのリロイというのは貴様だな」

「そうだが……………」

一体何を、そう尋ねるつもりだったがその声は兵たちの怒声により阻まれた。

「捕らえろ——！」

「！？」

腕を捕まれ、咄嗟に反撃しそうになる。「リロイ！」とソロが叫ぶのを聞き、はっとリロイがその方へ目を向ける。

「…………… 何が目的か知らねえが…………… っ、今は我慢するんだ。此処で暴れたら奴等の思う壺だぞっ」

「…………… ソロ…………… っ」

「いい覚悟だ。…………さあ！連れて行け！」

リロイたちが乱暴に兵に引かれ城へ向かう。それを一人の影がじつと見つめていた事は。

兵は勿論、リロイたちですら気付く事は無かった……………。

リロイたちが連れて行かれたのは、王城の王間。サマンオサ現王の御前である。

縄で腕を縛られたまま突き出され、リロイは一瞬息を飲んだ。すぐ傍ではシルが同じく手荒に扱われ「痛てーよ！」と、愚痴を漏らしている。

初老のサマンオサ王はまるで汚いものを見るかのような目つきで、リロイたちを見下ろしていた。

「…………御主らがアリアハンから来た自称救世使一行か」

「……………」

「答えろー！」

どう答えるか否か一瞬考えたりロイだったが、次の瞬間隣に控えていた兵士に顔面を蹴られ。僅かな呻き声と共にその場に崩れた。唇が切れて、血の味が沸きあがって来る。

「リロイー！」

叫んだ残りの三人も、すぐさま喉下に槍を押し当てられる。

「…………ふん、まあ良いわ。…アリアハンではちやほやされていたらしいが、この国は違つぞ。救世使なぞ、そのような詐欺まがいな輩。此のサマンオサでは死罪に値する」

「何だと!？」

「そんな無茶苦茶な!！」

「…………元々、救世使なぞ、人心を惑わし、世を混乱に貶めるような存在だ。おらぬ方が良からう。安心しろ…………アリアハン王には、勇者一行はサマンオサの地で戦死したと伝えておいてやるわ」

ひっひっひ、とやたら耳障りな笑い声を立てて王が笑った。

キツとリロイが上体を揺すり起こし、王を睨み付ける。

「…………貴様は王失格だつ。…………気軽に死を口に出来る者に、王たる資格なんかない!！」

「おうおう、良く言うたわ。…………明日の公開処刑はさぞ盛大なものになるであろうな。…………さあ、彼奴等を牢獄へ放り込んでおけ!！」

—————
ガシャン!———

一つの牢屋に荒々しく押し込まれ、その錠が堅く閉ざされる。

「ちつきしょ…………。俺たちが何をしたってんだ!——あの大ボケ爺めっ!——」

ガン!——と怒りも顕わに鉄格子を叩くソロを他所にシシルはリロイの口元に手を当てていた。

「ひどい傷だ。リロイ、痛むだろ……………」

「…………大した事無い」

ベホイミを施そうとするが、ふと何か違和感を感じたのか。シシルが眉を寄せた。

リロイから手を放し、自身の手を眺める。そのままぐっと、握り拳を作って。

「……………どうしたの？」

不安そうに尋ねるミロッドに、シシルが焦りの色を強めて。

「この牢、魔封が施されてる……………。くそっ！！」

万全の警備体制なのだろう。……………こうなったら獲物も全て奪われてしまっているし、もう自力で逃げる手立てはない。

「……………明日朝には処刑か」

「こんなところで……………こんな馬鹿げた事で、おれは死んでられない……………」

ぎり、と食い縛ったリロイの口の端に微かな血が滲んだ。その肩を安心させるかのようにポンポンと叩きながら、ソロが微笑う。

「安心しな。……………何があつたって、お前を殺させはしないさ。俺が生命にかえても……………お前の道だけは、作って遣るから」

「……………！？」

何か言いかけたリロイだったが、不意に抱き締められ。その目を瞬きさせる。シシルも、ミロッドも、微笑んだままだ。

「お前だけは、必ず守ってやる」

「……………っ……………駄目だ！……………全員が助からなければ、意味がない……………っ。そこまでして生き延びて……………そんな事されても、おれは嬉しくないっ」

「それでも……………世界を救えるのはお前だけだろ？……………リロイ」

「僕もさ、……………こんな事で死ぬのは癪だけど……………リロイの為なら別に惜しくないよ」

「そうね。リロイに助けられた生命だものね……………あたしも」

皆……………何を言っている？

リロイは眩暈を感じながらも必死で首を横へ振った。

「違……………違……………違……………違……………おれは……………嫌だ、そんな

のっ……………」

「…………… 勿論最初っから諦めちゃいないさ。…………… あがいてあがいて。…………… 生にしがみ付いてやる。俺たちは、生きているんだからな」

ソロが牢屋の外の漆黒を睨み付ける。

無駄死にはしない。

勇者の仲間…………… その真の意味を。その役目を最期まで果たす為に最後まで、決して…………… 諦めたりはしない———。

22話 血塗れの王都 中編

翌朝――　　――　　ようやく陽が昇り始めたばかりの、そんな時間。四人は城の中広場へと連れて行かれた。

既に街には今日の処刑の報が通っていたのか、幾人かの見物人の姿もある。……そしてリロイは見た。そのなかに、今にも泣きそうな、シェリーの姿がある事を。

何か叫んでいる。だが、それも此処では聞こえる事は無くて。ただ、苦笑だけを返す。

――　　彼女には、申し訳ない事をしてしまった。

「……………」

「さあ、出る！！」

広場には勿論魔封結界が施されている。縛られてこそなかれ、リロイたちはそのなかへと押し出された。

「……………結界が此処にも―――」

「なーんか嫌な予感するな、僕」

「あたしも……………」

「おい。……………お前等、リロイの周りを離れるなよ」

ソロガリロイの前に立った。

「―――　　皆の者、聞け！！……………此れより、救世使と語り人民の心を惑わせた大罪人の処刑を始める。……………柵を開けい！！」
王の声と共に、前方の柵が大きく上げられる。……………奥から漏れ出でるのは、唸り声。

どうやら、予想は大当たりしたようだ。

闇のなかから出て来たのは……………三頭の青い大猿……………コング。
「……」

「ふはははは！……………我がペットのコングたちだ、可愛かるう？

—— さあ、朝食の時間だ。たんまりと ” 救世使 ”
の血肉を味わうが良い——」

王の声に反応したかのように一斉に大猿たちが四人に襲い掛かった。獲物も防具も、魔法すら使えない状況の彼らには、逃げるしか手立ては無い。

「ちいっ……………！！」

「きゃあっ！！」

避けるにしても限度がある。ましてさほどの広さも無い広場だ。次第に疲弊する体は動きを鈍らせていく。まさに狩猟の兎状態である。

—— 例えどんなに修練を積んだ熟練者であっても、人間である以上——
—— 限界があった。

「……」 危ねえっ……………！！」

突然、叫びと共にリロイが範囲外へ突き飛ばされる。……………突き飛ばしたのは、ソロだ。

コングの攻撃の範疇から外れた事を横目で見取って、にやりと笑ったその表情が。リロイの表情を凍てつかせる。……………そしてその瞬間。

リロイを狙っていたはずのコングの豪腕が、ソロを大きく、弾き飛ばした。

「がはっ……………！！！！」

「……………ソロ—— っっ……………！！！！！！」

「わあああつ！……！」

「きゃ、あああつ！……！」

「シシル！……ミロッドっ！……！」

ソロが、シシルが、ミロッドが。眼前でコングに容赦なく殴られ、噛まれ。血に染まっていく。

—— 動け、体……！！

動いてくれ、頼む……！！！！

「—— ひやははははっ、死ね、死ねっ」

動けないでいるリロイの耳に、王の非道な笑い声が飛び込んで来た。それを聞いた瞬間、リロイの躊躇されていた指先が、ぴくりと揺れる。

…… させない。

—— こんなところで、終わらせない！！

チリ……と、何処かで、何かが揺らいだ。

自分は勇者だ。……守られるばかりじゃない。……守るのは、自分だ。

今、皆を守るのは、自分だけなのだから。

—— 父の血よ、英雄の血よ。

自分に流れているのなら —— 頼む。

皆を救う力を……今一度……！！！！

サ……と空が翳り始めたのを、魔物にやられた脇腹を抑えながら、ソロは見挙げた。

「………？」

「もう……誰も殺させは……しないっ!!」
皆は
このおれが守る!!」
リロイが叫んだ瞬間。立ち込めた暗雲から光が生じた。光は一瞬全てを包み込み。……そして。

ガカアアアアン!!

「うわあっ!?!」
「ひっ!!」

観衆から悲鳴があがるなか、天空から伸びた聖雷が、コング三体と魔封具全てを、打ち砕いた。

「こいつは」

「ライデインだ!!」……あの魔法……
リロイ……っ!?!」

そう。

ヤマトノオロチを倒した時に見せたあの力だ。
三人の視線が、リロイへと向けられる。

ゲオオオオオオ!!

裁きの雷を浴び、全身を一瞬にして焼き尽くされ。悲痛な叫びと共に

にコングたちが次々とその場に倒れ絶命する。

「……………何だと!？」

驚きを隠せないのは王だ。憎々しげに魔封を打ち破ったりロイを睨み付け、そして狂ったように四人を指示し叫ぶ。

「おのれ……………っ。よくもわしの可愛いコングたちを!!」

――殺せ!今すぐ殺せ!!奴等を生かして此処から出すな――

――っ!――!」

控えていた兵たちが一斉に四人に向け、弓を向ける。

――此れまでか。

そう感じ、ソロが舌打ちをした

……………その瞬間。

「ラナルータ!!」

叫ばれた魔法と共に、一瞬にして光が闇に包まれる。突如訪れた漆黒に兵が動揺した瞬間。リロイたちは上空からの声に気付き、視線を向けた。

「おい、こっちだ!!」――見えるか!?そのロープを伝つて……………早く!!」

ぼんやりと見物席側に伝ったロープにソロが気付き、リロイを見遣った。

「行くぞ!!」

動けないシルとミロッドをそれぞれが支えたまま、二人はその方へ駆け出した。

「な、何している!!撃て、撃てえっ!!奴等を逃がすなっ!!」

王の叫びが闇のなか、木霊し。無差別に弓矢が一斉に射られた。

何処かで悲鳴があがる。流れ矢が、民間人にまで及んだのだ。

「!?!……………まさか……………っ」

「リロイ、急げ……………」

何て奴だ。……………何の罪もない人間まで平気で巻き込むなんて……………

やがてラナルータの魔法が解かれ、周囲に光が戻ったその時には。
「大罪人」も「加担者」も、その姿は何処にも無かった……………。

脱走を手引きした男の案内により、四人はサマンオサ郊外の森の小
屋まで逃れる事に成功した。
リロイとシルが回復魔法を施し、何とか四人は大事に到らずに済
んだ。

「……………助けてくれて、ありがとう。だけど、どうして……………こ
んな事をしたら、あんたが危ないんじゃないのか……………？」
一息吐いた頃、そうリロイが尋ねた。

「……………まあ、危ないって言えば危ないな。だけど、俺は元々追わ
れている身だから……………それほど気にしじゃないさ。君たちを助
けられただけ上々だ」

魔法剣士らしい風体。長い紫の髪と細めな青い目を持つその男は肩
を竦め、笑いながら。白湯を四人に出した。

「……………追われた？」

「……………君は、アリアハンの勇者オルテガの息子らしいな。——

——俺は、サマンオサ勇者サイモンの息子、セーレン。君がこの

国に入ったという噂を聞いてずっと探していたよ。見つけた時にはもう、兵に先回りされてしまってたけど、ね」

「……………あんたが!？」

リロイが驚いた声をあげ、ソロとシシル、ミロツドが驚いたように顔を見合わせる。

「……………だが、勇者の息子がどうして王に追われているんだ? 余所者はともかく、あんたの父親はかつてはこの国を守った英雄だろう?」

ソロの言葉に、セーレンが苦笑を浮かべる。

「確かに……………親父は国を守り、英雄と謳われ、勇者として認められ旅に出た……………。しかし、親父がネクロゴンドで失踪した直後、王は豹変した。罪無き者たちの大量殺戮、国政放棄……………」

あの真面目な王がどうしてそんな事を、ってね。……………どう

しても気になった俺は、国内で暫く情報集めていたんだが、その時、信じられない事を聞いてしまったんだ。行方不明の親父が……………邪魔者として孤島の牢獄で秘密裏に葬られたという話を」

「!？」

「……………王はそんな事をする人間じゃない。……………そして…

あれこれ詮索しているうちに、王は今度は俺の身を拘束しようと兵を向けて来た……………。だから俺は考えた。今の王は……………もしかしたら、魔物が成り代わっているのではないかと。……………そしてその事に勘付き始めた俺を始末しようとしているのでは、とね……………」

その言葉にリロイが黙り込む。

自らも投獄されてから、ずっと考えていた一つの可能性だったからだ。

まだ記憶に新しいジパングでの大蛇騒動。……………あれも、魔物が女王になりすまし人心を惑わしていた一つの形。

もし同じように、このサマンオサを内側から滅ぼす為に魔王軍が送り込んだ魔物だったら……………。

「……………サマンオサの王様がモンスターなら……………。ヒミコの時み

たいに倒しまえれば良いんじゃないのか？」

ポツリと疑問を漏らしたシルに、ソロが首を振る。

「駄目だ。……仮にそうだとしても、奴はヒミコと違い本性を顕わしているわけじゃない。人間の姿の時に斬ったら……どうなる？」

「あ。……確かにやばいな、そりゃ……」

頬をかくシルの横でセーレンが深く溜息を漏らし。白湯の入ったカップを置いてから、ふと口を開く。

「手はあるんだ。……此処の遙か南にある毒の沼地の洞窟に、あらゆる真実の姿を映すという鏡が眠っているという伝承がある。……」

……女神ラーの魔力を秘めた鏡。それが実在するのなら、奴の正体を暴く事も可能だと思っただが……。俺一人では見張りが厳しくて、その洞窟には近付けなかった。……万が一、奴に鏡の存在が気付かれようなら……。先回りされて鏡を破壊されてしまう可能性があるからな」

「女神……ラーの鏡。……それがあれば、もしかしたら……。？」
確認するように尋ねるリロイにセーレンが頷いた。

「なら、おれたちが行く。……鏡を手に入れて、奴の正体を暴いてやる」

「……リロイ」

「もう誰も殺させはしない。……奴の凶行は……。おれが終わらせる」

もうあんな思いをするのは嫌だ。

そんな感が強いのを察したのか、ソロが眉を寄せ。「ああ」と短く頷いた。

「そうね……。あたしも、あの王様は絶対に赦せないわ」
「……セーレン。洞窟への道を教えてくれるか？」

迷いなく立ち上がったリロイに、セーレンが眉を寄せた。

「伝承に残っているだけで本当に存在しているのかすら疑問な産物だ。洞窟内部も魔物が大量に蔓延っている——。それでも、行くのか？」

「可能性があるなら行くさ。…………俺の父さんも…………——勇者サイモンも、そうするはずだ」

にこりと笑うリロイにセーレンは一瞬息を飲み。それから、ふっと自らも笑みを深めた。

「……………そうだな。勇者たる者なら、そうするはずだ……………」

——流石、真の勇者と謳われた英雄オルテガの子息だ。君は本物の勇者だよ、リロイ」

言葉に、リロイが照れるような表情で視線を外す。

「……………そこまで立派じゃない」

謙遜するリロイにセーレンが黙って首を横へ振って。

「……………連中の注意を引き付ける必要がある。俺はわざと兵に見付かって逃げるから、その隙に洞窟に入ってくれ。大人数で行くよりずっとリスクが低い」

「大丈夫なのか？」

「何、俺も英雄の息子だ。此れくらいの事出来なきゃ、親父に笑われるさ」

——とりあえず今夜はゆっくり休んでいつてくれ。

そう言ったセーレンの言葉に甘え、四人はあの混乱とした前夜を引き摺りながらもようやく安息の一時を過ごす事が出来た。

庭先で夜風にあたり涼んでいるソロのところへ、リロイが出て来る。

…ソロが出ている事を知っていたのだろう。彼の背を見つけても、さほど驚いたような表情は浮かべず。静かに、声を掛けた。

「ソロ」

「……………ん？ああ、リロイか。……………どうした？」

「少し……………風に当たりたくて。……………隣良いか？」

言葉にソロが目を細め。「ああ」と、そのまま向き直る。ソロの横にしゃがみ込み。満天の星空を眺めながら、……………ふと、リロ

イが口を開いた。

「…………… お前たちが身をていして魔物から守ってくれた時、おれは
…………… 自分の不甲斐なさを悔やんだ」

「……………」

「…………… お前たちはおれを、守ろうと…………… してくれたな。だけど、
おれは…………… おれは、勇者だ。守られる身じゃない。本来は守る側
に立つ身なんだ。———— 今回の事で、自分の無力さを突き
つけられた気がする」

「リロイ……………」

立ったまま、見下ろすソロの視線を感じ。リロイはしゃがんだまま
膝に顔を埋めた。

「選ばれし者が使える魔法…………… ライデイン。…………… 未だおれはあ
の魔法を制御する事が出来ない。おれは…………… 勇者として認められ
ていないのかも知れないな。…………… 所詮は ” 本物の勇者 ”
である兄の身代わりに過ぎない、偽りの……………」

「リロイ！」

遮るように叫ばれ、リロイは、はっと視線を挙げた。ソロが、じつ
と険しい表情で見つめていた。

「…………… お前は立派な勇者だよ、リロイ。セーレンも言っていたじゃね
えか。同じ思いを、俺たちも感じてる。だから———— ……」
…………… だから、そう自分を責めるな」

「…………… つ…………… だけど、おれは……………」

「勇者。…………… 勇ましき者。…………… 俺らはな、幾度とお前のその真つ直
ぐな勇氣に…………… 正義感に、励まされ続けたんだ。だからこそ、こんな
死地と向かい合うような旅を続けて来られた。そう信じてるぜ？」

「……………」

どさりと隣に座り込んだソロが、押し黙ってしまったリロイの髪を
くしゃくしゃと撫でる。

「自分を信じる。…………… 親父さんの血じゃねえ。兄貴の身代わりとして
の血でもねえ。お前自身の血だ」

「おれの……」 おれ自身の血……」

「俺あな、オルテガの娘だからってお前に惚れたわけじゃないぜ？」

ソロの言葉に、さつと頬に朱を差し。リロイが俯いた。

「お前」 だから好きになったんだ。……それを忘れるな？」

俯いたまま、草地を立ち上がる音が聞こえ。足音がどんどん遠ざかり……。やがて、ボタンとその扉が閉まった。

—— 自分を信じる。

「自分を……信じる……」

その言葉は、リロイの心に深く刻み込まれ。

「……ありがとう……ソロ……」

胸をきゅ、と抑えながらいつまでも、いつまでも。吸い込まれそうな星空を眺め続けていた。

23話 血塗れの王都 後編

「あ———っ！——！待てこら、シシルっ、開けるなっ！！」

ソロが叫んだと同時にシシルが「うわあ！！」とその宝箱から手を離す。半瞬遅かったのか、僅かに開いた宝箱がまるで意思を持ったようにガバツとその牙に溢れた。口を開いた。

……虫は餌を取るのに擬態をする事がある。この魔物も、まさにそれだった。宝箱の姿をし、欲に目の眩み近づいて来た人間たちを食らおうする魔物……ミミックだ。

「だ———っ！この馬鹿っ！！あれほど注意しろって言ったじやねえかつ！！！」

「———んな事言っただって、こんなに宝箱があるんじゃない……」

「……！！」
「ある事自体不自然なんだよっ！！いい加減学習しろ、賢者さまっ！！！」

ぎゃあぎゃああと口論する二人にミロッドが杖を翳しながら、今にも飛び掛って来そうなミミックを見遣る。

「そこ、じゃれてないで……！来るわよっ！！！」

リロイが駆け出し。手にしていた鋼の鞭を一気に振るい波立たせた。扱い慣れない武器だが、そうも言っていられない。

鞭に上蓋との境目を絡め取られ、力任せにミミックが引き倒される。

「ソロ、シシル！！……早く！！！」

あの城の一件で、リロイたちは装備の全てを失ってしまった。勿論、そのままの状態で魔物の巣であるこの地に踏み込む事は不可能だ。

その為、洞窟に潜る際にセーレンのお古を幾つか借り受けたのだ。リロイには鋼の鞭と鋼の鎧。ソロには鉄の槍と鉄の鎧。シシルには理力の杖と鎖帷子。ミロッドには魔導師の杖とみかわしの服。

どれも強力とはいえない武具だが、丸腰で洞窟に潜るよりずっとマシだった。

此れだけの物が揃っていたのは、セーレンが魔法戦士であったおかげといって過言ではない。

「せえーのー!!」

魔力を打撃力へ変換させた杖と、ソロの槍が同時に宝箱に突き込まれる。

ドガッ!!と鈍い音と共に一瞬ミミックの動きが留まり。全員がやったか、と思った瞬間。鞭で固定をしていたリロイが凄まじい力で引つ張られその場に転倒した。そのまま、鎖ごと引き摺られる。

「……………うわっ!?!」

「!?!リロイ……………どわっ!!」

一瞬リロイに気を取られたシシルのすぐ眼前にミミックのピラニアのような鋭い牙が迫り、慌てて上体を逸らした。その肩をソロが掴んで、シシルをミミックの範囲外に放り出す。

「気を付ける、こいつまだ元氣だぜ!」

「うん……………っ。……………え?」

後方で魔法を使うタイミングを計っていたミロッドが、不意にミミックの体内に魔法が渦巻いているのを確認し目を細めた。

この紋式は、一度見た事がある。……………此れは?何処で……………。

……………あ!!!!

はつとした時には既に遅く。

「待っ……………!!……………シシル!!」

「え?」

ザキ……………!!

叫んだ名前とミミックの呪詛が放たれたのと、ほぼ同時だった。

「!?!」

咄嗟に耳を塞ぎシシルがその場に転がる。それ以上精神に呪詛が及ばないよう、必死に魔法反射…マホカンタの魔法を唱えシールドを

張りながら、跳ね起きて。

「……………つ。あ、あ…あつぶねえっ……………！！」

「何っー魔法使っんだ、こいつ……………！！ぶっ壊してやるっ！！」

ズガッ！！と、ソロの槍が真上から真下まで一気に突き込まれ。ミミックは一瞬、ヒクツヒクツと、その蓋……………口であるうが、部分を蠢かした後によりやくその動きを留めた。

暫しの緊張の後、全員の口から疲れに似た安堵の息が漏れる。

「……………とんでもねえ強敵だったな……………あんなもん使って来るたあ……………」

「な、なあ。まさかと思うけど、さ。この辺りに落ちてる宝箱ってもしかして全部……………」

暗闇に浮かび上がる、無数の宝箱をシルが見渡し、ぞっとする。

暫し全員は無言になった後、立ち上がったリロイへ視線を向け。

「……………早々に先に進んだ方が良いな。鏡が宝箱に入っていないなら、良いんだけど」

「そうだな。あんなのがたくさん襲って来たら…まず勝ち目ないぜ」

「あーあ……………こんな事なら畏識別魔法覚えとけば良かった……………」

骸骨剣士やゾンビ、そしてそれを操るゾンビマスター等を蹴散らしながら、一行はほとんど下層へ降りて行った。

そして長い道程の後……………朽ちた祭壇で、ついに目的の鏡を見つける事となる。

「この鏡が、ラーの鏡……………」

リロイに視線を向けたミロッドに、全員が頷く。ツン、と指先で突つき、安全を確認した後ミロッドがそれを手にし。

「——やばい……ミロッド……」
「リレミト……」

憎悪に満ちた気配が4人に迫り来ると、リレミトが発動したのは
ほぼ同時だった。

まさに間一髪。

こうして一行は女神ラーの鏡を手に入れる事に成功したのである。

——深夜のサマンオサ城の城門前。……そこにリロイ、
ソロ、シシル、ミロッド、そしてセーレンの姿が現れた。…リロイ
の懐には、ラーの鏡。しっかりと、大切に忍ばせている。

「……正直、君たちが鏡を見つけられると思わなかったよ」
苦笑を浮かべるセーレンにリロイが肩を竦め。それから高い城を見
上げた。

「それで……此れからどうするんだ？」
「王は就寝時、見張りを一人も置かずに最上階の寝室で眠るらしい。
おかしいだろう？一国の王ともあるう人物が。無用心すぎる。……
…そこで、裏口から侵入し最上階を目指す。一部の兵士は俺の仲間
だから、協力を得られれば何とか辿り着けるだろう」

「つまり、王さまの寝顔を映してみるって事か。……………見付かったら今度こそ確実に死罪だなあ」

呟いたシシルにリロイが視線を向けて。

「かなり危ない賭けになるだろうな。……………だから強制はしない。行くも戻るも個人の判断に任せる」

「僕は行くよ。リロイたちだけ危ない真似させるわけにいかないからな。それに支援魔法あった方が心強いだろ？」

ニツと迷い無く笑うシシルの笑顔に、リロイが苦笑を深め。

「……………ああ、シシルが居てくれるととても心強いよ。じゃあ、皆
————そろそろ行くぞ」

無言で全員が頷きを返す。

こうして、深夜の隠密劇が始まった

。

日頃、王の凶行に疑問を持ちながらも恐れのため離れる事が出来なかった兵士たちはかなりの数いたらしい。

まあ、多少なりとも人間の思考を持つ者なら大抵はそう思うのが自然であろう。

それでも家族や自分の身の安全の事を考えると行動出来る者はそういない。そんななかでこうして手助けをしてくれる小さな勇気は、リロイたちにとって感謝以上に尊敬にあたる行為だった。

「……………このまま上に行きますと、別棟の最上階へ抜けられます。その窓から、少々強引ですがテラスへ飛び移る事が可能です。…

……………どうか、ご無事で、セーレンさま」

「ありがとう。お前も早く持ち場へ戻れ。……………何もなかったよう

に振舞うんだ、良いな」

「はい」

裏門番の兵士から渡された見張り棟の鍵を手には五人は息を飲んで先に進んだ。

敵は王だけじゃない。もしかすると、城の兵のなかにも魔物が潜んでいる可能性は捨て切れないのだ。

……既に知られているかもしれない？

歩きながら、焦りだけが先をつく。

「……… 此处だな」

見張り棟の最上階へ出るとそこは小さな小部屋となっていた。硝子窓が一枚あるだけの、何もない部屋。念の為、部屋の鍵を掛けた後にソロが窓をこじ開ける。

見下ろすと、そこは王室のテラスのほぼ真上の位置にある事が確認出来た。………問題は、高さ。どう見てもゆうに建造物2・5階ほどの高さがある。取っ掛かりは無く、飛び降りるしか方法はない。

「さて。………セーレン、あんたは降りれるよな？リロイも平気か？」

「ああ——。あれなら、何とか」

「多分大丈夫」

二人の返答にソロが頷いて。それからくるとシシルとミロッドへ視線を移す。

「お二人さん方はどうする？………お前らじゃこの高さは無理だろ」

「そうね………」

「ソロはシシルを頼めるか？おれがミロッドを抱いて降りる」

「ええ！？僕は大丈夫だよ」

リロイの言葉にシシルが慌て。目を細めたままソロがにやりと笑った。

「ろくに体力もねえ賢者さまが落っこちて骨折したら大変だからな。この俺様が、ご丁寧に、《姫抱き》で、お連れしてやるよ、おらっ——！！」

「ぎゃーっ！やめろっ！！」

キスを迫ろうとするソロにシルが悲鳴を上げる。その様子を見て、リロイとミロッドが笑いを零した。

—— 此れから激闘になるかも知れないのに、何でこんなに緊迫感がないのだろう……。

和みあう4人の姿に呆気にとられた表情でセーレンが見つめていたが、やがて小さく吐息を漏らし。

「それじゃあ、俺が先に降りるな。—— よっ………」
そのまま、漆黒の空へ身を躍らせた。

…… サマンオサ王寝室。

カチリ。セーレンが慎重に開錠した大窓が、音もなくゆっくりと開かれる。五人は息を飲んだまま奥へ視線を向けた。

巨大な寝所に、横たわる王の寝姿が、そこにある。そしてまるで別の生き物のような、奇妙ないびきを、盛大にかきながら。

「……………」

セーレンが頷き。それを合図にリロイが懷から鏡を取り出す。月の煌きもないまま、僅かな星明かりだけが、ぼんやりとラーの鏡に在るべきものを映し出す。

そしてそこに顕われたのは。

—— 王と同じ寝格好で、大いびきをかいている、巨大で醜悪な…… 紫色の巨人の姿。

「…………… ポストロール…………… !? 」

反射的に口にしたセーレンの言葉と同時に王の目が、かっと開き。

その姿が見る見る鏡の姿と同じ魔物の姿へ変貌していく。

見いたなあ……？

キングサイズのベッドがギシツと軋み。そのままズンっ！と、支柱が潰れた。

全員が獲物を抜き、王……いや、ボストロールを睨み付け。

魔法の基本式を組みながら、シシルが引き攣った笑みを浮かべる。

「へ、へへ。こうなったらもう言い逃れ出来ないよなっ。観念しろ、化け物めっ！！」

こ……これは……ラーの鏡！？……きざまらあああ、これを、何処で手に入れたああ”！！……！？セ、セーレン……おま”えがあああっ

「此れまでだな、王様ごつこも。……お休みの時間だ、ボストロール！……父の無念を晴らしてくれる！」

セーレンが鋼の剣を抜き駆け出す。リロイもソロも、同時に駆け出し。

「バイキルト！」

シシルとミロッドが同時に叫んだその魔法で、武器の鋭さが一気に増した。

お、おのれえ”ええええっ！！——がえり討ちにしてくれるわ”！！

「極力死角から狙え！……一撃を食らえば、間違いなく即死だぞ！！」

「……こいつどんな筋力してんだっ！！くそっ！！」

ボストロールはベッドを振り回しながら三人の攻撃を弾き続けていた。

狭い室内、相手は勿論自分たちも満足に動く事は敵わない。一撃が

振るわれる度に、壁や床に巨大な陥没痕が生じていく。

「魔法で攻めろ！こいつは魔力に弱いはずだ——」
衝撃音の合間にセーレンのアドバースが飛び交う。

ギロ、とボストロールの醜悪な巨大な目がセーレンを捉え。そのまま豪腕を振るった。

「——」
咄嗟に盾で防ごうとするが、威力は完全に殺せない。ミスリルの盾が砕かれ、セーレンが壁に叩きつけられた。

「——」
追撃のように飛んで来るテーブル。だが、セーレンは動けない。

「——」
セーレン！！」
ソロが叫んだ。割って入ろうと飛び込むが、距離が足りない。間に合わない——！！

「伏せるセーレン！ソロ！！……イオラ！！」
リロイが叫んだ呪文に木製のテーブルが瞬時に粉々に破壊される。降り注ぐ木端にセーレンが表情を顰めて。それから跳ね上がるように立ち上がった。

「すまない」
口角に滲んだ血を強引に拭い去り、セーレンは再び剣を取った。

「……ヒヤダイン——」

「マヒヤド——」

くおおおおおっ——！！

トロールという魔物はその巨体ゆえに打たれ強い事である。しかし、シシルとミロッドの度重なる魔法に押され、徐々にその攻勢は劣勢へ追い込まれていた。

「——」
「らあ——」

ソロの鋭い一撃が、ボストロールの右腕を大きく切り裂く。
耳が痛くなるような絶叫に顔を顰めながら、振り返るようにリロイ

を見遣った。

「今だ!!」

リロイとセーレン、二人の剣撃がボストロールの胸部目掛けて吸い込まれていく。

見事なタイミングだった。――そう。

二人は知らなかったが、勇者オルテガと勇者サイモンも、かつて共闘し、同じようにして強敵を倒した事があったのだ。

――まさに二つの血はその再来だった。

「はあああああつ!!!!」

「――これで終わりだつ!!!!」

ザンツ!!

吸い込まれた二つの刃が交差し、ボストロールのぶ厚い皮膚を貫いた。

やめ”……………痛い、いだ――あああああつ!!ぎゃあああああつ!!!!

ズズ……………ドオオオオオツ!!

ついにその巨体が絨毯を横ずりに倒れ込んだ。じわりとその奇妙に緑色の体液が、それに滲み出、……………びくつびくつ、と数度痙攣を起こした後、二度とボストロールが動き出す事は無かった。

「はあつ……………は……………」

「王!王様、如何されまし……………ひっ!!」

物音を聞き駆けつけた兵が惨状に悲鳴を挙げ。その場に腰を抜かせ

「……………おい!!」

息を切らせながらサーレンがその兵に向かって怒鳴る。

「ひっ、ひいひ!!?」

「今すぐ牢に入れてある者を全て開放するんだ!王に立ち入りが禁止されている区域も全て!!……………急げ!!」

状況を飲むまでやや時間がかかったが、兵はやがて集まって来た者たちと共に地下牢へ向かい駆けていった。

「……………大丈夫か?」

リロイが座り込んでいるサーレンのところへ近寄り。その傷ついている箇所にはベホイミを施してやる。

見るとシルもまたミロッドとソロにベホマを施していた。

「ああ。全員無事に生き残れて良かった……………。———こ

うして奴を倒せたのも、君たちの力があってこそだ、…ありがとう」
「こっちこそ。ありがとう」

ぐっと強く、握手を交し合う。その二人の表情には穏やかな笑みがあった。———。

やがて、地下牢最深部に囚われていた本物のサマンオサ王が救出されるまで、その時間は掛からなかった。かなり衰弱しているものの気力で生き延びて来たのか、現在は幸い命も取り留めて安静にしているとの事。

数日の後、王の寝室に呼ばれたリロイたちはその痩せた姿に驚きを隠せなかったが、こうして無事に会う事が出来て嬉しいという王の笑顔に表情を綻ばせた。

「そなたらには……………本当、感謝してもしきれぬほどの恩を受けてしまったな……………セーレン、そしてオルテガの子息、リロイよ」

「いえ。……………ご無事で何よりです」

「あれを、此处へ……………」

伏せつたままの王の言葉に兵士が小さな袋と箱を幾つか持つて来る。

「…聞けば、オルテガ殿の遺志を継ぎ旅をしている最中だったとか

……………旅路を中断させた挙句に国の問題に巻き込んで、真に申し訳ない……………。魔物が処分をしてしまった装備の分を、弁償となるかどうかわからぬが、此れを使ってくれ。僅かだが残っていたものだ」

「え？でも……………それは」

受け取る事にリロイは戸惑った。そんなつもりで、魔物を倒したわけではなかったからだ。

その様子を察したように王の表情が和らぐ。

「良いのだ。私の…心遣いと思い受け取ってくれ。軍力も財力もほとんど失ってしまった今のサマンオサが出来る……………唯一の支援なのだから」

「……………」

「リロイ……………」

ソロに促され、リロイは深々と頭を下げた。

「ありがとうございます」

金貨20000Gと、竜の鱗より作り上げたという大剣、ドラゴンキラ。不死なる者に最大の効果を発揮すると言われるゾンビキラ。魔法銀を鍛えて作り上げた魔法の鎧が二着と、同じく魔法銀の盾が一つ。

……………どれも簡単に手に入る代物でない事は、一目でわかった。

「それと……………これは城の宝物庫で兵が見つけたのだが、これは城のものではなかった。そなたたちのものだろう」

出されたのは、あの時刻がされた大地の鎧だ。

「……………本当に……………色々ありがとうございます」

再度深々と頭を下げた四人に王が微笑みを浮かべる。

「……いや、私たちがした事を考えると此れでも足りないほどである。……さて、武具はそれで良いであろうか……。」

—— セーレンから聞いたが、そなたたち、セーレンの父、サイモンの事でこの国を訪れたとか……。」

「はい。……ネクロゴンドの地で勇者サイモンが行方知れずになったと聞いて。もしかしたらセーレンがネクロゴンドの道を……いえ、そのヒントだけでも父から伺っていないか、藁にも縋る気持ちで……。……。」

勇者サイモンは、ネクロゴンドの地どころか孤島の牢獄で処刑されていた。

その時点で、手掛かりは完全に途絶えてしまっていた。

「そうか……。——だが、まだ諦めるのは早いぞ、勇者よ。」

「……?」

王の言葉にリロイが瞬きを強め。

「——死人に口無しとは良く言うが……我が国には死者の魂と交感出来る魔法具が存在する。」

「え!？」

「あれを持ちなさい」

王が示したものを察したのか、二人、兵が寝室を出ていく。やがて兵が小さな瓶を持って来た。中に入っているのは聖水のような、不思議な色あいをした、液体。

「……此れは……。」

「元々この国はシャーマン族……死者との交感をする種族が作った国らしい。シャーマン……儀礼人……という言葉が後のサマンという言葉になったと。……此れは古くより伝わりし秘薬、フロウティア。此れを持ち、孤島の牢獄へ向けて発つが良い。そしてサイモンの遺骸を見つけ出し、それにかけよ。」

「だけど……良いんですか?……とっても大事なものなんですよ?」

心配そうに眉を寄せるシシルに王が笑う。

「何。どんな重要なものであれ、世界が無くなってしまったら意味がない……。案ずる必要はあるまい。先代たちもわかってくれるだろう」

「……………」

兵の手からリロイに、瓶が渡される。

傍に控えていたセーレンが一步前に出、リロイたちを見つめた。

「俺は王の傍にいる。ボストロールを倒したとて、また強力な魔物が現れないとも限らないしな……。此処でお別れだ」

「セーレン、本当にありがとう」

「共に旅に出られないこの身を悔いる。……………また何処かで、必ず会おう、リロイ」

「ああ。——あ……。そうだ、セーレン」

ふと、思い出したようにリロイが懷からラーの鏡を取り出して。

「？——これは……………」

「此れを、あの洞窟へ戻してやってくれないか？」

この鏡はあの地に眠る者たちのもの。

役目を終えた以上、彼等に返すのが……………当然だろう。

「あの地に眠るシャーマン族たちの下へ」

「……………了解した。必ず、戻しておくよ。約束する」

差し出された手に、リロイがそれを握り返して。

「勇者の道に光あらん事を」

「セーレンも。どうか元気で——光あらん事を」

王とセーレンに最大限の感謝を示して、一行は国を後にした。

問題の牢獄は、アツサラームの北方にある海から流れ込んだ巨大な湖の中央にあるらしい。

進路を取りながら、リロイは潮風に目を細めた。

勇者サイモンが死した地。そこへ向かう。

サイモンの魂は、現れてくれるのだろうか？

果たして――自分たちにネクロゴンドへの道を示してくれるのだろうか？

「僕さ……お化けってあんまり……好きじゃないんだよな。いや、わがまま言ってる場合じゃないのはわかってるけど」

「へえ、意外。モンスターとかでもシシル平気にしてるから、そういうの大丈夫かと思ってたわ」

甲板で話し込んでいる三人の声が飛び込んで来る。

「ミロッドは知らないけどな、こいつレーベ出たばかりの時なんて、うさぎや蜂に悲鳴あげて逃げまくってたんだぜ？……っていうか、ラーの鏡を取った時の……お前、顔真っ青だったよな。シ・シ・ル・さ・ま」

「あら、ホント？」

「ソっソロっ!!」

わあわあ、と話に花を咲かせる仲間たちの姿に、リロイの口元が自然と綻んだ。

彼らは、自分が守って行こう。自分がリーダーなのだから。

今迄守られていた分を、これから返していかないとならない。

もう弱音を吐いている暇など、ないのだから。

「なあ、リロイ。お前も見てたよな――？」

シシルに頬を引っ張られながらも同意を求めるように声を掛けて来るソロに、リロイが笑いながら。

元氣に一つ、頷きを返した。

24話 蘇りし英雄

霧のなか浮かび上がる巨大な大渦。そしてそれに阻まれ身動きが取れない船が二隻……。

一つは、リロイたちの船だ。そしてもう一つは……

何と海賊船。

とはいえ、別に戦闘状態でも何でもなく。リロイたちは海賊船側へ渡し橋を通して乗り込んでいた。

「まさかこんなところで立ち往生する羽目になるとはねえ。旅つてのは本当何があるかわからないもんだよ」

そういつて豪快に笑うのは、ポニーテールの似合う赤毛金目の女性。名はソフィア。この海賊団「メルファレン」の女頭である。

義賊というもので、悪人からしか盗まないとか。以前リロイたちが遭遇しレッドオーブを強奪した連中とは比べ物にならないほど、穏やかな連中である。

「ソフィア、あの大渦の事知らなかったのか？……海賊っていうくらいだから海には精通していると思つてたけれど」

船縁から一緒に大渦を見つめていたリロイが顔を上げる。まさか、と両手を挙げて降参の真似をするソフィアにやや首を傾げ。

「航海図にあるような大きな海流なら、まだ対処は出来るさ。此処の岬も数ヶ月前までは、時化てはいたがまだ通れないほどじゃあなかった」

「何かあつたんだろうか……」

「うーん……。まあ、気になる事が一つだけあるんだ。この渦が

現れ始めたのと同じ頃、北海付近で幽霊船が目撃されるようになった。あたいたち、乗り込んでお宝でもないか探してみただけ……いるのは幽霊やゾンビばかり。おまけにお宝なんかなくてクズなものばっかだね。嫌な思いをしたよ」

「幽霊船……」

幽霊船と謎の大渦。……場所が違うものの、出現時期が同じだなんて、何か関係があるのだろうか？

そうリロイが考え込んだ瞬間、階段状になった下甲板の方で歓声があがった。

——— どうやら、ソロが海賊相手に飲み比べ五人抜きをしたらしい。

シシルもミロッドも、未成年だというのにすぐ傍でやんやんやはしゃいでいる。

「あいつら……」

頭痛を感じ、リロイが頂垂れる。

「ははははは。まあ、良いじゃないか。どのみち渦が消えるまでは立ち往生だ。此処で会ったのも何かの縁だし、ゆっくりしていくといい。あんたらの船は流されないようにうちの船に結んであるから安心していいよ」

けらけらと笑うソフィアにリロイにも自然と笑みが零れる。

「ありがとう。……初めて会った海賊が、強盗同然だったから……」

……嫌な印象しか持ってなかった自分が恥かしい」

「誰でも最初はそうさ。だけどあたいらは悪い奴等しか盗まない。人殺しだってやらない。———このあたいが、頭のうちは……」

……その後は知らないけどね、海表情同様、海賊の善悪も唯一つのものではないから」

「うん」

笑顔と共に頷くリロイに満足そうに笑み返して。それから潮風に気

持ち良さそうに目を細める。そのまま、大渦を見つめ。ふと、耳を澄ませた。

「？」

「……………ん？——何？」

「どうしたんだ？」

「しっ。……………おおい、てめえら静かにしろっ！！……………何か、聞こえるんだ」

頭に一喝され、酒飲み軍団がびくりと一瞬にして静寂を取り戻す。耳を澄ませ、目を伏せるソフィアに、自分も海へ意識を向けた。

……………エリ……………ク……………

……………リ……………ク……………エリ……………ああ

……………

渦の轟音に紛れて聞こえるのは、確かに女性の声色だ。

「エリック——確かにその名を呼び続けている。」

「……………エリック？……………誰だろ」

船頭二人の様子が違うと察したのか、酒瓶を片した海賊たちとソロたちが、上がって来る。

「ど、どうしました？お頭」

「お前等、聞こえないか？……………渦のなかから、人の呼ぶ声が聞こえるんだ」

「エリック、って」

「エリーならわかるけどなあ」

「それお前、アッサラムの踊り子の名前だろ」

「—— エリック。エリック、エリック……うーん、ど
つかで聞いた事が……」

海賊の一人が考え込んで。他の海賊たちも考え込んだ。

「あ」

「？」

「思い出しましたよ、あの幽霊船の甲板でそんな名を語ってた幽霊
が……」

「ああ、そいつ俺も覚えてるわ。恋人を置き去りにしたまま沈没し
ちまったってずっと愚痴漏らして…… そいつに構ってた所為で集
合に遅れてどやされた記憶が——」

「「それだ!!」」

リロイとソフィアが同時に叫び。全員が目丸くした。バツとソフ
イアが船縁から身を離し船室へと向かって駆けていく。

ぽかんと全員がそれを見送るなか、やや酒気を帯び顔を赤くしたソ
ロがリロイに尋ねた。

「一体何だつてんだよ」

「……渦が発生した原因がわかるかも知れない」

「は？」

ソフィアが持つて戻って来たのは、幽霊船で回収したお宝が入った
箱だった。

僅かな貴金属類や宝石が入ったそれをリロイたちに向かって見せ。
どうだ？とやや首を傾げて見せる。

「……」

リロイが手にしたのは、一つの指輪だった。リング部分が錆びてし
まっているが、大粒の真珠が埋まっている。

「それか？」

「わからない……でも、他のと比べて何か違うような気がして」

「よし。——貸しな、リロイ」

ソフィアがリロイの手から真珠の指輪を引っ手繰り、そのまま船頭から力任せに、渦へ放り投げる。

それは一瞬太陽の煌きを受け小さく光るが、そのまま渦へと飲み込まれていった。

「……………」

全員が息を飲んでそれを見守るが、変化はない。
そして、皆が諦め掛けたその時。

ゴゴゴゴゴゴゴ……！！

エリック——！！

オリビア………会いたかったよ！！ああ、会いたかった……！！

収束していく渦の中心に、あの指輪が浮いている。白い輝きを放ち続けているそれに重なるように、若い男女の霊がふわりと顕われ、
堅く、抱き締めあう。

——もう二度と会えないと思っていたわ……。もう置いていかないで。ずっと……ずっと、私の傍に居て……。貴方のいない時間を過ごすのは、もう嫌なの……。

——ああ、もう二度と離さないよ。………もう僕らを縛るものは何も無い……。………

霊が口付けあうのを目の当たりにし、思わずリロイが目を逸らした。頬を赤らめるそれに、ソフィアが笑い声を漏らす。

―― 行きましょう、私たちが穏やかに過ごせるところへ。

―― 行こう。僕らが安らかに眠れるところへ。

サア、と雲間から差し込んだ光に乗り、二人の霊はそのまま透けるように消え去った。

最後に穏やかになった波間にチャポン、と指輪が落ち。そのまま海へ沈み、見えなくなる。

全員が我にかえった頃には、海は何事もなかったかのように平穏さを取り戻していた。

「……………な……………何だったんだ？」

あまりの事ですっかり酒気が抜け去ったソロが目をぱちくりさせ。リロイがそれに目を細めた。

「恐らくは……………彼女は此处ですと……………死んだ恋人を待っていたんだ」

「……………」

フィーナの事を思い出しソロは僅かに眉間に皺を寄せ。そのままシルたちの方へと向き直る。

「よお、幽霊嫌い。ちびらなかったかい？」

「な！？……………んなわけないだろっ！！……………そりゃあ、びつくりはしたけど」

ぎゃあぎゃあじゃれあうソロとシルに笑ってたミロッドだったが、

ふと気付いたように二人を留めた。

視線を向けるとリロイとソフィアが向かい合っている。

「さてと、大渦が消えた事だしあたいらは行くよ。……あんたたちも早く自分の船に乗って離れると良い」

「……。ソフィア、色々ありがとう」

深々と頭を下げたリロイに「よしなつて」と笑いながら。ふと、ソフィアのその果実のように赤い唇が、リロイの耳元に寄せられた。

「——旅を終えたら、あたいたちのアジトへ来いよ。スー

南部大陸の最南端の岬にあるからな。——女同士、飲み交わ

そうぜ？」

「！？」

さつと顔を赤らめるリロイにソフィアがさも可笑しそうに笑い。

「ふふ、ばればれなんだよ。……さ、行きな。航海の無事を祈っているよ」

「……ああ。ありがとう。——ありがとう、ソフィア

……」

メルファレンの船が見えなくなるまで、一行はその場で停泊し。それから渦が消失した岬間をゆつくりと進み始めた。

「良い人たちだったわね」

「……うん」

女でありながら海賊の頭となった彼女。女でありながら勇者となった自分。

彼女にはゆつくりと聞きたい事があった。恐らくは彼女しか理解出来ないだろう、この自分の悩みを……。

「また会えると良いね」

「そうだな。……………きつと、また」

「おい、島が見えて来たぞ。あれじゃねえのか!？」

舵操作していたソロが前方を見据えて叫ぶ。バタバタと三人が集まるなか、指示す方。

霧に包まれた、不気味な孤島がぼんやりと浮かび上がっていた。

—— 流石監獄というだけあって、島唯一の建物、その内部の全ては無数の牢屋群だった。

しかし生の気配は無く静寂に包まれている。……………恐らくはこの管轄であるサマンオサ王が取って変わられたその時に……………全て処刑されたのだろう。

残るは無残な遺骸や死体のみだ。

「ちょ、ちょっとシシル。……………離れないでよ」

「そんなにくっ付いたら歩きづらいだろ」

「だって、怖いんだもの」

なかには壁に打ち付けられるように胸から剣を生やしたものの、頭蓋

を粉々に砕かれているものなど、どんな惨い殺された方をしたのかさえ、想像も出来ないようなものである。

此れには流石の鋼の心臓の持主のソロも眉を顰めた。

「……………ひでえな……………」

「ああ」

短くそう答えたりロイの声色には、やり場のない深い怒りが満ち満ちている。

「彼は……………サイモンは、何処だろう……………」

ほどなく、牢獄の最奥で見つけた彼の遺骸は、他同様……………いや、他ほどに崩壊が進んでいた。
散らばる槍は、彼に突き刺さったもののなれの果てなのか、今となつては知る由もないのだが……………。

「頑張れソロ」

「ふっ……………ぬおおおおおっ!!」

ソロが力任せに格子をへしやげ壊す。……………最も、老朽化が進んでいるからこそ出来る事だが。

「……………おりゃあああつ!!」

繋ぎ目がギシギシと嫌らしい音を立て、やがて……………ズズン!!牢の入口部分がぽっかりと口を開けた。

「ふへえ……………馬鹿力……………」

シシルが啞然とそう呟くさまに、にやりとソロが笑い。ぐっと力瘤を曲げて見せる。

「まだまだ若いもんには負けてないぜ?」

「あ、老けてるって自覚あんだ」

「るせえ」

リロイは骸骨の前へしゃがみ込み。先ずは両手を組んで祈る形を取った。三人もそれに習う。

「なあ、シシル……………」

ボソツと呟いたソロの言葉に、「何だよ」とシシルが返し。

「お前、以前は僧侶をかじってただろ。祈りの言葉とかはないのか？ 聖句とか」

「……………ニフラムなら出来るけど」

「……………此れから話聞こうって奴を浄化しちまってどうするよ」
「しつ。……………二人とも」

見るとリロイの手に、あの瓶がある。秘薬フロウティア。その不思議に色づく液体を瓶越しに眺めてから、徐にキュポン、とその蓋を開け。

輝きすら孕んだその液体を、遺骸に振り掛ける。

「……………」
「……………」
「……………」

……………誰……………だ……………
……………私を、呼び覚ます者は……………

突如、部屋に反響するような声色が響き渡り。

「わあ！」とシシルがミロッドにしがみ付く。

「きやつ。……シ、シシルっ」

「……………。貴方が、勇者サイモンか」

ごくりと息を飲んだ後、リロイは部屋を見回すようにゆっくりとその名を紡いだ。ソロもそれを見守ってはいるが、剣の柄には片手がさり気なく添えられている。

相手は人間でもモンスターでもない、死の世界の住人だ。……剣が通じるとは限らない、だが、暴走し襲い掛かって来る危険性は十分にあるからだ。

……………私、は……………。ああ……………私は……………ロゼとセーレンを
………残し……………このようなところへ閉じ込められてしまった………
………力無さ、ゆえ、に…………………………口惜しや………

……………勇者サイモン……………なのか？」

改めて、リロイが尋ねた。すると、骸骨からまるで蛍のような光がふわりと舞い上がり。それは一人の戦士の姿を浮かび上がらせる。セーレンを彷彿させる逞しい男の姿。

私の名は……………サイモン。サマンオサの……………サイモン。……………

私を呼ぶのは、誰だ……………

「おれの名はリロイ。貴方に聞きたい事があつて呼び覚ました」

サイモンの虚ろを孕んだ瞳が、リロイへ向けられる。その表情がやや変化し。

……………オルテガ…殿……………！！

「え？」

紡がれた名に当人のリロイは勿論。残りの三人も驚いたように目を丸くする。

ああ……………生きておられた、のか。オルテガ殿……………。——

—— 良かった…… あの時…… 貴方だけでも…… 逃して ——

—— 私は、間違つて…… いなかった……

「あ、いや。おれはオルテガじゃなくて」

ようやく、ネクロゴンドへの道が…… 開けたというのに…… ガ

イアの…… 剣……。此があれば……。これを火口へ投げ込み

…… 大地の女神に…… 捧げれば……。それなのに、私は…… 貴

方の元に…… 辿り着けなかった。…… 口惜しい…… おのれ、

…… 魔物ども、め…… ええ…… っ…… ！！！！必ず追うと…… 約束……

…… したのに…… っ…… ！！！！

号泣する霊の言葉にぴくりとリロイが反応を返した。…… ガイア

の剣？火口へ投げ込む？

—— それがネクロゴンドの鍵！！

「—— サイモン。後は私に任せろ」

不意に零れたリロイの、普通とは違う言葉に三人がはっとしてリロイを見遣る。

—— 父と見間違っているのなら。

—— 父の言葉で、貴方が安らげるのなら。

リロイはあえて、今だけ。—— 父の名を、オルテガを名乗

った。

父ならば、きっとこう考えるだろう。

父ならば、きっとこう言うだろう。—— 。

「…… このオルテガが…… 必ず、お前の無念を晴らし…… 大地を、世界を救う。だからお前は此処で安らかに眠りにつけ」

ああ……

満足をしたような、安堵感に満ち満ちた笑みを浮かべたまま。現れた時と同じように、その姿は不意に消え去った。

残されたものは、一本の剣。……ガイアの剣、そのものだ。た。装飾こそ朽ちてボロボロだが、その刀身はまるで生命が宿っているように長き年月を経ても曇り一つ浮かべていない。サイモンがどのような苦勞の末に手に入れたものかはわからない。それでも、そのずっしりとした存在感は彼の魂そのもののような気がして、重くリロイの両手に収まった。

「……リロイ」

「ネクロゴンドの……火口……」

呟かれた言葉に全員が表情を曇らせた。

誰もが知っている。……そこは、リロイの父……英雄オルテガが死した、閉ざされた地。

魔王居城突破の鍵となる地。……考えになかったわけではないが、無意識に避けていたのかも知れない。

最後のオーブを求めて、父と同じ道を……ついに歩む。

剣を抜き、リロイはそれを眼前に立てた。ソロも、シシルも、ミロッドも。表情を引き締めそれに従う。

志半ばに朽ちたサマンオサの勇者に対する黙礼と、そして此れからの決意を新たに。

リロイは改めて誓った。

必ず。――必ず魔王バラモスを倒し世界を平和にする事を……………！！！！

25話 世界樹の葉

—— ご報告致しますー！！

今でも、あの緊迫感に満ちた兵の報告の声色が、忘れられない。

王間に待たされた自分と、兄と、そして母の姿。……………恐ろしいほど険しい表情を浮かべた王様。

何かが起こってる。

幼心にもそれは良くわかった。

—— 何と……………オルテガが、敗れただと！？あの男が……………！！？

—— 我々だけではとても……………火山火口付近までは辿り着けず……………残念ながら、ご遺品の回収は……………。ただ、法術師の透眼が確かに炎のなかに消えるオルテガさまの姿を……………

—— 惜しい男を亡くしたものだ。よもや魔王居城…ネクロゴンドの地に散るとは……………

—— ナナ、泣かないで。ナナ……………

……………兄が、励まして、慰めてくれたのを覚えている。自分は空気に飲まれ、ただ、泣いていた。

父は遠い地で死んだ。死という意味を理解出来るか出来ないか、ぎりぎりの年齢だったのかも知れない。

それでも、自分たちは父の死を知り、受け止めてしまった。

……そして今、リロイは……。父が死んだこのネクロゴンド火山の火口に、立っている。仲間が慎重に見守るなか……。ガイアの剣は、音も無く風の抵抗も受けずに、真っ直ぐにその熱源へと落ちていった。

得も知れぬ思いに身を焦がながらも、リロイはその軌跡を見つめ続けた。やがてくるりと踵を返し、ソロたちの方へと滑り降りる。

「どうだった？」

心配げに尋ねるシルに、リロイはただ苦笑を漏らした。

「まだ何も変化はない。……ただ、場所が場所だし少し離れて様子を見た方が……」

リロイがそう返した瞬間。ズズン、と地響きが地の底から突いた。非常に嫌な事態を想像した四人はそのまま顔を見合わせ。誰が言うまでもなく脱兎の如く傾斜を駆け下り始める。

「ちよつ、ちよ、冗談だろ！？ここ、休火山じゃなかったか！？」

「……何と無くこんな予感はしたのよね……」

地鳴りは一層増していく。そして、一行が高台と思われる付近へようやく辿り着けた、その時――。

おおおお…… おおおお……！！——ど

おおおおおんっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

火山が勢い良く、噴火をした。

「うわ……っ」

「きゃあつ」

緩いマグマが大地から噴出し。……………そのまま海側へ流れ込む。尋常な量ではなかったそれは、みるみると水蒸気を発しながら、凝固し。大地へとその姿を変えてゆく。

「すげえ」

思わずソロが声を漏らしたのも無理はない。まるで導かれるように、そのマグマが創り上げた道は……………ネクロゴンドの山岳地帯へと続いていた。

ガイア。地球の剣。この意思が大地からの贈り物ならば、この道は間違いなくオーブへ続いているはず。

本来マグマ床というものは、生じてから冷却し人が歩けるに到るまで相当な時間が掛かる。しかしこのガイアの剣が生み出した新しい大地は、一瞬にして冷却され無骨ではあるものの人が十分渡れるものとなっていた。

それを見て取ったリロイが、やや険しい表情のまま三人へ向き直る。此処からが本番だ。この先は……………父すら辿り着かなかった、未知の危険地帯だからだ。

「行こう」

短く、しかし強い意志を感じ取れる言葉に、反論するものは誰もいなかった。

その洞窟は確かに、今までとは一味も二味も、毛色が違っていた。野生の雑魚の魔物たちとは違う、統率の取られた魔物たちが、意思を持って勇者一行を阻もうとして来る。

地獄の騎士、ホロゴースト、トロル、ミニデーモン、フロストギズモ……………見た事もない魔物たちの姿とその能力に四人は翻弄され、消耗戦を余儀なくされた。

—— イルダはまだ…現れていない。

しかし四天王というぐらいだ。ヒミコ、イルダ、まだ残り二人存在しているはず。

…………… どうして、残りの二人は現れないのだろう？

奴等がバラモス配下なら、確実に此处で防衛して来るだろうと踏んでいた四人だが、それも無く。

やがて魔物を切り開き、地底湖まで降りて来たリロイたちはそこで小休止を取る事となった。

「…………… ベホイミ」

「ベホマ」

リロイとシルが回復魔法を掛けている間、ソロが油断なく闇のなを見つめている。

「……………どうやら、大波は退けられたみたいだな。正直びびったぜ」
ソロがびびったのは、即死魔法であるザキとザラキを連発するホロ
ゴーストだ。幸い、シルのマホトーンが先に効いたものの、あれ
が無効化された時を想像すると、ぞっとする。

「パ……………——イルダも、来ないね……………」

言い直し唇を噛むミロッドを見遣り、リロイが一つ頷いた。

自分たちはオーブ集めに王手を掛けているはずなのに……………どう
して襲って来ないのだろう。

オーブの力を得ても勝ち目があるという絶大な自信があるのだろうか。
か。それとも…何か別な思惑があつて、様子を窺っているのだろうか。

ミロッドが消え入りそうな声色で呟いたその言葉に、ガシガシとソ
ロが髪をかく。

「まあ、考えてもしょうもないわな。……………こういうのは、取ったも
ん勝ちだしな。——来ないなら来ないで、好都合と考え

ようや」

「そつだな……………」

吐息を漏らし、リロイはブーツを脱いだ。脛を先ほど地獄の騎士に
斬られたのだ。斬られた時にはそれほどひどい傷ではなかったが、
その後全力疾走をした所為ですっかりと傷が開き、血で濡れている。
ベホイミを施そうとしたリロイにシルが気付いて、慌ててその顔
を挙げ。

「ちよつ、リロイ。ひどい傷じゃないかっ」

「え？……………ああ、これ。さつき、避け損ねて」

傷と裏腹にリロイはけろりとしている。慣れている、というと嫌な
感だが、実際そうなのだ。怪我をしても、どんなに血が流れても動
じなくなっていた。

「ベホイミくらいじゃ駄目だよ」

そっと手を翳し、ベホマを唱える。見る見るうちに傷が消えるそれにリロイが目を細め。

「……………流石だな。前は、ホイミしか使えなかったのに」

勿論、見習い僧侶だった頃の事だ。それを聞いてシシルが一瞬きよとした後に小さく笑った。

「そりゃあ、色々勉強したもんな」

「皆……………この旅で成長したと思うよ。シシルも、ミロッドも……………」

……

呟かれた言葉に、見張りをしていたソロが自分を指差す。

「俺は？」

「ソロは。……………会った時から強い人だっと思ってたからな。あんまりそういう感はないかも」

「ひでえ」と唇を尖らせるソロに、クスクスと小さな笑みを見せ。それから徐にリロイが立ち上がった。

「ありがとう、シシル。もう大丈夫だ」

「うん」

地底湖の休憩を挟んでの後半戦は、更に厳しいものとなった。……………

…誰かが指揮をしているのか、それとも単純に魔物の数が多いのかは定かではない。

「ベホマー!!」

「……………ベギラゴン!!」

暗闇に閃光が走り、治癒の光がその合間に輝きを見せる。ガキン!と剣と剣が打ち合う音。

前半戦で体力や精神力を大幅に消耗していた一行に対して、魔物たちには疲れの色などあるはずもなく。

五分五分の戦局は、次第にリロイたちを不利へと導いていた。

「……………はあっ、はあっ……………」
どれだけ戦い抜いたかわからない。しかし波状攻撃ともいえるそれに皆体力の限界を感じていた。
きりが無い……………。

「リロイ……………!!」
誰が叫んだのか、一瞬わからなかった。はっとして側面へ視線を向けるとそこには褐色の六本の腕と剣を持つ地獄の騎士がすぐそこまで、リロイへと迫っていた。

……………
避けられない。

斬られる…………… そう思った瞬間。…………… リロイは何か大きな手に思い切り突き飛ばされた。

その剣撃が前髪を掠め…………… そして、リロイがすぐ傍で攻撃魔法の紋式を組み立てていたシルに激突する。

「わあ!?!」

「……………っ!!」

その声色に驚いてミロッドもその方へ視線を向けると……………。

そこには。

…………… リロイを庇い、六本の剣で貫かれたソロの姿が。あった。

「……………ソ……………」

交戦中だというのにリロイはその姿を見た瞬間、剣の構えを解いてしまった。

「きゃあああっ……！ソロ……！！」

すぐ傍で悲鳴をあげるミロツドの声色が、遠い。

シシルも一瞬呆然としたが、真っ先に我にかえり。はっとして周囲をイオラで蹴散らし、硬直するリロイとミロツドを揺する。

「……動けっ……！動かないと……！僕たちが、死ぬぞ……！！」

「ソロ………？」

嘘だ。

ソロは強い。初めて会った時から、ずっと、自分より。

死ぬはずが…… —————

だらりとソロの手から剣が落ち、岩肌へと甲高い音を漏らした。

「マ、マヒヤド………っ……！！」

「ベギラゴン………くそっ……！リロイ、リロイ………！しっかりしろよっ……！！———くそおお……！！」

「……う、うわあああああああ……！！……！！」

弾けるように、リロイは駆け出していた。魔物の群に、真一文字に。
「リロイ……！！」

しかし無謀な動きではない。素早く、的確に一撃ずつ。魔物の急所を狙い確実に倒している。

―― 噓だ、噓だ、噓だ……っ！！！！

―― また、いつもみたいに冗談だ、って……！！

「あああああああつ！！！」

「リロイ……」

その強い悲しみに二人が動けないでいる間に。

リロイが、その場の魔物を殲滅するまで、そう時間は掛からなかった……。

…… 静寂を取り戻したなか、よろめきながら戻って来るリロイにソロに回復魔法を掛け続けていたシルガのろろと視線を挙げる。ミロッドも、そのシルの腕に縋ったまま顔を上げない。…… ただ、微かな嗚咽だけが響いて。

外傷こそベホマで治癒されていたが、ソロの衣類に残ったその出血の多さは、尋常ではなかった。

眠るように目を閉じている、ソロ。

「どうしてだ……」

「リロイ」

「起きろ！ソロ！！……リーダーの命令だっ……！！目を開けるよっ！！」

ガツとリロイが動かないソロの肩を強く掴み、激しく揺さ振った。涙目で顔を挙げたミロッドが、その腕に縋り。

「お願い、リロイっ。……やめてっ、お願い……っ……」

「どうして、おれを…… ——— おれなんかをっ……うっ……」

お前に庇われるくらいなら。

お前を失うくらいなら。

……まだ、ちゃんとした【応え】も返していないというのに。

「……どうして……っ！！！！」

リロイは堅く、ソロの身体を抱き締め続けた。零れた涙が、ソロの頬を濡らし続ける。

そして。

リロイの服間から零れた、ソロがくれたペンダント。それにも涙が一欠けら、零れた。

「リロイ……酷かも知れないけど、そろそろ行かないと。……」

また、新手が来てしまう」

ぎゅっと、爪が食い込むほど握り拳を作りながら、シシルが言った。

「ソロを……置いていくつもりか……っ！？おれは嫌だ！ソロの傍に……っ」

嫌だと首を横に振るリロイにシシルもまた、声を荒げて。

「だけど……っ！！！！このままじゃ僕たちも死ぬ！！何の為にソ

ロが犠牲になったと思ってるんだよつ!!」

ソロを失った以上、男は自分だけだ。……悲しみにくれる彼女たちを引っ張っていけるのは、自分しかない。

自分の感情を押し殺し、シシルが歯を食い縛った。

涙目のまま、ソロの身体を見下ろし。ふと。……異変に気付いた。

「……………え？」

「……………あ」

リロイの服間から零れ、抱き締めたソロの体に当たっている、ペンダント。

あのアッサラムの夜、ソロが自分にくれた、葉の閉じ込められた琥珀のペンダントトップが。……光を放っていた。

「……………此れは？」

「ソロが以前にくれたものだ……。でも、どうして……………」

考え込んでいたシシルが、ふと一つの可能性に気付く。まさか、と小さく呟いてから、真剣な眼差しでリロイを見上げた。

「それ、それちょっと貸して!!」

ガキン!!!!

予備短刀で慎重に琥珀を割ると、やはり光を放っていたのは琥珀ではなく、内部に閉じ込められていた葉だ。

「……………どうするんだ？この葉を」

「話でしか聞いた事がないけど……………。もしかしたら、この葉、”

世界樹の葉 ” かも知れない」

「せかい……………？」

ソロの upper body を支えながら、話を聞いていたミロッドがはっとして。

「それ!……………もしかして、あの創世樹霊イグドラシルの創り出し

た、世界樹の葉の事？…………あらゆる生を守護するっていう…………」

「そう。…………もし、この葉が本当に世界樹の葉なら…………ソロの魂を引き戻せるかも知れない」

「……！」

リロイが縋るような視線をシシルへ向けた。

シシルが葉を掴み。…………そして、ソロの唇へ寄せた。しかし死したソロは、それを飲み込もうとはしない。

「駄目か…………——わっ！」

「貸せ！シシル……！」

リロイは横から零れたそれを奪い、自らの口に含み。…………そして、ソロの唇に自身の唇を重ねた。

「リロ……………」

驚きの表情を浮かべた二人を他所に、リロイは真剣だ。

ただソロを助きたい。失いたくない…………その気持ちだけで。

——ソロ…………。ソロ、ソロ………………！！

——頼む、帰って来てくれ。

——此処へ…………。…………おれのところへ…………っ

…………！！

……くんっ……

唇を重ねたまま、リロイは確かに、それを感じ取った。

……どくんっ……どくんっ……

自分のじゃない。……密着した、ソロの鼓動が。確かに伝わって来る。

驚き唇を離そうとしたリロイは、不意に動いたその手に、しっかりと抱き留められた。目を見張り、その方へ視線を向けると……。

——ソロが、自分を抱き締めていた。

「……普通は……オウジサマの口付けでオヒメサマが目覚ま
すつてのが……セオリーなんだけどな……」

薄く瞳を開いたソロが、そう言い、にやっと笑った。リロイは一瞬
呆気にとられたがその顔が見る見る涙に歪んで。ぎゅっとソロの胸
元に顔を埋め、号泣する。

「あ、ああっ……ああああっ……!!」

不安が一気に弾けた少女は傍目も何もかも気にせずに、大声で泣き
続け。ソロはその震える髪を優しく撫でながら一息吐いた。

「……ただいま」

そのまま、後ろで涙を堪えているシシルとミロッドへ視線を向けて
「……ばっ、馬鹿野郎!……どれだけ心配したかと……」

——畜生っ

そう泣き笑いを浮かべるシシル。「悪い」と小さく漏らし、そ
れからソロは傍に散らばっているペンダントの残骸を見つめた。

（健康運に恵まれるお守り、か……。とんだご利益があったもんだ。5000Gは安いもんだったかな……。）

「……………ありがとうな、リロイ……………」

あの時、確かに闇に引き込まれ掛けた自分を引き戻してくれたのは、必死な少女の声色だった。

「あつ。……………見て、見て！！皆！！あれって……………」

不意にミロッドが何か気付いたように叫んだ。

地底湖の最奥にある祭壇。そこに数体の女神像と共に奉られた、銀色の珠が目に入ってくる。

それこそ、死闘を越えて捜し求めていた最後のオーブ。…シルバー
オーブの姿、だった。

26話 神の翼

極寒の地、レイアムランド。いつかランシールの神官が教えてくれた、伝説が眠る蒼き氷の大地。

その果てしない吹雪のなかを、リロイたちは歩いていった。

目印を置かなければ一瞬にして接岸している船さえ見失ってしまえるような、そんな白に包まれた景色。

シシルのフバーハの魔法に守られてはいるが、寒さは完全には防げない。

メラの炎で多少の暖は取れたとて、南国生まれのリロイやシシルは勿論、鍛えているソロでさえガタガタとその震えを留められなかった。

「うう、さぶい……。――――― 本当に此处なのかあ？……

……な、何もないみたいだけどさっ」

メラの炎を抱きながらシシルがぼやく。

「間違い無い。……… ほら、見て。オーブが呼応してるんだ。――

――― きつとこの辺りだと思う」

そうリロイが袋からシルバーオーブを出した。

「けど何も起こらないしなあ。……… は……… は、は――

くしゃんっ！――！」

「そう、ね。このままじゃ風邪引いちゃうどころか――

……… くしゅっ――！」

「もう少しの辛抱だ。きつとオーブが導いて………――

……… あ――！」

「ん？」

リロイの言葉に、前衛として並んで歩いていたソロも目を細めた。先ほどまで何も無かった景色に、不意に浮かび上がった巨大な石造

の建物。

「うう……………結果かあ」

震えながらも感心したようにシシルが呟き。それから空を仰いだ。

「見てよ。……………こつから先は雪が入り込んでない。」

「フバーハを解くよ」

ふわりと吹雪遮断のバリアーを解くと、確かに建物のなかのような暖かさがそこには満ちていた。メラの暖を消し、ミロッドも小さく安堵の吐息を漏らす。

「危つく凍死しちゃうところだったわね……………」

お入りなさい、ルビスの加護を持ちし者たちよ

不可思議な音色のような声色が不意に響き。リロイとソロは一瞬剣に手を掛けた。しかしそれがただの呼び声だと察すると皆へ視線を向ける。

「来いとき」

可笑しそうに笑うのは、ソロ。

「行こう。いつまでも此処に居たって仕方ないしな」

リロイがそう言い。シシルもミロッドもそれに一つ頷いた。

一行がその建物に入ると、一瞬花の香りがした。……………そして次に若葉の香りが。

「……………春の匂いにするわ」

自然と漏れたミロッドの言葉に他の三人も頷いた。……………肥えた土の匂い、柔らかい風。此処には、春という春が満ち満ちていたのだ。

そして、細く長い階段を上がり切ると待っていたのは……………双子であるつか、そっくりな二人の漆黒の髪の少女……………否、巫女。――

—— 不死鳥を守るという光の巫女の姿が、そこにあった。そしてその後ろには月石のような輝きを持つ、大きな卵が。

ようこそ、お待ちしておりました

ようこそ、ルビスの祝福を受けし娘よ

「……………不死鳥を蘇らせに来た」

リロイの言葉に、満足そうに巫女たちが微笑みながら頷き返し。そして、祭壇へと促すように手を差し伸べた。

オーブを祭壇へ

さすれば不死鳥の眠りは醒め、再びその力を取り戻す事でしよう

巫女たちに促され、リロイは袋からオーブを出した。

襲って来た海賊から手に入れたレッドオーブ。

テドンで託されたグリーンオーブ。

地球のへその奥地で手に入れたブルーオーブ。

ヒミコを倒して手に入れたパープルオーブ。

プラムナツハールから譲り受けたイエローオーブ。

そして、ネクロゴンドの洞窟で手に入れたシルバーオーブ。

全てのオーブが、今、此処に在る。

祭壇にオーブを置くとボツとそれと同色の炎が上がった。赤い炎、緑の炎、蒼い炎、紫の炎、金の炎、そして銀の炎。

お下がりなさい

トン、とリロイが祭壇から降りるとミロッドが首を傾げて来た。
「こんなので、本当に不死鳥が蘇るのかしら……………」
「わからない。だけど今は……………彼女たちを信じよう」

巫女たちの詠唱が始まる。詠唱というよりは、詩——古
い言葉のようにも聞こえるし、標準語にも聞こえる。まるで、夢の
なかに迷い込んだような空間の中、まるで母の子守唄のようなその
詠唱は、ゆっくりと静かに響き渡り始めた。

古に眠りし我等が半身よ

時は来たれり。夢を舞いし刻は今こそ終焉を迎え
其の心正しき者を乗せ、神なる意思に従いたまえ

「……………心正しき……………」

巫女の詠唱の最中、ちらりとシルがソロを見遣った。視線を感じ、
何か感じたのかソロが引き攣り笑いを浮かべる。

「あんだよ」

「賭博やるしなあ」

「るせえ。リロイにぶん殴られてからはやめてるよ」

「しつ。……………静かに」

リロイがそんな二人のやり取りを止めたその時。……………” ぴし
つ ” と、小さな亀裂音と共に、卵にヒビが生じた。

「……………!!」

目覚めなさい。今こそ、その神の腕 かいな を羽ばたかせ
飛び立ちなさい。この大空は、お前だけのもの

聖なる不死鳥ラーミアよ………！！！！

光が走った。巫女たちが生じさせたもののなか、卵が放ったもの
のか、それはわからなかったが。その音楽でも聞こえてきそうなほ
ど柔らかい光のなかで、 ” ぱきぱき……… ” と殻が割れる
音が響き。
続いて。

ピイイイイ

………

リロイたちは見た。

光から生み出されるように虹色の尾と青空色の翼を持つ白い巨鳥が
飛び立つのを。

それはやがて、久しぶりの世界を楽しむかのように、夢のなかのよ
うな空間を飛び回り。そして。

—— 不意に、消え去った。

幻のような長き一瞬が唐突に消え去り。四人ははっとした。卵の殻は砕け散り、微かに光を漏らしたまま。

不死鳥の姿はそこには無い。

「あ、あれえ？」

「……鳥が消えた」

きよときよとと辺りを見回す四人に巫女たちが小さく笑った。

ラーミアが目覚め、悠久の吹雪の結界も終わりを告げました
外へ出なさい、ガイアの申し子たちよ。不死鳥ラーミアが貴方がたを望みし地へと導いてくれるでしょう

「……………あ。——ありがとうございます」

リロイが丁寧に頭を下げたのを見て取り。巫女の一人が首を振った。
私たちは時を待っただけ
後は貴方たち人間のちからです。此の世界を護りたい、その心があればきっと神の加護は貴方たちと共に在る事でしよう

空と海と大地の名において。勇者の旅路に光あらん事を

吹雪のような白い花のような。ふわりと視界が奪われたと思った瞬間、リロイたちは晴れた雪原に立ち尽くしていた。

建物の姿も、巫女たちの姿も、もうそこには何も無い。

「リロイ、見てみるよ、あれ——！」

ソロの声色に全員が空を見上げ。眩い太陽を透かせるように、ゆっくりと飛来して来る大きな影に、歓声があがる。

不死鳥ラーミアの姿が、そこにあった。

……初めて乗ったラーミアの背は、まるで母親に抱かれているような安心感と温もりがあった。
始めは見た事もない空の景色や今迄通った街などが見える度にシシルやミロッドから歓声があがったが、それもやがて口少なくなっていくた。

——そう。

ネクロゴンド上空……。切り立った岩山に囲まれた湖に浮かぶ孤島……。バラモスの魔城が目前に迫って来たからだ。

ラーミアの背から身を乗り出してそれを睨み付けるリロイに、ミロ

ツドは目を細めて見つめ。

「リロイ……………」

「此处まで来た。……………とうとう、此处まで来たんだ……………」
「……………」

リロイの指示でラーミアはゆっくりと城の周りを旋回し。降り立とうと高度を下げてゆく。

しかし、不意に ” バチィッ！！！！ ” と衝撃が走り、そのバランスが大きく崩れた。

キュイイイイイツ！！！！

「うわっ！！！！？」

「きゃあっ！！！」

空に放り出されそうになるミロツドを、ソロが抱き留め、引き戻す。

「しっかりつかまってる……………っ、投げ出されるぞ！！！」

「何、何！？！」

それは、バラモス城を取り囲むバリアーだった。ラーミアは突然の衝撃によるよろと体勢を崩しつつも再び急上昇し。

困ったように旋回しつつ安定を取り戻す。

「ひ……………」

「大丈夫？シシル」

「め、目が回った」

全員が無事であることを確認し、ほっとしつつもリロイが険しい表情で下方を睨み付け。

（ そう簡単に上陸させてくれないという事が…………… ）
ちっと微かな苛立ちを込めた舌打ちが漏れる。

「こんなでつかいバリアなら、トラマナの魔法も通じないだろうしなあ……………」

「どうする？リロイ……………」

「……………」

このままでは 術 すべ がない。返答に窮していると、がくんと再びラーミアの高度が下がった。

「！？」

「リロイ！？」

「いや、おれは何もラーミアには。……………まさか」

「——— この子の……………意思？」

ラーミアは自らの意思で再びバリアを目指し始めた。大きく七色の尾が、そして赤い頭毛が開く。

「…………… うあつ……………！」

「きゃっ……………っ……………！！」

「…………… ラーミアー！！」

恐ろしい速度でラーミアは下降を始めた。

純白の羽根一枚一枚が光を孕みだし、それに気付いたものの意識を向ける余裕は、四人には全くといってなかった。

何せ高速。しがみついているのが、やっとなのだから。

「うわあああああああつ！！」

「シシル、スクルト、じゃない、マホカンタ、じゃない、フバーハ

…………… きゃあつ！！」

このままだとバリアに直に激突をする。ラーミアが無事だとしても、背に乗っている自分たちが無事とは限らないのだ。

やがて光の矢と化したラーミアが真っ直ぐに、落ち込むように。バ

リアへと飛び込んだ！！

「！！！！」

「……………」

衝撃が来ると思い目を閉じていた四人だったが、ふと何かが違うと感じたりロイがそっと目を開け。そして、速度が弱まっている事に気付いた。

何よりも、先ほどのバリアが、頭上にある。

「……………あ……………」

ラーミアはその身に強く光を纏い、闇の力で構成されていたバリアを消し去ったのだ。そして大きな羽音と共に降り立つ先は、優雅な装飾が目につく、大きな門の前……………。そう、バラモス城の入口。

「抜けた……………」

ぽかんとして眩かれたりロイの言葉に三人も次々と目を開け。辺りの一変した景色に目を瞬かせた。

「マジかよっ！！」

「やったー！！」

「凄いわ、ラーミアー！！」

ぎゅっとミロッドがその首に抱きつき。

キュルルル　と、

嬉しそうにラーミアが一声、鳴いた。

美しい外見と裏腹に、到るところに毒溜まりや毒草が生えている。ラーミアはやや広まった箇所へ降り、ようやくロイたちは陸地へと辿り着いた。

「さあ、後はおれたちがやる。…………おまえは、魔物に襲われないよう空へ戻っていてくれ。…………ありがとう、ラーミア」
巨鳥の首を優しく撫でからリロイが笑み。その言葉を感じたラーミアが再び空へ舞い上がった。
まるで励ますように暫し巡回をしていたが、そのまま空の彼方へと飛び去る。

「……………ついに、来たな」

緊張の含んだソロの言葉。霧もやの掛かったその城は、まるで侵入者を伺っているかのように、静寂を守っている。

「……………バラモス……………」

「侵入した事は……………気付かれてるだろうな」

「でも……………」

—————
魔物の気配は感じられない。

此処まで来た。ようやく—————此処まで、辿り着けた。
……………後は二つに一つ。生か死か。勝利か敗北か。それだけだ。

シャリン、と剣を抜く音に三人の視線が向けられた。

リロイは抜いた剣を城へ突き付け、そのまま睨み付ける。

「行くぞ!」

まるで相手に宣戦布告をするかのような真っ直ぐな声色で叫び。全員が頷く。

駆け出すリロイ。その後をソロ、シシル、ミロッドが続いた。

こうして、世界を賭けた戦いの幕が切って落とされた

！！！！

27話 1つの決着

「—— ようこそ、我が城へ参られた。人間の勇者どもよ、幻影、バリア、毒素溜まり、そして数々の気が遠くなるような罠をかいくぐり……否、導かれたのかも知れない。」

ネクロゴンドの戦い以上の激しい戦闘の末辿り着いたその地下王座に、奴は—— バラモスはいた。

醜悪な怪物。だが、人のようなドラゴンのような、トロルのような風格すら感じる。世界中探しても此れほど不定な種族は存在しないだろう。

そしてその身から感じられる威圧感—— まさに、魔王。ビリビリと肌の表皮すら痛さを感じられる空氣にリロイは息を飲んだ。

「如何に神の獣の手を借りたとて、人の子の身でありながら此処まで辿り着けた事は褒めてやろう。手助けをしたのは、竜の女王か？ それともルビスの小娘か？……まあ、そんな事は良い。忌々しいオルテガの血肉を直に味わえなかったのは惜しかったが、こうしてその血族が参じてくれたのだから。……のう、リロイとやら」

にたりと笑った大きな口の端に、禍々しい紫色の舌が垣間見えた。

リロイはおぞましさを感じながらもその構えを崩さないまま、じつと魔王—— バラモスを見つめている。

「ふ、ははははは——良い顔だ。……二度と生き返らぬよう、その腸 はらわた を食らい尽くしてくれよう。—— さあ、来るが良い——」

「……バラモス……！！」

—— 父の、仇。

「お前を倒す——」

リロイが剣を掲げた。

—— 稲妻の剣。この城の宝物庫で見つけた一刀である。

剣先から放たれたその雷光がバラモスの周辺でドンドンドン！と炸裂し、それと共に戦いの火蓋が切って落とされた！

「行くぞ、皆！！」

フォーメーションは基本と変わらない。ソロとリロイが主力、シシルが補助、ミロッドが攻撃魔法。

ミロッドのベギラゴンがバラモスの胴に炸裂し、僅かによるめいた部分目掛けてソロとリロイが剣を振る。

「……………甘いわ！！」

ガキンッとその強靱な爬虫類特有の鋭い爪が、二本纏めて切っ先を捉え、そのまま弾き飛ばす。

「……………ちっ！！」

「—— バイキルト！！」

シシルの詠唱が耳に入り、ソロはその刃が魔法で強化されたのを確認した。そのまま、腕を狙い剣を突き入れる。

「…………… おおおおっ！！」

薙ぎ込むソロ、しかしその切っ先は届かない。

外見に似合わずその恐ろしい速度で伸びた爪が、二の腕を深く抉った。

血が飛び、ソロの口から声にならない叫びが漏れる。溢れるベホマ、再び繰り出される剣撃。

「馬鹿め！！」

吐き出された炎にリロイが盾でそれを防ごうとし

—— 瞬

間、弾き飛ばされる。

ダンッ！！と背に強い衝撃を受けて、リロイは息が詰まり。そのまま壁に激突した。

戦況はややリロイたちの方が不利だった。

「ふはははは！！こんなものか、人間の力というものは！！」

「まだだっ……………」

メラゾーマの直撃を受け気を失っているミロツドの体を支えながら、シシルが痛む体を起き上がらせようとする。

杖を掲げ、皆に回復魔法を施そうと……………。

「ベホ……………」

「遅いわ！」

バラモスの手に魔力が集中する。そしてそれは、シシルの魔法の詠唱が終わる前に、光と轟音と共に大きく弾けた。

「伏せろ……！！」

リロイが言ったのか、ソロが言ったのか、わからない。

しかし三人がその魔法の脅威に気付いた時は、あまりにも遅かった。

イ……オ……ナ……ズ……ン……………！！！！！！

激しい爆発が四人の体を大きく吹き飛ばした。

揺れる地下神殿、咆哮にも似たバラモスの嘲笑。

即死は何とか免れたが、四人にはもう満足に戦う力は残されていないかった。

「くっ……………うっ……………」

「ほう、生き延びたか……………運が良いのか悪いのか、いや、悪いのだろうな。生きたまま食われる事となる苦しみを味わう羽目になったのだから」

——ザリ。

巨大な気配が近付いて来るのをリロイは感じていた。
負ける……………全滅だ。

皆……………殺される……………。此処まで来て……………っ……………

！！！！

”――諦めてはなりません”

「……………！？」

幻聴かと、誰もが思った。だがそれはバラモスにも届いたようで、その足が留まる。

「……………ルビスー！」

苛立ちを込めたバラモスの叫びに、リロイは、はっとした。そうだ、この声は――いつか夢のなかで聞いた声だ。

”……………もう希望は貴方たちにしか残されていないのです――
――さあ、立ち上がって……………”

サアッ。光が入らない地下だというのに、フロアは淡い光に包まれた。

その光を浴び、リロイたちは体がほんの僅かに軽くなるのを感じ取っていた。

「ぐあ……………っ！ー！ルビス……………――封印されていないが
ら此れだけの力を……………！！」

――バラモスが、苦しんでいる。ルビスの光を浴びて……………
……………！？

リロイは僅かに和らいだ痛みを抑えながら、立ち上がり。剣を構えた。

「……………シシル……………っ！ー！」

「……………く……………っそおっ！ー！ベホマ……………ピオリム……………バイキ
ルト……………！ー！」

最後の魔力を振り絞り、シシルはリロイに援護魔法を放った。

此れで通じなかったら………本当に終わりだ。

「……………！！！」

「……………おおおお！！！」

バシユツ！！

緑の血飛沫が飛び、リロイは僅かに顔に掛かったそれに眉を顰める。

「……………ぎゃあああ　っ！！！」

大きくバラモスの肩から胸に掛け、傷が生じ。バラバラと王衣装飾が冷たい石畳へと散った。

「リロイ！！」

薬草を束ねたものを口に咥えたまま、ソロがそれに続く。

何だ。

何だこいつ等は。

怯え絶望する事しか出来ない人間どもと何かが違う。何故諦めない、何故命乞いをしない。

たかが……………脆弱な人間のはずだというのに……………！！！！

「マヒヤド！！」

ミロツドの杖から冷気が疾り、バラモスの体に炸裂した。

通じる、通じてる。……………さっきまでと違う、自分たちが

魔王を押しているのだ。

そう考えるだけで、力が湧いて来た。

ルビスの祈りはそのきっかけであり、力を出したのはリロイたち自

身。

命運を賭けた戦いは、静かに終わりへ向けて動き出していた。

「こざかしいわ………！わ、我は魔王バラモス！地上を統べる者なり！！………消えろ………消えろっ！！忌まわしいルビスの使徒どもめえええっ！！！」

再びバラモスの手に魔力が集まる。

「ソロ！！」

「おう！！」

迫る二人。間に合わない。間に合うはずが無い。

勝

った！！

バラモスにはやりと笑い、そして………イオナズンを解き放った
———はずだった。

ザシュツ！！

「！！！！———ぎゃあああああっ！！！！」

血飛沫が、バラモスの腕から生じた。ボトリと床に落ちる太い二の腕。飛び散る緑の体液。

魔法が放たれるまさにその瞬間、リロイの鋭い一撃がその腕を切り落としていた。

激痛の絶叫の後、バラモスは見た。

迫る大男。ズンツと、鋭い切っ先がそのぶ厚い鱗を突き破り、腹を貫いた。

ミロッドはシシルと片手を握り合い、そして揃って杖を掲げる。

二つのベギラゴンのエネルギー塊。それを真っ直ぐに、バラモスに向けて解き放った。

そして———。

自分を睨み付け、天へ手を翳している、……勇者の姿……！！！！

「まさかつ……………や、やめろおおおおっ！！！！」

「……………ライデイン！！！！！！！！！！」

ガカツ！！！！……………ドオオオオオオン！！！！！！

天井が一瞬にして光に破壊され。そのうねりはバラモスに直撃した！！！！

雷光が、高熱が、渦巻いて。リロイとソロが与えた傷口からバラモスの体内を蝕む。

「ぎゃあああああああ……………っ！！！！！！！！！！」

バラモスの断末魔は地下王間を揺るがし。やがて煙を立て、……………魔王は倒れた。

「……………マ……………さま……………ど、……………だ、け……………を……………」

最期に呟かれたその言葉は、リロイたちの耳に入る事はなく。バラモスの生命が途絶えた事を確認したリロイたちは、安堵と共にかくりとその場に崩れた。

「……………はあっ……………は……………はあっ、はあっ……………」

「リロイ……………」

「リロイ！……………やったねっ！！」

ソロが声を掛けようとするより早く、ミロッドがリロイに飛びついた。それを見遣ったシルがソロの肩を突き、ソロも何ともいえない

い笑みを零す。

勝利したのだ、この瞬間、自分たちが、いや…………人間が。魔王軍に。——大地を、取り戻したのだ。

皆に笑みが零れる。ミロッドに潰されたまま、リロイは空を仰いだ。自分がライデインで空けた、穴。そこから見える青空が、ひどく眩しく見える。

ルビスの声は、もう聞こえない。

…………魔王が倒れたのなら、彼女もまた開放されたのだろうか？

僅かな疑問が脳裏を過ぎる、だがそれも呟かれたシシルの言葉に思考が遮られた。

「なあ……………」

「ん？」

「帰ろう、アリアハンへ。…………皆きつと、待っているよ！！」
そうだ。

もうすべて終わったのだから、心配する事など何もないのだ。

三人の笑顔にリロイが大きく頷く。

「そうだな、帰ろう。…………皆に、この事を伝えないと」

勇者の役目は——これで終わったのだ。

リロイは振り返り、まだ燦り続けている魔王の死骸を見つめた。

バラモス……………。

何故だろう、父の仇だったというのに。

倒しても、空虚な気持ちは抜けない。…………ぽっかりと、心に穴が開いたような気持ちだった。

「リロ————イー！！」

呼ばれ、はっとしたようにリロイは立ち上がった。

「今行く！」

リロイはもう一度バラモスを見遣り、それから……仲間たちの方へと駆け出していった。

その胸に過ぎるものを理解する事無きまま――。

再びラーミアの力を借り、一行はアリアハンの大地を踏んだ。

魔王討伐を果たしたリロイたちに、リロイの母を始め、アリアハン王、そして全ての民が祝福一色に染まった。

ソロとミロッドは暫くリロイの家で世話になる事になり、シシルはレーベが近隣にあるものの名残が惜しく、やはり家に連絡を入れたうえで、リロイの家に暫く泊まっていく事になった。

母、エリイフィールは皆がリロイの素性を知っているとわかったうえで色々な話を聞かせてくれた。

こっそりリロイとナナが剣稽古と歌稽古で入れ替わった事があった話。

ナナがリロイにおねしょを押し付けた話。

オルテガが意外にも子煩悩だった事。

リロイは顔を赤らめていたが、聞く事一つ一つがリロイという人物を更に好きにさせる事ばかりで。

……また、彼女の父や兄の事など、滅多に聞けない話ばかりで、皆は夜通し話に盛り上がった。

そして、深夜。

「……リロイ、起きているか？」

皆が寝静まった頃、ソロがコンコンとリロイの部屋をノックした。

「……なあに？」

カチャリと戸を開けて出て来たのは、一緒に寝ていたミロッドだ。片目を擦っている辺り、今で起きてしまったらしい。

「あ、悪い。……その、リロイは」

「いないわよ。お母さんのところか、お外じゃない？寝れないって言っていたから……」

「そうか。……悪いな、寝てるどころ起こしちゃって。……ゆっくり休んでくれや」

「うん。ソロもリロイばっか追っかけてないで早く寝なさいよ？……」

……お休み」

ぶらぶらと一階に降りて来ると、未だエリィフィールが起きていた。ランブ越しに何やら大きな兜を眺めている。

「あら、ソロさん。……どうしました？」

「あ、いえ。……ちっと眠れなくて。……それ、何すか？」

女性の持物にしては無骨な兜である。やや興味を示したように、ソロがそれを覗き込む。

「此れ？……あの人の、オルテガが愛用していた兜なんですよ。

本当は、ナナが旅立つ時に……持たせようと思ったんですけど。あの娘の頭のサイズには、ちょっと大きくて」

「はは、確かに男物じゃあいつには辛いものあるな。――

「……………」

「あの人に知らせていたんです。……………ナナが、貴方と…リロイの無念を晴らしてくれましたよ、と」

そう呟き、エリイフィールは兜を愛しげに撫でた。

リロイに良く似た横顔。ソロは暫しそれを見つめた後に、ポリポリと頬をかき。

気付いたエリイフィールが笑みを浮かべた。

「ありがとうございます」

「？」

「———— ルイーダさんから話は聞いてます。アリアハンから発った時からずっと……………あの子を護って下さったようด้วย」

「あ、いや。俺は別に……………」

改めて感謝されるとソロも照れた様子で目尻を染める。

「……………後悔は、していません。ナナがリロイの身代わりになると言った時から……………」

「……………」

「どんなに頑張っても……………あの子は女の子なんです。勇者を演じてても……………あの子は……………まだ16歳の女の子なんです……………」

……………
「……………楽しい事も女の子らしい事も何も知らないまま、知ろつともしないまま、戦いの道に立ったナナが……………不憫で…かわいそうで……………ごめんね、と、謝るとあの子、いつも微笑うんです。」
「……………お母さんの所為じゃないよ……………」

「……………選んだのは、あいつです。誰が悪いわけじゃない、リロイが……………ナナが自分の意思で選んだんです。……………エリイさんの所為じゃない」

ソロの言葉にエリイフィールが涙を拭いながら微笑んで。それから、戸口の方へと視線を向けた。

「……………あの娘、外にいますわ。多分井戸のところだと思います」
「井戸？」

—— ソロはシンと静まりかえった街をゆっくりと歩いていった。

いつも……否、旅立つ前、この時間にこんなところを歩く事はなかった。せいぜい酒場で盛り上がるか、街の外でモンスターを狩っていたか、そういう生活。

こういうのも悪くはねえな……。

と。……ふと、微かな笛の音が零れて来て、ソロは立ち止まった。

……井戸のある方だ。

首を傾げながらそっちの方へ足を向けると。……居た。

井戸縁に腰を下ろしたまま、リロイが横笛を奏でている。

月光に照らされ、アリアハン郷曲を奏でるその姿は、ある意味神秘的であり。

思いがけないリロイの特技を見てしまい、ソロは木の影から出るタイミングをすっかり外してしまった。

……こうやって隠れてるのって、ある意味不審者だよな……。

ちらりと視線を向けると、いつの間にか近所の野良犬なのか、それともリロイの友達なのか。犬や猫がちらほらと集まって来てその美しい音色を楽しんでいる。

……ま、いっか。……女神の横笛で眠りにつくのも、悪くねえ。

そのまま腰を下ろし、ソロは目を伏せた。

—— その夜、リロイの笛の音が止む事はなかったという……。

ロイの肩をべしべしを叩いた。

「わっ！？……………な、何？」

「見てみるよつ。……………ほら、シシルもミロッドも。……………あれ、あれなのか？まさか——」

スー大陸の東岸、徐々に近付いて来る先に見えるのは、大きな街。よく見ると、船着場なども完備をし、立派な造りが、遠目からでも確認が出来る。

「でっけえ街！！……………アリアハン並じゃないのか！？」

シシルが驚くのも無理は無い。あの荒地で、ミリエルとプラムナツハールと別れたのは、つい数ヶ月前の話だからだ。

「まさかこんな短期間で……………？本当に、あそこよね？」

——道間違えたわけ無いと思うし……………」

「間違いねえよ。……………なあ、リロイ」

ソロの言葉にリロイが頷いた。

方位も位置も狂いは無い。街自体に違和感はあるても、周囲の景色には何処か見覚えがあった。

「……………ラーミア、人気のないところへおれたちを降ろしてくれないか？」

リロイの言葉にラーミアが一声応じ。そのまま風に滑空するように陸地へと舞い降りていった。

がやがやと人の声。売り子の威勢の良い声色。迷子案内や、観光案内。規模はアリアハン、活気はアッサラムというべきであろうか。辺境の地でありながらもその堅固な船着場の完備により、此处には世界中からの商人や観光客が訪れていた。

「ようこそ、ミリーバークへ！」

街の門で迎えてきたピエロの言葉に、四人は瞬きをした。

「ミリー……バーク？」

「はい、街の創始者の愛称を取り、この街はそう呼ばれております。創始者ミリエルは何も無きこの地にプラムナツハール氏と共にこの街を創り出しました」

やったんだ、と皆が笑みを交し合った。

「凄いなあ、ちよつと来ない間にこんなに……」

「その、ミリエルに会いに来たんだが。彼女の家は何処にあるんだ？」

笑顔のままにリロイが尋ねると、ややピエロが困惑をしたように視線をさ迷わせ。やがて、しどろもどろに説明を始めた。

「や、その。ミリエルは創始者であつて、今は……その」

「え？」

「実は……」

「

市長ミリエルは確かに凄い手腕の持主だったのですが、街を大きくしたいというその心は、街の人たちには通じなかったんですよ。

いや、私も最近此处で働くようになったので当時の事は知らないんですけどね。聞いた話だと……過酷な労働環

境に住民たちが決起をして……………クーデターを起こしたとかで。

「待てよ、リロイ!!」

人混みをかき分けるように、リロイは駆けていた。その後ろをソロ。少し離れてシシルがミロッドの手を引きながら追い掛けている。

「リロイ!!」

市長は牢屋に投獄、そのまま幽閉されました。

最悪な事態こそ免れたものの、街には彼女の代わりに新しい市長が立てられて。彼女は地位も居場所も奪われてしまったんですよ。……怒らないで下さいよっ、だから私や聞いたただだって……………!!

「—— お客さま、此れより先は関係者以外立ち入り禁止で…………… うわっ!!」

街外れの、罪人を収める牢獄。その番人が駆けて来たリロイを制しようとして声を掛けて来た。しかしリロイは「邪魔をするな!」の、一言と共にその顔をふっ飛ばし。内部へ駆け込む。

「リロイ——っ!!……………あの馬鹿っ」

「ご、ごめんなさい。……………とりあえず、ゆるしてな?」

吹っ飛ばされ気を失った番人にベホマを施した後、ソロ、シシル、ミロッドもまた内部へと足を踏み込んだ。

—— ミリエルは最奥の部屋のなかでぼんやりと蹲っていた。あの艶やかだった黒髪はその輝きを失い、着衣もまた埃で汚れている。

かつての、あの美しい彼女の面影はあまりにも早く失われていた。

「誰？」

駆け込んで来るその音に、ミリエルは視線を挙げた。見知った顔が、鉄格子を境に信じられないように見つめている事に気付き、驚きと共にその表情を綻ばせる。

「ああ、リロイさん。……………会いたかったわ、元気そうで何より……………」

「……………ミ……リー、どうして……………」

呆然と呟かれるリロイの言葉にミリエルが苦笑を浮かべ。

「……………ん。私、頑張りすぎちゃったみたいなの。……………貴方たちが旅立った後、私とプラムさんね、色々な事に挑戦して……………この地を村へ。村から街へ。大きく、大きく育てていったわ。……………世界一の街にしようと、頑張った。だけどそれが皆を苦しめる事になっってしまった……………」

「だけど、こんなところに居る事なんか……………っ」

「良いの。皆の気持ちを考えないで……………仕事を強要させていた、私が悪かったのよ。此れはね、リロイさん。私に与えられた罰なの。こうして考えてるとね、私がどれだけ浅はかだったのか……………色々思い当たるところ、あるなあ、って……………」
—— だから、良いの。少し……………一人で反省したいのよ」

「リロイ！」

ようやく辿り着き、ソロたちがリロイを取り囲み。……………そして、牢のなかのミリエルを見遣った。

「ミリー……………」

「お久しぶりね、皆も元気で良かったわ。……………さあ、もう行って

ちょうだい。一人で、少し考えたい事があるのよ」

「ミリー……っ!!」

やりきれないようにリロイが言葉を搾り出した。

「貴方の所為じゃないわ、リロイさん。貴方が私に外の世界を見せてくれたの。……感謝してるわ」

「なら、もつともつと！外を見てみよう!!……世界にはもつと大きな国がたくさんあるんだ!……ミリーの……本当の故郷だつて、きつと何処かに……っ」

「……ありがとう」

力無く諦めを浮かべたような微笑を浮かべるミリーと、今にも鉄格子をひしゃげそうな勢いのリロイを抑えながら、ソロが困ったように目を細めた。

「リロイさんを……連れて行って。……私のいないところまで」

「ミリー……っ、やだっ、嫌だ……離せ、ソロっ!!離し……て

……っ」

「—— お前たち、そこで何をしている！民間人立ち入り

禁止区域だぞ！」

不意に怒鳴られ、四人が視線を向けた。騒ぎを聞きつけた警備員だろつ。先ほど吹っ飛ばされた者と、二人。通路に立っている。

「……げ」

「—— この方々は迷い込まただけよ。……人々の目に触れさせたくないのなら、もう少し警備を強化したらどうなの？隔離牢が聞いて呆れるわ」

冷ややかに告げられるミリエルの言葉に警備員が息を飲んだ。

「だ、黙れ！追われた分際で生意気な……っ、生かして貰えるだけありがたく思えっ!!」

「…………っ！」

言葉に、リロイが激昂し。今にも警備員に掴み掛かるような勢いでソロに拘束されたままの身体を、身じろがせる。

「…………リロイ！」

「何だ小僧！文句あるのかっ！」

睨み付ける警備員を睨み返し。

どうしてそこまで言われて黙っているんだ、とミリエルを見たリロイの目が、大きく開かれた。

「…………お騒がせしましてすみませんでした、旅の方。ご気分を悪くなされたとお思いですが、どうぞパークでの楽しい時間をお過ごし下さいませ」

につこりと、まるで ” 他人 ” のように振舞うその姿に。じわりと滲んだ涙をぶんぶんと首を振って散らせて、そのまま押し黙る。

彼女の知り合いともなると、その身が危うくなる事を危惧していたのだろう。

だからこそ、彼女は偽った。この人たちは見知らぬ人。偶然迷い込んだ、 ” 一見の旅人 ” であると…………。

「さあ、出るー！」

急ぎたてられるように牢獄から追い出され、ソロに抑えられたまま、リロイが警備員へ怒鳴った。

「…………待つてくれ、プラム老は…………プラムナツハール老は、何処につ。せめて彼だけでも会わせてくれ…………、頼むっ」

どうして彼がいながら、こんな暴挙がゆるされたのか。彼に会ったら全てがわかるのではないか、そう思って。リロイは必死に叫んだ。

「リロイ、落ち着け……………」

警備員はその必死さに怪訝な表情を浮かべつつも四人を門の外に押し出して。それから、告げた。

「…………お前等がどういう関係かはわからんが…………。プラムナツハール氏は急な病で亡くなられた。もうかなり前の話だ」
どくん。

「…………え…………？」

「さあ、もう良いだろう。行った行った。楽しい時間を過ごしたいのなら、此処での事は全て忘れる事だな」

プラム老の死に呆然としたままのリロイを小高い丘まで引き摺って行き…………そこでようやくソロがその身体を開放する。

「……………」

「悪いな、手荒な真似しちまつて。…………どつか痛いところ、ねえか？」

座り込み、押し黙ったリロイにソロが尋ね。リロイは小さく首を振った。

「…………プラムさん…………亡くなられてたなんて……………」

涙ぐむミロッドにシルが背を撫でて遣り。それから自身も小さく鼻を嚙った。

「こんなのって…………こんなのって、ありなのかよ。あれじゃあ、ミリーが……………」

あんなに、この地の発展を夢見ていたのに。…………あまり

にもひどい仕打ちに、四人は閉口せざるを得なかった。

…………その夜、結局ミリーバークの宿で一泊する事になった。リロイが明日どうしても帰る前にもう一度、ミリエルと話がしたいという事で現市長へ頼み込んだのだ。

その結果、少しだけなら、という条件で会う事がゆるされたのだが

……。

「——なあ、シシル」

「ん？」

リロイの母親や自分の叔父夫婦に買った土産物をチェックしていたシシルがソロの言葉に視線を上げる。

「ん……何？」

「リロイ……落ち込んでるだろうな……」
「……だろうな」

自分は使命を果たし、彼女に報告をしたいが為にこの地へ訪れたのに。待っていたのは、純粋な思いゆえに人々から切り離された彼女の姿だったのだから。

おまけに、あの優しかったプラム老も既にこの世から去っていた。

「それなら、さ」

「あ？」

「ソロが励ましてあげれば良いんじゃないの？」

「……お前は？」

馬鹿、と呟きながらシシルが袋に荷を詰めて。

「あのさ……。——もう良い」

諦めたようにシシルが溜息を漏らし。「あんだよ」と、ソロがそれを問い詰めようとした、その時。

バタンツと宿の扉が大きく開かれ。息を弾ませたミロッドが飛び込んで来た。

「——？　どうした？」

「大変なの二人とも！……ミリーが……ミリーが……っ！！」
ミロッドの様子に事が尋常でない事を悟ったのか、ソロもシシルも眉を寄せたまま一斉に立ち上がった。

リロイは先に、牢獄の前に居た。
ざわざわと野次馬が集まるなか、呆然と佇んだまま。その背を見つ
け、三人が駆けて来る。

「……………リロイ、一体」

生き延びた衛兵の話だと、先ほど一人の来訪があつたらしい。黒衣
の男だつたらしいが、彼はミリエルとの面会を求め。市長承認があ
るとの事で承諾したという。

彼はミリエルと会い、何かを話したとの事。

その後、彼は立ち去り。……………ミリエルは看守数名を皆殺しにした
後に姿を消したと。

—— 余談だが、男の持っていた市長承認は偽りのものだつ
た事も確認されているらしい。

「馬鹿な……………」

「殺されたのは……………13名。…騒ぎを聞いて駆け付けた者も含まれ
ているらしい。……………ちらりと運び出される遺体が見えたが、あれ
は……………」——メラか、ギラ系の魔法じゃないかと」
押し殺すように呟かれたリロイの言葉に、ポンポンとソロが頭を撫
でた。

「嘘よ……………。……………ミリーは、そんな事をするような人じゃ……………」

「！！」

「おれだつて信じてる……………っ！！きっと何か……………あつたんだ。

その、男との間に……………」

歯を食い縛り、リロイは項垂れた。

ミリーの、あの笑顔が脳裏を過ぎる。

それでも彼女は此処には居ない。…………何の手掛かりも証拠も……
…原因もわからないまま。

一行は苦い思いを抱え、タイムリミットと共に、ミリーバークを離れる事となる。

29話 予兆

穏やかな時間を過ごす為に遠出したはずなのに。
懐かしい顔と再会する為に訪れたはずなのに。

様々な楽しみを胸弾ませてアリアハンを発った時とは違い、帰路は誰もが無口だった。

謎は謎のまま、わからないまま。

誰もが彼女の事を信じている。彼女の熱意と、そしてその優しさを知っているからこそ、信じているというのに。
頭が、混乱する。

……わからない事だらけだった。

「……そろそろアリアハン大陸が見えて来るわね」

呟かれたミロッドの言葉に「ん」とリロイが小さな呟きを返す。
「お土産、おばさま喜んでくれるかしら。……そういえば、リロイ。何買ったの？」

努めて明るくしようとしているのはわかっている。その気持ちは凄く嬉しい。……それでも、今のリロイの表情は曇り、とても笑顔等返せる状態ではなかった。

「……」

「リロイ……」

「ごめん、少し放っておいてくれないか？」

「——考えても仕方ねえじゃねえか。……あいつに何が
あったのか、俺等には……」
現状じゃ何もわからねえよ」

ソロが横から口を出し、リロイが頷く。

「うん……………」

「寧ろ、久方ぶりに遊びに出て、帰って来る娘が、んな暗い顔してるのが問題だろ。お袋さんに心配掛けたいのか？」

的確な言葉にリロイがやや、はつとした表情を浮かべて。ようやく僅かに苦笑じみた笑みを見せた。

「そうだな。…………その通りだ。折角平和を享受して幸せにしている母さんにまで、心配を掛けさせるわけにはいかない。……………すまなかったな、皆」

リロイの言葉に三人が笑い。ふと気付いたようにシシルが首を傾げる。

「そういえば。…………魔王は倒したんだし平和が戻ったんだろ？…

…………まだリロイのままでいるのか？」

「まだ…完全に落ち着いていないからな。そのうち頃合を見て、王に相談したいと思ってる。だから今はまだリロイで…兄の名で良いんだ」

「ふっん」

ピュイイイ

ふと、自分たちを乗せているラーミアが甲高く一声鳴いた。

それを聞きつけ、リロイが頭部を見下ろす。

「どうした、ラーミア……………」

「リロイ！…………あれっ！」

ミロッドの驚きの声にその視線を戻し。示す方、アリアハン大陸。

…………その上空に渦巻く、漆黒の雲。

自然発生のそれではない。誰もが瞬時にそう悟った。何もかも吸い込んでしまいそうなその暗黒の雲に無意識にぞくりと身震いが走る。

—— 得体の知れない、禍々しい魔力を少なからずとも感じ取れたからだ。

魔力を持たないソロですら、肌に刺すような圧迫感に息を飲む。

「何、だ？あれ……………」

「……………アリアハン国の方……………？で、でも、どうして……………っ」

「……………魔王は死んだんだろ！？何であんなどす黒い――」

――魔力が……………」

「知るもんかつ！……………リロイ、早く戻ろう！……………何かあれ、凄いやバイ感じがするっ」

リロイが命じるより先に、ラーミアはその羽ばたきを強めた。

――魔王は、バラモスは倒した。……………おれたちの目の前で倒れた。

世界は平和になった。

……………もう何も、脅かすものなどないはずなのに……………！？

ラーミアはアリアハン城の屋上に強行着陸を果たした。薄暗く立ち込めた雲は、今にも堕ちてさえきそうである。まるで闇のベールにでも覆われたようなその光景にただならぬ胸騒ぎを感じつつ、リロイたちがラーミアから飛び降りた。

「勇者さま！！」

気付いた衛兵が、駆けて来る。

「何が起こったんだ、此れは一体！？」

尋ねるリロイに、どうやら城の住人たちもわかっていないらしい。急に空が暗くなったかと思うと雷鳴がとどろき。そして闇に覆われてしまったとの事。

「王は王間に残っておられますが、ずっとリロイさまの帰宅を待ち望んでいました」

「……………この状況はいつから？」

「ほんの一時間ほど前からです」

報告する兵に「わかった」と短く告げ。リロイは率先して螺旋階段を降りて行った。

幼い頃、親に連れられて何度も訪れた城内だ。その構造は恐らく一般兵より詳しいだろう。

優雅な大廊下も構わずに駆け抜ける。時折後ろを追いかけて来るソ口たちへ視線を向けながら、ほどなくして、王間の脇の扉から飛び込んで来た。

王と大臣、占星術師。そして、兵が十名ほど待機をしており、リロイたちの姿を見るや否や安堵の息があちこちから漏れ出でる。

「リロイ！」

「王、ご無事で何より……………つ……………先ほど戻りました……………城下街の方はどうなっているんですか？」

「どうやら、この闇の雲は城上空のみに留まっているらしい。案ずるな、そなたの母上の安否も確認されておる」

「感謝します」と短く頭を下げ。それからソ口たちを見遣った。

「……………でも、一体何なんだろう……………」

「……………四天王？」

「……………まさか……………」

魔王は倒れたんだ、

連中に戦う理由等無いはずだろう」

ミロッドが表情を曇らせたのを見留めたシルが声を荒げた。その

時。――その声色は不意に、空とも地ともつかない響きを齎し……その場にいる全員の耳に届いた。

……ようやくご到着か。待ち侘びたぞ、ルビスの使徒よ……

…
反射的に全員が獲物を取る。リロイが王間の天井へ睨み付けるように視線を向け、そして叫ぶ。

「誰だ！――！」

我が名はゾーマ。闇と闇の大地を統べる者……

「！？ゾーマ……？」

そう、大魔王ゾーマ……。そなたらが倒したバラモスは、このわしの配下にあたる。小物とて、あやつを倒したほどの地上の勇者……。一度、話してみたいと思うてな
辺りが騒然とする。

勿論、リロイたちはその比ではない。……大、魔王？……闇を統べる……？

あのバラモスを「小物」扱いするほどの実力者……！！

「……………」

言葉を失ったリロイに微かな嘲笑が漏れ。

驚きを隠し切れぬか、可愛いものよ。……だが、これでわかったであろう。我は闇の神。我が居る以上……そなたらが如何に抗おうが、この大地は我が手中にある……――さあ、嘆き苦しむが良い。そなたらの絶望の叫びはどんな美酒よりも勝るというもの。……くくく……ふふふふふ……

その微かな笑い声に、ぞくりと全員が震えた。兵のなかには腰が抜け、その場にへたり込む者までいる。

しかしそれを叱咤する者は誰もいない。……誰もが、大魔王のその欠片ほどの気配に圧倒されていたからだ。

――しかし……正直、人間どもに此处まで抗う力があるのか、予想もしておらなかったのも事実。……仮にも”

地上の魔王として与えられた者” を倒した褒美。それをくれてやろうと思うのだが……………如何かな？

「……………褒美……………だと？」

ようやく押し殺すように、リロイが呟いた。……………この威圧感は確かにバラモスの比ではない。リロイさえ、虚勢を張るのが精一杯だった。

恐らく今臨戦状態に陥ったとなれば、自分たちは一瞬たりとも生き延びれないだろう。生と死、その隣り合わせの感が、ひどく一行に押し掛かる。

そうだ。……………地上から最も深淵に続く路。……………ギアガの大

穴より、我が世界へ来るが良い。……………我を倒せば、世

界は真の平和を享受する事になるぞ……………？

「…………………………」

忌まわしきルビスの使徒と選ばれた者、わしも是非ともその顔を拝んでみたい。……………来るが良い、地上の勇者どもよ。

そなたらが如何に無力な存在であったか、このわし自らが刻み付けてやろう……………。……………ふははははははは……………

……………！！！！

魂まで奪い去っていくかのようなその笑い声が止んだ時、空はまるで何事もなかったように青空を取り戻していた。

突然、バタリと兵の一人が倒れる。そしてもう一人……………闇に抵抗力を持たず耐え切れなかった兵が、引き上げられた残留思念に引き摺られて魂を奪われたのだ。

「…………………………！！」

あまりに咄嗟の事で誰一人身動き一つ取れない。

王間にいた者たちは皆、未だにその緊張とショックから開放されずにいた。

やがて重々しく口を開いたのは、王だった。

「……………何て事だ……………。バラモスでさえ…討ち取れたのが奇跡だ
というのに、大魔王とは……………」

「……………王……………」

よろめいた王を支えるように占星術師が手を添える。

「……………既にこの世界の 運命 みらい は決まっておったのか…

……………」

運ばれる兵の死体、それを視界に留めながら、王が頼り無く王座へ
腰を降ろす。

「あの」

リロイが口を開きかけた瞬間、王は弱々しくそれを制した。

「……………良いのじゃ、リロイ。……………此れ以上、お前に危険を負わ
せられんよ」

「だけど……………」

「……………家へ戻りなさい。エリイ……………お前の母が心配して
おろう？……………わしは疲れた。少し…休ませて貰うよ……………」

最後に「くれぐれも他言無用」と最後の王命を授けられ。リロ
イたちは城を後にした。

無言のリロイと、ソロたち。城下へ続く石橋のところには、母エリ
イフィールが心配そうに待っていた。

「……………母さん」

「ああ、ナナ、無事だったのね。お城の様子が変だって聞いて、来
ただけど……………立ち入りが禁止されて……………、母さん心配したの
よ。何かあったの？王さまは？」

母の言葉に、リロイが小さく首を振り、僅かな笑顔を見せた。

「何でもないよ。別に何もなかった。ちょっと……………ゴタゴタして
たみたい」

「……………？そう？」

「うん。……………おれたち、ちょっと用足しをして、帰るから。……………母さんは先に家で待ってて？」

リロイの声色にエリイフィールは腑に落ちないような表情を浮かべていたが、「早く帰ってらっしゃいね？」と一言告げ。そのまま道の彼方へと歩き去っていった。

……………暫くした後、シシルが重く口を開く。

「……………どうすんだよ、此れから」

「—————今夜泊まったら、皆はそれぞれの家へ帰れ」

リロイの言葉に三人の視線が集まる。リロイは前を向いたまま三人を見ない。

「え？」

「魔王討伐の旅は終わった。……………だから、パーティは、解散だよ」

「ちょ、ちょっと待ってよ、リロイ。だってまだ、大魔王が……………！……」

「ゾーマはどうするんだよ、ゾーマはっ」

王さまの言う事をそのまま受け入れるの？と続けるミロッドにリロイが苦笑を漏らした。その問いに対する返答はなく、代わりに。

「今迄本当に……………ありがとう。皆の事は忘れないよ」

—— ひとしきりのお別れパーティは突然の事もあつて普段と変わらない料理だった。…… 三人の複雑な表情はともかくも、リロイの表情は終始穏やかで。何も知らないエリイフィールがサラダをテーブルに置きながら嬉しそうに微笑む。

「ナナのこんな表情見るの何年ぶりかしら。そうね、お別れといつても、もう会えなくなるわけじゃないからね。…… また遊びにいらしてね？ ソロさん、シシル君、ミロッドちゃん」

「……………」

「あ、…………… はい」

翌朝、…………… いや、深夜のうち、といつても良いかも知れない。ア

リアハン外れのその家から気配を押し殺し出て来る一つの影があった。…………荷を整え、旅支度をしたリロイの姿だ。

母さんへ

詳しいわけはいえないけれど、まだおれの旅は終わっていないんだ。何も告げずにまた旅立つ親不孝を、ゆるして欲しい。

必ず帰って来る。

大丈夫、父さんも兄さんも、きっとおれを守ってくれる。

お守りかわりに、勝手に悪いけど母さんのリボン貰ってくよ。箱に入ってた、青い奴。

父さんの兜を通して、おれの旅の無事を祈っていてくれ。

貴方の娘 ナナより

母のリボンを腕に巻き、きゅ、つと唇を噛み締めて。リロイは未だ誰も起きていない暗がりのなかを歩いた。横笛も持って来てしまった。

何故だかわからない。……ただ、もう戻れないような、そんな不安が重く彼女に押し掛かっていたからだ。

——一人で行く。

ソロモシシルも、ミロツドも。……彼らは「魔王バラモス討伐」の供として付いて来てくれただけ。

此れ以上……危険にさらすわけにはいかない。大切な仲間だっただけに、此れ以上……巻き込みたくはなかった。

脳裏によぎった、あの豪快に笑う男の姿をぶんぶんと首を振り、かき消して。リロイは空に朗々と輝く月を見あげた。

「……………行つて来ます」

大魔王討伐　さいごのたたかい　に。……………けんかを売られたなら、買ってやる。

一度、踏み込んだ道だ。諦める事も、踏み止まる事も、もう自分ではゆるせなかった。

此れが勇者の心だなんて、思わない。自分は父に似ているのだ。……………強情なのは、自他ともに認めている。……………ただ、それだけだ。

ギアガの大穴という場所は、あのバラモス城のある湖の外れにある。

毒素で覆われた、謎の場所の一つだ。

—— ラーミアに連れて行って貰おう。そこから先は……
おれだけだ。

そう、リロイが街の外へ向かった、その時。不意にその首元を大きな腕に絡み取られ、ぎよっと目を見開く。

「!？」

咄嗟に肘鉄をかまそうとするが、その感じ慣れた抱擁感と匂いに……
身体が固まった。

「—— こおら。…… こんな夜更けに抜け駆けしようとしてるのはどこのお嬢さんだ……？」

その口が、にっと笑みを形取り。戸惑った視線と共にリロイがその名を呼ぶ。

「ソ…… ソロ……」

「ばればれなんだよな、リロイの行動つてさ。…… えーと、単純？」

気付くと前方からシシルとミロツドも笑顔で歩いて来る。

「そうね、此処まで行動が読まれるっていうのも、勇者として問題なんじゃない？」

「そうそう」

ミロツドとシシルの言葉にリロイが瞬きを強めた、反論しようとしたところをびしっと人差し指、立てられて。

「だから、僕たちがいないと駄目なんだよ。…… リロイには、僕たちという仲間がね」

「……っ……。パーティは解散だと言ったはずだつ。お前たちはバラモス討伐という「仕事」を終えたはずだろう……。もう関係のない話だつ」

「そうだな、仕事はもう終わったわ。…… 確かにもう関係の無い話だわな」

ソロの言葉が肩越しに聞こえて来、リロイはどきんとした。

「だが、俺自身があの魔王ゾーマ……だったか？ 奴が気に食わねえんだよな。それに俺の未来の嫁さんがそんな危ないトコへ行くってんなら、付いて行かないと旦那失格だろ？」

「！？ 誰がいつ決めたっ！……まだおれは応えて……」

—— じゃないっ

ソロの言葉にぽかんとしたミロッドとシルに気付き、慌ててリロイが首を振る。

「と、と……とにかくっ！！……お前たちまで危ない橋を渡る必要はないっ！……馬鹿な事を考えてないで、さっさと戻れ！」

「嫌だ」

「嫌だよ」

「嫌よ」

三種三様の否定を返され、リロイがぐつと息を飲む。

「お、お前等……っ」

「あのね、あたしたちは勇者リロイじゃなくて、アリアハンのリロイ……貴方が好きだから今こうしてこの場にいるのよ」

「……………！！」

「僕たち友達だろ？……それを助けたいと思ったんだ。おじさんだってゆるしてくれるさ」

「ちなみにラーミアだってそうだと思うぜ？ お前一人なんざ死地に行かせるようなもんだしな。……ちゃんとした、「保護者」

同伴じゃないと搭乗お断りするだろうよ。あいつにとっても、お前は大事な友達だからな」

けらけら笑ったソロがポンっとリロイの頭を撫でて、その身体を解放する。

「……………今度こそ死ぬかも知れないんだぞ？」

「上等だ。闇の神だか何だか知らねえが、そんなもんには負けるつもりねえよ。それに、それほどでかい親玉なら、雷神の剣でも持って

るかも知れないしな」

「僕はリロイの行くところなら何処でも行くよ。皆が一緒なら怖くは無いしな」

「あたしもっ。きっと、お婆ちゃまもそうしろと言うわ。ママだつて……！」

込みあがる涙をぐつと堪え、リロイは空を睨み付けた。そのまま、小さく鼻を鳴らしてから大きく息を吐き。三人を見つめる。

「……………ありがとう」

ミロッドが微笑んでリロイの手を取り、堅く握り締めて。その上にソロとシルの手が重なった。

「……………大魔王さまに人間の凄えところ、見せてやろうじゃないか」

「……………ああ！」

……………
こうして、再び四人の旅が始まった。

ラーミアの翼を借り、日の出を見ながらの飛行。……………やがて一行が訪れたその地は、魔王バラモスが現れた地とも言われていた、ギアガの大穴。

今となつては、偽りではなかったのかも知れないとも思える。

底知れぬ深淵。……ゾーマは此処から、自分の世界へ来い、と言つた……。

「さあて……」

淵ぎりぎりのところから、ソロが下を見下ろした。ミロッドが心配そうに声を掛けて来る。

「ソロ、危ないわよ」

吹き上がる風に心地良く目を細めた後にひらひらとソロが手を振つて。

「平気さ。……それよりどうする、リロイ。……此処から落つこちららミンチ確定だと思つのは俺だけじゃねえと思つがな」

「……ただの穴じゃない」

反対側からシシルと共に覗き込んでいたリロイがぼつりと呟き。その声が穴に僅かに反響を齎した。

「あ？」

「皆、良く見てくれ。……ほら、ずっと奥……何か渦巻いてるのが、見えるか？」

「……」

「……」

「……あ」

真つ先に見つけたのは、シシル。

「旅の扉だ！……奥にでつけ旅の扉があるよっ！」

「恐らくは魔王の世界と繋がっているんだろう。……交互に繋がっているのか、一通なのか、わからないけれど……行き先は、間違いは無いと思う」

リロイが三人を見渡す。……最終確認だった。

それに気付いて、にやっとソロが笑い。

「んじゃ、俺。一番乗りなっ！」

そのまま、前置きもなく不意に崖から飛び降りる。

「ソロ!?」

「——じゃあ、あたしもっ!!先に行くわよ、リロイ、シシルっ!」

「待てよ、ミロッドってばっ。ほら、リロイ。置いてくぞっ!!」

リロイが啞然とするなか、あっと言う間に三人は穴へと身を躍らせた。

「ばっ………馬鹿っ!おれを置いてくなよっ!!」

一瞬遅れを取ったが、リロイもまた慌てて穴に身を投じた。

ふわふわとした奇妙な浮遊感。……リロイは微かな波の音を感じ、薄く目を開いた。

焦点が定まると同時に、浮遊感も喪失する。

……どうやら、ベッドに寝かされていたようだ。見ると、外傷などは全く無い。

潮臭い……。

それが第一印象だった。その木造の小さな部屋は、まるで海の側にあるように、強い潮の香に満たされていた。

「あつ」

小さな声が戸口で聞こえ。覗き見ていた、5〜6歳ほどの男の子がパタパタと通路を掛けていく。

「お父さん、あの人起きたよっ」

……此処は？

自分はどうして此処に……。――　　そうだ、ギアガの大穴に飛び込んで……。――　　強いショックを受けて、氣を失ったのだ。

此処は何処なのだろう。

……魔王の世界なのだろうか。それとも……自分の世界の、何処か別の場所なのだろうか。

「リロイ」

「良かったあ、目を覚まして」

「大丈夫？」

声がしてその方を見遣ると、安堵の息を漏らしながら部屋に入って来る三人の姿、それと、先ほどの子供の父親だろう、男の姿が。

「驚きましたよ。此処に人が落ちて来たのは、もう何年ぶりだったか」

「落ちて来た……………」 ———— それじゃあ、此処は……………」

くらくらする頭を抑え尋ねたリロイの言葉に男が頷き。

「アレフガルド地下世界へようこそ、アデルハイド地上世界の来訪者よ」

その一言に、リロイは大きく息を飲んだ。

30話 地下世界

アレフガルド
地下世界。

かつて精霊姫ルビス神が創り上げた、リロイたちの住む アアルハイド 地上世界の裏側…地下に存在する世界の名。

ルビス神の加護で水と緑に恵まれ、天空には白き月と赤き月の双子月が光と闇を交互に照らし。地上とはまるで変わらない豊かな世界であつたとの事。

しかし、現在は見ての通り、大魔王ゾーマの魔力で双子月は消え失せ、完全に大地は暗闇に閉ざされている。

そして月が失せた時、ルビス神もまたこの世界から消えうせた……。

「賢者さまや聖官さまは皆口を揃えて言っている。……ゾーマが

ルビスさまを何処かに封じてしまったのだと。だから大地が枯れ、水が澱み。天空から月が失われた。前に落ちて来た、地上から来た男からも話を聞いたが、君たちの暮らしている上の世界は、つい最近になつてから ” 魔王 ” が現れたらしいな」

男……グレンの話にリロイが訝しげに首を傾げた。出された珈琲を受け取りながら、「ありがとう」と漏らし。更にその続きを促す。

「地上から来た男……？おれたち以外にも、いるのか？」

「ああ、今は何処で何をしているかわからんがね。…何年前だったかな。傷だらけの男を、今日の君たちのように助け出したんだ。彼は地上から来た、と。そして地上では魔王が現れ、全てを揺るがしている、とも」

「何年前……」

ふと思ひ当たる可能性に全員が気付いたようにリロイを見遣る。し

かしリロイはやや黙った後にその考えを吹っ切ろうとしたのだろうか、小さく首を振った後に改めてグレンを見た。

「……………ゾーマのいる城は何処に？」

「何？」

「おれたちは、奴を倒しに来た。……………城の場所がわかるなら、教えて欲しい」

「ちょ、ちょっと待て。……………如何に地上の魔王……………バラモスを倒したとはいえ、奴はゾーマに比べると小物の部下に過ぎないんだぞ。君たちのような若い者ががむしやりに戦って勝てる相手じゃない」

慌てて留めようとするグレンにシシルがむっとした表情で。

「あいつの強さはわかってるよ。……………アリアハンの城で丁寧に挨拶してくれたからな」

「……………今、諦めれば……………。勝てないと頭から決め付けて諦めてしまえば……………地上世界は確実に滅ぼされてしまうだろうし、この地下世界にも永遠に夜明けは来ない……………違うか？」

静かにそう問うソロの言葉に、グレンが唸った。

「……………確かに。既に幾つかの小村が奴の手で滅ぼされている。……………だが……………もう奴に敵う人間は存在しない。無駄に血を流すだけだ……………」

なおも愚図るグレンに、眉間に皺を寄せ、リロイが立ち上がった。

「……………わかった。なら、他所を当たらせて貰う」

「え？」

「ちょ、ちょっと、リロイ……………!？」

「協力してくれないという相手に幾ら言っても無駄だろう。……………行くぞ」

ボタンとリロイが部屋から出て行き。三人が慌てて立ち上がってその後を追う。戸を閉め際にぺこりと、ミロッドが頭を下げ。そして、部屋の扉が閉ざされた。

奇妙な静寂のなか、グレン一人取り残される。

「……………」

あの子たちは何も知らない。この世界に起きた惨状は――

恐らくは地上世界とは比べ物にならないくらいのものだろう。

大魔王には勝てない。傷つける事すら出来ない。わかっている、わかっているのに……………。

「お父さん？」

四人が出て行ったのを見たのだろう、グレンの息子がひょっこりと戸口から顔を覗かせた。

それをしっかりと抱き締めながら、グレンは堅く目を瞑る。

「…………… お父さん、泣いてるの？どうしたの？」

グレンは何も、言えなかった。

――臆病だという事はわ

かっている。だけど、この子の為にも無駄死にする事は出来ない……………。

いい得も知れない葛藤が、彼のなかで渦巻いていた。

「―― リロイ…………… リロイったら！ちょっと待って、此

処、島よ！？…………… どうやって陸地へ渡るつもりなの？」

「…………… 泳いでも、渡る」

リロイはグレンの態度に、腹を立てていた。

此れが、 地下世界 アレフガルド の住人の考えなのだろうか。

それとも彼だけなのか、わからない。

地上ではまだ、深刻さを知る者はどんな者でもそのちっぴけな勇気を振り絞り魔王軍に抵抗をしていたからだ。

自分たちを親身でバックアップしてくれたアリアハン王を始め、兵

士の皆。

最後まで屈する事なかった、テドンの人々。

不屈の精神と正義を貫き通した、サマンオサのサイモン。

その遺志を受け継ぎ、限らない助力をしてくれた、その息子セーレン。

そして、

—— 我が父オルテガ。

誰もが身も心も傷つきながら、自分たちが生まれた世界を守ろうとしたのに。

彼は始めから全てを諦め、それを許容していた。……………その事が、ゆるせなかった。

「無理よ、この海が何処まで続いているか知れないのに。それにこの海の色……………もしかしたら、毒素が生じてるかも知れないじゃない！」

「おい、リロイ。早まるなよっ」

今にも飛び込もうとするリロイを抑えながらソロが声を荒げる。

「落ち着けて！」

「落ち着いていられるかっ！……………こうしている間にも、誰かが

——

「—— 私の船を使ってくれ」

風の音に混じり聞こえた言葉に、四人が振り返る。……そこには
グレンと、その息子が立っていた。

……リロイの表情は冷たく無言のまま、堅く唇を噛み締めている。
「グレン……さん……」

「……君たちの言う通りだな。……最初から諦めていては何も
出来ない。——此れからの世代の為に、本当は……こ
の世界に住んでいる私たちが何とかしないとならない問題だとい
うのに」

グレンは息子の頭を愛しげに撫で、それから改めて。……頭を下
げた。

「……すまなかった、地上の勇者たちよ。……君たちは、決死
の思いで此処まで来たというのに。それなのに、私は……」

「……わかって貰えたら、それで良い。此方こそ、ありがとう

……」
リロイがそう言い、僅かに笑み。そしてグレンの前へ立ち、その頭
を上げさせた。

「——教えてくれ。大魔王は、何処に」

「……ラダトーム城の対岸の地だ。闇の結界に覆われ、直
には辿り着けない孤島だが……目視確認する事が出来る。だからまず
は、ラダトームを目標して北上してくれ。銀の鐘の塔が聳えている
から、すぐわかるはずだ……」

そこまで吐き出してから、グレンは表情を曇らせ、俯いた。ぎゅっ
と、爪が食い込むのではないかとというくらいに握り拳を作り。

「……力のない自分が憎いよ……。こんな辺境に子供を連れて
逃げ隠れる事くらいしか、出来ない自分が……」

「そんな事は無いさ。……グレンは……おれたちを助けてくれ
た。地上から迷い込んだ人を助け出した。……それに、貴方は、
貴方の子供を守っている。剣を持つ事だけが戦う力じゃない。……

……出来る事は幾らでも見付かるはずだ」

「……」

「—— おれたちは、おれたちに出来る事を……やれるだけやる。例えそれが無駄に終わっても」

微笑んだリロイにグレンは何処か精霊ルビスの光が重なり。グレンは堅く、リロイの手を握り締めた。

これが。これが 地上世界 アデルハイド の勇者……！！

「……………ありがとう……………」

その弱々しい声色は寄せる細波にかき消されてしまったが、リロイはいつまでもグレンの縋る手を、握り返し続けていた。

きつかけは小さなもので良いのだ。ほんの一握りの勇気があれば、それは力となる。

人の心に僅かでも正義があれば、きつと負けやしない

。

グレンと、グレンの息子に別れと感謝を告げ。リロイたちはこの未知なる大陸……アレフガルドの中央大陸を目指し船を漕ぎ出した。キングマーマン、キメラ、クラーゴン等、地上世界では見た事もない凶暴なモンスターがその行く手を阻んだが、幾多の死闘を乗り越越

えて来たリロイたちにとって、それらは既に大敵ではなかった。

そして……。

「見てリロイ！あれ、街が見えるよっ！！」

舵を取っていたシシルの声に、リロイたちが甲板を駆けて来る。

薄暗がりのなか、確かに浮かび上がるのは街の灯り。嬉々してシシルがその方へ舵を切った。

—— その国は 夜光花 アスモニカ と呼ばれる日の光
が無くとも育つ花々に囲まれた美しい国だった。

活気すら感じるその国の様子にリロイたちは何処か安堵のようなものを
感じつつ、その門をくぐる。

「…………… 小さな街だけど活気あるなあ」

「こら、はぐれるぞ」

地上には売っていない珍しい魔具等にふらふらと見に行こうとする
シシルの襟首を掴み、ソロがリロイを見遣った。

「先ずはどうするんだ？」

「国王に謁見したい。……………が、もう皆、潮風でベタベタだろう。
宿で休んでから向かって遅くない」

「やったあ、お風呂入れるのねっ」

きやあ、と喜びを見せるミロッドに、ふと辺りを見渡したソロがに
やりと笑った。

「なあなあ、ミロッド、リロイ。見てみるよ」

「ん？」
「え？」

—— ラダム旅人の宿 【 ダンシングマドハンド亭 】

混浴源泉あります。一泊二食お一人さまだったの 1G 破格
の安さと美味しい食事で貴方のお越しをお待ちしております。

空き部屋あります
○○ - ○○○ - ○○○○

………立てられた看板を前にへらっと笑うソロにミロッドが目をつ
にした。

「……………混浴？」

かあ、と顔を赤らめるミロッドに、シシルも顔を逸らした。リロイ
に到ってもその頬は赤い。

「……………混浴なら裸見ちまっても罪にならないよなあ？」

「な、何馬鹿な事言ってるのよつ。そんなのあたしたちがゆるすわ
けないでしょ！？」

「……………ソロ。……………マヒヤド、ベギラゴン……………ライデ
イン。それとも、直に刻まれる方が、お好みか？」

リロイが真顔、かつ静かな声色でミロッドと自分の最大攻撃手段を
並べ始め、流石のソロもそれにはぎょつとする。

「此処まで苦楽を共にした仲間だ。せめて苦しまないよう一撃で仕
留めてやっても良いが。……………シシルだって勿論協力してくれるだ

る？」

視線を向けられ、（巻き込まれた！？）とばかりにシシルが必死にこくこく首を縦にふる。言うまでも無いが彼に求められているのはザキ、ザラキという即死魔法系統だ。

「てめえ…………シシルっ！！」

「じ、自分の身が一番可愛いだろっ。変な事言うソロが悪いんじゃないかっ」

「うるせえっ！こんの裏切り者っ」

「うるさいっ！！」

リロイとミロッド双方から同時に怒りの声上がり、ソロとシシルは身を寄せ合いすくみ上がった。

（かぼ

ん

……………）

「…………と、いう事でえ。…………いい？誰もこっから先入れちゃ駄目だからねっ。ちゃんと見張ってるのよ、二人ともっ」

結局、リロイとミロッドが入っている間、ソロとシシルは戸口で見張りを行う羽目になったのである……………。

「…………ミロッド、前も思ったが肌の色白いな…………。日焼けしにくい体質なのか？」

湯場の方から聞こえて来た言葉にシシルがぴくりと反応する。ソロもまんざらじゃないように聞き耳を立て。

「やだ、リロイったら。……きやははっ、くすぐったいっ」

「……だって、ほら。おれは…肌も荒れてるし、色も少し……」

「でも、ほら。胸も大きいし……」

……だって」

クスクスと笑いが漏れる女たちの会話に、二人とも頬を染めている。

「……拷問だな」

「ああ……」

「—— トイレ行って来て良いか？」

「駄目だ。……行くなら俺が先に行く」

「何でっ」

「年寄りを優先させろっ」

「うるさいぞ、見張りっ！」

リロイの声が飛んで来て、ぴしゃりと二人のやり取りは再び沈黙へ押し込まれたのだった……。

—— 一夜眠っても起きたという感がほとんどない。何せ、寝ても覚めても夜なのだ。朝が訪れない世界。それが此処、アレフガルド。

一行が城へ訪れたのは、地上時間で言うならお昼頃、だろうか。真っ直ぐに来れば良かったものの、道具屋のタイムバーゲンと重なってしまい、先に旅道具を揃えていたのだ。

「止まれ。此処から先は由緒あるラダトーム城。何用で訪れた？」
門を守る衛兵に尋ねられ、リロイが一つ頷く。

「おれたちは地上世界から来た。至急に王との謁見を求めたい」

「ち、地上から！？……………少々、お待ち下さい……………」

一人が何かを伝えに行き、……………やがて恐らくは王の側近の地位にあたる偉い人物なのだろう、やや中年の男を連れて、戻って来た。

「お待たせして申し訳ない。私はラルス王に仕える大臣のヒアルデと申します。王間までご案内致しましょう」

大臣自ら？と一行は顔を見合わせ思いながらも、その口は閉口したまま、彼の後をついて歩く。

「……………我々はずっと待ち望んでいました。ルビスさまが地上から光を遣わせる事を」

「……………光？」

リロイが首を傾げ。前方を歩くヒアルデに尋ねる。振り返る事は無く、ただヒアルデが頷いて。

「光は希望を与え闇を払う。……………我々は大魔王に対し様々な抵抗を繰り返して来ましたが、どれも大した効果は得られませんでした。我々はずっと、貴方がたが導かれこの世界に現れるのを待っていたのです」

「……………一つ尋ねて良いだろうか」

リロイの問いに、大臣が振り返る。

「何でしょう」

「おれたちの事をどうして知っているんだ？待っていたとか、光、とか……………一方的で、話が見えないんだが」

「此れは失礼しました。……………実は、この世界はルビスさまの神託で全ての事象を知ります。……………最も、ルビスさまがお隠れになられた後は、世界は神託を失い混沌を辿る一途にあります。今より八年前に、一つの神託がこのラダトームの地へ伝わりました。――

――月が光を失いし時は地上の勇者が三人の供を伴い現れる、

そして再び光を齎してくれるだろう、と……………」

「……………」

「それが最後の神託でした。ルビスさまはその後にお隠れになり……………恐らくはこうなる事を予め察しておられたのでしょいうな」

ギ…ギ…ギ…と大扉が開かれる。それと同時に、ヒアルデが大声を上げた。

「ラルス王！地上世界の勇者さまをお連れ致しました！」

——— その王はアリアハン王よりもやや年配ほどで、一行を穏やかに迎えてくれた。

「……………そなたらが地上から来た者たちか。遠路遙々、真、良く参つてくれた。……………わしは、このアレフガルドを統べる国、ラダトームの王ラルスじゃ」

「……………統べる？……………この世界は……………この国しか存在しないのですか？」

「軍力が乏しい小国は大魔王が現れた辺りにほとんどが消滅させられてしまった。現在この世界に残る国家はもはや此処のみ……………そしてルビス神が消えた今、我が地が大魔王と戦う最後の抵抗拠点である」

来るが良い、と促され。王座から立ち上がった王がバルコニーへ向かい歩き出す。四人はきょとんと視線を交わした後に儀礼を解き、王の後へと続き。

「此方へ来るが良い。……………見えるか？」

城のすぐ対岸に見える、毒々しい湖に囲まれた城。立ち込めた霧は、何処か幽霊城を彷彿させるような雰囲気醸し出している。

四人はぶるりと身を震わせた。この感じ……………アリアハンでゾーマ

の思念と遭遇した時の感覚に似ていた。

「あれが、大魔王ゾーマの居城。通称、闇の城じゃ。……此れほど近い位置にありながら、あの強い毒素と結界に阻まれ、我々人間は島に上陸する事はおるか近付く事も出来ぬ。……奴はあの城のなかで、魔力を蓄え続けているのじゃ……」

「……海峡を渡る事は？」

「あの海は、水自体が魔物と化しておる。船で近付こうものなら、船ごと海に食らわれてしまうじやろう……。以前、海峡を泳いで渡ろうとした男がおつてな。そやつも、遂に戻る事はなかった……」

ぴくりと引つ掛かったようにリロイが目を上げる。

「……男？」

「街のすぐ側で傷だらけで倒れていた男がおつてな、保護をした事があつた。——何処から来たのか、自分が誰なのか……」

「男は記憶を失っていたが、ある時、「あの城へ行かねばならん」と突然言い出して……。引き止める間もなく、男は荒海へ身を投じたのだ」

「……」

どくん。

「その男の名は、オルテガと名乗り——」

「——」

「まさかつ——」

「嘘っ——」

「オルテガだつて!？」

四人が突然反応を示し、王が驚いた表情を浮かべる。

「何じゃ……一体どうしたのじゃ？」

「……オルテガは……オルテガという名は、こいつの……リロイの父の名です。……地上世界、ガイア火山の火口に落ちて焼け死んだはずの……」

「何と……。それは真なのか？リロイ殿」

驚きで言葉が出ないリロイに代わってソロが説明をし、それを聞いた王が驚愕の表情を浮かべる。暫く黙っていたが、やがてリロイが弱々しく頷き。

「……。そうか。大魔王の魔力が強まり、光の世界と闇の世界の歪みが大きくなつてきているのも事実。…火口に”道”が出て来ていても、何の不思議もなかるうに。……じゃが……」
王が言わんとした事がわかっていたかのように、父の生存をリロイは喜べなかった。

そう、父が向かった先は……。生きて渡る事など不可能であろう、魔の海峡。

どのみち父は……。海の藻屑と散ってしまったのだから。

「……。王よ。——何があつても、我々はあの城へ……」

……大魔王へ挑まねばなりません。何か島へ渡る手掛かりがあるのなら、例え小さな些細な事でも教えていただけないでしょうか」

父への感情を押し殺し、自分がしないとならない事を……。使命を優先させたリロイに、仲間内から痛々しい視線が向けられた。

迷っている暇は無い。余計な事を考えている暇は。

そんな事を、父は望んでいない……。！！

「……。ふむ……。道か……。——リムルダール

という街が、この国の遙か東の果てに存在する。そこにいる賢者はあらゆる知識を持つ者と言われているが、その知を授かった者はほとんどいないという。……そなたたちならよもや賢者も心を開くかも知れん」

「リムルダールの、賢者……」

「地図を示して遣ろう。中途にドムドーラ、メルキドの街があるから、其処で船の物資の補給を行うと良い。そこまでの食糧と水は此方で用意させて貰うよ」

「——— ありがとうございます……………!!」

深く頭を下げたりロイたちに王が首を振った。

「わしらに出来る事は少ない。出来る事なら何でも力になろう。………いつでも頼って来てくれ」

——— 死んだと思っていた父が……………生きていて……………それもまた、絶望なまでの道に散っていた。

喜びはなかったが、忘れていた空虚な思いが、リロイの胸を満たしていた。

何が其処まで父を駆り立てたのかはわからない。

生命を賭けてまで、守ろうとした二つの世界。貫き通した正義。

そして今、その道を……………自分の意思で。娘の自分が辿っている。

火山で途絶えたと思われた父の足跡。それを地上から離れたこの世界で。再び……………。

それを考えると、少し。……………涙が滲んだ。

31話 賢者

神秘的な湖上に存在する浮島都市、リムルダール。

リロイたちがその街へ辿り着いたのは、ラダトームを発ってから、五日後の事だった。

途中でドムドーラ、メルキドと、ラダトームとはまた面々の違う街を渡り、ようやくの事だ。

「きれーいっ！！……… ねえねえあの湖って泳げるのかしら？素敵ねえ」

「ミロッド、遊びに来たわけじゃねえんだぞ」

嬉しそうな声を上げたミロッドにソロが苦笑し。べ、とミロッドが舌を見せる。

「わかってるわよ、それくらい。……… 此处に、賢者さまがいるんでしょう？どんな方かしら？」

わくわくした様子にリロイが歩きながら笑い。そのあまりのはしやぎ様にリロイが困ったように首を傾げて見せる。

「何だ、やけに嬉しそうだな」

「だってそうよ。賢者さまっていえば、あらゆる魔法に精通した魔術の達人の事を指すのよ？魔法使いのあたしにとっては憧れみたいなものなもの」

「つーか、僕も一応賢者なんだけどね」

シシルの言葉にミロッドが笑い。

「だってシシルよりあたしの方が、攻撃魔法強いもんね。賢者というより、まだまだ賢者の卵って感じなんだもの。尊敬対象にはほど遠いわ」

「ちえっ」

頬を膨らませるシシルに、まあまあとソロがその頭を撫で。片手で宿を示した。

「ほら、宿も見えて来た事だしよ。そうぶーたれるなつての。……
…少し情報を集めればすぐに賢者の居所もわかるさ。それほどの有名な人なら、尚更な」

……賢者、賢き者。あらゆる事象に精通し、魔法の理 ことわりを解き明かす者。

確かにシシルのようになり立ての者はそれこそその辺りの僧侶や魔法使いと大差はないが、それでもそれだけの素質を持つ者はそう多くない。

だからこそ崇め称えられるのだ。賢者という存在は。

地上世界ではガルナの試練を乗り越えた上で名実共に認められる証だが、この世界ではどんな賢者の試練が行われているのだろう。

そして、その試練を乗り越えた者は一体どんな英知を授けてくれるのだろうか、誰もが期待していた。

——
しかし。

「何じゃ何じゃ。久々の来客だというからどんなのかと思いきや、

むさいの一人にガキ三人ではないか。ぴちぴちなのはおらんのかい、
こう、むちむちぷりんぷりんなのは」

古い一件の家。人々の話を頼りにようやく会う事が出来た賢者は……。

……。
齢90歳はあろうかという老人。しかも、かなりの助兵衛だった……。

「む、むさいのって俺か」

啞然と自分を指差すソロに老人が半目で「当たり前じゃい」と
言い。

「……………ご老人」

頭痛を感じながらもリロイは平静を装い、咳払いと共に声を掛けた。
「……………我々は」

「知っておるわい。地上から落ちて来た勇者一行じゃろう。勇者ナ
ナ、戦士ソロ、魔法使いミロッド、賢者の卵シシル。……………このわ
しに知らぬ事などないわ」

隠していた名さえ明かされ四人は絶句した。しかし次の瞬間、シシ
ルが何かに気付いて食い下がる。

「卵って何だよ、卵って！」

「じゃあかあしいわいっ！！何でおぬしのような青臭い小僧までわ
しと同格扱いされなきゃならんのじゃっ。魔法も極めておらんから
に」

「うつ……………そ、それはっ。だけど……………っ」

鋭い口調で返され、シシルが返答に困る。

「反論出来まい？間違ってないのじゃからな。……………というで、卵

決定な。——それよりおぬしらは、魔の島に渡る方法を

求めて此処へ来たのじゃろう？」

老人の言葉は全てを見通していた。リロイは驚きを隠せないまま、
息を飲み頷く。

「…………ご教授願えないだろうか？」

「嫌じゃ」

即答一瞬。眉を寄せたまま、リロイが食い下がる。

「知っているのは恐らく貴方だけだ。…………どうしても、おれたちは行かないとならない。どうか…………」

「そうじゃな、全土探しても魔の島のあれを何とかする方法を知っておるのはわしか、ルビスさましかおらんじやろう。だが、嫌じゃ。何でもさい男と乳臭いガキどもの手伝いをせねばならん」

「あ、あのなあ…………」

シシルが握り拳を作り、それを慌ててミロッドが制する。

たとえどんな ” くそジジイ ” であれ、今、彼の機嫌を損ねるわけにはいかなかった。

「何か若くて可愛えむちむちぷりんちゃんはおらんのかい」

「む、むちむち…………」

リロイがちらりとミロッドを見るが、ミロッドは慌てて両手を振った。

確かにミロッドは可愛い。

しかしミロッドはハーフェルフの為か15にしては平均年齢よりも発育が遅い。…………お世辞にもむちむち以下略とはとも言えなかった。

「そうさな、可愛えぷりんちゃんが酌をしてくれたら、話して遣ってもええぞ？」

「ジジイ…………っ」

「待て、ソロ。……………わかった、出直して来よう」

「良いか、白い花が似合いそうな可憐なぷりんちゃんじゃぞ！」

—— 何か最初から比べると注文が増えた気がするが、それでも一行は出直すしかなかった。

歩きながらぶんすか怒るのはシシル。ミロッドはともかく、あんな助兵衛ジジイに卵呼ばわりされるのがよほど癪だったのだろう。

「いつそ実力行使しちまっても良いんじゃないかあ？」

空に拳を振り上げるシシルに、ソロがひらひらと手を振って。盛大に溜息を漏らす。

「やめとけよ。恐らくあの爺さん強いぜ？」

「そうね。……見た目が全てじゃないから」

無言で前方を歩いていたりロイがくると肩越しに振り返った。どうやら一人で考えていても打開策は一つしかないと思ったらしい。半目で三人を見遣る。

「……………で、どうする？」

「どうするって……………ミロッドが駄目だった以上、候補は一人しかないじゃん」

腕を組んだまま返すシシルの言葉に「だろうな」「とりロイが困った顔をして。

「駄目元で遣ってみるか……………？……………あまり、気は進まないんだけどな」

「仕方ないだろ」

「……………ソロの女装」

ぼそりと呟いたりロイの言葉にぶつと三人が噴出した。その様子に

「ははは」「とりロイが笑い。

「冗談だよ。……………さて、一度宿に戻るか」

笑いながら歩き出すリロイに、三人は「絶対冗談じゃなかったぞ」「と思いつつ、ぞつとしながらその後を続いた……………。

「おおっ！やれば出来るでないかつー！」

あのポルトガの夜に着た薄黄向日葵柄のワンピースと白い花飾り姿のリロイに老人が狂喜した。

手を伸ばすそれを、ソロがペシッと叩き落す。

「はいはいはい、踊り子さんに手を触れないで下さい」

「ぬう、むさいの。けちじゃの……」

「じゃああしい。俺の嫁さんだ」――――「

ゴッ……！

脳天から一撃を食らい、ソロが頭を抱えその場に蹲る。握り拳を片手で作ったままのリロイがそれを冷ややかに見、それから老人へ向き直り。

「えっと……。さ、さあ、お酌をいたし……ますわ。そこに、お掛けになって、下さ……い」

ミロッドが付け焼刃で仕込んだ慣れない女言葉を口にし、にっこりと引き攣ったように微笑む。ぷつと吹き出しかけるシシルの腕を、ミロッドがぎゅゅと抓り。

「あだだだだ」

「………ちよつと黙ってなさいよつ。大事なところなんだから………」

「おおおう、ナナよ。もう少し近う寄れな？」

「………お、お酒を……」

「酒より、のお。ほれ、………ん？」

さわ、と悪寒を感じ。リロイは思わず手にした酒瓶を強く握り締めた。瓶に”ピシッ”とひびが生じる。

そう。……老人がリロイの尻を撫で回したのだ。

「——っ……！」

「ほっほ、ええ尻しとる………ぶほっ……！」

ゴッ……！！

鈍い音と共にソロの強烈な肘鉄が老人の頭に会心の一撃を食らわし、老人がそのまま前方に倒れる。

「………も……う……我慢ならねえ、このジジイっ……！！……」
——リロイ！こんなあてにする必要なんかねえっ！！単なる
助兵衛ジジイじゃねえかつ……！！」

「ソ、ソロ……？」

「ソロ、おじいさんに何て事………」

「るせえっ！好き勝手触られて黙ってられるかつ……！！……！」

ソロが激怒する様子に何処か嬉しいと感じ、慌てて首を横へ振り。
リロイは倒れ込んでいる老人を見下ろした。

仮にも修羅場を潜り抜けて来た屈強の戦士の肘鉄だ。………果たして食らって無事なのか。

「ソロも落ち着いて……。おれは大丈夫だったんだから。それより、シシル。早くベホマを………」

回復魔法の級なのだろうか、寧ろ蘇生魔法の級な気がするが。

「あ、ああ」

シシルが伏したままの老人に手を翳そうとしたその時。倒れたままの老人の体からベホマの光が漏れ出で、そのままむっくりと起き上がった。

「ほほほ……やるのお、むさいの」

「ち、生きてやがったか」

「ソロつたら！」

ふわりとまるで重力の抵抗もなかったように老人が立ち上がると、そのまま再び椅子へ腰を下ろし。グラスに酒を注ぐ。

「まあ良いて。………… おんしらという人種がわかったからの。ぷりんちゃんの尻も堪能出来た事じゃし、話を聞いて遣ろう」

「え？」

「本当！？」

「本当はの、わし秘蔵の神秘のビキニも試し……………」

ああ、いや。冗談じゃて。冗談冗談。それよりも魔の島に渡る方法、じやったの」

ソロがりロイたちの後ろで殺気立つのを感じ、老人が慌てて本題に入った。

「魔の島へ渡る方法は、精霊の加護より虹の橋を顕現させるしかなかろうて」

「虹の橋？」

「そうじゃ。雨と太陽が合わさりし時、光と希望に溢れしその橋は闇の島へと導いてくれるじやろう。—— 雨雲の杖、太陽の

石。それとルビスさまの力が必要じゃ。それが集まった時に再びわしのところへ来るが良い」

「雨雲の杖と太陽の石……………」

「そうじゃ。雨雲の杖は妖精たちが、太陽の石は人間たちが、それぞれ守る事をルビスさまより命じられた。妖精たちが守っておるのなら、ルビスの神殿を頼りにすれば良からう。この大陸の南西、グルフセレクの沼地に存在する妖精たちの聖地じゃ。…………… 太陽の石の在処は大凡見当がつこう？」

人間に託された太陽の石。

…………… 人間たちの象徴の場所。

「ラダトーム……?」

「後はラルス王にでも聞くんじゃないな。此れ以上ヒントを出すと返ってつまらんじゃろ?」

「……つまらないという問題なのだろうか、とりロイは一瞬考えたが、なるほど、如何に知識の宝庫とはいえ、それに全てを頼ってはいけないという事が。」

「わかりました。……ありがとうございます」

「それとその坊主、少し預けていかんか?」

頭を下げてリロイだが、ふと、ちよい、と指差した方へ視線を向け。その先にはシシルが驚いた表情を浮かべている。

「え!? 僕!?」

「そうじゃ。坊主といってる以上おぬしかおらんじゃろ。此れから世界の命運を賭けて戦う身だちゅうのに卵のままじゃ気の毒じゃろ? おんしらがラダトームとルビス神殿へ行っている間に、わしがみつちり魔法の極意を叩き込んで遣ろう」

「ええええ!?!」

にやりと笑った老人にリロイが顎に手を当てて考えた。そのままポーン、とシシルの肩に手を置く。

「丁度良い機会だ。先輩賢者に色々教わるんだな」

「やだよ、リロイ。僕こんな変態賢者と二人きりなんてっ」

「安心しろ、男には興味ないわい。……では行つて来い。くれぐれも戻つて来るのを忘れるんじゃないぞ? 坊主が泣くからの」

「泣かないっ!」

「ありがとうございます。……老人」

「ギースじゃ」

「え?」

深く頭を下げてリロイだが、その言葉に瞬きを強めて顔を上げる。

「いつまで人をジジイ扱いしとるつもりじゃ。わしの名はギース。短くて覚えやすいじゃろ?」

「……………あ。ありがとうございます、ギース。……………それじゃ、行って来ます」

シシルの悲鳴がリロイの背に響くが、それも扉が閉まり、聞こえなくなる。

あらら、と未だ戸の方を心配そうに見遣っているミロッドをリロイが促して。

「行くぞ」

「ええ。……………大丈夫かしら？———シシル……………」

「実力は本物だよ、あの人は。……………おれたちは、おれたちのやるべき事をしよう」

ラダトームへ舞い戻るのはロスが大きいかも知れないが、必要な事なら避ける事は出来ない。

迷いは余計に時間を使う。ならば此処はギースを信じて、大きく一歩を踏み出す道を選んだ方が良い。

出来るだけ、急ごう。……………自分を見失わないくらいに。

焦る気持ちは死に繋がる。リロイは深呼吸をした後に、歩いて来る仲間の方を、見遣った。

32話 太陽と雨を求めて

シル抜きでラダトームまで再び航路を取り、ラルス王にその事を告げると、王は快く秘密裏で国宝として守っていた太陽の石を三人に渡してくれた。

「いや、此れくらいでそなたらの手助けが出来るのならな。………それよりもリムルダールの賢者が示したもう一つの地………あてはあるのかな？」

大臣が開いた地図を目で辿りながら、ラルス王が三人に声を掛ける。「賢者は………グルフセレクの沼地と。生憎未だその場所は掴んではいませんが………」

「ふむ。メルキド大陸の南部、海岸線にある大きな沼地帯じゃ。大凡此処辺りであろう」

羽ペンでくるりと印を付けられた位置を見遣ると、なるほど、帰りの航路の途中にある。

「仲間が一人リムルダールに残っておると言うが、三人だけで大丈夫かね。必要なら、僅かだが兵を同行させるが」

「いえ、おれたちだけの方が身軽で良いので………。お心遣い、感謝します、ラルス王」

丁寧な頭を下げたりロイに、ラルス王の表情が綻んだ。その手を、堅く握り締める。

「そうか。また何かあったらいつでも頼って来てくれ。出来る事ならば何でも力になろう」

「ありがとうございます。———それより近隣の小村や街の方はどうなっているでしょうか？」

ずしりと重い太陽の石をソロの荷物袋に預けながら、ロイが眉を寄せる。

「うむ、最近ドムドーラが幾度か魔物の襲撃にあっている。ラダ

トームから兵を何隊か配備させ、警戒をしているが………どうも野生の魔物というよりも統率制があつてな。大魔王が故意に街を陥落させようと企んでいるのでは、とな………真相は未だ推測の域を出ぬままじゃ」

「……………」

「じゃが、このラダトームの兵力もそなたらが考えておるほど脆弱ではないぞ？このわしが責任を持って、各所の街村の安全は確保しよう」

「はい……………」

どうしてラダトームへ直接攻撃を仕掛けて来ないのだろうか。

確かにドムドーラもそこまで小さな街では無い。それでも、軍事力等は一切持たない、ただの砂漠に在る街だというのに。

どうしてこんな、回りくどい真似をするのだろうか？

自分がもし大魔王なら……………真っ先に軍力であるラダトームを落とす。人間であれ、魔物であれ、それが兵術というものだろう。

帰路の船のなか、リロイはその事を考えていた。

「お、いたいた——。おい、リロイ。ミロッドが飯出来たとよ。入れよ」

「ああ」

呼びに来たソロにリロイが顔を上げ、立ち上がる。

「重要品の割にあつさりと手に入つたな」

「そうだな……………」

そう答えたリロイだが、ふと、ソロの右腕の動きがぎこちない事に気付いて。怪訝そうに視線を向けた。

「ど……………どうした？」

「ソロ」

ぐいっとリロイが右の二の腕を掴み。「あだだだっ！」と、ソロの口から痛みを訴える声が漏れたのを聞き、眉を細める。

「脱げ」

「いや〜ん、リロイちゃんったら大胆……………」

「良いから！」

リロイの声が怒気を孕んだのを見て取り、ソロは軽口を叩くのを止め。そのインナーの腕を捲くつた。

恐らくは先の戦闘でやられたのだろう。腫れ上がったその腕は、恐らく折れている。

どうして戦闘が終わった時に気付けなかったのか、と、リロイは自分に腹を立て。だが同時にソロにも腹を立てて、見上げるように睨み上げた。

「こんなにして、どうして黙ってた。悪化したらどうなるか、仮にも大人ならわかるだろっ！」

” 仮にも ” その言葉に、はは…………、と半目をした後にソロが左手で首裏をかき。

「どうせリムルダールに着いたらシシルにベホマ掛けて貰えるしな、それまで……………と思って」

「辿り着く前に魔物に襲われたらどうするつもりだったんだ」

「いや、俺。両利きだから何とかなるな、と……………」

ああ言えば、こう言う。苛々とリロイはその眉間の皺を深め。そして、爆発した。

「何とかなるわけじゃないかっ！」

怒鳴った後、口早にベホイミの紋式を口にし、その光をソロの腕に

当てる。

「おい。…………折れてんだ。ベホマ級じゃないと効果出ねえよ」

ソロだって、悪戯に内緒にしていたわけじゃなかった。ベホマは現状シシルしか使えない。無駄に怪我が見付かって心配されるよりは、内緒にしていた方がパーティの為になる、そう思っていたのだ。

それでもリロイはゆるせなかった。リーダーは自分だ。……………どんな些細な事であれ教えて貰いたかった。

……………何かあつてからでは、手遅れなのだ。

そう、あのネクロゴンドの洞窟で……………自分はただ、泣きじやくり、しがみつくしか出来なかった。

シシルの機転が無ければ、恐らくはソロは二度と目覚めてくれなかっただろう。

だからこそ、誰かが欠けた時であれ……………自分はしっかりとしないとならないというのに。

今、回復魔法が使えるのは、自分しかないのだから……………。

「おい、リロイ……………」

魔力の無駄遣いだ、とソロがその肩に手を置き、表情を見遣る。

「……………」

「やめろつて。————大丈夫だ、此くらい、大丈夫だから」

不安がる子供をあやすように、優しくソロは何度もリロイに言い聞かせる。

身体的負担が大きい————それに気付いたからだ。

元々魔法より剣に長けていたくらいだ。ベホイミの連続使用で僅かにリロイの額に汗が浮かぶのを、ソロは見落とさなかった。

「リロイ……………！！」

そしてその手を掴んだ瞬間。

ベホイミの光より強い光が二人の間で生じ。……………そして、光が。

……………痛みが、消えた。

「……………あ」

「ベホマだ。……………ベホマの光……………、って、おい、リロイ？」

こてんと、リロイがソロの肩に凭れ込む。……………気を失ったのか？
とやや驚いた様子でそれを見つめたが、聞こえるのは微かに寝息で。

ベホマが成功した瞬間に緊張の糸が切れたのだらう。

魔力を使い切り眠り込んでしまったリロイを、ソロは痛みの消えた
右手で、優しく撫でた。

「氣い張る必要ねえっていうのに……………どうしてわからんかね、こ
のお嬢さんはよ」

額に口付けを落とし、それから晴れない暗い空を見上げる。

———と、その時、ミロッドが痺れを切らせて船室から出
て来た。

「ちよつとご飯だつて言つて……………———な、何？ど
うしたの？」

「いや。何でもねえよ。オヒメサマが寝ちまって、な」

「……………疲れてたのかしら？」

寝顔をミロッドが見下ろし、瞬きを強める。と、ソロがにやりと笑
みを深め。その小柄な寝姿を抱き上げ。

「ぐっすり寝かせてやろうぜ。どうせ魔物が出たら否応なく叩き起
こされんだ」

「そうね」

二人は顔を見合わせくすりと笑い合い。そしてリロイを連れて船室
へと戻って行った。

—— ナナ

…… 誰だ……。 —— いや、わかる。 …… あんた

…… いや……

…… 貴方は…… ルビス……？

—— そうです……。 私は、バハラタの夜、貴方の夢へ語り掛
けました……

—— 覚えていますか……？

…… 覚えている。自分を…仲間を信じろ、と……

—— ええ。 …… 良くぞ数々の苦難を乗り越え……この大地
まで現れてくれました……

…… ゾーマが…… 貴方に何を ——

—— 私は、彼の者の手により石に変えられ……塔のなかへ封じ込められてしまいました

…… 塔？

—— 虹の橋を掛ける為には私の力が必要です

—— 今はこうして、思念を送るだけで精一杯……。ナナ、貴方の手で私を解放して下さい…

…… 待て、貴方は今何処にいるんだ。塔は？……塔は一体…

……

—— …… 我が肉体は…マイラの…… 此れを…

…

……ふ、と意識が戻り、リロイは目を覚ました。……船室の、自分の寝台の上だ。

またあの夢……否、夢を通してルビスが語り掛けて来た。布団の上、ゴツ、と堅いものを感じリロイはぼんやりとそこへ視線を落とす。古木で出来た奇妙な形の笛がそこにあった。

「……マイラ……」

覚えている。

ゾーマに石に変えられたルビス神。そして、その封じられた肉体が

置かれている塔の事。…………拾えた言葉は、” マイラ ” とい
う言葉だけ。

その言葉が人名なのか、はたまた場所の名なのかは不明だが、鍵と
なるのは間違いなかった。

その事をソロたちに伝えよう、そう立ち上がった瞬間。…………船体
が激しく――大きく揺れた。

ズズッ…………ン…………!!!

「!?!」

床に転がる笛を引っ手繰るように掴み、リロイは自分の荷袋へ押し
込んだ。そして、武装もそこに立て掛けておいた稲妻の剣を掴
み、船室から飛び出す。

「!リロイ!」

「よお、お嬢さん。良くお休みになれたかい?」

見るとソロがミロッドが既に臨戦状態に陥り。眼前にはクラーゴンの
毒々しいオレンジ色の肢体が今にも船体へ乗り上げようとしてい
た。

幸い一匹だけだが、それでも気が抜けない相手だ。

「魔物が出たならさっさと起こせ!」

「呼びに行こうと思ってたところなのよ。そしたらリロイ先に起き
て来るんだもの」

複雑な紋式を組み立てながら、ミロッドが笑い。

「このやかましさに起きなきゃそれはそれで驚きもんだけどな。…

……と」

ソロがドムドーラで購入した吹雪の剣を鞘から抜き去り。そのまま、
クラーゴンに向けて一閃する。ビシッと霜を孕んだ傷が生じ、
ヴォオオオオ!! と、クラーゴンが激痛に怒声を上げた。

「―――ベギラゴンー！」

追撃で放たれたミロツドの魔法は真っ直ぐに巨大イカを取り囲み。そのまま灼熱の光を浴びせ。やがて力尽きたクラーゴンが再び海のなかへと沈み、消えていった。

「ふう」

「いっちょ上がりつと……………」

「……………即死系があれば一発だったな。……………倒せて良かったが」
「そうね、早く用事を済ませてシルを迎えに行つてあげましょ」

ミロツドが笑い、リロイがそれに頷きを返す。ふと、海岸線沿いの大陸を見つめていたソロが何かに気付いたように船縁へと移動した。

「―――おい」

「ん？」

「あ。……………あれかしら？」

ソロの言葉に目を凝らした二人が見つけたものは、霧立つ沼地に聳える小さな石のほこら。

沼は毒素で異様な色に染まっているが、そのほこらまで掛けられた橋は白薔薇に包まれ、一種異様な光景を醸し出している。

「あれみたいだな。……………よし、接岸準備をしよう。ソロはこのまま魔物の接近の警戒を続けてくれ。ミロツドはおれの手伝いを」
リロイの言葉に二人が頷き。手際良く船の移動を開始した……………
…。

—— ほんらへ入り、 ” ルビスに遣える者 ”
と名乗る妖精に会えるまで、そう時間は掛からなかった。

その容姿は、あの地球のへそで出会った番人と酷似しており、彼女もまた妖精だった事が思い起こされる。

「良くぞ参られました、地上の勇者たちよ。…私はルビスさまがお隠れになられた現状、雨雲の杖を守護する任を与えられた者…… ナーダと言います」

ナーダは憂いを表情に浮かべたまま三人を見渡した。

「太陽と雨の力が必要になる時が来たのですね。…… ならば、この雨雲の杖を持ち行きなさい。—— ゾーマが何処かに隠し

てしまったルビスさまをお助けする事が出来たならば…… その加護は必ずや虹の橋を齎す事となるでしょう……」

祈るような、なだらかな声色。そして、リロイの前へ進み出、灰色の古木のような杖を差し出す。

「ありがとう。…… ルビスは、おれに言った。自分は塔のなかに石になっていると。そしてマイラという言葉、…… この笛をおれに託して」

リロイの言葉にソロとミロッドが目を丸くする。

「いつだよ」と、ぼそりと尋ねるソロに「さっき寝ている時」と、リロイが苦笑混じりに呟き返した。

その笛を見た瞬間、ナーダの表情が変わる。

「それは確かにルビスさまの魔力が込められた妖精の笛……」。

—— マイラというのは、この世界の北東にある、人間の

軽い気持ちでそう言った三人の言葉だが、シシルの方は予想外に深刻な事態に陥っていた。

そしてそれを知るのは、彼女たちがギースの家へまさに入ろうとした瞬間だった……。――

（―― あちっ！あだだだっ！――）

（ほれ！それしきの魔法制御出来ずにどうするんじゃ！集中が足りんわい、集中がっ！――）

……扉に手を掛けようとしたままりロイは躊躇し。ソロとミロッドを見遣った。

（ぎゃ――っ――！――）

「……」

三人が頷いて扉を開けた瞬間。ボンッ！――と、室内に炎が炸裂した――！

「うわ！？」

「―― 誰じゃいつ！今取り込み中……、って、おお。おんしらか。……で、どうじゃった？首尾の方は」

爽やかに笑うギースの足元にはシシルがへろって伏せている。

「リロイ……遅いよおおおお」

「わ、悪かったな、シシル。……太陽の石と雨雲の杖を借りる事が出来た。それと、ルビスが封じられている場所の情報も」

「うむ。……さ、こいつももう絞るだけ絞ったし返して遣っても良いじゃろ」

「ふあゝい……」

ずりずりと三人の方へ戻りべそをかくシシルの頭をミロッドが苦笑

して撫で。それを見遣つてからリロイがギースへ視線を戻す。

「それでルビスが囚われている塔の事なんだが……………」

「何かあつたかの？」

「結界が張られているらしい。…ナード……………ルビスの留守預かりの妖精は、ルビス級の魔力でないと破れない、と……………」

表情を曇らせる三人にギースは一瞬目を丸くして。それから声高らかに笑い始めた。

驚いた表情を浮かべる四人に、ロッキングチェアに深く腰を降ろし直す。

「なるほどなるほど。……………確かにあの塔の結界はゾーマが張つたもの。並大抵の魔力では打ち破れまい。じゃが、ルビスさま以外で破れる者はもう一人おるぞ？」

「え？」

「このわしじやい」

「えええ！？」

四人の言葉にからからとギースが笑い。

「とはいえ、船旅で魔物とけんかをしながらあの地まで向かうには、わしはちと年を取りすぎた。つー事で、シシル。おぬしが代わりに結界を解け。トラマナくらいは使えるじやろ」

「へ！？…ちよ、ちよつと待つて。爺さんしか出来ないんだろ！？僕がやつたつて出来るわけないじゃないかつ」

確かに。

戸惑つた表情を浮かべるシシルを始め、一行にギースが懷をゴソゴソと漁り。やがて、水晶柱のついたペンダントを取り出した。

「当たり前じやい。このわしが何十年かけてこの超！魔力を手に入れたと思うとる。……………この水晶を媒体として遣うが良い。こいつにはわしの魔力が吹き込まれておる。おぬしほどのちっばけな魔力でも塔の結界を除去出来るじやろ」

「ちっばけ…」

——— まあ、良いけどな……………もつ」

「如何にアレフガルド一の賢者であるわしが稽古をつけてやったとて一週間やそこらじゃ。まだまだちつぽけな卵にや変わらんじやる。……良いか、基本紋式に破邪公式を掛け合わせる時に遣うんじやぞ。余波を防御するのを忘れるな」

水晶を受け取り、やや緊張した面立ちでシシルが頷き。満足そうにギースが笑んだ。

「そうそう、素直に年寄りの言う事を聞いていれば良い」

道が見えたのを確認したりロイが早々に立ち上がる。……動向を見せない四天王も気になるし、何よりもルビスのその安否が気遣われたからだ。

「ありがとう、ギース。それじゃ、おれたちはこのままマイラへ向かうよ」

「休息無しか？」

「マイラにも宿はあると思う。そこで休んだ後に塔へ向かうと思っっている」

そうか、と頷いたギースが、「達者での」と見送り。

リロイ、ソロ、ミロッドが順に扉から外へ出ていく。最後にシシルが出て行こうとした時、その声は掛けられた。

「シシル」

「！……な、何だよ」

「気を付けての」

「！？……ああ」

一体何を言われるのかと思いきや、シシルはやや照れたような表情を浮かべ。短く返答を返してから三人と共に家を出ていく。

一人、家に残されたギースは小さく溜息を吐いて。それから壁に掛けられた一枚の絵に視線を向けた。

強面の男とその妻であろう女性。そして……シシルと同じ年くらいの男の子の楽しい表情が、描かれている。

「デリラック。……駄目じゃの、あやつを見ているとお前の事をつい重ねてしまうわい」

それだけ、呟き。それからギースは一人、酒瓶の酒をグラスへと注いだ。

33話 呪詛

……漆黒の闇のなか、静かな声色が響いた。

ボツと不意に立つ蒼い炎。……魔法のランタンが、その道を記していく。

「——やあ、アークマージ。戻っていたのかい？」

呼ばれ、アークマージ……イルダは僅かに視線だけを動かした。

暗い石畳の向こう、燃えるような赤い長い髪と瞳を持つ、美青年……

……そんな言葉が似合いそうな男の姿がそこにあった。

ひょうひょうとしたフェイス。何も知らない人間なら一見騙されてしまいそうな、甘いマスクをしている。

「……バルログか。——何の用だ？」

バルログと呼ばれたその男はふふ、と小さく笑い。可笑しそうにイルダの背を見遣っている。

からかうような声色で、続け。

「勇者一行が乗っていると思わしき船がアレフガルド南端岬を航海しているのが目撃されたようだね」

「そうだな。……バラモスを倒した以上、此处へ向かうのは必然だろう。大魔王さまも直々に、奴等を」 呼んだ ” みたいだからな」

「ねえ、アークマージ。……君に聞きたい事があったんだけど」

ふと尋ねられた言葉。やや眉を上げた闇色の男は、その炎のような男へと鋭い視線を向ける。

「……聞きたい？」

「君はバラモス城でゾーマさまより勇者の進行阻止を命じられていなかったかな？そもそも君が動けば、勇者がバラモスを倒すような事は有り得なかったはずだけど……」

「貴様には関係無い話だ。……ゾーマさまのお咎めは、もう直々

に受けた」

苛立った声色と共に殺気が辺りを渦巻く。

「まさか、裏切り行為？やだなあ、人間と暮らした所為で染まっちゃったりしたのかな……？ねえ、アークマージ、その辺りはどうなのさ。」

——あのエルフとの娘の事も、気になって仕方ないんだろ？このままじゃゾーマさまに殺されるのが目に見えてるからねえ……ふふ」

「——裏切りと判断するのなら、この場で斬り捨てるが良い。尤も……貴様如きに私が傷つけられるわけがないがな。……試してみるか？」

それまで笑顔を ” 作っていた ” バルログの表情が僅かに強張る。今だ表面上は穏やかな顔を取り繕っているが、その真紅の瞳は僅かに歪んでいて。

沈黙と、双方の圧迫感。完全堅固のこのゾーマ城でさえ、それだけで空気がびりびりと揺らめきを見せたほどだ。

「……やめとくよ」

ふ、と表情を和らげ、バルログが先に殺気を解く。ひらりと両手を振って、元の遊び人地味な笑顔を浮かべ。

「今、君と争ったところで何のメリットも無いしね。姫君も、騒がしいのは好まない。お叱りを受けるのはまっぴらだからさ」

姫という名にアークマージ……イルダの眉が上がった。

「そう言えば、姫はどうしている。ゾーマさまとの謁見の後から、姿を見ていないが」

「姫なら尖塔の間で就寝中さ。彼女の事は君に任せたよ、アークマージ。どうもボクは嫌われてるっばいからね」

「……」

「ボクは此れから、光の塔へ向かい勇者たち一行を抹殺しないとならないからね。ゾーマさまから直々に命を受けたんだ。……まあ、バラモスが欠けた今、 ” 姫 ” とボクと君しか奴等に敵う相手もいないだろうから……悪いけど獲物はボクが美味しく頂くよ。」

—— バラモス城の件が無かったら、ボクじゃなく君に声が掛かってただろうけど、残念だったね」

「……………ゾーマさまの意思は絶対だ」

重く呟いたイルダの言葉にバルログがかくんと首を傾げ。それからニツと笑みを深め。

「まあ、君のお嬢さんは出来るだけ傷をつけないようにして連れて来るから心配しないで。要はルビスの加護を絶てれば良い話だし。勇者と剣使いのでか物と賢者の坊やだけ、始末して来るよ」

「くれぐれも油断するなよ。如何に四天王で最弱とはいえ、バラモスを倒すほどの者たちだ。侮っているとミイラ取りがミイラになるぞ」

「あれ？心配？……………小物なバラモス如きと、この炎の魔人バルログを一緒にしないで貰いたいねえ」

—— こいつの口調は妙に苛立ちばかりを誘う。

確かに実力はある。……………恐らくは ” 姫 ” に次ぐ四天王 N O . 2 であろう。

「勝手にしろ」 そう言い放ち、イルダは闇のなかに姿を消した。

その背をにこやかに見送った後、バルログはまるでこれから秘密の悪戯をする子供のような、無邪気な笑みを浮かべ、その笑みに指先を乗せる。

「さあて。待ち惚け食らうの嫌だし、ゆっくりと塔へ向かうかな。

……………じっくりと時間を掛けた方が狩りは楽しいし……………♪」

—— 三人が見守るなか、シシルは結界の前に立ち、その目を伏せていた。

両手に破邪と解呪の公式を乗せたまま、慎重に魔法を組み立てていく。

普通のトラマナならそう難しく方式を組み立てる必要は無い。……

…だが、今回は特別も特別。大魔王が作った結界が相手なのだから。

「……………大丈夫なのかよ」

「しっ」

あまりに長い詠唱に痺れを切らしたソロが小さく呟き。ミロッドが人差し指を立てる。

シシルの青い髪が、ふわりと魔力の余波で舞い。そのまま目を開き、両手で水晶を掲げたまま、その呪文を唱えた。

—— トラマナ ——

魔法を受けた水晶はその煌きを増し。シシルの手から離れたと思うとふわりと塔の上空目掛けて飛び上がった。

そして一定距離まで飛躍すると、不意に音も無く砕け散り……………何ともいえない美しい光が、塔全体を覆うように満たしていく。

「わ……………」
「綺麗だな」

そして、やがて光が晴れ。―― ついに塔を覆っていた結界が消え失せた。

ぺたんと脱力し座り込むシシルに三人が近寄り。

「大丈夫か？シシル」

「ああ……………うん。何とか……………。あの水晶、すっげえ魔力持ってた……………。引き摺られるかと思ったよ」

「成功……………？何だか雰囲気が変わったみたいね」

「うん。―― 結界も消えたし、もう普通に入れるはずだよ」

リロイが手を貸して、シシルが立ち上がる。

「歩けるか？何なら船に残ってても……………」

リロイが心配そうに声を掛けるが、シシルが笑顔で首を振った。

「平気、平気。爺さんに特訓して貰ったおかげで魔力結構上がったからさ。さあ、なかへ入ろう。―― 一刻も早くルビスさまを解放しないとね」

内部は思ったより狭かった。

侵入者防止用の回転床に幾度か惑わされたが、このパズルみたいな罫にはミロッドが得意だったらしく、それもすぐに解決する事が出来た。

昇ったり降ったり、回ったり落ちたりを繰り返し……………やがて一行

は、恐らくは最後の階段であろう上り口へと、辿り着いた。

「此処ね？」

ミロッドが階段の下から上を見遣る。

「……確かに他の階段とは段数が段違いに多い。先は真つ暗で、何処まで続いているのかすら知れない。」

「行きましようよ」

「そうだな。……おれが先頭、次にシシル、ミロッド、念の為、殿はソロが務めてくれ」

階段を一步だけ昇った状態でリロイがそう言う。

広い通路を歩いている時と違い、細い通路や階段を上がる時は、前方だけではなく後方も気にしなくてはならないのだ。

「OK。……んじゃ、ほれ、シシルさつさと続けや」

ミロッドを挟んでソロが剣鞘でシシルを突く。

「や、やめろつて」

「お前等、遠足じゃないんだぞ。……と、———— 待て！
！」

階段を中間まで上ったところ、リロイがふと何かに気付き立ち止まった。その背にシシル、ミロッドが連鎖でぶつかり、シシルが鼻を抑えたままリロイを見。

「ど、どしたの？」

「……誰かいる。……凄く、嫌な気配がする」
「敵か？」

「今迄閉ざされてたところよ？……入り込んでいたとしたら、敵としか考えられないじゃない……！」

「————」
「ご名答」お嬢ちゃんは考えが鋭くて良いねえ。
流石はアークマージの愛娘だ」

拍子抜けするほど間抜けた声色が先の部屋から響き。リロイはきつと目尻を鋭くした後にその方へ向けて駆け上がり始めた。はっとして三人もその後続く。

「思ったより早く到着したねえ。少しだけ早く待つてて正解だったかな？」

石像の前に、待つていた赤毛の男……………バルログがそう言うてにやりと笑う。

「誰だ。……………ゾーマの配下か」

稲妻の剣を抜きながらリロイが尋ね。他の三人も瞬時に臨戦状態へ陥る。

「そう、一応ボクも四天王の一人だからね」

「……」

「バラモス、アークマージ、ヒミコの後釜である姫、そしてこのボク、バルログ……………。察しているのも居ると思うけれど、大魔王ゾーマさまにお仕えする四天王だよ。……………そして四天王の役割は、魔力を蓄え、城から動けないゾーマさまの手足になる事……………」

「……………」

ちやっとリロイが剣を構える。

「四天王で一番弱いバラモスを ” 仮魔王 ” として地上に据える事で地上の勇者の實力を測つてみたけれど、なかなかのものだったし。おかげでいつも目覚めさせる事が無い姫まで召集が掛かってしまったしねえ。……………と、おしゃべりが過ぎたか。――

――ボクが此処にいる理由は何となくわかつてるよね？」

にこりと笑い、短剣と鞭を袖から取り出すバルログに、リロイが眉を寄せる。

「そう。麗しの精霊姫を復活させるわけにはいかないんだよ。――

――妖精の笛も君が持つているね？それも一緒に破壊させて貰おう。……………さあ、殺し合おうじゃないか！我は炎と死を司る魔

人バルログ。……………楽しい宴の始まりだよ!!」

ひやはははは、と耳に障る笑い声と共に炎を宿した鞭が飛んで来る。リロイはそれを切り裂こうと目を凝らす、それが炎を纏った金属である事を知り、慌てて横に飛ぶ。

ズガッ!!と重たい音を立て、リロイの立っていた場所が裂け。舌打ちを込めたソロが吹雪の剣を振り薙いだ。

「バイキルト!!」

二人の魔法が一瞬にしてリロイとソロの刃の鋭さを増させ、その一刃がバルログへ迫る。

にやりと笑ったバルログの口に呪詛が漏れるのを感じ、さっ、とシルがその表情を青ざめさせた。

「リロイ、ソロ、耳塞いで……………っ!!」

ザラキ……………!!

慌てて耳を塞いだ二人にメラゾーマの大炎珠が迫る。

「……………っ!？」

ボンッ!!!

「あああっ!!!」

炎が、その場に炸裂する。何とか盾を使い直撃は避けられたが、そ

れでもそのダメージは計り知れないもの。

燻る煙を立たせながらその場に蹲るリロイとソロがぐぐつと上体を何とか起こし。シルがソロを、リロイが自分に、それぞれがベホマを施す。

「ふふっ……………そうそう。そうでなくっちゃ面白くないよ。……………立つて、何度も倒されて己の力の無さを感じながら死ぬんだ。その方が何倍も面白い」

猫が鼠を弄ぶかのような。バルログの言葉はまさに ” 遊び ” だった。

絶対の自信。

……………そうだ。

ゾーマも、本質はそうなのだ。
だからこそ、要となるラダトームには手を出さずに……………人間のあかく様を楽しんで……………。

—— 例えようのない苛立ちに、リロイは再び立ち上がった。そのまま、ダツと駆け出し。再びバルログに向けて剣を振り下ろす。

「はあああっ!!」

「無駄だよ、無駄無駄」

ガキンと片手に持った短剣でその一撃を何なく捌くバルログ。

「この野郎!!」

ソロの攻撃が、今度はもう片手の鞭により阻まれる。

「聞けばアークマージにも敗れたというじゃないか。言っておくけど武器の扱いに関しちゃ、彼より上だよ……………?」

接近しすぎると武器を完封されたうえでザラキの餌食に、遠ざかるとメラゾーマの炎の餌食に。決定打の欠けた攻撃の一進一退は予想外に長引いた。

強いていえば、彼が手加減をしている――遊んでいる所為か、それともメラゾーマの範囲が狭いだけなのか。イルダの時のように一瞬で勝負がつくというがないのだけが救いか。

「――ベギラゴン――!!」

何度が知らないシシルとミロツドのWベギラゴン。その熱気に僅かにバルログが顔を顰めるがその効果はあまりにも薄い。

「ひやはははは!! 炎の魔人たるボクにそれくらいの熱が通じると思っっているのかい!？」

「……皆……ちょっと、試したい事があるんだ」

息が上がり、途切れ途切れに呟かれたシシルの言葉にちらりと三人が視線だけを動かした。

「何？」

「――もしかしたら一撃を入れられるかも知れない

――」

「……さあ、そろそろ飽きて来た。あんまり遊びすぎるとボクもゾーマさまにお叱りを受けてしまうからね。――いい加減死んで貰おう」

ひゅん、と鞭が風を切り、甲高い音を立てた。

「アークマージのお嬢ちゃんはおボクと一緒に帰るんだよ。………パパが待っているからね？ふふ………」

ミロッドの表情が僅かに歪むが、何も言わない。ただ真っ直ぐにバルログを見つめているだけだ。

残りの三人も、攻撃を留め、構えたまま動かない。その様子に満足した様子で。

「大丈夫だよ、そんなに痛くはないさ。——— 一瞬だからね！！」

「——— メラゾーマ！！」

「——— ！？」

鞭が振るわれた瞬間、シシルの口から炎系最強魔法、その詠唱が放たれ。……… 自分の得意魔法がこんな小僧が扱った事に対し驚いたような表情を浮かべるが、鞭を自分の周囲へ巻くようにガードを施し、その直撃を避ける。

「驚いたね」「そう、眩こうとしたバルログの笑みが、今度は瞬時に強張る。——— そのすぐ後ろで、今度はミロッドが吹雪系最強魔法を唱えたのだ！

「マヒャド！！！」

「なっ………」

一瞬灼熱状態へ追い遣られたバルログの肉体は瞬時にその熱を奪われ。その急激な温度差はバルログの武器を粉々に、破壊した。

そう、熱いものをいきなり冷やすと物質はそれに耐え切れずに破壊される。……… 単純な話だが、メラゾーマとマヒャド、その強烈な

やめろ

無駄だ

放せ

—— 手遅れだ

硬直したリロイの目の前で青い刃が振り下ろされ。腕ごと切断されたバルログが肉塊となりその場にどしゃつと崩れ落ちる。

「……………やった」

「やったわね、ソロ、リロイ！」

タツと駆け寄って来たミロッドとシシルだったが、その様子が何か変な事にすぐ気付き笑顔を引っ込めた。

「……………リロイ……………？」

意識を手放したリロイ。まるで糸が切れた人形のように、その体がかくんとソロの腕に預けられる。

「……………く、はは……………は……………！！！」

肉塊と化したはずのバルログの肉体から声色が漏れる。

「……………勇者……………さえないな……………ば……………——」

最期の言葉だった。やがてボコボコと急激に腐敗が進んだそれは……………
……………床に染み込むように消えて行った。

「リロイ……………リロイ……………おいっ——！」

シシルがザメハを唱えるが、効果は全く無い。……………心臓は、動いているのだ。死んではいない、ただ、目を覚まさない……………？

はっと何かに気付いたようにミロッドがリロイの荷物袋に飛びつい

た。ゴソゴソと整理もされていないそこから、例の……妖精の笛を取り出し。

「ミロッド!？」

「ルビスさまならリロイを助けてくれるかも知れないじゃない!」

……あたしだって妖精一派の……ママの、エルフの血が流れているわ。

……あたしにも、吹けるかも知れないっ」

ミロッドの吹いた笛の音は……。――優しく、石像の

周りを取り囲み、そして、消えた。

「……あ……」

やはり、勇者として認められたリロイにしか……扱えないのだろうか？

それとも自分のなかの……父の――闇の血が……。

「……願、い……。お願い、ルビスさま……。聞き届けて……」

……っ!…封印から目覚めて……!」

幾度もミロッドは、その笛を吹き続けた。

回復、解毒、覚醒、自分が知る限りのあらゆる魔法を、シシルはその後ろでリロイに試し施していたが……やがてそれも全て、無駄に終わってしまった。

「ミロッド……」

「……お願い……ルビスさま……っ!」

シシルもソロも諦めかけた、その瞬間。石像に異変が生じた。
光が取り囲んだと思うや否や、その姿は長く美しい緑の髪の女性の
姿へ変貌したのだ。

リロイの upper body を起こしたまま、魔法を施したまま、ソロとシシルが
驚いたように視線を釘付けにする。

—— 精霊姫ルビス。その者が今まさに……復活を果たし
たのだ ——

良くぞ私を助け出してくれました。……ミロッド、ソロ、シ

シル……

「ルビスさま……っ！……リロイを……リロイを助けてっ

！……バルログと闘った後に目を覚まさなくなっちゃったんです
っ！……」

自分の足元で大粒の涙を浮かべる少女に、ルビスは痛ましげに目を
細めた。そのまま一歩、一歩と祭壇を降り。眠り続けるリロイの方
へと向かう。

……彼女は、バルログの呪詛によって精神を闇に囚われてし
まいました。……光の珠が無ければ一生目覚める事はないでしょ
う

「光の珠………？」

天空界を司る竜の女王が守護する真なるオーブの名です。……

…あらゆる闇を切り裂き、光を齎す事が出来る神器

ルビスのその謳うような言葉にミロッドが、ばつとソロとシルを見。険しい顔のまま二人が頷く。
そのままソロが口を開き。

「ルビス神、ゾーマ討伐にリロイは必要不可欠です。どうか、天空界へ続く道を教えて下さい」

……………わかりました。ならば、貴方がたを天空界へ飛ばしてあげましょう。……………それと、此れをお持ちなさい。私の魔力が込められた、聖なる守り。元の世界へ戻る時に道標として遣うと良いでしょう

ふわりと、ミロッドの手にその小さな装飾品が零れ。ミロッドがルビスを見上げる。

貴方の必死な……………仲間を思う気持ち、この私にも重く届きましたよ。……………周囲に惑わされず……………貴方の道を、行きなさい。……………勇者を、仲間を助ける為に

「はいっ！」

貴方がたの旅路に……………光あらん事を。……………また、会いましょう、勇者の使徒たちよ……………

ルビスのその手から、白い光が溢れる。

三人がその光に思わず視線を伏せた瞬間。周囲の空気が一変した。

「あ……………」

柔らかな日差しと澄み渡る青空。空に浮かぶ緑の浮き島に、三人は立っていた。

そして眼前に広がる巨大な城。

「……夢んなか、みたいだ。……此処が天空界？」

無言でソロがりロイを抱き上げ、歩き出す。

「……おら、行くぞ。……さつさとオヒメサマを起こさねえとな」

「あ、待って！」

ソロには一つの思いがあった。

あの時、目を覚ました時に自分の目の前にあつた、涙に濡れたあいつの顔。

あの時自分は、あいつに助けられた。

あいつが居たからこそ、自分は今こうして生きていられるのだ。

俺がお前を助ける。絶対に死なせやしねえ……！！！！

こうして一行は、神の領域——天空の城へと足を踏み入れたのだ……。

34話 鏡の双子

内部は恐ろしいほどひっそりと静まり返っていた。

大抵 ” 城 ” というものは門番に兵士が立っていて、……
否、魔物の城等は勿論例外だが、大抵はそういうものである。

しかし歩いている者の気配、音。そういうものは一切ない。……
よもや、既に魔物の手に堕ち陥落したのでは、そんな不安さえ、三人の心に過ぎった。

「……おや、貴方がたは地上の民ですね？」

ふと声が聞こえ。安堵したように三人が振り返り……その姿に絶句をした。

「!？」

しゃべっているのは、栗色の馬。そう、あの人参や飼葉が好きな、誰もが良く知っているあの ” 馬 ” である。

「この城に何か御用ですか？」

ブルルと鼻を鳴らしつつも平気で人語を解するその姿に、気後れをしていたソロがようやく口を開く。

「……りゅ、竜の女王が住む城というのは……此処で合ってるのか？」

「ええ。此処は最も天空界のなかでも天空に近い、竜王族……竜の女王の城です。まさか人間が此処まで辿り着けるとは思っていませんでしたが……。女王に面会をお求めですか？」

ちらりと馬の視線が、ソロの腕のなかで眠っているリロイに向けられる。

「何か 理由 わけ ありのようですね。とりあえず、個室へ案内致しましょう。—— 誰か。誰かおりませんか」

馬の声に遠くからパタパタと足音が聞こえて来て。一人の妖精の少

女が現れる。

「何でしょうか、ラネスさま。……あら、お客さま、です？」

「ミステイ、この方々と西の翼の間へご案内なさい。それと何か肌掛けも一緒に」

現れた少女にそう言い放ち、どうやら偉い立場であろうその馬が改めてソロたちを見遣った。

「女王との面会が許可されるかどうか確認して参りますので、部屋でお待ち下さいますか？」

「……すぐ会えないのか？とても大事な事で……急いでるのだが」
ソロの言葉に馬の表情がやや悲しげになり、戸惑ったような様子でその蹄を軽く鳴らした。

「ええ……まあ。詳しい事はミステイにお伺い下さい。……それでは」

「……女王さまは不治の病に冒されているのです」

先導し歩きながら、妖精の少女ミステイは三人に説明をした。

「不治の？」

「はい。……以前に闇の魔王が天空界へ侵攻をしようとしたその時、女王の力でそれを阻む事が出来たのですが。……その時の傷が元で、今は病に伏せた日々を送られております。女王は、竜王家の血を絶やしてはならないと……生命を賭けて卵を遺そうとしているのですが。……産めば必ずや女王の生命の炎は消えてしまうでしょう。……城の者は皆、悲しみにくれて祈りを捧げるしかないのです」

なるほど、城が静かなのはその所為なのか。

ゾーマの爪痕がこんなところにもまで及んでいた事に三人は驚きを隠せなかった。

「この部屋でお待ち下さい」　そう、置き去りにされて、早二時間……。ミステイも、先ほどの馬……ラネスも、戻って来ない。

「勝手に会いにいつちゃ駄目なのかな……」

「駄目よ、そんなの……。無断でなんて、見付かったらそれこそお城を追い出されてしまうわ」

「だって……。リロイが手遅れになっちゃったら」

不安でいっぱいしのシルがそう口にし。ソファへ横たわっているリロイに視線を向けた。

そしてその髪を優しく撫で。

「呪詛ってほとんどが進行型なんだよ。見た感じ変わりが無いようでも、時間が経てば……」

「――」

それまで黙って目を伏せていたソロがシルの言葉に顔を上げる。

「眠っているだけじゃ済まなくなる可能性が、あるって事？」

「うん……。精神が完全に闇に食われたら……」

精神の完全なる死。そうなってしまうっては闇を払っても二度と目を覚ます事は無い。

「リロイ……」

ミロッドがその手を強く握り締め、祈るように目を伏せた、その時。

「――　失礼致します。お待たせ致しました、女王がお会

いになれます」

呼びに来たラネスの言葉に三人が待ち切れなかったように視線を上

げた。

黄金色の竜が大きな寝台に横たわっている。ソロたちが通されたのを感じ、その大きな青空色の眼を開き。ぐぐ、とその上体を起こした。

「……………長らく待たせましたね、地上からの来訪者よ……………」

「—— 竜の女王。初にお目に掛かります、我々は……………」

……………」

「勇者リロイの従者たち……………ですね。……………先ほど、精霊ルビスの思念より伺いました……………。大魔王ゾーマと戦っている……………」
「頷くソロ。シシルとミロッドがその後ろで不安そうに女王を見上げている。」

「……………はい。勇者が……………闇の呪詛に精神を囚われてしまいました。ルビス神はその囚われた精神を救い出す為に光の珠の力が必要と……………。どうか、ご助力をお願いしたいのです」

深く頭を下げた勇者の供たちの言葉に、女王の大きな瞳が数度、瞬きを強める。

「頭を上げなさい、戦士ソロよ。我々として闇の軍勢と争う身。同士に対し何を拒む理由があるでしょう。……………ルビスに 理 ことわりの命運託されし者たちよ。この光の珠を持ちなさい。……………ただし、呪詛を解き、魂を捕獲するには、受けた場所と同じ場所で行わねばなりません。……………くれぐれも間違えないように」

ポウ、とソロの眼前に小さな光球が生じ、それは見る見る一つの宝玉へと姿を変えた。

ラーミア復活に使ったオーブに良く似たその珠を、大事に両手で受け取り。

「……………ありがとうございます。それでは、我々は一刻も争うので失礼致します。その……………くれぐれもお大事に」
最後に言われた言葉に女王がグルルと、やや甲高い声で” 笑う”
「ふふ…ありがとうございます。……………さあ、お行きなさい。仲間を救う為に……………！」

女王の言葉に送られ、一行は城の出口へ向かった。そしてその門に手を掛け、外へ出ようとした瞬間。

クウオオ ———ン……………

物悲しい鳴き声が一つ。城内に響き渡った。
途端に何処からかざわざわとざわめく声が聞こえ始め。ソロたちは驚いたように足を留め。

「まさか……………」
やや表情を青ざめて呟いたミロッドの言葉にソロが黙って首を振り。
「行くぞ」 と、ミロッドとシシルを押し出す形で門をくぐる。

——— 情に流されている余裕等、無かった。

例えそれが人道に反していたとしても…………… 非情と言われても……………
…………… それよりも、もっと大切なものを守らないとならない。
” 脆弱な人間 ” である自分にはそれで精一杯、なのだから……………。

⋮

⋮

⋮

(…… 真っ暗 ———— だ ……)

それは突然に。 …… ふ、と暗黒のなかにその感情を取り戻した。まるで夢のなかのように力が入らない。手も足も、バラバラになっ
てしまったかのようにその感覚が無かった。

(…… おれは …… 死んだのか ……)

誰かが自分の名を呼んでくれたような気がする。

…… いや、自分は ” 誰 ” だったか ……

—— 呼んでくれたのは誰だったのか、何も ———— 思い出せ
ない。

(もう、どうでも良い …… このまま、此処で …… 何
もかも忘れて、眠りにつきたい ……)

辛かったのかも知れない、悲しかったのかも知れない、ただ、もう

” 何もかも忘れたい ” そんな思いが …… 溢れていた。

——— そうだ、全てを忘れてしまえ。

何処かで ” 何か ” が命じている。

——— 何も考える必要は無い。全てを放棄してしまえば良い。
あたたかい。そう思った。

母の腕のなかのような安心感に包まれ、全ての不安を取り除くよう

な安堵が……そこにはあった。

—— 我を受け入れろ……。我の……闇の一部となれ……！！

本当にそれで良いの？

突然、闇に響いた声。—— 靄の掛かった意識が、収束する。不安定だった自分の感覚が一つになり、闇のなか、” ナナ ” はその声の方を見た。

（ 誰……だ？ ）
ひどいな。僕の事も全部忘れちゃったんだ

浮かび上がる一人の人物。褐色の大きな目と黒い髪、……… 幼い頃の ” ナナ ” に酷似した人物。

—— そう。八歳の時に死んだ……… 自分の魂を分けた…双子の兄。……… ” 本物のリロイ ” である。

（ ……兄、さん………？ ）
そうだよ、ナナ。思い出してくれた？

” ナナ ” のその姿が、八年前の姿へと戻ってゆく。まるで鏡ごしに自分を見つめるように、二つの魂が向かい合う。

（ ……おにいちゃん……… ）
ごめんね、僕が弱かったから。ちゃんと勇者になれなかったから。全部ナナに背負わせてしまって
（ ……違うの。……… あれは、わたしが……… 自分で決めたの。……… おにいちゃんの代わりになるって……… ）

でも辛かったんだろ？……もう全部忘れたかったんだろ？

(……………)

ナナには、無理だったんだ。覚えてるだろ？僕が死ぬ時に、ナナがお願いした事

(……え？……)

「おにいちゃんを連れて行かないで。代わりにナナをあげるから。ナナの分の生命をおにいちゃんにあげるから」……………そう、言ったよね

(……あれは……………)

まだ肉体へ……………ナナの肉体へ戻る道はあるんだ。……………ナナが代わりに此処に残ってくれたら、僕が代わりにゾーマを倒してあげるよ。だって僕は” ホント ” の勇者さまだからね

リロイが指した方。そこに光が見える。ナナがその方へ目を凝らすと、そこには眠る自分を抱き上げながら、懸命に塔の階段を駆け上がっているソロと、……………シシルと、ミロッドの姿が。

(……………みんな……………)

忘れたい、って事は、悔いがないって事だよね？僕と代わっても良いって事だよね？

(……………)

この闇のなかにいると、何もかも忘れて消えてしまいたくなる。

……………皆は……………自分を助けようとしている……………。

ナナ？

(……………おにいちゃん……………ごめん……。わたしまだ、おにいちゃんの名前で、出来るだけやってみたい)

それに。

—— ナナの視線が、ソロへと向けられる。

帰りたい。…………あの人のところへ。

（おにちゃんみたいに出来ない。わかってるけど…………でも…………）

…………いいよ

リロイがナナを、優しく見つめる。

あの道はナナの道だよ。…………試すような事言つて、ごめんね。だけどナナに…自分で気付いて貰いたかったんだ。じゃなきゃ、闇を完全に振り払う事は出来ないから…………

（…………おにちゃん…………）
それとね、おとうさんは ” こっち ” に来てないよ。だから…………そのうち、絶対に会える。…………頑張つて、ナナ。僕はずっと、見守ってるから…………

ぎゅう、と抱き締めあう小さな身体。

やがてリロイはそつとナナの身体を離し。光を指した。

さあ、行つて。…………大丈夫、ナナはもう立派な勇者だよ……………！

ソゾ…………。

突如、闇が蠢いた。

—— おのれ……後少しのところで。折角の獲物、逃がしてたまるものか……！！

（……………！？）

ナナ行つて。大丈夫、此処は僕に任せて

周囲の闇がまるで触手のように広がり、二人に迫つて来る。リロイはナナの前に立ち、庇うようにそれを睨み付けた。

（おにいちゃん！！）

僕だつてオルテガの息子だ。さあ、急いで！僕が防いでる間に……………！！

ナナは躊躇つた表情を浮かべていたが、唇を硬く結び、大きく頷いて。

光の方へ向かい、走り出した。

闇がそれを阻止しようと触手を伸ばす。

……………行かせない！！

リロイの手から光が疾り、一閃は触手を焼き切つた。

—— 何故邪魔をする。大した力も無い精神霊の分際で……

……………！！

—— そうだね。僕じゃお前を倒す力はないよ。だけど、ナナが戻るまでの時間稼ぎなら出来る

—— 良からう……………。ならばあの娘の代わりにお前の魂を

食らつてくれる……！！

闇の触手がリロイを捕らえた。

闇に絡まれた箇所が黒く染まり、そして消えていく。苦しげに眉を寄せるが、リロイの心に後悔は無かつた。

彼女さえ助かれば、それで良い。

僕の大切な妹……………。僕の所為で人生が狂ってしまった、哀れな妹。

ナナ……………。魂は消滅しても……………僕はずっと君の中にいる。

僕は勇者になれなかつた。だけど、ナナと一緒に……………戦つて……あ

げるよ……。

だから………。………幸せに………っ
………。

—— アリアハン自宅 ——

「あら………？」

掃除をしていたエリィフィールは、ふと立て掛けてあった絵が落ちているのに気付いた。

そこにはオルテガ、エリィフィール、リロイ、ナナの四人の、家族全員の姿が描かれているのだが、落ちた衝撃の所為だろうか。リロイの顔の部分の絵の具にひびが生じていた。

「あらあら、大変。………此れって直せるのかしら」

「エリィフィール、いる？」

ノックの音に気付き、エリィフィールが顔を上げる。絵をとりあえず棚に戻し、それから戸口へ向かい。

現れたルイーダの姿に表情を綻ばせる。

「あら、久しぶり。どうしたの？ 酒場 おみせの方は？」

「今日はバイト君がいるから抜けて来たのよ。一杯やろうと思ってさ」

ニツと酒瓶を見せるルイーダに、「相変わらずね」と、エリィフィールが笑う。

「何言ってるの。リロイもまた旅に出ちゃって、あんたが寂しそうにしてるから——ん？」

ふと、何かに気付いたようにルイーダがエリィフィールの肩越しに家のなかを覗き込んだ。その行動に怪訝そうにエリィフィールも振

り返り。

「……………？どうしたの？」

「ああ、いや。今誰かいたような気がして……………」

「え？」

————— 僕はいつでも、傍にいるよ…………… —————

リロイはゆっくりと目を開けた。それを心配そうに見下ろしている
ソロ、シシル、ミロッドの姿が、そこにある。

「……………」

目尻が濡れている事に気付いた。しかしそれも気にしないかのように
数度、瞬きをする。

「……………皆……………」

「リロイ……………！お帰り……………っ」

ぎゅっと抱き締めてくるミロッドに苦笑したまま、リロイがソロへ
視線を向けた。

「……………ただいま。……………心配、かけた……………」

「ばあか、俺たちは何もしてねえよ。……………ちよっくら” 寝て
いる間” にルビス神は復活しちまったけど、な……………」

多くは語らない。……………それでも皆がどれだけ苦労したのか……………
リロイには良くわかっていた。

「……………無駄な時間を取らせた。……………もう、油断しないよ」

ぐぐつと立ち上がろうとするリロイをシシルが目尻に涙を未だ浮かべたまま支え。視線が合い、「へへっ」と笑う。

「…………リロイ、此れ」

そつとミロッドが差し出した聖なる守りを受け取り。

—— 此れで、太陽の石、雨雲の杖、ルビスの加護が宿った聖なる守りが揃ったのだ。

「…………此れで虹の橋が掛けられるんだな！」
シシルの言葉に全員が頷き。

ゾーマ城がいよいよ近くなる。
残る四天王は、アークマージと…………まだ見ぬ、
” 姫 ” と
呼ばれた者。

「急いでリムルダールへ戻ろう」
その言葉に異論を唱える者は、誰もいなかった。

仲間が、兄が、家族がくれたたくさんの支援。
それらを経て今の自分が —— ” 勇者リロイ ” が此
処に居る。

—— おとうさんは ” こっち ” に来てないよ。だから…………そのうち、絶対に会える。

兄がくれた一つの可能性。…………それを胸に秘めて…………。リロイ

は仲間に支えられながら、ゆっくりと新しい一歩を歩き出した。

……決戦は、もうすぐなのだから。

35話 最後の夜

涙石を思わせる、しかし不確定なその美しい色合いの石が、リロイの手に渡される。

「ちつこいからと無くすでないぞ。……………最重要品じゃい」

—— ギースのところへ戻ってから、半刻が経過していた。ギースは渡された太陽の石、雨雲の杖、そして聖なる守りを手に、
「入って来るなよ」 と、隣室へ籠ってしまった。

そして一行が待ちくたびれかけた、その時。……………それを持って部屋から出て来たのだ。

魔の島の結界を打ち破り、虹の橋を齎す光の結晶……………。虹の雫。闇の城へ向かう為に必要不可欠な代物である。

「……………で。……………それ、どう使うんだ……………？」

横でそのやり取りを見ていたシルがポツリと呟き。じろりと目ざとくギースがその声を聞きつけると次の瞬間、杖先でポカツとシルの頭を叩く。

「あだっ！」

「此れしきの使い道も察せんのか、こんの馬鹿者めが。……………魔力が一番渦巻いている場所……………。この街の北西に、最も魔の島と接点に近い岬が存在する。そこでこの宝石を天へ掲げるんじゃ。——

—— さすれば……………、まあ、後はその目で確かめて見ると良からうて」

「—— 本当に色々……………ありがとう」

深々と頭を下げたりロイに、ギースはやや陰しく目を細め。

それからギツと椅子に深く背を預け、ふう、と一つ。息を吐いた。

「……………ナナ。それに、ソロ、シシル、ミロッドや。……………おんしらが大魔王に挑む前に、とても大事な話がある……………」

「？」

神妙なギースのそれに四人が怪訝そうな表情を浮かべる。互いに顔を見合わせた後、リロイが口を開き。

「……………何だ？」

「虹の橋が掛かれれば魔の島に。……………そしてゾーマ城へも容易く侵入が可能じゃろう。……………じゃが、一つだけ問題がある。わしにとつては大した問題では無いが、おんしらにとっては……………とても、とても重大な問題じゃ」

「……………問題？」

「大魔王ゾーマが滅べば、それと共に地上世界と地下世界を結んだ旅の扉が消滅する。……………つまり、おんしらは二度と……………元の世界へ戻れなくなる、という事じゃ」

一瞬の静寂。カチ、と時計の針が動く音だけが室内に響き渡った。その表情の強張りに、ギースは再び椅子を軋ませながら言葉を続ける。

「……………愛した故郷を、世界を。そして家族を棄てる覚悟じゃ。……………それでも、大魔王に挑むか？」

過ぎる家族の顔。そして、故郷……………自分の家。……………思い出の場所。

あまりのショックに咄嗟に言葉が出なくなった四人にギースは痛ましげに目を細め。それから視線を落とした。

「一晩ゆつくりと考えて……………結論を出しなさい。」

今夜は二階へ泊まっていくが良からう。それから……………」

ギースは立ち上がり、窓辺に立った。

明けぬ漆黒の空を見遣りながら、ゆっくりと、此れだけは考えて欲しいとばかりに最後に口を開き。

「おんしらが此処で戦いを放棄しようが誰も責めたりはせん。重要なのは何の為に戦うか、という事じゃ。……………それだけは忘れるでないぞ」

■ ■ — 賢者シシルの場合 — ■ ■

—— 大魔王を倒すと二度と元の世界へ帰れない……………。

母さん、アリアハンの皆、シシルの叔父さん、エルフの女王、弥生、セーレン、ソフィア…………… 今迄会ったたくさんの人たちと…二度と、会えなくなる。…………… あの青空の下に…………… 戻れなくなる。

あてがわれた部屋のなか、リロイは寝台に横たわったままぼんやりと天井を見ながら考えていた。

…………… 決死の覚悟だけじゃなかったんだ。…………… こんな、二つと選べない大きな選択肢が、最後の最後で待っていた。

「——なあ、リロイ」

ふと、隣で同じように壁に凭れ座り込んだまま考え事をしていたシシルの声に、顔だけ向ける。

「ん？」

「……僕さ……。僕……実はこんな事になるんじゃないかなって予感があったんだ」

「え？」

言葉に上体を起こす。シシルと目が合えば、すまなそうに苦笑した表情が見てとれて。

「黙っててごめんな。だけど、確証は無かったから……。言えれば混乱させちゃうと思ってて。……旅の扉ってね。自然に生

じたものと、特定の人物の魔力で生じたものと二つのタイプがあるから。……ゾーマが作ったものなら、多分倒したら消える……かも、知らないって。ずっと感じてた」

謝る言葉にふるふると首を横へ振り。リロイは寝台の上に座り直した。

「——シシルは……どうするんだ？」

尋ねればシシルは小さく微笑を浮かべ。それから何気に自分の手を見つめた。

「……レーベの叔父さんのところへ帰りたいって気持ちも勿論あるけど。……あのさ、僕が賢者になった時の事、リロイたちに話してなかったよね」

「……ダーマの試練の？」

「うん」

シシルが天井の明かりに手を翳す。そのまま目を細め、話を続け。

「……あの時さ。僕が悟りの書を手にした時……幸せそうな笑顔が”視”えたんだ。そしてその時、知らされた。……

誰かの笑顔を守る事、それが僕の力の源なんだって」

そう言ったシシルはいつもよりも僅かに大人びて見え。リロイは息を飲んだ。

「力の、源……………」

「リロイの笑顔、ソロの笑顔、ミロツドの笑顔、世界の人の笑顔……………。誰かが幸せになつてくれるなら、僕は頑張れる。たとえ元の世界に帰れなくても…………… 此処を第二の故郷とする覚悟は、もう出来てるよ」

「…………… そうか」

リロイは笑んだ。…………… 否、笑む事しか出来なかった。レーベで初めて会った時は頼りない宿屋の受付だと思っていたのに…………… バハラタでの決意。そして、賢者の試練。…………… 時に幾つもの死闘を乗り越え…………… 彼はいつの間にか、誰よりも成長したような気がした。

自分よりも、確かな意思と…………… 強い思いが。シシルには在る。

では、自分は？ 自分はどうするのだろう…………… ？ どう在りたいのだろうか？

「…………… リロイ？」

ギシツと寝台から降り立ったりリロイにシシルが首を傾げ。

「…………… 少し風に当たって来るよ」

そう言い残し、リロイはそのまま、部屋を後にした。

一人取り残されたシシルは、ぼんやりと天井を再び見上げ。それから深い溜息を漏らした。

「宿…………… 継ぐって約束したのになあ。叔父さんがっかりするだろうな」

零れる言葉は届かない世界の先にいる叔父に対する詫び。しかしそ

の瞳に決して後悔の色は無かった。

■ ■ ■ — 魔法使いミロツドの場合 — ■ ■ ■

「……………お婆ちゃま……………」

微かな声色に気付いたのは、階段を降りている途中。階下の大部屋。……………ギースは出掛けているのか、テーブルにはミロツドの姿しかなかった。

「ミロツド？」

「……………あ。……………リロイ……………」——ギースさん、出掛けちゃったの。ラダトームの使いの方がいらしてるとかで……………」
「こ、と笑顔を見せるミロツドだが、微かに目尻には涙が残っていた。それに気付いたリロイが、そつとそれを拭い去る。」

「……………」

「ミロツド……………」——辛いなら無理に付き合う必要は無
いんだぞ？」

言葉にミロツドが苦笑して、それから首を横へ振った。

「ありがとう。だけど、あたし……………此処に残らないといけない理由があるから。——パパを残して一人帰れないわ」

イルダ。……………ゾーマ配下の四天王にして、……………ミロツドの実の父親。
「あたしは……………ママの分まで知らないとならない事がたくさんあるの。それがたとえ辛い結果になっても……………。だから、最終決戦

には臨むわ。あたしが、あたしである為に。………… エルフの女王の孫娘、そして、魔族イルダの娘である自分にけじめをつける為に」

どうしても、あの優しかった父が。あの思い出の全てが偽りとは思えない。

まだ―― まだ父を呼び戻す手は残されているかも知れない。

可能性があるのなら、ほんの少しでもその希望が残されているのなら。―― たとえ生まれ育った世界に二度と戻れなくても、待ち続けている祖母の元へ戻れなくても……………。

「ミロッド……………」

「駄目ね、泣いてばかりじゃ、ママに笑われちゃう」

そう言って微笑んだ彼女は、一回りも二回りも成長しているように見え。

言葉少なにやりとりをした後、リロイは家の外へと出て行った。

静かになった部屋のなか、ミロッドは目を細め。窓から外を見遣り、祈るように手を組んだ。

” ミロッド、このルビーを持ってエルフの森に向かいなさい。ノアニールの森………… 貴方なら一人で行けるわ ”

” ママ………… ママとパパは？ ”

” ……………。後で必ず追いかけるから、ママとパパの事は心配しないで。………… さあ、急いで………… ”

”—— 刺し違えて死のうとは馬鹿な女だ。所詮は無駄死。
殺せると思ったのか、四天王であるこの私を—— ”

何が真実？何が偽り？

あたしは—— 見極めないとならない。一人で決めないと
ならない。

そしてもし、パパが戻ってくれない、その時は—— あた
しが……娘であるあたしが、パパを止めてみせる……！！

■ ■ ■ — 戦士ソロの場合 — ■ ■ ■

……微かな鼻歌が風に乗って聞こえて来る。

リロイはその方へ足を伸ばした。街の中央、小さな泉がある場所だ。
その中央の小島に座り込み、鼻歌を歌っている人物を見つけ、そっ
と声を掛ける。

「風邪引くぞ、ソロ」

「—— ……リロイ。散歩か？」

「ああ」と短く返答し。自分も小島がある橋をトントンと乾
いた音と共に渡る。

「……隣、座って良いか？」

「断りなんか入れるなよ」

にや、と笑い。自分の隣をポンポンと叩くソロにリロイが笑みを深め。そこに座り込む。

「……………シシルとミロッド、迷ってただろ。……………あいつら、帰る場所があるからな」

「……………ああ」

「お前も、だろ？リロイ。……………お袋さんに……………手紙一つで出て来ちまつてるからな」

「でもソロだって……………」

リロイが言いかけ。そして自分の言葉に、はっとする。

……………そうだ。

ソロにはもう、帰るところがなかったんだ。

……………滅ぼされたテドン。魔王軍に家族を、婚約者を、故郷を。全て……………奪われたのだから……………。

「……………ごめん」

「あ？何で謝るんだよ」
「だって」

自分は無神経だ。

どんなに笑顔でも、軽口を叩いていても、あの傷は……………恐らく一生ソロの心から消えはしないのだ。

全てを理不尽に奪われた悲しみ。それを抱えているはずなのに。言い掛けた一言。

ソロだって故郷に未練があるんじゃないのか？

口にこそ出はしなかったが、深い自責の念がリロイを襲った。

「……………まあ、お前考えてる事なんざ大体察しつくけどよ。……………」

俺あ、何処までもお前と一緒にいくつもりだぜ？地上へ逃げ帰るのも、此処に留まるのも……………お前次第だ、リロイ」

「……………おれが決める話じゃない。……………あんたが決める事だ」

「ああ、俺の選択だぜ？耳腐るほど言っただろ？……………全て終わったら、お前を嫁さんにするってよ。……………だからお前から離れはしねーよ」

かつと顔を赤くするリロイの耳元にソロの声色が近付いた。

「……………言つとくが、からかいや冗談なんかじゃねーからな？……………」

…地上へ戻れなくても構いやしねえ。お前の側にいられるなら……………」

……………、お？」

リロイの肩が寄りかかって来た。それを受け留めつつ、ソロがやや戸惑った表情を浮かべる。

「……………どうしてあんたはそう……………いつもいつも恥かしい事を平気で口にするんだ」

「……………根が正直者だからなあ？そういうリロイこそどうしてそんなに奥手なんだよ。口説き辛いじゃねーか」

頭をかいたソロに、ふふつとリロイが笑い。

「おれは、勇者だからな。…色恋事にうつつを抜かしてる暇は無いんだよ」

「……………多少の色恋事はゆるされると思っけどなあ。ほんつとお堅い勇者さまだよ、お前は」

ぐりぐりと撫でられた後、髪を抑えたままにリロイが顔を上げる。じつとソロを見つめ、それに気付いたようにソロもリロイを見つめる。

「ん？」

「……………なあ、ソロ」

「どうした？」

「おれは必ず……………ゾーマに、勝つ。……………そしてお前のその言葉に………応えを返すよ。————約束する」

真っ直ぐに見つめて来る、その愛しい褐色の瞳にソロが笑みを深ませ。

「リロイ。……………あの横笛、持って来てるんだろ？」

逆に尋ねられた言葉、やや驚いたようにリロイがソロを見遣る。懐へ無意識に手を当て、首を傾げつつ。

「どうして笛の事知っているんだ？」

「アリアハンの夜にな。……………実はこっそり聞いてた」

「……………あんな下手なの、聞かれたのか……………」

独学というより見様見真似で覚えた横笛。自分でも下手なのを自覚している所為か、聞かれた事に恥かしさが湧き上がる。

「……………誰もいないと思って夜中に吹いていたのに。……………下手だったろ？」

「はは。そんな事ねえよ。……………お前の笛の音、綺麗だったぜ？良かったら、また此処で聞かせて欲しいんだがな」

「え？でも……………」

言い掛け、ソロが優しくに見つめている事に気付き。リロイは躊躇しつつも愛用の横笛を取り出す。

微かに漏れ出す、アリアハンの故郷の曲。

「……………お前の居る所が……………俺の故郷だな」

最終決戦。

殺させはしない。リロイは————ナナは、俺が護る。

勇者という枷から今度こそ開放して……………本当の笑顔を取り戻させるんだ。

静かな、微かな笛の音にシシルもミロッドも、ギースも。ただ無言でそれを聞き。

リムルダール最後の夜は、こうして更けていった……………。

36話 闇の還る地 前編

ついに此処まで。

…… 思えば、長いようで短かったかも知れない。

時は巡る。例え世界で何が起ころうとも。

……… そう、奇しくもこの日、地上世界の暦では10月23日………
…。旅立ちから丁度、一年が経過しようとしていた。

当人も気付いていなかったのかも知れない。……… リロイは、17
を迎えていた。

「——— 此処だな」

先頭を歩いていたらリロイが、立ち止まる。波荒立つ岬、そして……
… すぐ手が届きそうなほど近い場所に見える巨大な城。———

——— ゾーマ城だ。

「リムルダール北西の岬って此処…… しかないよな。……… 何だ思い
つきり近い場所じゃん」

その隣から、トトトつと前に出。城を眺めて見るシシルに、後ろか
らミロッドが声を掛けた。

「シシル、危ないわよ」

「平気さ。……… さあ、リロイ。早く橋を掛けようぜ！」

「……… 準備は良いか？」

ボン、と肩に手を掛けるソロにリロイが視線を向け。深呼吸を一つ
した後に大きく頷く。

この朝。……… 誰も、地上へ戻ると言う者は誰もいなかった。

誰もがそれぞれの思いを抱え、自らの意思で。大魔王と戦う事を決意したのだ。

そんな四人にギースはそれ以上何も言う事はなく。ラルス王と秘密裏に連絡を取り、集めた魔法の品々を、最後の戦いへ赴く四人に与えた。

聖なる力を秘めた、 光の鎧 をリロイに。

その鋭い刃で敵の攻撃を跳ね返す、 刃の鎧 をソロに。

温度系に強い、 水の羽衣 をミロッドに。

そして、 ドラゴンローブ をシルに。

……更にシルは、ギースから餞別だ、と。彼が若き頃から愛用している賢者の杖を受け取った。

この最後の戦いには、様々な人の思いが詰まっていた。

……負けるわけにはいかない。……この戦いは自分たちだけの戦いではない。地下世界、そして地上世界、天空界の三界に住む人たちの思いと共に、戦うのだから。

「……精霊姫ルビス……」

リロイは懷から、あのギースに貰った虹の雫を取り出し見つめ。…

……それから勢い良く、暗天へとそれを掲げた。

「……頼む……！！……おれたちをあの島へ、導いてくれ……

……！！！」

瞬間。

リロイは掴んでいたその雫が急激に熱を帯びるのを感じた。そして意識がそこに向けられた、その時。

まるで硝子細工が壊れるような音と共に……雫は光と共に砕け散った。

「——！？」

驚いた四人を他所に破片がまるできらきらと、意思を持つように螺旋を描き闇空へ吸い込まれていく。

「此れは……——！！！」

パアアアアアアアア……ッ！！！！！！

「……………っ！？」

凄まじい光。……………されど痛みなどはない、柔らかい光が、周辺を覆ってゆく。

「わあ……………！！！」

ミロッドが感動の声を自然と漏らした。

光のカーテンはそのまま収束し、帯と成り。初めは白かった光がやがて七色に輝きを深める。

「——虹だ」

光の帯がやがて一本の美しい虹となり……………そして。光が収束するにつれ、それは一本の堅固な橋へと変貌を果たしていった。

七色に輝く光の橋。…………虹の橋。そしてその彼方に見えるのは……
……結界が失われた魔の島、そのものだった。

「……………」

光が消え、数度目を慣らす為に瞬きを強めた四人はそのまま視線を交わしあつた。

歓声を上げる者は、誰もいない。

そう、この瞬間から…………人類と魔族の最後の戦いは始まったのだ。

そしてその沈黙を破つたのは、リロイだった。

「行くぞ。…………まだ四天王も二人、残っている。…………油断は出来ない」

「おうっ」

「行こう！」

「ええ！」

リロイの言葉に三人が元気良く応え。それを笑顔で返したリロイがキツと城を睨んだ。

「これが本当の…………最後の戦いだ！！」

そして一行は、島目掛けて橋を駆け出したのである。――。

城は、シン……と静まり返っていた。魔物の姿もない。…………最初のフロアは単純なもので、分かれ道は多少存在していたものの、基本的

に王座まで一本道だった。

「何か………拍子抜けすんなあ」

そう呟いたのは中堅を歩いているシシル。………もつとたくさん魔物がお出迎えしてくれるものと思っていたからだ。勿論、そう思っていたのは他の三人も同じだったので、シシルの一言を窘めようとする者は誰も居ない。

体力を温存出来る事はあるありがたい事だ。だが此処まで静かだと、逆に不安の方が大きくなる。

故意に妨害しないでいるとなると―――その先に待つのは明らかでないからだ。

誰もが考えていたが、それを口に出す者は一人もいなかった。

やがて四人は巨大な扉の前に辿り着いた。此れまで通って来た通路の脇の小部屋の扉とは、明らかに違う大きさの大扉。リロイがそれを目を細めて見上げる。

「位置的には、此処が一番中央だな」

「………ええと、ちょっと待って。………そうね、この先が一階の中央フロアみたい」

こまめにマップの役割を受けていたミロッドが手書きの地図を覗き込む。

「東側が………こうだったから、恐らく西側も対極を為していると思うの。………だから、この中央部分がぼっかりと空いているわ。王間はこの先に間違いと思う………」

あくまでこの城が、他の城と同じ構造を為しているのなら、である。ソロがその巨大な錠前を見遣ると、それは魔法の鍵で開けられそうな形状で。リロイから受け取ったそれを使い、手早くガチャリと開いた。

「………開けるぞ。………ぐつ。………重え………っ！何じゃこりや………っ！？」

「頑張れソロ。………おれも手伝う」

「ソロ、腰傷めんなよ」

「やかましい！！……………ぐ、おおっ！！」

リロイとソロが何とかその巨大な門を開けた先には……………恐らく王間に続く通路であろう。薄気味悪い、緑色の石像が多数並ぶ大きな広間がそこに開けていた。

———
そして。

「……………待っていたぞ、勇者リロイ……………」

その中央に立つ、闇色の髪の毛……………見知った顔の男。四天王アークマージの姿が、そこにあった。

「よもや此処まで来てしまうとは……………。お前達の力を侮っていたという事か」

「……………パパ……………っ！」

真っ直ぐにリロイを見据えるアークマージ…イルダの前に、ミロツドが飛び出して来る。

「お願い、パパ。もうやめてっ」

「ミロツド……………一度差し伸べた手を払った者にはもう用はない……………。たとえ実娘とて、最早容赦はしないぞ」

「……………パパっ……………！」

悲鳴混じりに叫んだミロツドを無視し、イルダは構えた。その両手にびりびりとフロアが震えるほどの魔力が集まる。

「さあ、眠りから目覚めよ。闇の番人、大魔神たちよ……………。今こそその力、我が王の為に振るう時来たれり！！」

ズズン。

……………ぱらり、と天井から埃が落ちた。

「……………な、何だ？」

「リ、リロイ！！……………石像の目が光つ……………、え、ええええええっ！？」

驚いた表情のシシルの前で一体、また一体と、フロアを満たしていた石像……………否、魔物と化した大魔神が動き始める。

—————
ゴゴゴゴゴ……………！！！！！！

「マジかよっ！！！」

「さあ、この私と大魔神六体を共に相手にして貰おうか。……………ポルトガの海以来だ。何処まで強さを増したか、試してくれよう……………！！！！！」

「ちっ……………。あいつらは僕に任せて！……………皆は、アークマージを！」

舌打ちし駆け出したシシルに、はっと三人がその方を見。

「シシル！？！」

「他所見をしている暇は無いぞ！！！」

ふわりと僅かに浮いたイルダの双眼が邪悪を帯び。その手からメラゾーマの炎球がシシルの方を見遣っていたリロイ目掛けて、真っ直ぐに放たれる。

「マホカントー！！！」

しかしミロッドがリロイの前に飛び出し、反射的に唱えた魔法反射の壁がそれを相殺する。

「……………！？！」

跳ね返された炎球がそのままイルダに向かって戻ってゆくが、イルダがそれを同じ威力で放ったメラゾーマで相殺し。

しかし次の瞬間リロイとソロの刃がそれぞれ左右から迫っていた。

「おおおっ!!」

「……多少は……学習能力がついたといえるか?」

「……だが、まだまだ……」

すつと向けられた手。その手にマヒヤドの氷を纏わせ。……二人の刃を直に受け留めた。

「……なっ……」

如何に魔族とはいえ、イルダの腕はまさに魔導師たるものそのものの細さだ。……勇者と戦士の決死の攻撃を両手で受け止め、顔色一つ変えないそれに戸惑いの色が走る。

「驚いたか?……だが此れが私とお前達の差だ。……私

は、もう何百年と……ゾーマさまをお守りし続けていた。」 姫

” やバルログ等よりずっと……ずっと昔から。……あの方を

たつた一人の頃より守り続けていたのだ。——ゾーマさ

まの邪魔はさせぬ、お前達を此れ以上先へは進ませんっ!!」

バシッ!!

鋭い音と共に二人の刃が跳ね返される。

「うわっ!!」

「……小童どもが、図に乗るな……」

「——イオナズン!!!」

カッとしロイの背後で凄まじい閃光が走り。大爆発が起こった。はつとしロイたちが振り返ると、けほけほ、と咽ながら口元を拭っている埃まみれのシシルの姿。

「へっ……。ジジイ直伝イオナズンだ。……粉々になっちまっ

たらもう動けないだろーが」

「イオナズン?……あんな小僧が……むっ……」

……」

僅かに驚いた表情を浮かべるイルダ。しかしそれも、ソロの攻撃で思考が中断される。

「おのれ……………っ!!」

「魔法使いの弱点だよなあ?……………こう接近してりゃ、迂闊に魔法も放てないだろっ!!」

殲滅した大魔神の瓦礫の上を渡り。シシルが戻って来る。ソロとイルダが交戦しているのを見、ミロッドへ視線を移して。

「バイキルトは?」

「大丈夫、ソロのは補強済み。……………でも、このままじゃ魔法攻撃が難しいわ。何とか間合いを……………」

「……………良いの?」

バイキルトをリロイに施し、送り出しながら。シシルが尋ねる。一瞬その言葉の真意が飲み込めず視線を向けるミロッドに、再度。

「だって、……………親父さん、だろ?」

「……………。うん。……………良いの。……………それより、良い?」

……………ソロたちが僅かにでも離れた瞬間を狙って……………メラゾーマを叩き込むわ。ベギラゴンやイオナズンは……………範囲が広くて巻き込んだじやうから。—————
的確な命中率が必要よ。ちゃんと集中

してね」

「……………ああ」

本当に、良いのだろうか。

恐らくはミロッドは……………父親を説得する為に……………此处まで来たと思うのに。

……………本当に。

ザシュッ！！！！

氷の盾をかいぐつたリロイの一撃が、ついにイルダの肩口を切り裂く。

「……………ぐつ……………！！！！」

溢れる血。人間ではない。ミロッドの血の色とも違う……………緑色の、魔族の血。

僅かに生じた隙に、ソロの刃もまたイルダの二の腕を深く切り裂き。……………ほんの僅かな攻防の隙が、一瞬にして態勢を逆転させた。

「このつ……………！！！！」

ドンツと放たれるイオナズンの爆風が、二人をそのまま弾き飛ばし。「あああっ！！」

「リロイ、ソロ！！」

シシルが急ぎ、ベホマラーを唱え、二人の傷を遠隔治療する。

——しかし、ミロッドは違った。

真っ直ぐに父親を見据え。……………リロイとソロが離れた隙を。——

——そこに、自分が持つ最高威力の魔法を放ったのだ。

「……………メラゾーマ！！」

「——」

リロイたちが回復される様に意識を向けていた所為だろう。その大炎球にイルダが気付いた時には既に、その眼前にまで迫っていた。そして熱気の向こうで、悲しげに杖を向けたミロッドの姿に。…彼女と同色の紫の瞳が大きく見開かれ。

—— ドオオオオオン!!!! ——

ミロッドがほとんどの魔力を使い放ったそれは、イルダを倒すに十分値する威力を持っていた……。

（ミロッド、忘れないでくれ。お前は私の……そして母さんの大事な娘だ）

（うんっ、あたしパパもママも大好きだもんっ）

（—— ミロッド……）

（ずっとパパの傍にいるよ。だっておっきくなったら、パパのお嫁さんになるんだもんっ）

どさり、と倒れたイルダにミロッドがはっとして。そのままイルダに駆け寄る。

「……………パパ……………っ!!!!」

次いで、シシルに回復をして貰ったりロイたちもすぐに駆け寄る。

「……………」

「……………パパ、嫌よ。目を開けてよ……………」

今しがた自ら倒した父親に縋り、ミロッドは大粒の涙を零した。：

……確かに覚悟はあった。それでも、父親なのだ。自分のただ一人の父親なのだ。

間違った事はしていない。わかっていても……………理屈ではわかっていても。自分はこの人の娘なのだ。

「……………ミロッド……………」

薄く目を開くイルダ。しかしその全身はメラゾーマの業火に焼かれ、既に誰が見ても手遅れなのは一目瞭然だった。

「……………どうして、こんな事になっちゃうの……………。嫌よ、あたし。

……………嫌よ……………」

「……………泣くな……………決別した身だ……………。お前が殺

さねば……………私がお前を、殺していた……………。そんな男を、父などと、呼ぶものではない……………」

「あたしはパパの子よっ……………パパとママのっ」

「だが……………。私は……………ゾーマさまを裏切れなかった……………。たとえ

……アンを愛しようと……………お前を、手に入れる為だけに……………あの娘を殺さねばならなかった……………。……………お前が……………消息

を絶った事を知った時……………正直、喜んだ……………。このまま見付か

らなければ……………と……………」

「……………パパ？」

恐らくはもう見えていないのだろう。イルダは虚ろに瞬きを一つした後、ふつと微笑を浮かべた。

「……………お前が勇者に加担したと……………バルログから聞いた時には……………胸が凍る思いだった……………何故こんな事になったのか……………」

……。ミロッド…………お前とだけは、戦いたく……………なかった……………」

イルダのゾーマへの忠誠心と、家族への愛の葛藤。

イルダは選べなかったのだ。……………たとえ美しい妻と愛らしい娘を得ようとも。

自分は魔族。…ゾーマの僕だという事から、逃れられなかった。それが自分と生き延びた娘を傷つける事だとわかっていても。

数百年という自分とゾーマの絆は……………それ以上に堅いものだったのだから。

（ミロッド。もし……………パパが遠くに行っちゃったらどうする？）

（パパ、遠くに行っちゃうの？……………やだ、やだよ。あたしパパとママの傍にいたいもん。寂しくなるの嫌だもん）

（……………。ごめんな、ミロッド……………。泣かないでくれ……………）

「……………お前の手で倒されたかった……………。叶えられ……………本望だ。……………こんな私を……………父と呼んでくれて……………。

……………ありがとう……………ミロッド……………。……………愛

しい……………私の……………」

「……………あ……………」

イルダの笑みがそのまま静かに……………動かなくなる。

—— アン…………。——
きつとお前の傍には行けないだろうが—— 出来る事なら、
お前と——。

「………… パパ…っ！！嫌あつ、目を開けてええっ！！…………
…いやあああつ…………！！！！」
自らとどめを刺したイルダの亡骸に縋り。ミロッドは絶叫した。
………… 誰もが、口を出す事が出来ない。

—— この痛みは、ミロッドにしかわからないのだから。

（ ねえ、パパ。ずっとミロッドの傍にいてくれる？ ）
（ ああ—— ずっとお前の傍にいるよ………… ）

ずっと…………。
永遠に、お前の事を見守っているよ——。

「…………ミロッド…………」

ひとしきり泣き、未だイルダの亡骸より離れようとしないミロッドに。リロイがそつと声を掛ける。

「…………わかってる…………」

すくつとミロッドは背を向けたまま立ち上がり。その涙を袖で拭いた。それを眺めていたソロが頬をかいてから、ミロッドの側に近付き。…………イルダの前にしゃがみ込む。そしてそれを抱き上げ、やや広い安定した場所へと連れ移動し、そつと降ろす。

「ありがとう、ソロ」

「…………全部終わつたら…………親父さんを迎えに来てやろう。――」

「な？」

「…………うん」

バリアに満ちた部屋。罨で満たされた部屋。明らかに侵入者を排除するだけの目的の道が、その後延々と続いた。

…………そして、他のフロアと明らかに毛色が違う…………地底湖であろうか、水に満たされたエリア。大仰な橋が掛けられたそこへ足を踏み入れた時。

四人の耳に鋭い咆哮と…………金属の音が飛び込んで来た。

「……………！？」

ガキン……………ガキン……………っ……………。

確かに剣撃の音だ。戦いに身を置くものならすぐわかるその音に四人が眉を寄せる。

「……………旦那っ……………！！無茶だ！一度撤退を……………っ！！
！こっちの分が悪すぎるっ！！」

悲鳴、否、懇願に似たその声色に更に背筋に冷たいものが滑り落ちるような感覚が生じる。
自然と四人の足は早足になっていた。

あの声は知っている。……………でも、まさか。……………こんなところに。

「カンダタ！！！！」

中央大橋の手前、血を流して倒れているその大男に、リロイが真っ先に声を掛けた。

「あ——っ！！あたしを捕まえた奴だわっ。変態大男！！」
駆けて来るその姿に一瞬驚いた表情を浮かべたカンダタであったが、すぐに状況を飲み込んだらしく、「へっ」と小さく笑う。
「やっぱりおめえがオルテガの旦那のガキだったか……………。悪いな、一足先に……………暴れさせて貰ってたぜ」

「どうして……………」

「オルテガの旦那と俺様は古い仲でさ。まあ、俺あ、盗掘最中に誤って一人ギアガの大穴に落ちちまったんだが、そんな時にオルテガの旦那と再会してな……………。まあ、一度汚しちまった手だが、旦那は恩人だったつつう事もあったし、旦那について行く事にしたのさ。」

……………ぐっ……………」

苦痛に表情を歪めるカンダタに、リロイがそっと、その焼け爛れた

両足に手を当てた。ベホマの光が、見る見るとその傷を治癒していく。

「……………すまねえな」

「良いさ。父の助けになってくれたんだ。それよりあんたは、来た道に戻って城を脱出しろ。……………後は、おれたちがやる」

ざっと立ち上がったリロイにカンダタが一つ息を吐いた。

「そうだな。……………悔しいが俺様如きの力じゃこの先に行っても足手纏いにしかならねえ。……………旦那はこの先だ。襲って来た金色のヒドラを追って行っちゃった。……………早く助けてやってくれ。」

あれ ” 何かすげえやばい予感がしてならねえ……………っ ”
ヒドラ。……………先ほどの咆哮の持主だろう。

「わかった。……………あんたも気を付けて戻ってくれ」

「おめえらもな。生きてまた会おうぜ!!」

ベホマで脚力を回復したカンダタが、その盗賊自慢の足の速さで橋を渡り、見えなくなるのを見送った後。リロイは三人に振り返る事なくいきなり駆け出した。

「リロイ!?!」

「……………急ぐんだ!!」

父に会える。そんな胸の高鳴りよりも、何か別な鼓動がリロイを支配していた。

嫌な胸騒ぎが消えない。

急いで、急いで……………。

—— 一刻も早く、……………父に加

勢を。

「ちよっ、ちよっ……………待ってっ!!」

一番足の遅いミロッドの声にシルが振り返り。その手を握る。

「シシル……………」

「大丈夫？……………さあ、急ごう」

「うん……………」

リロイとソロの姿が曲がり角で消える。

そしてようやくミロッドの手を引いてシシルがそこへ追いついたその時。

シシルたちが見たものは。

巨大な結界に分断された先で黄金の巨竜と戦う……………かつての英雄の姿だった。

37話 闇の還る地 中編

「父さ——……………父さんっ！！！」

まるで水晶の壁のように堅く、その進行を阻む結界に。リロイは叫びながら強く叩いた。

此れはまさに、ランシールの結界と同じもの……………古代呪による結界だった。

「……………父さん……………っ……………くそっ！！どうしてこんな……………結界が……………っ……………！！！」

どうやら、向こう側には此方側の姿も音も、届いていないらしい。

……………オルテガの視線が向けられる事はなかった。

大斧を振り薙ぎながら、三叉の首を持つ黄金竜へ果敢に挑むその姿は……………幼心に残る、あの優しい父親と重なっていた。

しかしその身体は傷つき、利き腕は深刻なほど焼け爛れている。……………押し切られるのは最早時間の問題だった。

「リロイ、退いてっ！！！」

追いついたシシルが張り付くリロイを押し退け、口早にトラマナを唱える。……………しかし僅かに光を吸い込んだだけで、その結界が失せる事は無かった。

「……………！？——畜生っ！！！」

「まわれるところはないぜ、此処だけだっ！！！」

他の道を探していたソロも血相を変えたまま戻って来る。

「やめて、ソロ……っ」

「……………」

「簡単に諦めてんじゃねえよっ、このままじゃ……………!!」

「黙れ!!……………出来るならとくに結界を除去してるさ!!」

叫んだシシルがそのままリロイの背を見遣る。

肩を震わせ、届きそうで届かない場で今にも生命を散らせようとしている父の姿を見つめているリロイ。

” あれ ” を見て諦められる人間が何処にいるというのか。

こんな ———— こんな残酷な舞台を用意したゾーマを、シシルは許せなかった。

シシルだけじゃない。ソロも、ミロッドも。

こんな悲しげなりロイの表情を、見た事が無かったから。

胸が、切り裂かれそうだった。

「……………頼む……………消えてくれ……………。」 ———— 父さんを…

…助けてくれ……………っ……………」

燃え盛る炎のなかでオルテガが崩れ落ちる。

竜はそれをじっと眺めた後、ゆっくりと、その姿をかき消していった。

突如訪れる静寂。微かな残り火の燃える音だけが、そこにはあった。

「……………」

オルテガは、動かない。身を震わせ、今にも絶叫しそうなリロイの眼前で、結界が音も無く消失した。

「————— っ!?!」

「リロイっ!!」

ソロに肩を揺すられ、リロイは誰よりも先に飛び出した。

結界に阻まれていた先——長く大きな橋の、その突き当たり。

大きく焦げたそこで燻り続けているオルテガの下へ。

「父さんっ!!」

余波が残っているかも確かめずにリロイはオルテガを抱き起こした。

……竜の炎はあらゆる傷口からオルテガの体内を焼き尽くしていた。ぜえぜえと漏れる弱々しい呼吸に堪え切れずに、リロイがその逞しい身体を抱き締める。

「……父さん……!! しっかりしてくれ、父さんっ!!」

「……誰……だ……。カンダタか……?」

既に光すら失っている瞳を虚ろにさ迷わせながら、オルテガはその抱き締めて来る細い腕に触れた。

「……違う。……貴方は……誰だかわからぬ

が……我が最期を見取ってくれ……感謝する」

「違うっ、おれは……っ……!! ナナだよ、父さんっ!!」

「……わしは……此処までのようだ……。——此

処まで来れるほどの強者ならば……頼む……。——闇

の王を——ゾーマを……倒してくれ……。……奴

を倒せ……ば、全てが……っ」

リロイは抱き締めたまま必死にベホマを施し続けていた。言葉にふるふると首を振りながら。

「父さん……しゃべらないで……っ」

「——願わくば……地上世界……。」

アリアハン……国にいるエリイフィールと子供たち……リロイと

ナナに……伝えてくれまいか……」

「え……?」

「わしは……いつまでも……お前たちの傍に……る……」

と……………」

握られた剣が手から滑り落ちる。
ガラン、と、無機質に響き渡った音に。リロイはその目を大きく見開いた。

涙を頬に伝わせたまま、リロイは僅かにオルテガを揺する。

……反応は無い。だらりと力を失った腕が、隙間から零れ。……
…トサ…、と床へ着く。

「あ……………」 ———— う、あ……………」
今しがたまで…………… 眼前で戦っていたのに。

——— 助けられる距離にいたのに。

どうして……………っ……………。

「…………… 父さ…………… 父さん……………！！ ———— うわあ
あああああっ……………！！……………」

間に合わなかった。

何も知らない父に、自分の存在を伝える事すら、出来なかった。

「リロイ……………」

呼ばれ、リロイが視線を挙げると。そこには父の剣を手にしたソロの姿がある。

「…………… それ。父さんの……………？」

「ああ。此れで親父さんと一緒に…………… ゾーマを倒してやろうぜ？
…………… な？」

渡された剣をリロイは声もなく涙を零しながら、抱き締めた。

それがオルテガが、神の金属オリハルコンを鍛えて創り上げた最強の剣、王者の剣である事をリロイたちは知らない。

「おお~~~~い!!!!!!」

ふと、後ろから掛けられた声に、涙混じりにリロイが視線を挙げた。
……脱出したはずのカンダタの姿がそこにあったのだ。

「……あんた……逃げると言っただろ……」

涙を拭うリロイに状況が察したのか、息切らせつつ、立ち止まったカンダタが足元のオルテガを見遣った。

「旦那……」

「丁度良い。……父さんも、連れて行ってあげてくれ。……安全なところに」

「あ、ああ。……それより、どうしても此れ渡したくて戻って来たんだよ」

カンダタが袋から大仰な剣を一振り、取り出して見せる。

彼の話では、戻る途中マントゴアと呼ばれる合成獣の群れに襲われ。逃げ込んだ先で見つけたものらしい。

「……どうも強そうな武器だったからなあ。恐らくは相当のお宝だろうが……世界が滅んじまったら金もクソもねえだろ。……戦士のおんちゃんなら使いこなせると思ってたな」

ほらよ、とカンダタの手からソロの手にそれが渡り。その鞘の文様を見たソロが驚きの声を挙げた。

「……雷神の剣だっ!!」

「え?それって……。あ、ソロが探してたって奴?」

以前旅の目的を聞いた事を思い出し、シシルが目丸くし。「あ
あ」とソロが嬉しそうに頷く。

「ありがてえ。此れで百人力だ」

すらりと鞘から出した黄金の刀身が湖面の反射を受け、きらりと輝きを見せる。

「それじゃ、俺様は戻るぜ。……と」

くい、とミロッドに腕を引かれ。カンダタが視線を落とした。

「嬢ちゃんか。……どうした？」

「……一階の大間に……黒髪の男性の方が……亡くなってます。あたしの、パパなの。……お願い、パパも一緒に連れて行って貰えますか？」

ミロッドの言葉にカンダタが目を細め。「ああ、わかった」と、一つ頷いた。

（……こいつらは親の死を乗り越えてまで戦に挑もつてのか

……）

かつて幼い日、口減らしの為に捨てられたカンダタ。親を憎み、自分自身だけを信じ、悪事に手を染め生き抜いて来た。

親なんて口だけのもの。邪魔にしかならないと思っていたのだが

。

（絆……か。それも、悪くねえもんだな）

「……頑張れよ？」

「そっちこそ今度こそ城から出るんだぞ。……此れから起こる事は……おれたちでも予測出来ないからな」

カンダタに送られ、四人は……再び歩き出した。

———そこからの道は先ほどまでと打って違い、魔物が群れを為して襲い掛かってきた。
マントゴア、ソードイド、ドラゴン、ドラゴンゾンビ。………どの敵も今までの敵とは段違いに強いものばかりだった。
しかしリロイの王者の剣、ソロの雷神の剣の威力は彼らの生命力よりも遥かに勝り。誰も彼女たちの進軍を留める事は出来なかった………。

———やがて一行は大きなフロアへと出た。

その中央に立つ、黒髪の女性。………誰もが思った。最後に残る四天王。

名は確か………
———姫。

「遅かったわね、地上世界の勇者たち。てっきり怖気付いて逃げ出したとばかり思っていたわ」

しかし最初に放たれたその言葉に。リロイの目が大きく開かれた。
………他の三人も同じである。

長く艶やかな黒髪、そして黄金色の瞳。………黒いドレスに身を包んだその彼女は、誰よりも自分たちが良く知る人物だった。

「…………ミリー!?」

呼ばれた名ににこりと、ミリエルが微笑む。

「…………こんな形で再会するとはね、リロイさん。…………会いたかったわ」

「どうして…………どうして此処にいるんだ!」

「そうよ、どうして…………」

一様に動揺が隠せない彼女たちにミリエルの瞳が細まる。

「…………私が最後の四天王だったという事。竜姫ミリエル…………それが私の本当の姿よ。地上の動向を探らせる為に、ゾーマさまは私の力と記憶を封印し人間の姿を与え…………野に放っていたの」

「嘘だ…………。嘘だっ!!!」

「嘘じゃないわ。…………全部本当の話。…………そして今回…………私は、覚醒めさせられた。貴方たちを抹殺する為に」

ふわりと、ドレスが揺れる。そしてその輪郭が、見る見る薄れ…………。

その場には巨大な一体の、三又の首を持つ黄金竜の姿が現れた。

「!?!…………じゃあ、さっき、オルテガをやったのは…………!!」

反射的に剣を構えつつも、ソロが眼前のそれを信じられない様子で眺め。

…………そう。英雄オルテガを亡き者にしたのは、この私。ゾーマさまの結界があったとはいえ…………かつての英雄も老いには敵わないよね。あれほどあっさり仕留められるとは、思ってもいなかったわ。…………さあ、次は貴方たちの番。…………我が業火で先人の後を追いなさい…………!!!

「ミリー…………、ミリーっ!!!」

「危ねえ、リロイっ！下がれ！！」

声を掛け続けるリロイをソロが抑える。先ほど父を失い、更にその仇が友だったなんて。

リロイの心はボロボロに傷付いていた。

「ソ……ロ………」

「剣を抜くんだっ。………さもないと、こっちが殺されるぞ………っ！！」

未だ心の準備も整わないまま、戦闘が始まった。

やらねばやられる。………まさにそれだった。

容赦なく降り注がれる灼熱の炎をシルのフバーハで抑え、その間にミロッドのバイキルトで補強されたリロイとソロが攻撃を仕掛けた。

どうして。

どうして、こんなに。………望まぬ戦いを繰り返さねばならないのだろう。

無駄な争いはしたくはない。それなのに………。

「————リロイ！！」

はっと顔を上げると側面から竜の尾が迫っていた。そのまま凄まじい威力で弾き飛ばされ、壁に激突をする。

「うぐっ！！」

息が、詰まる。

「……………しつかり!!」

駆け寄って来たシルがベホマを施し。何とかリロイがその上体を起こした。

追撃で飛んで来た炎をフバーハで遮断しながら、シルがリロイを見遣る。

「……………このままじゃ、大魔王に会う前に殺されるよ……………っ」

「……………わかってる。彼女は……………本気だ」

確かにイルダやバルログよりも、彼女は強い。

父を亡き者にしたのは彼女なのに。……………彼女だというのに。……………

…父の仇のはずなのに……………!!

それなのに、リロイにはどうしても憎む事が出来なかった。

父の最期と、ミリエルの笑顔が相互に浮かぶ。

(新しい村が出来れば、世界中から人が来てくれるわっ)

(いつか、私の故郷を見つけ出して行ってみたいの)

あの街作りの時の彼女の笑顔、そして懸命な態度は全て……………嘘偽りのものだったのか、どうしても信じられなかったから。

貴方は下らない情で世界を切り棄てるのね、リロイさん……………

「…………………………」

貴方が加減をすればするほど、私の勝機はますます高くなる……………。そして貴方が負ける時、それは貴方の死。……………それ……………それは世界をも終わらせるという事

「…………ミリー…………」

馴れ合いごっこは終わりよ。…………本気で戦う気が無いのなら
………潔く殺されなさい！！

かっとな鋭い牙がリロイ目掛けて振り下ろされる。

「リロイ……！」

仲間の叫び声が、遠い。…………リロイは泣いていた。涙を伝えながら、じつと牙を剥き迫る竜を見つめ。

「…………ごめん。…………ミリー……………」

王者の剣が煌き、…………そして。

肉を絶つ嫌な音を残し…………巨竜の身体が切り裂かれた

。

どしゃつと落ちるそれが、見る見る人間の姿へと戻っていく。血塗れたドレスは奇妙な艶を伴いながら、べったりと彼女の肌に纏わり

ついていた。

「……………寄らないで……………っ!!」

駆け寄ろうとしたリロイたちに、横たわったままミリエルが叫んだ。びくりと立ち止まった彼女たちへ視線だけを向け、眉を寄せる。

「……………選んだ道よ。貴方も、それが貴方の選んだ道なら……………つまらない情は棄てて前へ進みなさい。ゾーマさまは、目前よ……………」
「ミリー……………」

「……………人間として生きて……………十数年。お爺さまの事、プラムさんの事、……バークの事……………楽しかったわ。……………泡沫の夢だとわかった時は……………悲しくて、涙も出たけれど……………。私は、此方側で生きる道を選んだ。……………何故だか、わかる？」

「……………」
「貴方たちが、私の母……………ハ又大蛇を倒したからよ。私が貴方の父親を奪ったように……………私の母も、貴方たちに奪われた。——

——倒した人間の勇者というのが、貴方たちだったなんて、驚きだったけれど……………。でも、悔いはないから……………」

「!?!? ヒミコの娘……………!?!?」

すう、とミリエルの姿が透け始めた。はっとし、思わず一歩踏み出すリロイにミリエルのキツイ視線が突き刺さる。

「来ないでと言ったでしょう!……………私は、友情よりも復讐を選んではしまった。たくさんの無力な生命も奪ってしまったわ。だから……………」

……………このままで良いの。……………私が消えた後に残る鍵を……………持ちなさい。それがあれば謁見の間へ……………ゾーマさまの居る場所へ……………入れるわ……………」

すう、と霞のようにミリエルの姿が薄れ……………そして、徐々にその姿が判別出来なくなり。

まさに消える、その瞬間。にこりと笑顔が見えた気がした。

……ばいばい、みんな

ちりん、と零れる、奇妙な形をした鍵。微かな光を反射し、それが小さく煌いた。

項垂れるリロイにそつとミロツドが肩に手を添える。

「…………リロイ…………」

「わかつてる」

言葉を選び一瞬迷った素振を見せたミロツドにリロイが涙をぐいと拭い去り。

「何があるうとも…………進まないとならないんだ。…………そうだろ？皆…………」

ソロとシシルも頷いた。

そつと、シシルが一枚の薬草をミリエルの消えた場所へ、置く。

緑に囲まれた地で幸せに、無邪気に、笑っていた彼女の姿が…………どうしても忘れられなかったのだ。

この薬草は、その緑の代わり。

闇から放たれ…………今度こそ、一人の人間として生まれ変わる、為に…………。

イルダ、オルテガ、ミリエル。…………死ななくて良かったはずの者たちが、一人、一人とまた死んでいく。

「…………此れ以上、誰も死なせない…………！」

フロアの奥、ぽっかりと開いた下り階段。…………ミリエルが守っていた、大魔王ゾーマへ続く道。

内部から感じる汗が滲み出るほど邪悪な気配に、シシルが全員にベホマを施す。

リロイは床で輝く小さな鍵を手についた。マネマネ銀と呼ばれるあらゆる形状に変化する鍵。…………これがあれば、ゾーマと戦える。

「————行くぞ!」

悲しみを力に変えて。一行は今、最後の階段を駆け下りた。

38話 闇の還る地 後編

ゴオオオオ……………オオオオオオオ……………

何処から吹き込んだ風なのか、その漆黒の空間は、風鳴りで吹き荒れていた。

城の地下深部、そのはずなのに。天井が見えないほど、高く広い。

「……………油断するな」

剣を抜いたまま。リロイが三人を見遣る。

「何か見えるよ。……………あれ、柱だ」

ポツ、と自然と小声になったシルが指さした先。ぼんやりと闇に浮かび上がる神殿調の柱群。恐らくはあれ一つ一つでこの巨大な空間を支えているのだろう。

「大魔王とやらは何処に居るんだ……………？」

じつとりと滲んだ汗を、ソロが手の甲で拭う。

このフロアに足を踏み入れた時から、ずっとこうだ。得も知れぬ凄まじい圧迫感と、禍々しい殺気。……………そう、あの日アリアハン王間で感じ取った奴の気配そのままが、此処に満ち満ちていた。

「……………ゾーマ……………!!!!」

リロイが叫んだ。奴に聞かせるだけではない。自分自身を奮い立たせる為に。

「何処にいる……………おれたちは……………此処に来た……………姿を見せろ……………!!!!」

シン……………。

返答は無い。そしてやや刻が流れ、暗がり不安そうに、ミロッド

がりロイのマントを掴んだ。

「……………本当に此処に居るのかしら……………」
「わからない……………」

ただ、奴の気配は肌に染みるほど感じる。

そしてもう一度、リロイが叫ぼうとしたその時。……………闇の彼方に
ボツと蒼い光……………否、灯りが灯った。

「!？」

灯りはゆっくりと意思を持つように彼方から……………リロイたちのま
わりまでその青白い道を作り上げた。

そして浮かび上がる周囲の景色。……………四人は、巨大な祭壇の上に
立っていたのだ。

ようこそ我が生贄の祭壇へ……………。地上の勇者たちよ

浮かび上がる巨大な王座。そしてそこに座る、一見老人のようなそ
の魔族の姿に一同が息を飲む。

見た目で拍子抜けしたわけではない。……………気配だけで人を殺せそ
うなほど、押し潰されそうな圧迫感が、その男から溢れていたのだ。
大魔王ゾーマ。……………誰もがそう本能的に確信していた。

……………どうした。わしを殺しに来たのではないのか？若きオル
テガの娘よ

無意識に震えが生じていたのを感じ、リロイがぎゅっと剣柄を握る
手に力を込める。

「そうだ……！！お前を倒し、地上とアレフガルドの平和を……
…取り戻す！！」

そうだ。……そうでなくては面白く無い。……この最下層まで辿り着く事が出来たの者は数百年来……そう、あの忌々しいルビスの小娘との戦い以来か。久方ぶりに楽しめそうだ……

漆黒のベールのようなマントを翻し、にやりとゾーマが笑った。
そしてその枯れ枝のような身体を揺らし、ゆっくりと立ち上がる。

来るが良い、ルビスに祝福されし光の聖女よ。……そなたを我が闇の血で染め、死の花嫁として迎えて遣ろう！！

ゾーマの叫びと共にびりびりと王間が揺れ。そして白い霧が辺りに漂い始める。

—— かああっ！！！！！！

その吐き出された輝く息が、見る見る辺りを凍て付かせていき。

「……シシル……」

「わかってる……フバーハ……！！」

リロイの言葉に急ぎ吹雪断絶の障壁を施すシシルだが、それを見たゾーマの額の第三の目から衝撃波のような光が発せられ。一同が弾き飛ばされる。

「—— うわっ！！」

「……ぐっ！！」

「きゃあっ！！？」

ただ弾き飛ばされただけ。威力はほとんどないその光にすぐさま皆立ち上がるが。……最初にその異変に気付いたのは、シシルだった。

「……フバーハが消えてるっ！？」

「え！？……あっ……！！！」

ふははははっ！！！！他所見をしている暇などはないぞ、勇者よ
っ！！！！！！

再び吐かれた吹雪が、四人を直撃する。

「……………うわっ!!」

「きゃああっ!!」

障壁を含む、補助魔法を無効化された上での直撃。リロイとソロは持ち前の体力と装備で何とか耐え切るが、シシルは片膝を突いたまま。ミロッドに到っては起き上がれない。

「く、そ……………。———ベ…ホマ…ラー……………っ!!」

冷気で喉をやらねがらも必死で唱えたシシルの広範囲回復魔法が、冷気に侵された皆の身体をやわらげた。

「———行くぞ、ゾーマ……………!!!!」

「おおおっ!!!!」

リロイとソロが同時に駆け出し、攻撃を仕掛ける。それを見、シシルがミロッドを引つ張り起こして頷き合わせ。

「……………シシルは回復フォローお願い」

「大丈夫？」

「ええ。……………だから、生命維持宜しく」

にこ、とミロッドが笑いながらポンつとその肩を叩いて。そして交戦している二人の下へ走り出した。

「———くそおっ!!……………何だこいつ、斬っても斬っても手応えが……………っ……………!!」

二人の攻撃は、ゾーマに届いてた。……………幾度も幾度も、その身を斬り付けているはずなのに。まるで手応えが感じられない。

衣の中身がないような、そんな軽い手応え。しかし奴は確かに此処にいるのだ。

「……………畜生っ!!」

「危ない、ソロっ!!!!」

バツとリロイがソロの身体を突き飛ばし。その場が冷気で一気に凍り付く。

「……………はあっ、はあ……………」

助け出したリロイも、息が上がっている。シシルから回復の援護を受けているとはいえ、正直追いついていないのが事実だ。

傷ついた箇所は凍て付き、ひどい凍傷となっている。

あらゆる冷気を操るゾーマに接近戦で挑む為には、返り討ちを覚悟しないとならなかった。

ふははははは！！先ほどまでの元気はどうした！！……………そんならの攻撃の何と脆弱なものよ！このわしの肌どころか、髪の毛一本ほども傷つける事も出来まい……………！！

「……………リロイ……………っ」

少し離れていたところからメラゾーマでサポートをしていたミロツドが二人のところへ駆けて来た。

「ミロツド！？」

「ゾーマのまわりに闇が渦巻いてるわ。それが……………全ての攻撃を無効化してるのよっ」

「！？」

リロイたちが目を凝らすと、不敵な笑みを浮かべるゾーマのまわりには何も見る事は出来ない。

「おれたちには見えな……………。——っ！！」

「くうっ……………！！くそったれっ！！」

再び叩きつけられる吹雪。施される回復魔法。……………埒があかない。

「ミロツド、どういう意味だよっ！！」

どうやらシシルにも見えていないらしく、後方から困惑した声色が飛んで来る。

「……………闇が渦巻いてるの。……………もしかしたら、あたし……………パパの血が流れているから見えるのかも知れないけど」

「闇……」

見えないものをどうやって払えば良いものか。

しかし自分たちの肉体もそろそろ限界だった。後方支援をしているシルも、魔力の使い過ぎで肩で息をしている始末。

……此处で打破出来なければ、待つのは死だけだった。

（———光を———）

ふと、脳裏に聞こえたその声に。びっくりとリロイは視線を挙げた。

「………光？」

復唱するように呟かれたその言葉に、三人がはっとする。

「そうだ！………あれは！？」

リロイを助ける時に竜の女王から受け取った光の珠。

———あらゆる闇を切り裂き、光を齎す事が出来る神器———

ソロが自分の荷物袋から取り出したものを三人が見遣った。………
そして、ゾーマ自身も。

それは………っ！———竜の———何故それを………
………っ！———

マヒヤドというにはあまりにも強力な氷竜を放ち、ゾーマがそれを奪おうと襲い掛かる。

しかし冷気が辺りを包む、その瞬間。

ソロの手より、リロイの手へそれが渡され。
高く掲げられた――

天

―― 一瞬。何が起こったのかわからなかった。

辺りが白に。……冷気の白ではなく、光の白だ。……そう、リロイが掲げた光の珠。そこから……まるで生まれたばかりのような無垢な、純粋な光が生じたのだ。

―― ぐ、ああああああっ！！！！！！

ゾーマの苦痛に満ちた声色がその空間に響き、四人がはっと我にかえる。
今なら、見える。ゾーマを護り取り囲んでいる闇の衣が……光に

帰化されてゆくのが。

そして今こそ………攻撃の最初で最後の機会だった。

「行くぞ!!」

光が守ってくれているのか、先ほどまでの肌に刺すような冷気の感覚はもう無い。リロイは王者の剣を掲げ、そして………真一文字にゾーマに向かい駆け出した。

ソロの一撃がゾーマの胸を切り裂き、シシルのイオナズンが、ミロツドのメラゾーマが、一団となり集中する。

そして。

「……………おおおおおっ!!!!!!!!!!!!!!」

ドッ!!

鈍い音と共に、ゾーマの眉間にリロイの剣が突き立てられた。――
――血は、流れない。……………そもそも、血が流れているのかすら、白き世界のなかでは良くわからなかった。

お、おのれえ……………っ!!!!!!!!!!人間如きが……………っ!!!!!!!!!!

ガツと、その胸を掴まれるが、リロイは決して剣を離さなかった。

これで最後だ。……………全てが……………此处で……………!!!

「……………ギガデイン!!!!!!!!!!」

放たれた最後の天空魔法は地下数回を一気にぶち抜き。真っ直ぐにゾーマに向けて落ちた。

剣を伝い、その神の雷がゾーマの脳へと直撃する。

ぎゃあああああああああ

!!!!!!!!!!

ゾーマの絶叫が響くなか、光の珠がその輝きを失い。……………そしてフロアはもとの薄暗がりを取り戻した。

ゾーマが倒れる。

そして……………。

「……………リロイ!!」

叫びと共にソロが駆け出し。ゾーマの足元に倒れたリロイを助け上げる。軽く揺すってみると、僅かに反応があった。

ほっと安堵の表情を浮かべたソロの膝の上、弱々しくリロイが笑みを見せる。

「……………もう無茶すんなって……………言っただろーがよ…………………………」

「ん……………」
ぐぐつと何とか身体を起こすりロイ。その視線の先には、王座に凭れ、煙り続けるゾーマの姿があった。

……勇者……………否……………聖女…ナナよ……………

……
これだけのダメージを受けようともまだゾーマには話すだけの力が残っていた。

僅かに驚きの表情を浮かべる四人に、それでももう戦う力は残されていないのか、ただ語り続け。

ギガデインの余波が、ゾーマの衣のあちこちに小さな炎を生じさせる。

良くぞ……………我を倒した。……………もはやわしには戦う力は……………残されていない……………。敗北は……………認めよう……………

「……………ゾーマ……………」

だが、わしの千里眼には……………見える。……………いつの世か……………

……………わしに代わる者が再び顕われ……………この世を……………

全てを……………闇にかえるのが……………な……………。ふふ……………

……………。そしてその時……………そなたは老い……………既に世に存在せぬであらう……………

よろりとソロの腕を借りて、リロイが立ち上がる。

「……………闇には……………負けない。きっとその時には、新たな勇者が生まれ……………その者を倒すだろう。……………人間に一欠けら……………」

の勇氣がある限り……………完全な敗北は存在しない」

遂に煙り続けていた炎が大きな炎となり、ゾーマを包み込んだ。業火のなか、僅かな嘲笑が響き渡る。

光あれば闇は必ず……………存在する。光が大きくなればそれだけ……………

闇も……………忘れるな……………人類の代表者どもよ……………

……………。魔族という存在もまた……………人間という存在の裏返しだという事を……………な……………

ズシャ…………。

燃え盛る炎のなか、ゾーマの生命が遂に潰える。
そしてその言葉をリロイが脳裏に反復した、その時。

ズズ……………ン!!!!!!!!!!!!!!

ゾーマの魔力により支えられていた闇の城が、崩壊を始めたのだ。

「うわっ!」

「きゃあっ!!」

誰もが立ってられないほどの大激震。パラパラと天井からは崩壊を意味する小さな残骸が降り始めるなか、青ざめた様子でシルが王座にいる二人へ声を掛けた。

「リロイ!! 早く逃げなきゃ城が潰れる!!」

ソロに支えられたまま、リロイが頷いた。そのままソロを見遣る。

「……………歩けるか？」

「いや……………。身体に力が入らないんだ」

「リロイ、ソロ、早く!!」

ミロッドを急ぎ立てながらシシルが叫び。……………リレミトを使おうにもミロッドは魔力を消耗しすぎていた。

その為、あの大きな地下通路を、もう一度走って戻らなければならなかった。

その前に城が潰れる可能性は非常に高い。……………それでも。

此処まで来て、こんなところで。……………死ぬわけにはいかなかった。

そして、ソロがリロイを抱き上げ、シシルたちの方へ向かうとしたその時。

「……………!？」

「危ない、ソロ!戻って!!」

大轟音と共に、床が陥没し、その場に巨大な亀裂を生じさせた。：

……………とても飛び越せる幅ではない。

リロイとソロがいる王座側、そして、出口のあるシシル、ミロッド側へ……………完全に分断されてしまったのだ。

「リロイ!ソロ!大丈夫か!？」

崖の向こう側で心配そうにしているシシルたちの姿にリロイが片手を挙げた。

「……………ああ、二人とも無事だ!!」

「お前等!!俺たちはこっちで道を探すから、二人で地上へ戻れ!!」

怒鳴ったソロの言葉に、ミロッドが信じられない表情を浮かべる。

「み、道を探すって……！！！」

「大丈夫だ！！ぜってえ戻る！！……そっちこそ早くしないとペ
っちゃんこになるぜ……！！！」

「無茶だよ、ソロ……！！道なんかありっこないっ……！！！」

叫び返したシシルにリロイが今度は叫ぶ。

「シシル！ミロッドを連れて戻れ。このままだと二人ともあの世逝
きだぞっ！」

「だけど……っ」

「てめえ一人じゃないだろーがっ！！さっさと行け……！！」

ソロの言葉にシシルが、はっとする。……そう、シシルにはミロ
ッドを守る責任がある。

シシルは今にも泣きそうな表情を浮かべ、そして。

「……絶対戻って来いよ……！！……絶対、絶対だぞ……！！……約
束破ったら……承知しないからなっ……！！」

ぐいつとミロッドの腕を掴んで、階段へ向けて走り出す。

「シシル……！！？」

「行くぞ、ミロッド……！！……リロイ……約束だからな……っ
……！！！」

「ソロ、絶対リロイを守りなさいよっ……！！……二人一緒に戻らな
かったら……絶対ゆるさないんだからっ」

涙目で階段を上がっていく二人を笑顔で見送った後、小さくソロが
息を吐いた。

「……さってと、どうするかね？」

「……道は無いな」

「そっだよな」

まるで他愛の無い会話をするような二人。そして、ズズンっと少し

離れたところの柱が一本、倒れた。

「でもさ、約束守ったろ？俺」

「—— 何の約束？」

ドオオ！……天井の一角が崩れ去り、もうもつと煙が立つ。

「最後まで一緒にいるってさ」

「……馬鹿」

「何だよ、ホントだろ？」

ミシミシと、二人の真上の天井が、いやらしい音を立て始める。

「なあ、ナナ……」

「……。何？」

「……愛してるぜ。……ずっと、ずっとな？」

「……」

「お前は？」

ドオオオッ！……！！！！

二人の真上が崩れ始め、瓦礫が二人に降り注ぐ。ソロはぎゅっとリロイを抱き締めたまま、堅く目を瞑った。

……わたしも——愛してる……

その言葉は轟音に飲み込まれ……………やがて地下部分が全て、
崩落した……………。

シシルたちが間一髪城から出たその時、闇の城は凄まじい音と共に
崩壊していった。

……………そして、幾ら待っても。リロイもソロも……………戻る事はなかった。

泣き叫ぶミロッドを宥め「絶対生きてる」そう何度も、まるで自分に言い聞かせるようにシシルは繰り返し叫び続けた。

そして涙も枯れ掛けた頃……………。ゾーマ城崩壊を確認したラダトーム兵たちに発見され、二人はラダトーム城へ保護される事となる。

そして馬車のなかで二人は見た。

暗闇だった東の空から、光が……………”朝日”が差し込んで来るのを。

それは闇の呪縛が絶たれた証だった。

一同は歓声を漏らしたが、シシルたちに笑顔が戻る事は無かった……………。

形ばかりの祝宴。……………勇者のいない祝宴。……………そして、あの頼りになるソロの姿も、そこにはなかった。

「……………」

「ミロッド」

ラダートム最後の夜、宿で復活した白い月を眺めていたミロッドのところへシルが入って来た。

あの激闘から二週間。……まるで今までの全てが嘘だったのよう
に。世の中は平穩の真っ只中にあつた。
ただ此処が地上世界でないという事と。……リロイとソロが、
いないという事。

「……………なあに？シル」

「僕さ、リムルダールのギース爺さんのところに行く事にしたよ。

……賢者として、最初から修行し直そうかと思ってさ……………」

「そうなんだ」

「うん。……………爺さん、僕に……………養子になんないかって」

「良かったじゃない」

ミロッドが振り返る。元気はまだないが、笑顔をようやく見せ始めていた。

「ん。……………それでさ、ミロッドも一緒に……………来ないか？どうせ
行くところも無いんだろ？」

「あたしは……………」

ふるふるとミロッドが首を横に振り。僅かに俯く。

「あたしは、此処に残るわ。……………パパのお墓の傍にいたいの……
…。それに、リロイたちが戻ったら、絶対此処に来るだろうから……
……………。待つてる」

「そっか。……………ホントは僕も、残りたいけど……………」

「良いのよ。……………皆、ね。噂しているの。……………リロイが……

勇者は、死んでしまったのだろっ、って」

「ミロッド……………」

「でもね。あたしたち仲間だけでも……………信じていても良いと思わ
ない？」

「帰って来るさ」

「うん」

「……………帰って来る」

「……………うん……………」

ポロポロと涙を零すミロッドを、シシルが強く、抱き締めた。肩を震わせて泣く彼女を……………本当はこのまま離したくはなかった。

それでも一人前の賢者になると決めた以上……………自分の決めた事を覆したくは無かった。

「……………それじゃあ、行くよ」

「元気でね。…お手紙、書くね。……………毎日。毎日、書くから」

「ミロッドも元気で。……………一人だからって泣いてばかりじゃ駄目だよ。リロイもソロも、親父さんも……………そんなミロッド見たくないだろうからさ」

「うん……………ありがとう」

窓からシシルを乗せた馬車が去るのを見送り。ミロッドは改めて闇に浮かび上がる月を見挙げた。

ルビスさま……………。

ナナとソロを……………帰して下さい。

彼女たちはまだ……………本当の平穏を享受していない……………。

…… かわいそうな恋人たちなんです……。

しかしミロツドのその願いも虚しく。

「勇者リロイ」は二度とアレフガルドの民の前に姿を現す事は無かった……。

その後、王者の剣、勇者の盾、光の鎧、聖なる守り、その四点だけが、瓦礫から発掘された。
しかしどんなに探しても、勇者とソロの遺体だけは見付かる事はなかったという。

不在であるが勇者リロイには神に近き者としての称号 【ロト】
が送られ。

王者の剣はロトの剣。

勇者の盾はロトの盾。

光の鎧はロトの鎧。

そして聖なる守りはロトの証として。

それぞれラダーム城に奉られる事となる。

そして。
.....十年の歳月が、流れた
.....。

39話　そして伝説へ…

パタンと閉じられる本。そしてその膝元には、不満そうに頬を膨らませている二人の男の子の姿が。

父親が苦笑を浮かべ、片割れの小さい方の柔らかい髪を撫でて遣る。

「さあ、物語は此れでお終いだ」

「え———っ？」

「勇者さまは？勇者さまはどうなったの？………死んじゃったの？」

父親はにこりと微笑んだまま、本を置き、ロッキングチェアから立ち上がった。

その拍子に額のサークレットがきらりと小さく煌いた。

「そうだな……。勇者は、いつまでも人の心の中に生き続けた。

”一握りという勇気の欠片” となって、な」

「ほらほら、二人とも。そろそろお客さまがいらっしやるんだから早く着替えてらっしゃい」

パンパンと隣で母親が手を叩いた。「はい」と上がる返事。パタパタと小さな足音を立てて二人の姿が階段の上へと消える。

途端、父親が深く息を吐いた。母親と視線を交わしあい、困ったように苦笑を漏らす。

「お疲れさま、あなた。………もう、こんなもの見せるから興味持っちゃって………」

母親が取り上げた本。それはこの世界に伝わる伝承———
英雄伝説だ。

地上から降臨した勇者が闇の王を倒し、天空に光を取り戻すという史実。

世界を救った勇者は、二度と民衆の前に姿を現さなかった。
終わりにには――そう記されている。

「僕が見せたわけじゃないさ。あいつらが勝手に書庫から持ってきたんだよ。イリーはまだ字が読めないから、シェロの奴が漁ったんだろうが……」

「ふふ、今からこんなものに興味示してるようなら、将来はあなたみたいに本の虫になりそうね。あの子たち」

「本の虫とはひどいな。此れでも頑張ってるんだよ、色々とね」
差し出された紅茶を受け取り、父親が笑んだ。そしてふと――

――その目を細める。

「あれから、十年か」

「――そうね。長いようで短かったかしら。あの戦いから……」

思い出すように母親――ミロッドが柔らかく表情を綻ばせる。その言葉にシシルもまた、視線を窓の外へ向けた。

子供たちは知らない。 ” 英雄伝説 ” の英雄たちが、自分たちである事。

勇者が生死を共にした大切な仲間だという事を。

「それにしても」

紅茶を啜りながらシシルが眉を寄せる。

「遅いな。定期便の到着時刻はとくに過ぎているのに。……何処で油売っているんだ？」

それは今日来る予定の ” 客人 ” の事だ。

シシルの言葉にミロッドもまた眉を寄せる。

「そうねえ……マイラからの便だから、もしかしたら混んでるのかしら？」

「マイラ行きは混むだろうけど、マイラから来る分にはまだ混む時期じゃないだろう」

—— トントン。

ノックの音にミロッドが立ち上がった。シシルへ視線を移し、笑みを浮かべ。

「噂をすれば何とやら、ね。……はいはい、今開けます」

ミロッドが扉を開けるとそこには小さな女の子を担いだ大男の姿があった。

「よお。悪いな、遅くなっちゃった。シシルの旦那はいるかい？」

「いらっしやい。勿論いるわよ、遠路遙々お疲れさま。」

—— こんにちわ、ミリルちゃん」

「こんにちわっ」

大男の背で、ミリルが元気に挨拶をした。

「ちよっ……早く入って。荷物多いんだから立ち止まらないでよっ」

その後ろから聞こえて来る女性の声に、「悪い悪い」と移動を開始して。カバンを置いた黒髪の女性が吐息を一つ漏らした。

そう。

リロイと……否、ナナとソロは生きていたのだ。

あの日、あの瞬間。一体どうやって自分たちが崩壊の中から助かったのかはわからない。

気が付いた時には二人、マイラの孤島にある塔——その最上階に倒れていたのだ。

（ 幸せに —— ）

最後に、その言葉を聞いた気がした。

ルビスの声にも聞こえたし、リロイ……兄の声にも聞こえた。オルテガの声だったかも知れない。

ただわかるのは ” 皆 ” が助けてくれた事。

あの瞬間、確かに勇者リロイは死んだのかも知れない。そして――

―― 本当の自由を得たのだ。

今度こそ、幸せになる為に。

「 あ —— つ、ミリルちゃんだっ 」

「 ソロおじさん、ナナおばさん、こんにちわっ 」

着替え終わったシェロとイリーが階段を駆け下りて来る。

「 ミリル、母さんたちはお話があるから三人で遊んでおいで 」
ナナの言葉にミリルが笑顔で頷く。

「パパ、ミリル連れてお爺ちゃんの家まで行つて来て良い？」

年長のシェロの言葉にシルが「ああ」と、頷いてみせる。

「爺ちゃんの仕事の邪魔はするんじゃないぞ。それと、夕飯までには戻る事」

「わかつてるよ。イリー、ミリル。行こつ」

「待つてよ、兄ちゃんつ」

パパパタと三人が家を出ていけば、シン……と室内がまるで台風が去つたように静まり返る。

ふう、と息を吐いたのはナナだった。

「男の子二人だと元気が良いな。うちのは大人すぎて心配なくらいだ」

「あら、女の子だもの。お母さんみたいにお転婆だったら、困るでしょ？」

クスツと笑つたミロツドの言葉にナナが眉を寄せる。お転婆……

言い回しが何か違うが、反論は出来なかった。

「幾つだったか、そつち」

「上が7歳、下が4歳だな。……ミリルはイリーと同じ……いや、違うか。1歳下だったな。3歳だったか？」

「そうだな、来月末で4つになる」

「早いもんだな —— ——」

剣や杖を手に魔王軍と戦っていた日々が、遠く感じられる。

初めて旅立った日、酒場の入口でソロとぶつかって怒鳴りあいをし

た時の事。

レーベの村の朝、シシルが一大決心をして、ついて来るのを決めた時の事。

誘いの洞窟で、ナナが刺された時の事。

シャンパーニの塔でミロッドと出会った時の事。

サマンオサでの処刑未遂事件。

そして、ネクロゴンドの洞窟での……………。

ゾーマと戦った日の事ですら、何処か遠くに感じられる。

父を始め、数々の先人たちを乗り越え……………手に入れた幸せ。

多大な犠牲の下にようやく掴む事の出来たそれを絶やしてはならない。

そして、この意思は自分たちを超えて……………子供たちへ、引き継がれていくのだ。

―――
勇者の心。そのものが……………。

光があれば、闇もまた絶える事は無い。逆も然り。闇がある限り……………

……………光は失われる事は無い。

人の心に光ある限り、勇者ロトの血は永劫消える事はないのだから。

F i n

■ 勇者リロイ↓ ナナ（17歳↓27歳） ■

勇者の名を棄てた後、マイラの村でソロと挙式を挙げる。その後女の子を出産し、生涯幸せに暮らす事となる。

アレフガルド大陸でナナ・リロイの事実を知っているのは仲間と賢者ギースだけである。

■ 戦士 ソロ（26歳↓36歳） ■

ナナと婚姻を結んだ後、マイラで温泉業を開業する。武才は元々あったものの、意外な商才にナナも驚きを隠せない。

また、子供が大好きで自分の子供だけではなく近所の子供も連れ立って、良く森へ遊びに出掛けるのも目撃されている。

■ 魔法使いミロッド（16歳↓26歳） ■

ラダトームで一人、父の墓の世話をしながら暮らしていたが、20歳の時にシシルにプロポーズをされ、婚姻。リムルダールへ引越

す形となる。現在は二人の男の子を出産し、幸せに暮らしている。

■ 賢者 シシル（17歳↓27歳） ■

戦いの後、賢者ギースに養子兼弟子入りをし、20歳でアレフガルドーの大賢者として認められる。最近はおつぱら地上世界とアレフガルド間の旅の扉開通の研究に打ち込んでいるらしい。

ギースとは現在別居中なのだが、家が近所なので良く子供たちを連れて遊びに行っている。

■ その他 ■

ミリル： ナナとソロの娘、3歳。両親に似ずおっとり気質なおしやまさん。名前の由来は……。

シェロ： シシルとミロッドの息子、長男で7歳。両親の影響か、魔法の素質がある。しっかりとした男の子。

イリー： シシルとミロッドの息子、次男で4歳。ミロッドの魔族の血を色濃く引いてしまった為、紫の瞳をしている。甘えん坊の男の子。

*** TO BE THE NEXT | DRAGON QU
EST ? ***

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9728o/>

鏡の双子

2010年11月21日07時17分発行